
大里郡寄居町

城見上／末野Ⅲ／花園城跡／箱石

県道広木折原線関係埋蔵文化財発掘調査報告

— V —

1999

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団



末野遺跡出土局部磨製石斧



末野遺跡出土ナイフ形石器他



箱石遺跡・花園城跡全景と穀形埴輪



末野遺跡 S XII 出土土器

序

埼玉県では、「新しい発展と豊かな生活を支える基盤づくり」を施策方針の一つとしております。その一環として、交通の要衝としての地理的条件を生かし、県民の生活圏の拡大や高度化する産業活動の円滑化を図るため、総合的な道路交通網の整備が進められています。

特に、県内を結ぶ幹線道路の整備については、地域間の連携を高めるために、県内1時間道路網構想を目指して進められ、県道広木折原線の建設もそれらの施策の一つとして計画されました。

この路線は、国道254号線の児玉郡美里町広木から川良田湖を経由して、国道140号線の寄居町折原を結ぶ道路です。

寄居町の道路建設予定地内には、木野遺跡など4遺跡の貴重な遺跡が知られていました。これらの埋蔵文化財の取り扱いについては、関係機関で慎重に協議を重ねてまいりましたが、やむを得ず記録保存の措置が講じられることになりました。発掘調査については、埼玉県教育庁生涯学習部文化財保護課の調整により、当事業団が、埼玉県道路建設課の委託を受け、実施することになりました。

寄居町は、町の中央を流れる荒川の景観が県指定名勝「玉淀」として知られており、荒川を中心に緑豊かな山々が広がり、古くから人々の生活が営まれてきました。町内には、古墳時代後期から平安時代の古窯跡群の木野窯跡群や国指定史跡として有名な戦国時代の鉢形城跡などがあります。

城見上、木野、花園城、箱石遺跡の発掘調査では、旧石器時代から近世まで各時代の遺構と遺物が発見さ

れています。

城見上遺跡と木野遺跡からは、奈良から平安時代の須恵器を作るための粘土を採掘する上坑が、多数発見されています。また、窯の操業に関わった工人達の住居跡も検出され、彼らの生活した場所でもありました。

箱石遺跡では、古墳の横穴式石室の調査を行いました。古墳からは、円筒埴輪と人や穀をかたどった形象埴輪等が出土しました。

特に、木野遺跡では旧石器時代の遺物として、今から3万年以上前のもので、県内では最も古い時期の石器が発見されています。石器は、刃部を研磨して作った石斧で、今までに見られているなかで、特に人型のもので、今回の発掘調査によって、その他にも多くの貴重な資料を得ることができました。

本書が、埋蔵文化財の保護及び普及・啓発、学術研究の基礎資料、教育機関の参考資料として広く活用いただければ幸いです。

刊行にあたり、発掘調査に関する調整に御尽力をいただきました埼玉県教育庁生涯学習部文化財保護課をはじめ、発掘調査から報告書刊行に至るまで御協力いただきました埼玉県土木部道路建設課、同熊谷土木事務所、寄居町教育委員会、並びに地元関係者各位に厚くお礼申し上げます。

平成11年3月

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理事長 荒 井 桂

例言

1. 本書は、大里郡寄居町に所在する城見上、末野、花園城跡、箱石遺跡の発掘調査報告書である。
2. 遺跡の略号と代表地番及び発掘調査届に対する指示通知は、以下のとおりである。

城見上遺跡（JMKM）
埼玉県大里郡寄居町大字末野字金場573番地2 他
通知：平成5年6月29日付け 委保第5の679号

末野遺跡（SEN）
埼玉県大里郡寄居町大字末野字金場1126番地2 他
通知：平成6年1月10日付け 委保第5の1902号

花園城跡（HNZN）
埼玉県大里郡寄居町大字末野字金場1206番地他
通知：平成5年1月10日付け 委保第5の1900号

箱石遺跡（HKIS）
埼玉県大里郡寄居町大字末野字箱石1290番地11他
通知：平成5年6月6日付け 委保第5の656号
3. 発掘調査は、県道広末折原線の建設に伴う事前調査であり、埼玉県教育庁生涯学習部文化財保護課が調整し、埼玉県土木部道路建設課の委託を受け、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。
4. 本事業は、第1章の組織により実施した。本事業のうち、発掘調査については鈴木孝之、馬橋泰雄、赤熊浩一、大塚道則、阿部友寿、中山浩彦、佐藤康二が担当した。

整理報告書作成作業は西井幸雄が担当した。
5. 遺跡の基準点測量、および航空写真撮影は株式会社

社東京航業研究所に委託した。カラー写真は小川忠博氏に委託した。自然科学分析は古環境研究所に委託した。

6. 発掘調査時の遺構写真は、鈴木、馬橋、赤熊、大屋、阿部、中山、佐藤が撮影した。

遺物の写真撮影は西井・赤熊・大谷 徹・大屋・永井いずみが行った。
7. 出土品の整理は西井が主に行い、奈良・平安時代の遺物は永井、古墳時代を大谷が行った。

本書の執筆は、I-1を埼玉県教育庁生涯学習部文化財保護課が、IV・V・VIの奈良・平安時代の遺物、IX-3を永井が、VII-1を富田和夫が、VII-2、IX-2を大谷が、IX-4を鈴木が行い、他を西井が行った。奈良・平安時代の遺物は赤熊が補訂した。
8. 本書の編集は、西井が行った。
9. 本書にかかる資料は、平成11年度以降、埼玉県立埋蔵文化財センターが保管する。
10. 本書の作成にあたり、下記の方々よりご教示、ご協力を賜った。記して謝意を表します。（敬称略）

荒井幹夫、安斎正人、石塚三夫、稲田孝司、井上 慎也、加藤秀之、上敷頼 久、亀田直美、岡武良克、窪田恵二、桑波田武志、小林 高、佐藤宏之、鈴木忠司、鈴木美保、長崎潤一、朴 英哲、三瓶裕司、宮田英二、山崎 武、吉田 望、寄居町教育委員会

凡 例

1. 遺跡全体図におけるX・Yの数値は、国土標準平面直角座標第IX系に基づく座標値を示す。

また、各挿図における方位の指示は、すべて座標北をあらわす。

2. グリッドは5 mを大グリッドとして設定し、大グリッド内に1 mの小グリッドを25区設定した。遺構の配置等の表記は、大グリッドを基準としている。

3. 測量、遺物実測図の縮尺は、原則として以下のとおりである。

遺構 1/60・1/100

遺物 先土器時代石器 4/5

縄文時代石器 1/3

須恵器・土師器 1/4

須恵器変形部破片 1/5

かわらけ 1/4

埴輪 1/4

鉄製品 1/2

その他、遺跡位置図、周辺地形図、遺跡全体図などは、その都度縮尺率を示した。

5. 須恵器は断面を黒く塗っている。

6. 測量図内で使用した遺構の略号は以下のとおりである。

SJ 住居跡

SB 掘立柱建物跡

SA 棚列

SD 溝

SK 土墳

SX 城見上遺跡は竪穴状遺構・地下式土墳

新石遺跡は土器焼成遺構に関連する土墳

ST 古墳跡

7. 断面測量図中の土層番号は、ローマ数字が遺跡全体を通ず基本土層、算用数字が遺構個別の観察結果を表す。

8. 本文・観察表中の記載基準は以下のとおりである。

標高・遺構計測値…m単位

遺物計測値…cm/g単位

・胎土は肉眼で観察できるものについて次のように示した。

A-片岩粒、B-石英粒、C-白色微粒子、D-雲母、E-酸化鉄粒子、F-長石、G-砂粒・小石、H-角閃石

・焼成は次の3段に分けた。

A-良好、B-普通、C-不良 (s)-酸化焰土器

・残存率は器形全体に対するもので、5%単位で示した。

9. 文中の引用文献は(著者、発行年)の順で表現し、参考文献とともに巻末にその一覧を掲載した。

目次

序	
例言	
凡例	
目次	
I 発掘調査の概要	1
1. 調査に至る経過	1
2. 発掘調査・報告書作成の経過	2
3. 発掘調査・整理・報告書刊行の組織	3
II 遺跡の立地と環境	4
III 遺跡の概要	7
IV 城見上遺跡	11
1. 遺跡の概要	11
2. 縄文時代の遺構・遺物	11
3. 奈良・平安時代の遺構と遺物	22
4. 中・近世の遺構と遺物	57
V 末野遺跡C区	60
1. 遺跡の概要	60
2. 先上器時代の遺構と遺物	61
3. 奈良・平安時代の遺構と遺物	95
4. 中・近世の遺構と遺物	101
5. その他の時期の遺物	108
VI 末野遺跡D区	110
1. 遺跡の概要	110
2. 奈良・平安時代の遺構と遺物	110
3. 中・近世の遺構	134
4. その他の時期の遺物	136
VII 花園城跡	137
1. 遺跡の概要	137
2. 遺構と遺物	140
VIII 箱石遺跡	142
1. 遺跡の概要	142
2. 古墳時代の遺構と遺物	143
3. 平安時代の遺構と遺物	167
4. 中・近世の遺構と遺物	190
5. その他の時期の遺物	191
IX 結語	192
1. 末野遺跡C区出土の石器群について	192
2. 箱石遺跡第1号墳出土埴輪について	204
3. 城見上・末野遺跡の須恵器生産について	215
4. 末野遺跡出土の墨画土器について	223
5. 花園城跡周辺の地形から	229
X 附編	238

挿図目次

第1図	埼玉県の地形図	4	第35図	B区出土遺物(1)	51
第2図	周辺の遺跡	6	第36図	B区出土遺物(2)	53
第3図	遺跡周辺の地形	9	第37図	B区出土遺物(3)	54
第4図	グリッド網図	10	第38図	城見上遺跡出土瓦(1)	56
【城見上遺跡】			第39図	城見上遺跡出土瓦(2)	57
第5図	城見上遺跡全体図	12	第40図	地下式土壇	58
第6図	第1号住居跡(L=125.50m)	13	第41図	グリッド出土遺物	59
第7図	第1号住居跡出土土器	13	【末野遺跡C区】		
第8図	第1号埋甕	13	第42図	末野遺跡C区全体図	60
第9図	第1号埋甕出土土器	14	第43図	基本土層	60
第10図	グリッド出土土器	14	第44図	先土器時代調査範囲	62
第11図	出土石器(1)	16	第45図	先土器時代調査区土層断面図	62
第12図	出土石器(2)	17	第46図	先土器時代遺物分布図	63
第13図	出土石器(3)	18	第47図	石器集中a	64
第14図	出土石器(4)	19	第48図	石器集中b	65
第15図	出土石器(5)	20	第49図	石器集中c	66
第16図	A区土壇(L=125.30m)	23	第50図	石器集中d	67
第17図	A区粘土探掘坑(1)	24	第51図	出土石器(1)	70・71
第18図	A区粘土探掘坑(2)	25	第52図	出土石器(2)	72・73
第19図	A区粘土探掘坑(3)	26	第53図	出土石器(3)	74
第20図	城見上遺跡A区遺物分布図(1)	29	第54図	出土石器(4)	75
第21図	城見上遺跡A区遺物分布図(2)	31	第55図	出土石器(5)	76
第22図	A区出土遺物(1)	33	第56図	出土石器(6)	77
第23図	A区出土遺物(2)	35	第57図	出土石器(7)	78
第24図	A区出土遺物(3)	37	第58図	出土石器(8)	79
第25図	A区出土遺物(4)	38	第59図	出土石器(9)	80
第26図	A区出土遺物(5)	39	第60図	出土石器(10)	81
第27図	A区出土遺物(6)	40	第61図	出土石器(11)	82
第28図	A区出土遺物(7)	41	第62図	出土石器(12)	83
第29図	A区出土遺物(8)	42	第63図	出土石器(13)	84
第30図	A区出土遺物(9)	43	第64図	出土石器(14)	85
第31図	A区出土遺物(10)	44	第65図	出土石器(15)	86
第32図	A区出土遺物(11)	45	第66図	石斧接合資料(1)	87
第33図	B区粘土探掘坑・土壇	49	第67図	石斧接合資料(2)	88
第34図	城見上遺跡B区遺物分布図	50	第68図	接合図	90

第69図	母岩1分布図	92
第70図	母岩2分布図	93
第71図	第1号住居跡(L=132.60m)	95
第72図	第1号住居跡出土遺物	96
第73図	第2号住居跡(L=132.60m)	97
第74図	第2号住居跡出土遺物	97
第75図	末野遺跡C区遺物分布図	98
第76図	C区出土遺物	99
第77図	C区出土瓦	100
第78図	第3号孤立柱建物跡 (L=131.00m)	101
第79図	第1・2号孤立柱建物跡 (L=131.00m)	102・103
第80図	第4号孤立柱建物跡 (L=131.70m)	104
第81図	上墳	104
第82図	ビット5・かわらけ	105
第83図	第1・2号溝	106
第84図	第1・2号溝	107
第85図	第3・4号溝	108
第86図	出土土器	108
第87図	出土土器	109
【末野遺跡D区】		
第88図	末野遺跡D区全体図	111
第89図	第3号住居跡(L=132.00m)	112
第90図	第3号住居跡遺物出土状況	113
第91図	第3号住居跡出土遺物(1)	113
第92図	第3号住居跡出土遺物(2)	114
第93図	土壇(1)	116
第94図	土壇(2)	117
第95図	第5号溝	119
第96図	粘土探掘坑(1)	121
第97図	粘土探掘坑(2)	122
第98図	粘土探掘坑(3)	123
第99図	SX11	124
第100図	SX11出土遺物(1)	125
第101図	SX11出土遺物(2)	126

第102図	末野遺跡D区遺物分布図	127
第103図	D区出土遺物(1)	128
第104図	D区出土遺物(2)	129
第105図	D区出土遺物(3)	130
第106図	D区出土瓦(1)	132
第107図	D区出土瓦(2)	133
第108図	井戸	134
第109図	第3・4・5号溝列	135
第110図	出土石器	136
【花園城跡】		
第111図	花園城跡全体図	139
第112図	花園城横断面図	140
第113図	第1号溝	140
第114図	第2号溝	141
第115図	出土遺物	141
【箱石遺跡】		
第116図	箱石遺跡全体図	142
第117図	第1号墳全体図(1)	143
第118図	第1号墳全体図(2)	144
第119図	第1号墳石室	145
第120図	第1号墳石室閉塞状況	146
第121図	第1号墳石室断面図	147
第122図	第1号墳石室羨門部閉塞状況	148
第123図	第1号墳石室礎石・掘り方	149
第124図	第1号墳石室遺物分布図	150
第125図	第1号墳鉄製品	150
第126図	第1号墳円筒埴輪	151
第127図	第1号墳朝顔形埴輪	152
第128図	第1号墳円筒埴輪拓影(1)	153
第129図	第1号墳円筒埴輪拓影(2)	154
第130図	第1号墳円筒埴輪ハケメ拓影	155
第131図	第1号墳形象埴輪(1)	157
第132図	第1号墳形象埴輪(2)	158・159
第133図	第1号墳形象埴輪(3)	160
第134図	第1号墳形象埴輪(4)	161
第135図	第1号墳形象埴輪(5)	162
第136図	円筒埴輪凡例図	163

第137図	第1・2号住居跡(L=108.50m) ……167	第160図	出土瓦(7) ……188
第138図	第1・2号住居跡出土遺物 ……168	第161図	第1号掘立柱建物跡 (L=108.50m) ……190
第139図	第3・4号住居跡・出土遺物 (L=109.50m) ……168	第162図	グリッド出土遺物 ……191
第140図	第5号住居跡(L=109.50m) ……170	第163図	出土土器 ……191
第141図	第5号住居跡出土遺物 ……170	第164図	出土石器 ……191
第142図	第6号住居跡(L=109.50m) ……171	第165図	石斧の原石・素材剥片想定図 ……194
第143図	第6号住居跡出土遺物 ……171	第166図	AT降灰以前の石斧出土遺跡分布図 ……196
第144図	第7号住居跡・出土遺物 (L=109.50m) ……171	第167図	地域aの石斧(1) ……198
第145図	第8号住居跡(L=109.50m) ……172	第168図	地域aの石斧(2) ……201
第146図	SX(1) ……173	第169図	口縁部・凸帯形態分類 ……204
第147図	SX(2) ……174	第170図	小前田古墳群の変遷 ……208
第148図	土壌 ……174	第171図	円筒埴輪の比較 ……209
第149図	出土遺物(1) ……175	第172図	小前田9号墳と円埴2号墳 ……210
第150図	出土遺物(2) ……176	第173図	靱形埴輪集成図 ……212
第151図	出土遺物(3) ……177	第174図	城見上・末野遺跡概念図 ……216
第152図	出土遺物(4) ……178	第175図	城見上・末野遺跡出土の董 ……218
第153図	出土遺物(5) ……179	第176図	董の変化と共伴遺物(1) ……220
第154図	出土瓦(1) ……182	第177図	董の変化と共伴遺物(2) ……221
第155図	出土瓦(2) ……183	第178図	三鈎杵・羯磨 名所図 ……224
第156図	出土瓦(3) ……184	第179図	屋敷跡全景(写真と全測図を合成1/600) ……………226
第157図	出土瓦(4) ……185	第180図	屋敷跡全測図(1/600) ……227
第158図	出土瓦(5) ……186	第181図	花園城跡周辺地形図 ……231
第159図	出土瓦(6) ……187		

表目次

【城見上遺跡】		表9	C区出土瓦観察表 ……100
表1	石器一覧 ……21	表10	石器一覧 ……108
表2	A区出土遺物観察表 ……46～48	【末野遺跡D区】	
表3	B区出土遺物観察表 ……55	表11	第3号住居跡出土遺物観察表 ……114
表4	瓦観察表 ……57	表12	SX11出土遺物観察表 ……126
【末野遺跡C区】		第13	D区出土遺物観察表 ……131
表5	先土器時代石器一覧 ……94	表14	D区出土瓦観察表 ……134
表6	第1号住居跡出土遺物観察表 ……96	表15	石器一覧 ……136
表7	第2号住居跡出土遺物観察表 ……96	【花園城跡】	
表8	C区出土遺物観察表 ……100	表16	出土遺物観察表 ……139

【箱石遺跡】

表17	第1号墳出土川筒埴輪観察表	164
表18	第1号墳出土川筒埴輪計測表	165
表19	第1号墳出土形埴輪観察表	165・166
表20	第1・2号住居跡出土遺物観察表	168
表21	第3・4号住居跡出土遺物観察表	169

表22	第5号住居跡出土遺物観察表	169
表23	第6号住居跡出土遺物観察表	170
表24	第7号住居跡出土遺物観察表	171
表25	SX・グリッド出土遺物観察表	180・181
表26	瓦観察表	188・189
表27	石器一覧	191

図版目次

【城見上遺跡】

図版1	城見上遺跡A区粘土探掘坑群 城見上遺跡B区粘土探掘坑群
図版2	グリッド出土石器 第11～15図
図版3	グリッド出土土器 第22図2～5 グリッド出土土器 第23図36～39
図版4	グリッド出土土器 第22図15・30・31 グリッド出土土器 第28図100・101・107・ 108・110・113 グリッド出土土器 第29図120
図版5	グリッド出土土器 第23図51・第29図128・ 130・131 グリッド出土土器 第23図50 グリッド出土土器 第24図67 グリッド出土土器 第25図76・78
図版6	グリッド出土土器 第27図87～89 グリッド出土土器 第30図139・140・148 グリッド出土土器 第31図150 グリッド出土土器 第32図164
図版7	グリッド出土土器 第35図3・7 グリッド出土土器 第37図33 グリッド出土土器 第41図1～3・5

【末野遺跡C区】

図版8	石器出土状況（石器集中d） 石器出土状況（第51図1の石斧を中心に）
図版9	石器出土状況（第52図2） 石器出土状況（石器集中d）
図版10	第1号住居跡 第2号住居跡

図版11	第1～3号掘立柱建物跡 第3・4号溝
図版12	ビット5、かわらけ出土状況 ビット5、かわらけ出土状況
図版13	先土器時代石器 先土器時代石器
図版14	先土器時代石器 先土器時代石器
図版15	先土器時代石器 先土器時代石器
図版16	グリッド出土土器 第72図1・2・8 グリッド出土土器 第76図19 グリッド出土土器 第82図1 グリッド出土土器 第86図1

【末野遺跡D区】

図版17	第3号住居跡 第3号住居跡拡張部
図版18	SX11遺物出土状況 SX11遺物出土状況
図版19	第3・4号櫓列 第5号櫓列
図版20	第3号住居跡出土土器 第91図1・2・5・6・9・10 第3号住居跡出土土器 第92図15・16・20・21
図版21	SX出土土器 第101図24 SX出土土器 集合写真 グリッド出土土器 第103図17・19
図版22	グリッド出土土器 第100図3・7・8・

10・12・14・15・17・19

【花園城跡】

図版23 花園城全景

図版24 第1号溝

第2号溝

【箱石遺跡】

図版25 第1号墳全景空中写真

図版26 第1号墳調査前（北東から）

第1号墳墳丘（南東から）

図版27 第1号墳石室全景（南西から）

第1号墳石室全景（北東から）

図版28 第1号墳石室羨門（南西から）

第1号墳石室玄門（北東から）

図版29 第1号墳石室附塞状況（南西から）

第1号墳石室附塞状況（北東から）

図版30 第1号墳石室控積み全景（南東から）

第1号墳石室控積み南隅部

図版31 第1号墳石室礎敷地形（南西から）

第1号墳石室掘り方（南西から）

図版32 第1号墳玄室遺物出土状況

第1号墳周溝（北から）

図版33 第1号墳円筒埴輪 第126図1・2・5・7・
9・10

図版34 第1号墳円筒埴輪 第126図4・6・11・13

第1号墳形象埴輪 第131図15

第1号墳形象埴輪 第135図52

図版35 第1号墳円筒埴輪（1） 第128図

第1号墳円筒埴輪（2） 第128・129図

図版36 第1号墳円筒埴輪（3） 第129図

第1号墳鉄製品 第125図

図版37 第1号墳埴輪形埴輪 第132図22

図版38 第1号墳形象埴輪（1） 第131図1～8

第1号墳形象埴輪（2） 第131図9～14

図版39 第1号墳形象埴輪（3） 第131図16～21

第1号墳形象埴輪（4） 第134図24～33

図版40 第1号墳形象埴輪（5） 第134図34～41

第1号墳形象埴輪（6） 第135図42～51

図版41 第3・4号住居跡

第5号住居跡

図版42 第5号住居跡

第7号住居跡

図版43 第7号住居跡

SX3

図版44 SX5

第1号掘立柱建物跡

図版45 第1号住居跡出土土器 第138図2～4

第2号住居跡出土土器 第139図2

第5号住居跡出土土器 第141図1・3

第6号住居跡出土土器 第143図2・3

図版46 第7号住居跡出土土器 第144図1

SX1出土土器 第149図2

SX2出土土器 第149図3・10・12・14

SX2・4出土土器 第149図4

図版47 SX2出土土器 第149図13・15・19

SX3出土土器 第150図20・29・36・37

SX5出土土器 第151図40

図版48 SX2出土土器 第149図11

SX6出土土器 第151図41

第1号墳出土土器 第151図45

グリッド出土土器 第151図55・58・63・64

グリッド出土土器 第153図20

図版49 グリッド出土土

I 発掘調査の概要

1. 調査に至る経過

埼玉県は関東地方の中西部に位置し、県全域が都心から100kmの圏内に含まれる。県では快速でうろちのある生活空間の形成のために、道路網の整備を進めている。「県内1時間道路網構想」を推進し、高速道路、地域高企画道路、インターチェンジにアクセスする道路、都市内街路から生活道路に至るまで、体系的な道路網の整備計画である。県道広木所原線の整備もこうした事業の一つである。

道路建設課から平成4年8月26日付け道建第270号・平成7年1月31日付け道建356号で、文化財の所在地及び取扱いについて、文化財保護課長あて照会があった。それに対して文化財保護課長は、平成4年10月2日付け教文第720号・平成7年2月28日付け教文第1066号で、予定地には末野遺跡・城見上遺跡・花園城跡・箱石遺跡が所在し、事業計画上やむを得ず現状変更をする場合は、事前に文化財保護法第57条の3項の規定に基づき、文化庁長官あてに発掘通知を提出し、記録保存のために発掘調査を実施するよう回答した。

その後、道路建設課と文化財保護課との間で取扱いについて協議を重ね、現状保存は困難であり、記録保存の措置を講ずることになった。

発掘調査の実施機関である財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団と、道路建設課・文化財保護課の三者で工事日程、調査計画・調査期間などについて協議した。

文化財保護法第57条3項の規定による埋蔵文化財

発掘通知が埼玉県知事から提出され、第57条1項の規定による発掘調査局が財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長から提出された。各遺跡での発掘調査の期間と発掘調査に係わる通知は以下のとおりである。

城見上遺跡

発掘調査

期 間：平成5年4月1日～平成6年3月31日

通 知：平成5年6月29日付け 委保第5の679号

末野遺跡C・D区

発掘調査

期 間：平成5年4月1日～平成6年3月31日

通 知：平成6年1月10日付け 委保第5の1902号

花園城跡

発掘調査

期 間：平成5年4月4日～平成6年3月31日

通 知：平成5年1月10日付け 委保第5の1900号

箱石遺跡

発掘調査

期 間：平成5年4月1日～平成6年3月31日

通 知：平成5年6月6日付け 委保第5の656号
(文化財保護課)

2. 発掘調査・報告書作成の経過

(1) 発掘調査

本事業に伴う発掘調査は、城見上、末野、花園城跡、箱石の4遺跡を、平成3年度～5年度、7年度の4カ年に渡って行った。調査面積は10,500㎡である。

本書で報告する遺跡は、城見上遺跡、末野遺跡C・D区、花園城跡、箱石遺跡の4遺跡である。

〔城見上遺跡〕

城見上遺跡は平成3・4年度と平成5年度に発掘調査を実施した。

平成3年12月1日から発掘調査の準備を開始する。調査区内の西端にプレハブ事務所を設置し、補助員の募集をする。また、併行して重機による表土掘削を行う。

平成4年1月から本格的に遺構の確認と精査に入る。

平成4年4月年度を越えて継続調査となる。4月23日に空中写真測量を行う。

平成5年4月から5月の2ヶ月間、花園城跡・箱石遺跡の調査の準備でプレハブ事務所を移築した後、事務所の下部分を調査する。調査面積は全体で2,600㎡である。

〔末野遺跡C・D区〕

末野遺跡C区の発掘調査は、平成4年5月から、城見上遺跡の調査と併行し、重機による表土削除を行う。

補助員による遺構確認と精査は、城見上遺跡と連続して行う。6月20日に空中写真測量を行う。

奈良・平安時代の遺構の調査が終了した後、8月から10月にかけてローム層のある地点に深掘調査を行う。その結果、先土器時代の良好な石器集積が検出された。ローム層について重鉱物及び植物残渣体の自然科学分析を行う。

末野遺跡D区は、8月から重機による表土掘削を行い、9月に基準点測量を行う。補助員による遺構の確認作業と精査は、11月から本格的に実施し、平成5年3月31日に終了する。

調査面積は全体で3,000㎡である。

〔花園城跡〕

花園城跡の発掘調査は、平成6年1月から3月31日と、平成8年2月から3月31日の2度の発掘調査が実施された。最初の調査は、平成5年11月に調査に先駆け花園城跡全体の空中写真測量を実施し、平成6年3月に空中写真測量の追加を行った。2度目の調査は、末野遺跡と併行して行われ、2月に空中写真測量を実施した。

調査面積は全体で3,300㎡である。

〔箱石遺跡〕

箱石遺跡の発掘調査は、平成5年5月から12月まで、発掘調査を実施した。

4月にプレハブ事務所の移設を行い、6月から重機による表土の掘削、基準点測量を行う。併行して補助員による遺構確認、精査を行う。

9月に空中写真測量を実施した。その後、古墳の石室の精査を中心に実施した。

調査面積は1,600㎡である。

(2) 報告書作成

平成10年7月1日から、平成11年3月31日まで行った。

遺構は、第2原因を作成し、それをもとに図版を作成。11月に終了。

遺物は、7月から水洗後注記を行い、8・9月に復元作業を行った。補強が必要なものは、10月まで石膏入れを行った。

遺物実測は、9月～11月まで復元作業と併行して行い、10・11月トレースを行った。

11月の前半に写真撮影を行い、後半から原稿執筆、割り付けに入った。1月に割り付けを終了し、3月に本書の印刷を終了した。

3. 発掘調査・整理・報告書刊行の組織

主体者 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

(1) 発掘調査 [平成3～5・7年度]

理事長	荒井修二 (H 3・4)	<調査部>	
	荒井 桂 (H 5・7)	調査部副部長	梅沢太久夫 (H 3・4)
副理事長	早川智明 (H 3・4)		高橋一夫 (H 5・7)
	富田真也 (H 5・7)	調査第三課長	宮崎朝雄 (H 3)
専務理事	横川好富 (H 5)	調査第一課長	宮崎朝雄 (H 4)
	吉川國男 (H 7)		坂野和信 (H 5・7)
常務理事兼管理部長	倉持悦夫 (H 3・4)	主任調査員	鈴木孝之 (H 3～5)
	柴崎光生 (H 5)		馬橋泰雄 (H 4)
	新井秀直 (H 7)		赤熊浩一 (H 7)
理事兼調査部長	栗原文蔵 (H 3・4)	調査員	大屋道則 (H 3)
	中島利治 (H 5)		阿部友寿 (H 5)
	小川良祐 (H 7)		中山浩彦 (H 7)
<管理部>			佐藤康二 (H 7)

庶務課長	高田弘義 (H 3)
	萩原和夫 (H 4・5)
	及川孝之 (H 7)
主 査	松本 晋 (H 3)
	賛田 清 (H 4・5)
	市川有三 (H 7)
主 任	長滝美智子 (H 7)
主 事	長滝美智子 (H 3)
主 事	菊池 久 (H 4・5・7)
経理課長	関野栄一 (H 3～5)
専門調査員兼経理課長	関野栄一 (H 7)
主 任	江田和美
	福田昭美 (H 7)
	腰塚雄二 (H 7)
主 事	長滝美智子 (H 4・5)
	福田昭美 (H 3・4・5)
	腰塚雄二 (H 3・4・5)
	菊池 久 (H 3)

(2) 整理事業 (平成10年度)

理事長	荒井 桂
副理事長	飯塚誠一郎
常務理事兼管理部長	鈴木 進
<管理部>	
庶務課長	金子 隆
主 査	田中裕二
主 任	長滝美智子
主 任	腰塚雄二
専門調査員兼経理課長	関野栄一
主 任	江田和美
主 任	福田昭美
主 任	菊池 久
<資料部>	
資料部長	増田逸朗
主幹兼調査部副部長	小久保徹
専門調査員	坂野和信
兼資料整理第一課長	
主任調査員	西井幸雄

II 遺跡の立地と環境

城見上遺跡・末野遺跡・花園城跡・箱石遺跡（以下末野遺跡群と仮称する）は、秩父鉄道波久礼駅の東約1kmに位置する。寄居の市街からは北西に約2kmほど離れている。

埼玉県の西半分を占める山地は、大きく奥秩父山地、外秩父山地、上武山地に分かれる。遺跡は外秩父山地と上武山地を分かつ荒川の河岸段丘上に立地し、遺跡の背後には上武山地が連なり、前方には外秩父山地を間近に臨むことができる。（第1図）

遺跡の立地する河岸段丘を含む山地は、群馬県下仁田町南部から埼玉県越生町まで広がる三波川帯の結晶片岩を基盤とするものである。岩盤の上には片岩が風化した粘土層が広がっている。城見上遺跡A・B区及び末野遺跡D区で確認された粘土探掘坑は、この粘土を採取するためのものである。（堀口1998）

遺跡の約1km西側から南側には荒川が流れる。寄居町は荒川の上流域から中流域に当たり、荒川総合調査報告書の流域では、B区（荒川村三峰口から寄居町小園の区間）からC区（寄居町小園から熊谷市久下の区間）に変わる地点にあたる。

两岸に江南台地や櫛引台地、波久礼を扇頂とする荒

川扇状地が開析され河岸段丘が形成されている。名勝「玉淀」はこの開析によって形成された景観である。

遺跡の立地する左岸の河岸段丘は、右岸の江南台地に対比されるものである。荒川からは、扇状地の河岸段丘の寄居面Ⅰ・寄居面Ⅱの更に1段上の3段目に当たる。

遺跡ののる河岸段丘は、荒川に注ぐ小河川により更に樹枝状に複雑に開析されている。

本遺跡群で中心的存在である、窓跡群に関しては『末野遺跡Ⅰ』で詳しく記されているので、本書では触れず、他の時期の遺跡に関して概観する。

県内の先上器時代の遺跡は、大宮台地、武蔵野台地、北武蔵台地に多く分布し、本地域は全般に希薄な地域である。末野遺跡周辺の遺跡は、牛無貝遺跡で石器集中からナイフ形石器、掻・刮器等が約450点が出土し、稲荷窪遺跡から掻・刮器と剥片が数点検出されている。また、本地域より上流域の先上器時代遺跡は、秩父市の下町遺跡からナイフ形石器が単独で検出された以外は、研究史的に著名な皆野町古丸遺跡と、大滝村の神庭洞窟が知られている程度である。

城見上遺跡から出土した縄文時代の遺構と遺物は、

第1図 埼玉県の地形図



前期黒浜式期が主体である。本地域は黒浜式期に遺跡が急増しており、寄居町南大塚遺跡で住居跡が70軒余り調査されている。他に、ゴシン遺跡、甘粕原遺跡が知られている。これらの遺跡は、いずれも荒川右岸の河岸段丘上に位置しており、本遺跡が位置する左岸は遺跡が少なく、また小規模である。

箱石遺跡は、本報告で古墳跡1基、1998年度の調査で2基が調査され古墳群を形成すると思われる。荒川左岸の古墳群は、寄居面Ⅰ上や上武山地山麓に立地している。谷津、藤田、樋の下、小前田、黒田、一本松、猪俣の各古墳群が知られている。いずれも6世紀中葉から7世紀の横穴式石室を主体部とする古墳群である。石室の形態は無袖、片袖、胴張りがある。

荒川右岸は江南台地の縁辺部に立地する立ヶ瀬、上郷、小園、伊勢原、赤浜の古墳群が知られている。詳細は不明だが、赤浜古墳群が6世紀に遡る可能性があり、その他は7世紀のものと推定されている。いずれも円墳である。

花園城跡は、中世以降に交通の要衝として多く築造された城の一つである。本地域は後北条氏の勢力圏にあったが、上杉氏・武田氏との接点にあたる地域で、鉢形城を中心に、花園城、要害山城、門良田城、天神

山城が荒川の左右両岸に配されている。

以上、末野遺跡群周辺の遺跡について概観した。遺跡群からは先土器時代、縄文時代、古墳跡、古墳時代～古代の窯跡群及びそれに関連する粘土採掘坑群と住居跡、中世の城跡、中・近世の掘立柱建物跡などの多時期多様な遺構・遺物が検出されている。

本地域は、上記したように流域、地形が共に大きく変わる地点である。そのため、人々の活動空間に占める意味や、交通という視点からも興味深い地域である。先土器時代を例に取り上げても、県内のほとんどの遺跡が、台地部（平野部）の比較的平坦で開けた景観（森林等によって境界は巡られていた可能性はたかい）であるのに対し、眼前を荒川本流が流れ、背後に山岳が迫った段丘面で、活動する空間及び視界はおのずと限定されており、平野部とは異なる景観におかれている。また、出土した石器群の年代と内容を検討する上で、県内の遺跡よりも群馬県側の動向と比較する方が有効と思われる。古利根川とその支流が関東山地を抜け合流して大河となる周囲に位置しており、石斧を有し、環状ブロックを形成するAT下位の遺跡が濃密に分布する範囲の南端に位置している。

周辺の遺跡

- | | | | | | | | |
|-------------|--------------|-----------|----------|-----------|----------|----------|-----------|
| 1 城見上遺跡 | 2 末野遺跡 | 3 花園城 | 4 箱石遺跡 | 5 藤田氏館 | 6 花園御殿城 | 7 要害山城 | 8 仲山城 |
| 9 岩田氏館 | 10 白鳥氏館 | 11 天神山城 | 12 野上氏館 | 13 井戸氏館 | 14 藤谷源氏館 | 15 根岸山砦 | |
| 16 金崎殿館 | 17 菅野館 | 18 田野城 | 19 旗塚 | 20 玉川氏館 | 21 折原石道跡 | 22 灰田原遺跡 | 23 馬場の内廃寺 |
| 24 丸山遺跡 | 25 一本松遺跡 | 26 猪俣南古墳群 | 27 用土城 | 28 用上北沢遺跡 | 29 谷津古墳群 | 30 飯沼氏館 | |
| 31 吉野廃寺 | 32 用上堀の内 | 33 桜沢砦 | 34 大塚山古墳 | 35 桜沢堀の内 | 36 桜沢家跡 | 37 小前田氏館 | |
| 38 小前田古墳群 | 39 立ヶ瀬古墳群 | 40 羽毛田遺跡 | 41 藤田古墳群 | 42 寄居廃寺 | 43 折原家跡 | | |
| 44 大正寺南遺跡 | 45 立原堀の内 | 46 前耕池遺跡 | 47 鉢形城 | 48 樋の下遺跡 | 49 栗師古遺跡 | | |
| 50 大河内金兵衛陣屋 | 51 甘粕原遺跡 | 52 ゴシン遺跡 | 53 露梨子遺跡 | 54 大塚遺跡 | 55 上郷古墳群 | | |
| 56 小園古墳群 | 57 水野石見守長勝陣屋 | 58 むじな塚遺跡 | 59 東原遺跡 | 60 塚越遺跡 | 61 島田氏屋敷 | | |
| 62 不動寺 | 63 富田堀の内 | | | | | | |

第2図 周辺の遺跡



III 遺跡の概要

(1) 調査の方法

県道広木折原線の調査では、調査区を便宜的に現道で区切りA～L区とした(第4図)。各調査区の遺跡との対応は、A・B区が城見上遺跡、C～F区が末野遺跡、J区が花園城跡、K・L区が箱石遺跡である。G・H・I区では遺構、遺物は検出されなかった。

調査区には、国家座標第IX系に基づく、北西方向から5mピッチのグリッドを設定した。

グリッドは5mピッチを大グリッドとし、それを25分した1mピッチを小グリッドとした。標記は大グリッド-小グリッドの順で指す。

(2) 遺跡群の概要

遺跡群の周辺は、荒川に注ぐ小河川によって開析された樹枝状谷が発達し、起伏に富んだ地形となっている。

城見上・末野遺跡(A～F区)の調査区は、東西方向上武山地の裾野に沿うように、標高124～132mの等高線に沿って、小さな谷を横断している。調査区は、遺構の検出されていないI区で、花園城跡にぶつかり90°南側に折れる。

花園城跡・箱石遺跡(J～L区)の調査区は、南北方向に花園城の裾野に沿って進み、徐々に標高を下げて、荒川の崖線に向かっている。

城見上遺跡(A・B区)

遺跡群の西端に位置し、現道によって調査区をA区とB区に呼称した。検出された主な遺構は、縄文時代前期の住居跡と埋壘、奈良・平安時代の粘土探掘坑2群、中・近世の地下式土壇3基である。

縄文時代の遺構は、調査区の西端3～6-7-10グリッドに集中している。遺物は、前期黒浜式期の上器片を中心に、前後の時期のものがみられる。しかし、遺構に伴うものは少なく、住居跡及び埋壘の資料が僅かにあるだけである。石器は点数が多いわりに遺構に伴

うものは無く、時期の限定ができるものは少ない。しかし、磨製石斧の未製品等が多く含まれており、当該地域の縄文時代前期の石器様相と大きく矛盾することはない。

奈良・平安時代の遺構は、A区とB区に粘土探掘坑群がそれぞれ1群みられる。

A区の粘土探掘坑群は10-16-10-12グリッドに位置する。東から西に緩やかに傾斜する斜面を利用しており、東西約50mの範囲に幾つかの密集部がみられる。南北方向は調査区外に広がっているため、探掘坑群の規模は不明である。B区の粘土探掘坑群は、調査区全体に広がり、中央部に南北方向の溝が走っている。地形的には小さな谷が入っており、それを利用して粘土の採掘を行っていたものと思われる。

溝はB区の粘土探掘坑群と重なるように、南北方向に通っている。また、溝の底面にある第8土壇から遺物がまとめて検出された。

中・近世の遺構は21-22-12-13グリッドから、地下式土壇(SX)3基が検出された。遺物は遺構と関連は明らかでないが、内耳鍋3個体がほぼ完全な形で出土した。

末野遺跡(C区)

末野遺跡は範囲が広く、窯跡のあるE・F区は別に報告をしている。また、本報告はC区とD区を別章とした。

C区から検出された主な遺構は、先土器時代の石器集中4ヵ所、平安時代の住居跡2軒、中・近世の獨立柱建物跡4棟、欄列2条と溝3条である。

先土器時代は、径14mの範囲に石器集中4ヵ所が環状に並んでおり、いわゆる「環状ブロック」を形成している。遺物は、局部磨製石斧及び打製石斧が4点出土し、ナイフ形石器、人形の縦長剥片等が出土した。時期的に、県内最古段階の資料で、最も良好なまとまりを有する石器群である。

平安時代の住居跡2軒は、耕作等の削平によって、ほとんど消失しており、カマド及び貯蔵穴が僅かに残るだけである。そのため、住居跡の規模、形状等は不明である。

中・近世の遺構は、東西36～46グリッド列の約50mを、3条の溝によって囲まれた範囲から、掘立柱建物跡4棟、柵列2条が検出された。また、第4号掘立柱建物跡に近接するピットから、内面に黒書で梵字と羯磨が描かれたかわらけが出土した。

末野遺跡（D区）

D区から検出された遺構は、奈良・平安時代が主体で住居跡1軒、土壇、溝2条と粘土採掘坑2群である。中・近世は柵列2条と井戸2基が検出された。

遺物は、ほとんどが平安時代の須恵器類で、第3号住居跡から羽口の破片が出土している。

花園城跡（J区）

調査区は、花園城跡の西側の堀野に沿って、南北方向に設定した。遺構は溝2条が検出され、花園城に関連するものと思われるが、城跡に関連する遺物は検出されていない。

箱石遺跡（K・L区）

箱石遺跡から検出された主な遺構は、6世紀後半の古墳1基と、平安時代の住居跡8軒、土器焼成に関連すると思われる土壇（SX）が6基、土壇2基、中・近世の掘立柱建物跡1棟である。

古墳は胴張りをもつ横穴式石室で、円筒、朝顔形埴輪と人物、鞍、家などの形象埴輪を持っている。また、石室内から鎌、弓金具が検出されている。

平安時代の住居跡は、耕作等によって床面近くまで削平が進んでおり、遺存が良好なものはない。そのため、遺構に伴う遺物は少なく、帰属時期を決めかねる住居跡もあるが、概ね同時期であると考えられる。

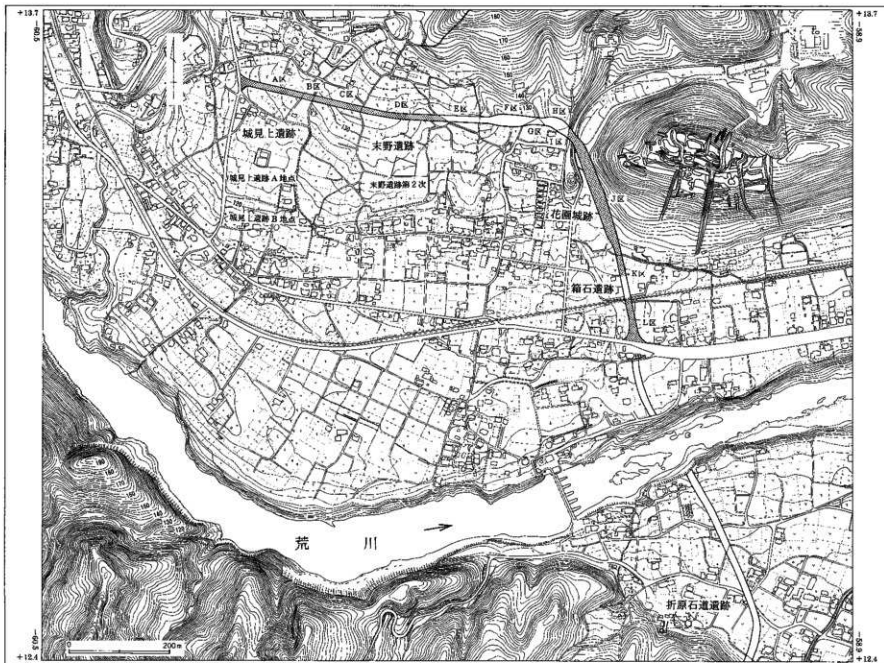
土器焼成に関連すると思われる土壇（SX）は、古墳の周溝内に並ぶように5基が検出され、1基だけ離れて第7号住居跡の南西コーナーを切っている。土壇覆土には焼土粒子、炭化物が含まれ、多量の歪んだ形の破片が投棄されていた。今回の調査区では、土器焼成に関連する直接的な遺構は明確にできなかったが、それに関連するか、失敗品の廃棄場として捉えられる。

中・近世の掘立柱建物跡は、調査区の南端に位置し、一部調査区外まで延びている。

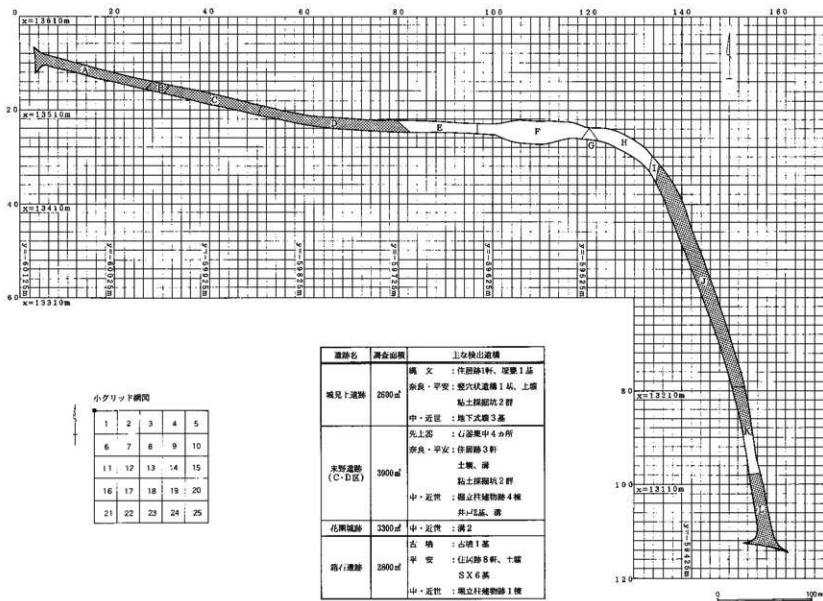
調査工程表

遺 跡 名	調査面積	平成3年度	平成4年度	平成5年度	平成7年度
末野遺跡（F区）	3000㎡				
末野遺跡（E・F区）	1800㎡				
城見上遺跡	2600㎡				
末野遺跡（C・D区）	3000㎡				
花園城跡	3300㎡				
箱石遺跡	1600㎡				

第3図 遺跡周辺の地形



第4図 プリッド網図



IV 城見上遺跡

1. 遺跡の概要

遺跡群の西端に位置し、現道によって調査区をA区とB区に呼称した。

調査区は幅9m、長さ約140mで、ほぼ東西方向に上武山地の裾野を横断するように設定されている。区画内の標高は約124m～132mである。A区は西から東に向かって徐々に標高が高くなり、B区で浅い谷部となる。末野遺跡C区に入ると、ふたたび標高が上がり、最も高い地点は約132mを測る。このような地形の変化を利用するような、遺構の配置がみられる。

検出された主な遺構は、縄文時代前期の住居跡と埋葬、奈良・平安時代の粘土探掘坑群、中・近世の地下式土壇である。

縄文時代の遺構は、調査区の西端5・6・9・10グリッドにまとまる。遺物は、前期黒浜式期の土器片を中心に、前後の時期のものがみられる。しかし、遺構に伴うものは少なく、住居跡及び埋葬の資料が僅かにあるだけである。石器は点数が多いわりに遺構に伴うものは無く、時期の限定できるものは少ない。しかし、磨製石斧の未製品等が多く含まれており、当該地域の縄文時代前期の石器様相と矛盾しない。

奈良・平安時代の遺構は、調査区全体に広がっている。主な遺構は、A区とB区の粘土探掘坑群と竪穴状遺構、土壇、溝である。

A区の粘土探掘坑群は10～16・10～12グリッド位置

する。東から西に緩やかに傾斜する斜面を利用しており、東西約50mの範囲に幾つかの密集部がみられる。南北方向は調査区外に広がっているため、探掘坑群の規模は不明である。B区の粘土探掘坑群は、調査区全体に広がり、中央部に南北方向の溝が走っている。地形的には小さな谷が入っており、それを利用して、粘土の探掘を行ったものと思われる。

竪穴状遺構は、5・9グリッドで縄文時代の住居跡と重なっている。周囲の土壇より一回り大きく、北東側にトラップを有している。遺構の性格は不明である。遺物は須恵器の坏類が検出されている。

土壇は、A区の3～6・8・9グリッドに7基、B区の29・15グリッドに1基検出されている。遺物は、第1号土壇から瓦片が、第8号土壇から須恵器の坏や甕類がまとまって出土しているが、他の土壇はほとんど遺物が検出されておらず、全て同時期かさだかでない部分もある。

溝はB区の粘土探掘坑群と重なるように、南北方向に通っている。底面に第8号土壇が位置している。

中・近世の遺構は、21・22・12・13グリッドから、地下式土壇(SX) 3基がまとまって検出された。

遺物は、内耳鍋3個体がほぼ完全な形で出土しているが、遺構との関連は明らかでない。

2. 縄文時代の遺構・遺物

(1) 住居跡

第1号住居跡(第6・7区)

調査区の西端部、6・10グリッドに位置する。遺構は耕作によって床面まで削平されており、中央部に平安時代の竪穴状遺構(SX1)が重なっており、炉跡等は確認されなかった。規模は、部分的に検出された周溝によって、長軸約5.2m、短軸約4.7mの楕円形になるものと推定される。ビット及び土壇状の落ち込みが、

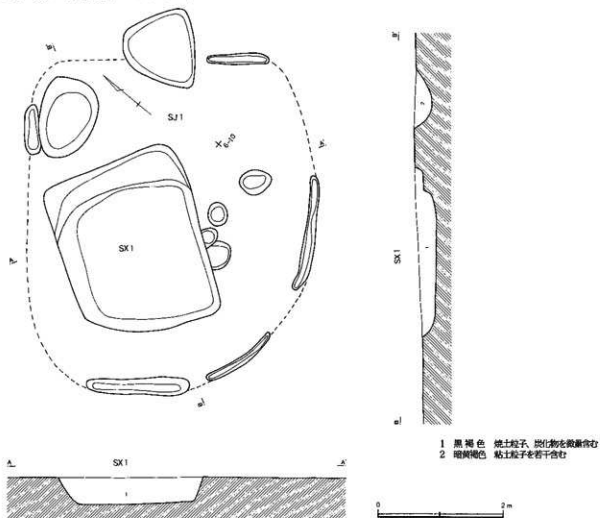
住居跡と重複しているが、遺構に伴うものかは不明である。また、柱穴になると思われるビットは検出されなかった。住居跡の主軸はN-52°-Eを指す。

遺物は僅少であるが、黒浜式期の破片が出土していることから、帰属時期は黒浜式期で間違いないものと思われる。

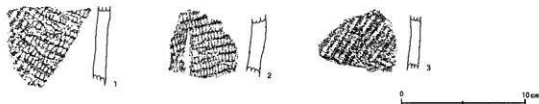
第5図 城見上遺跡全体図



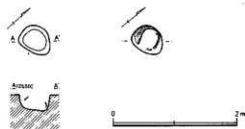
第6図 第1号住居跡(L=125.50m)



第7図 第1号住居跡出土土器



第8図 第1号埋壺



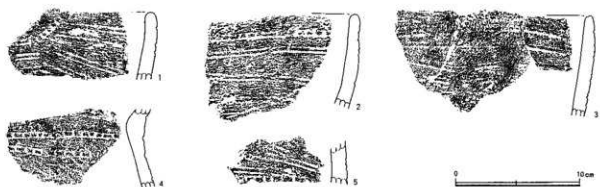
(2) 埋壺

第1号埋壺 (第8・9図)

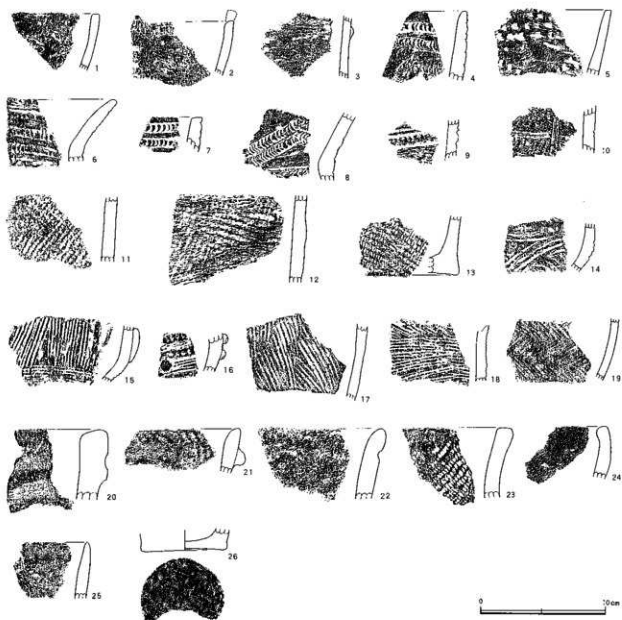
7-9グリッド、住居跡の南側約5mの地点に位置する。径約0.5m、深さ約0.3mのビットで、土器は伏せた状態で検出されている。遺物の遺存状況は悪く、ほとんど接合できなかったが、胎土の観察から1個体であったと考えられる。

土器は口縁が小さな波状を呈し、口縁近くに爪形文が1本描かれる部分と、半截竹管にとる平行沈線のみ

第9図 第1号埋出土土器



第10図 グリッド出土土器



が施される部分がみられる。また、胴部との括れの部分に爪形文が何本か描かれている。時期は黒浜式期である。

(3) グリッド出土遺物

a) 土器 (第10図)

本遺跡から出土した縄文土器は、全般に遺存状況が悪く、拓本によって文様がわかるものを選んで掲載した。

1～3は早期条痕文系土器群と思われる。

5～13は前期黒浜式土器である。住居跡や埋嚢と同一時期で、点数的に最も多かった。6～9は口縁またはそれに近い部分で、爪形文2本によって三角形状に文様が描かれている。11～13は縄文が施されており、13は底部の破片である。

14は諸磯B式土器である。

15～19は前期諸磯C式土器である。細い半截竹管による条線が施されている。16は円形の張りつけがみられる。

20～26は中期及び後期と思われる土器片をまとめた。

b) 石器 (第11～15図)

縄文時代の石器は、A区とB区から多数出土している。しかし、縄文時代の遺構に伴うものは無く、グリッド及び縄文以降の遺構覆土中からの検出であった。そのため、組成等の問題には触れず、個別石器の説明のみを行う。

磨製石斧 (1～8)

磨製石斧は、未製品と思われるものが大部分である。

1は基部の一部に敲打痕がみられるが、素材礫の形状を変えるものではなく、研磨は刃部付近だけである。作りは粗く、この状態で完成品なのか、製作途中で廃棄されたものかはさだかでない。

2は刃部下半部を大きく欠損する。研磨は全体に施されている。外形は基端部が窄まり、最大幅が刃部より少し上にくるものと思われる。基端部付近に上位方

向からの牽動がみられる。加撃によるものと思われるが、使用に関わるものかは明らかでない。

3は上半部の欠損品である。基端が錐の様に尖り、横断面形はほぼ円形である。

4は上半部を欠損する。外形は両側縁が平行し、側面を有しており、他の磨製石斧と形状が異なる。研磨は全体に入念に施されている。欠損付近に敲打による浅い挟りがみられるが、着柄に関連するものと思われる。受熱による赤化がみられる。

5～8は製作途中の欠損で、廃棄されたものと思われる。5は製作の初期段階のものである。両側縁からの牽動によって、大まかに形状を整えている。

6は両端部を欠損する。全体の形状は、整っており完成品と変わらず、部分的ではあるが研磨痕が観察できる。そのため、製作途中の欠損か、使用による欠損かさだかでない。

7は上半部を欠損する。全体に敲打が施されている。形状は整っており、研磨の前段階での欠損と思われる。

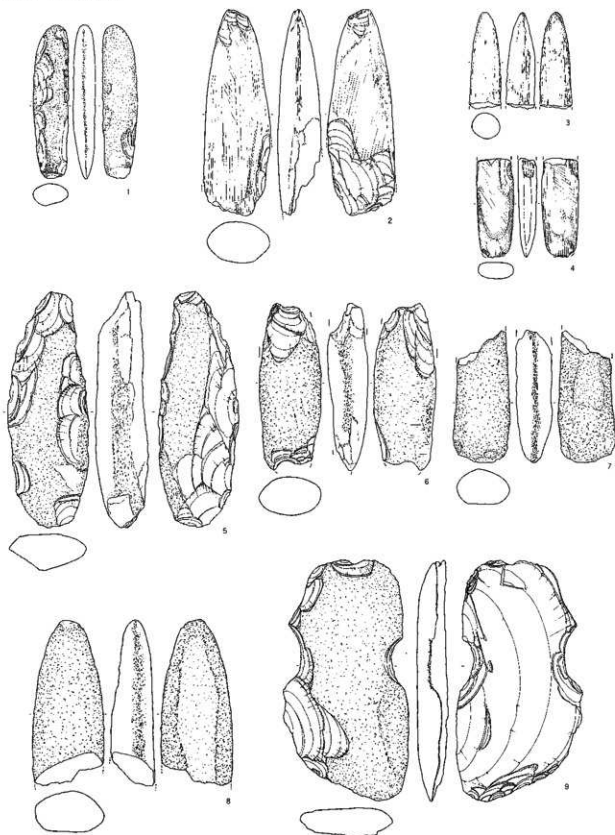
8は下半部を欠損する。裏面中央部に原石面を残すが、形状は整っており、7と同じように研磨の前段階での欠損と思われる。

打製石斧 (9～26)

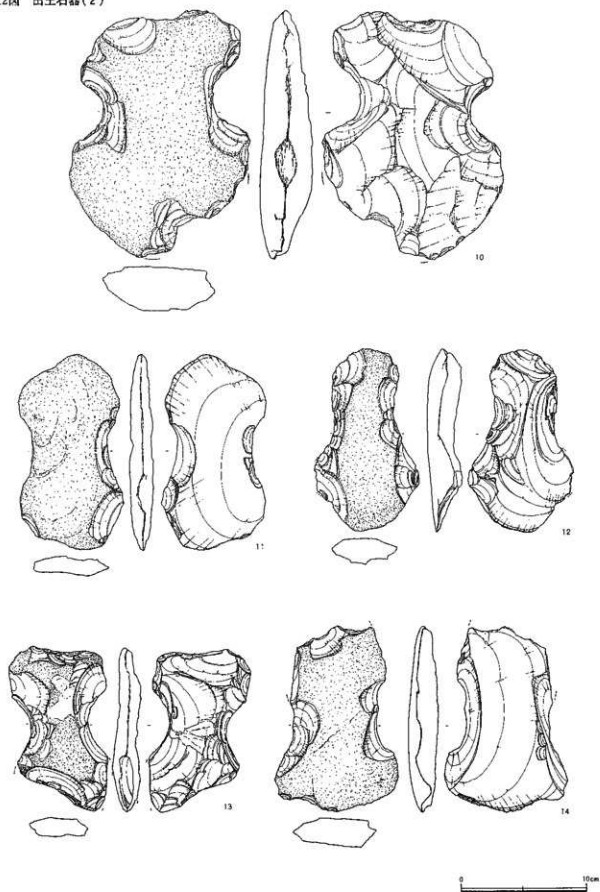
打製石斧は、欠損が少なく形態のわかる14点を図示した。平面の形状が、いわゆる分銅形と短冊・楕形のものに大別ができる。分銅形は基部の挟りが比較的浅いものが多く、大きさによって、長さ19cm前後、重さ500gを超える大形のグループ(9・10)と、長さ約15cm前後で、重さが200～300gの中形のグループ(11～14)に分けることができる。短冊・楕形は長さ23cmを超える大形品(15)を除くと、10cm前後のものがほとんどである。また、17は刃部付近の正面を研磨している。18は横断面が卵形に近く、正面を中心に基部に敲打痕が観察でき、磨製石斧の未製品の可能性もある。

23～26は、片面を原石面とし一方の面に分割面を大きく残している。断面は厚く礎斧と呼ばれることが多い。

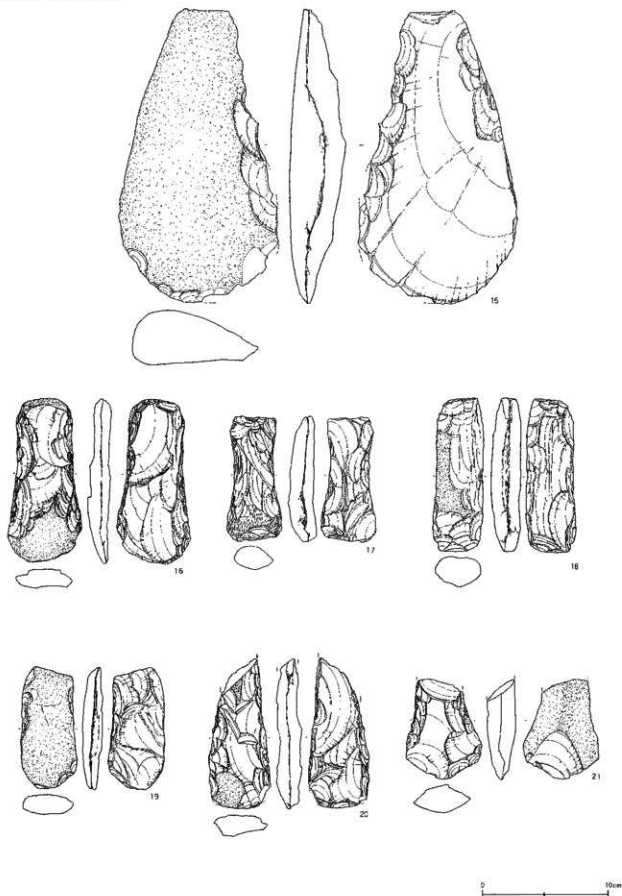
第11圖 出土石器(1)



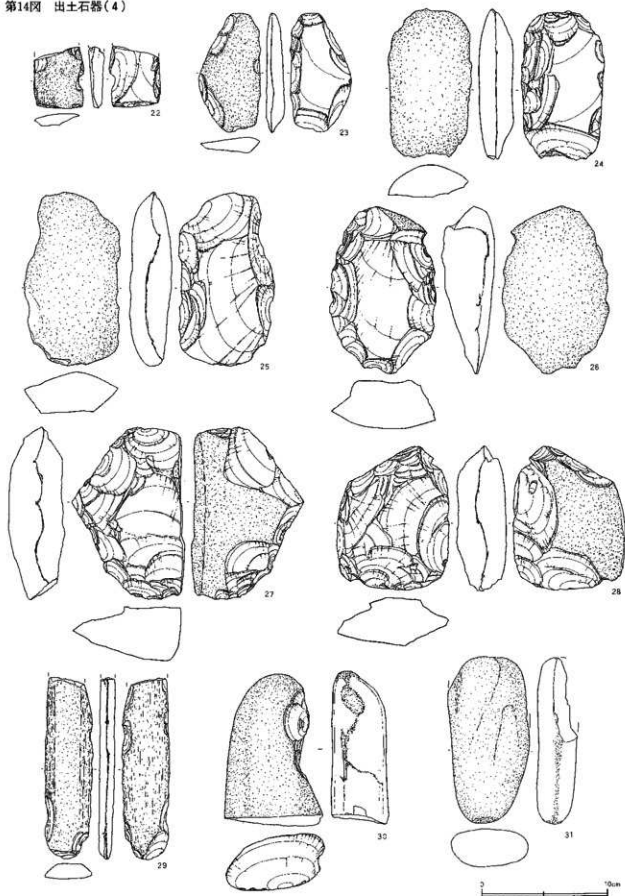
第12図 出土石器(2)



第13圖 出土石器(3)



第14図 出土石器(4)



第15圖 出土石器(5)

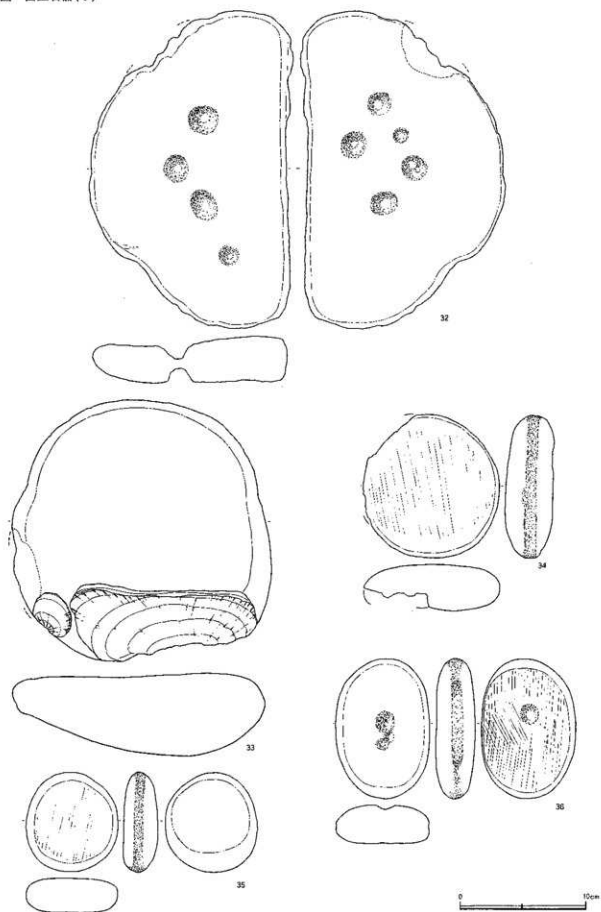


表1 石器一覧

番号	出土地点	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	備考
1	A区 SN-18	磨製石斧	12.2	2.8	1.8	98.94	緑泥片岩	
2	A区 12-10G	磨製石斧	16.3	5.4	3.5	401.76	緑泥片岩	
3	A区 SN-1	磨製石斧	7.6	2.5	2.3	66.90	緑泥片岩	
4	A区 SN-14	磨製石斧	7.8	2.9	1.5	64.63	緑泥片岩	
5	A区 10-10-14G	磨製石斧	18.6	6.5	4.2	721.86	緑泥片岩	
6	A区 23-18G	磨製石斧	13.2	4.9	3.3	330.89	緑泥片岩	
7	A区 10-10-8G	磨製石斧	10.4	4.6	2.9	203.95	緑泥片岩	
8	A区 11-11G	磨製石斧	13.1	5.7	3.5	395.35	緑泥片岩	
9	B区	打製石斧	19.0	10.1	2.55	631.22	砂岩	
10	A区 10-10-22G	打製石斧	19.6	14.5	4.1	1167.52	砂岩	
11	A区 9-11G	打製石斧	15.4	8.4	1.9	304.89	ホルンフェルス	
12	B区 V群粘土採掘土塊	打製石斧	14.4	8.4	2.8	278.61	砂岩	
13	A区 3-8G	打製石斧	12.9	8.0	2.3	265.64	ホルンフェルス	
14	A区	打製石斧	14.6	9.9	2.3	405.21	砂岩	
15	A区	打製石斧	23.2	12.7	4.5	1490.59	緑泥片岩	
16	A区 10-10-2G	打製石斧	13.0	5.9	1.8	147.85	ホルンフェルス	
17	A区	打製石斧	10.1	4.4	2.3	111.76	ホルンフェルス	
18	A区 15-11G	打製石斧	12.1	4.0	2.4	198.08	緑泥片岩	
19	B区	打製石斧	9.7	4.5	1.7	101.24	ホルンフェルス	
20	B区	打製石斧	11.8	4.9	2.1	117.89	ホルンフェルス	
21	A区 19-12G	打製石斧	7.9	6.0	2.2	102.23	ホルンフェルス	
22	A区 22-13-9G	打製石斧	4.9	4.1	1.2	29.24	ホルンフェルス	
23		打製石斧	9.4	4.9	1.5	86.56	ホルンフェルス	
24	A区 SK-6	打製石斧	11.8	6.7	2.8	295.78	安山岩	
25	A区	打製石斧	13.7	7.7	3.4	463.93	ホルンフェルス	
26	A区 22-12-21G	打製石斧	13.2	8.5	4.3	514.27	ホルンフェルス	
27	A区	石器	13.6	9.0	4.5	617.63	ホルンフェルス	
28	A区	石器	11.4	9.0	4.0	468.19	砂岩	
29	A区 3-8-10G	石剣状石器	14.3	3.9	1.2	130.33	緑泥片岩	
30	A区	スタンプ状石器	12.1	7.8	4.6	566.67	砂岩	
31	A区 10-10-18G	敲石	13.2	6.6	3.2	361.04	砂岩	
32	B区 VI群粘土採掘土塊	凹石	25.1	16.4	3.6	2154.60	緑泥片岩	
33	A区 10-10-17G	石皿	20.5	20.6	6.5	3850.00	安山岩	
34	A区 SN-3	磨石	11.2	10.9	3.9	636.46	閃緑岩	
35	A区 12-13-14G	磨石	7.9	7.4	2.8	260.68	閃緑岩	
36	A区 14-11G	凹石	11.1	7.5	3.2	388.31	砂岩	

礫器 (27~28)

多方向からの剝離によって構成され、石核とも思われるものもある。

石剣状石器 (29)

上半分を欠損する。両側縁は平行し、横断面がレンズ状を呈している。石剣の未製品と思われるが、帰属時期の問題があり詳細は不明である。

スタンプ状石器 (30)

楕円形の礫を分割している。基部の一部に敲打痕がみられるが、燃米系土器群に伴うスタンプ形石器とは異なると思われる。

敲石 (31)

楕円形の扁平な礫を用いて、長軸の一端に敲打痕が観察できる。

凹石 (32・36)

32は扁平の礫の両面に凹部が複数みられる。36は両面に凹部がみられる。裏面に磨耗痕、側面に敲打痕が観察できる。

石皿 (34・35)

厚手大形の川原石が用いられ、平坦面を石皿として使用している。

磨石 (34・35)

円形で扁平な川原石が用いられている。片面の平坦な面に研磨面を有し、側面に敲打痕がみられることから、敲打具としても用いられていたことが伺える。

3. 奈良・平安時代の遺構と遺物

奈良・平安時代は、調査区西側にまとまる竪穴状遺構と土壇群、A区とB区のそれぞれの粘土探掘坑群にまとめられる。

(1) 竪穴状遺構

竪穴状遺構 (SX1) (第6図)

調査区の西端部5-10グリッドに位置し、縄文時代の第1号住居跡と重複している。平面の形状は方形で、北東側にタラップを有している。規模は長軸2.7m、短軸2.2m、深さは0.2-0.3mで、底面はほぼ平坦である。

遺物は須恵器の環、甕の胴部破片が出土している。

(2) 土壇

土壇はA区の西側にまとまり、1基単独でB区に位置する。A区にまとまる土壇は、縄文時代の住居跡及び平安時代の竪穴状遺構と近接する。遺物が検出された土壇は、第1号土壇と第8号土壇のみで、他の土壇からは遺物が見つからないので、縄文時代は不詳である。一部、縄文時代の土壇の可能性もあるが、概ね奈良・平安時代に属するものと思われる。

第1号土壇 (第10図)

調査区の西側、住居跡の北側で5-9グリッドに位置する。北側は調査区外に延びる。全体を調査していないが、平面形はほぼ円形に近く、径は約2m、深さ約0.2mである。底面は概ね平坦である。覆土は下層に粘土ブロックを含み、上層に焼土粒子と炭化物を微量含んでいる。この傾向は、他の土壇に共通する。

遺物は、瓦破片が数点出土している。

第2号土壇 (第10図)

4-8グリッドに位置する。平面形は楕円形で、長軸は約1.5m、短軸は約1.2m、深さは約0.3mである。掘り込みは他の土壇より深い。底面は概ね平坦である。

第3号土壇 (第10図)

住居跡の西側に隣接しており、第4号土壇と近接する。4-9グリッドに位置する。平面形は隅丸方形で、

長軸は約1.8m、短軸約1.2m、深さ約0.15mである。主軸方位はN-30°-Wを指す。掘り込みは浅く、底面は概ね平坦である。

第4号土壇 (第10図)

住居跡の西側に隣接しており、第3号土壇と近接する。4-9グリッドに位置する。平面形はほぼ円形で、長径は約1.6m、短径は約1.2m、深さは0.2mである。掘り込みは浅く、底面は概ね平坦である。

第5号土壇 (第10図)

4-9グリッドに位置する。平面形は楕円形で、長軸約1.1m、短軸約0.8m、深さ約0.45mである。掘り込みは深く、底面は長軸方向にV字状を呈する。覆土は他の土壇と同じ傾向を示すが、最下層に炭化物と鉄分のブロックを含む層が見られる。主軸方向はN-29°-Wを指す。

第6号土壇 (第10図)

調査区西端の3-8グリッドに位置する。一部調査区外に延びているが、ほぼ完掘している。平面形は概ね隅丸方形であるが、不定形に近い。長軸は約3.5m、短軸は約1.8m、深さは約0.3-0.15mである。底面は西側が深く、東側は浅い傾向を示し不規則である。

第7号土壇 (第10図)

調査区の西端3-8グリッドに位置し、ほぼ半分が調査区外である。平面形はほぼ円形で、径は約1mである。深さは約0.15mと浅く、底面はほぼ平坦である。

第8号土壇 (第33図)

19-15グリッド、B区の第1号溝の内に位置する。平面形状は楕円形で長軸1.2m、短軸1mを測る、底面はビット状に深くなる部分がある。

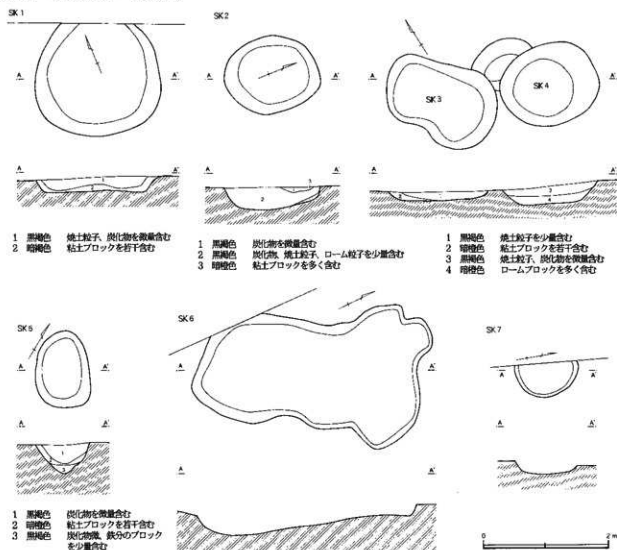
遺物は、須恵器の環、蓋、甕類がまとめて出土している。

(3) 溝

第1号溝 (第33図)

B区の粘土探掘坑と重複している。南北方向に調査区を横断するように走っている。覆土は下層に礫を含

第16図 A区土坑(L=125.30m)



む層があり、上層に粘土と砂が含まれている。各層の礫又は砂に赤褐色の鉄分が付着しており、水に浸かっていた可能性が高い。

(4) A区粘土採掘坑群

粘土採掘坑は、A区の7～17-9～12グリッドの東西約50mの範囲に、幾つかの密集する部分をもって分布している。南北の範囲は、調査区外に広がっているため明らかでないが、粘土採掘坑が等高線に沿って掘られている可能性が高く、東西方向のように広がらないと思われる。

(5) A区出土遺物

A区から出土した遺物は、蓋、環、高台付環、椀、高台付椀、壺、高盤、高台付壺、鉢、壺、横瓶、甕、焼き台、土師器の環、甕、上鉢、紡錘車がある。

以下、調査区西から順に説明する。3-8グリッドからは、径3.5cmの擬宝珠状のつまみを持った蓋4が出土している。天井部の調整は回転ヘラケズリされていて、口縁端部の形態は欠損しているため不明である。竪穴状遺構からは、環15・27と甕86が出土している。15は口径7.8cmの環である。非常に小ぶり、また器肉が非常に厚い。底部の調整は手持ちヘラケズリを施している。27は環である。分厚い底部から直線的に立ち上がるが、口縁部は欠損している。底部の調整は左回

転ヘラケズリである。86は甕の胴部の破片で外面が3cmの幅で11本の、幅の狭い刻みのような平行叩きで横と斜めの3方向から叩いている。内面は青海波文だが一部しか残っていない。硬く、焼きしまっている。

9グリッドから東には粘土採掘坑が広がっている。9-11グリッド内の西側の粘土採掘坑からは、蓋3が出土している。3は口径が推定16.3cmのかえりの付いていない蓋である。つまみの有無は不明で、天井部の調整は左回転ヘラケズリである。

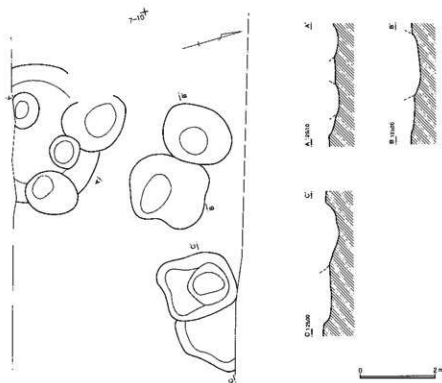
10-10グリッド内の西南に位置する粘土採掘坑からは、蓋12、盤42、鉢57、土師器の甕93が出土している。12はかえりが付いている蓋の口縁部の破片である。42は盤で、小片のため口径などは不明である。口唇部内面に斜めに面を持つ。57は小型の鉢の口縁部である。器肉は上にいくほど薄くなり口唇部でやや外反する。93は土師器の甕の口縁部である。口縁部は外反し、口唇部は丸くなる。胴部は直上に立ち上がり、外面は右から左に削られている。

10-10グリッドからは、蓋6・8・10、環17・18・21・

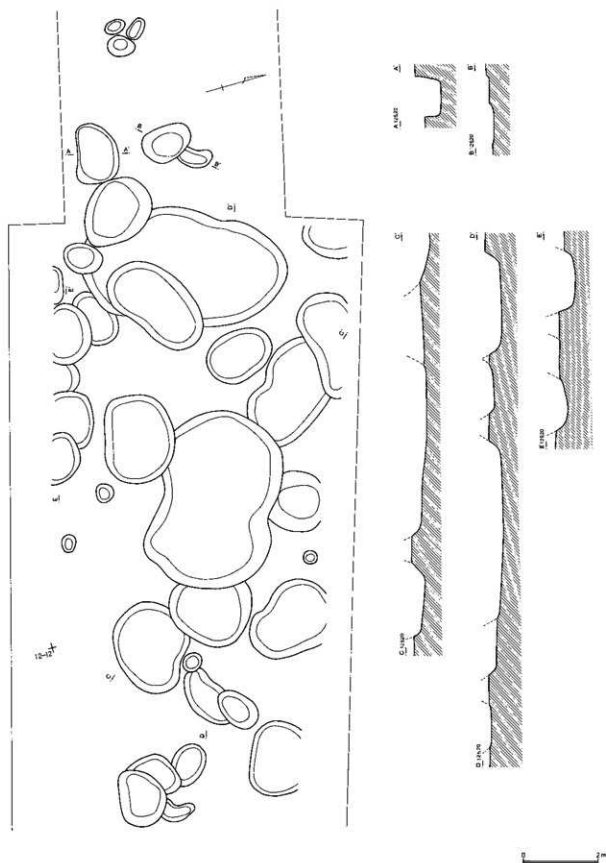
22・26・29・34、高台付碗37・125、盤41、高盤50、鉢54・56、壺58、長頸壺61、甕76・81・83・90が出土している。

6は推定口径18.8cmのかえりの付いた蓋である。かえりは奥に入っている。つまみの有無は不明であり、天井部の調整は回転ヘラケズリである。8は推定口径15.8cmで器高の低い蓋である。口縁部の手前で外反する。10は蓋のつまみである。つまみ径は2.5cmで形態は擬宝珠状である。酸化焰焼成である。17は推定底径5.4cmの環の底部である。調整は無く、ヘラ切りのままである。18は推定口径10.8cmの環の口縁部の破片である。端部をつまんでいる。底部の形態は欠損しているため不明である。21は推定底径8.8cmの環の底部の破片である。底部の調整は全面持ちヘラケズリである。22は推定底径9.8cmを持つ環の底部の破片である。底部の調整は左回転ヘラケズリを施している。胎土は砂っぽい。26は推定口径16.8cmの環である。25と同様底部が欠損している。直線的に立ち上がり、口縁部はやや外反する。器肉が薄い。29は大型の環の底部であ

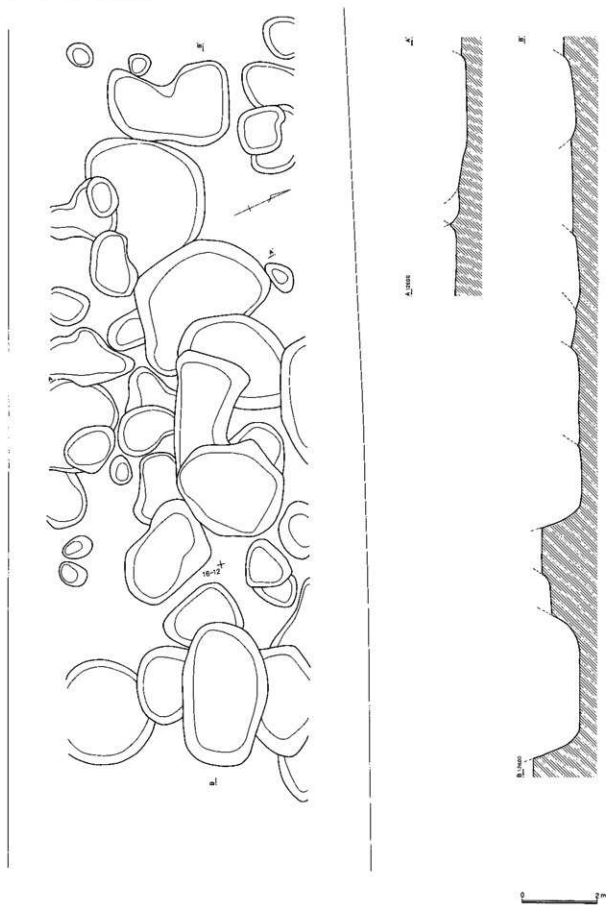
第17図 A区粘土採掘坑(1)



第18図 A区粘土採掘坑(2)



第19图 A区粘土弹振坑(3)



る。底径が大きく、器内が非常に厚い。外面はほぼ平底を呈していて、調整は全面回転ヘラケズリである。内面はもりあがった中央部から外に向かって下がっている。34は推定口径12.4cmの環で底部は欠損している。体部は外傾に内湾して立ち上がり、口唇部は外反している。胎土は砂っぽい。37は推定口径18.0cm、高さ9.4cmの大型の高台付碗である。体部は外傾に内湾しながら立ち上がり、口唇部でやや外反する。底部は回転系切り離しの後、ハの字状の高台を貼り付けて外周を指ナデしている。焼成が不良で、人粒の赤色粒が目立つ。器肉が薄い。125は推定底径6.4cmの高台付環の底部で、回転系切り離しの後高台を貼り付けている。41は甕の口縁部である。小片のため口径などは不明である。体部は外傾に内湾気味に立ち上がり、口縁部で鋭く外側へ折れる。口唇部は内傾する平坦面を持つ。50は高盤の底部から脚部にかけてである。底部外面は回転ヘラケズリで、中心は撫でている。上から下へ開いていく脚部を貼り付けている。器面はざらつく。54は小ぶりの鉢の口縁部である。形態の特徴は口縁部外面が外反し、端部上面に平坦面を持つ。内面に青海波文のようなものが見えるが、はっきりしない。56は体部から口縁部まで外傾に内湾気味に立ち上がる鉢である。口縁部に沈線をめぐらす。口唇部は外反し内面に平坦面を持つ。底部の調整は回転ヘラケズリである。11-10・11グリッド出土遺物と接合する。

58は壺の口縁部である。頸部は外傾に開き、口縁部で外反して口唇部は外に斜めに面を持つ。61は長頸壺の口縁部である。頸部から外傾に立ち上がり、口唇部外側がわずかに外反し、上面に面を持つ。外面に2本の沈線をめぐらす。76は補強帯の付いた甕の頸部である。6または7条の波状文を3段施し、その後ヘラ記号を書いている。判読できない。土器を逆さにして左の縦線から書き始め、最後は左から右下への斜め線を引いている。内面はナデ調整、外面は指ナデで器面を整えている。81と83は甕の胴部である。81は外面は3cmの幅で9本の刻みの細かい平行引きが横位に施され、その上に刀子のような鋭い斜め刻みが部分

的にみられる。内面は一部に青海波文が残っているが、ほとんどナデをしている。83は甕の胴部である。外面は3cmの幅に8本の縦斜格子叩きで、内面は青海波文である。22-13グリッド出土遺物と接合している。90は甕の底部である。丸底で内面には自然釉がたまって塊になっている。外面は細かい平行叩きが部分的に認められるが、はっきりしない。器肉は薄めである。

11-10グリッドからは、蓋9・13、長頸壺62が出土している。9は蓋のつまみである。つまみ径は2.6cmで、つまみの形態は中央がとがり、一度回んでもちあがる擬宝珠で貼り付けてある。13は蓋の口縁部の破片である。かえりが付いている。62は長頸壺の胴部である。2本の沈線がめぐる。

10-11-11グリッドにまたがる粘土採掘坑からは、底面から環31が出土している。31は口径12.2cmの環でゆがみがひどい。体部は外傾に内湾気味に立ち上がり、口唇部は丸くやや厚くなっている。底部外面は全面回転系切り離して、体部外面はクロロ目がついつい。焼成は良く、胎土も緻密でよい。

11-10・11グリッドにまたがる粘土採掘坑からは、長頸壺の底部64が出土している。64はハの字に開く高台が貼りつき、底部内面は中心から外側に右回りでヘラナデが施されている。高台は端部で強く外反して肥厚する。

12-10グリッド内の西側の粘土採掘坑からは、高盤49、甕72が出土している。49は底部中央に脚部の刺離したあとがあるため、高盤とした。口縁部外側が屈曲していて、上に面を持つ。底部内面には青海波文が、外面には平行叩きの痕跡がある。叩いた両側を回転ヘラケズリしている。器面はやや風化しざらつく。粘土は粘質が強く、緻密である。72は甕の口縁部である。小片のため径を出せない。外傾に直線的に立ち上がるが途中で両面がへこみ口唇部は肥厚する。上に平坦面を持つ。

11-12-11グリッドにまたがる南側の粘土採掘坑からは、甕の胴部80が出土している。外面が3cmの幅に8本の縦格子叩きが、内面には青海波文が施されてい

る。施文順序は下から上である。

13-11グリッドからは、蓋7が出土している。推定口径16.0cmの蓋で、天井部の調整は回転ヘラケズリである。

13-11グリッド内の北側に位置する4基の粘土採掘坑の西より2つ目から環25、壺68が、4つ目から高台付碗36、高盤51が出土している。25は推定口径12.7cmの小ぶりの環である。丸みを帯びて立ち上がるが、口縁部は直上している。底部が欠損しているため調整は不明である。68は丸底気味の壺の底部である。底部内面は中心周辺が強い指ナデのためこんでいる。分厚い底部から外傾に内湾気味に立ち上がるが、極端に器肉が薄くなる。底部の調整は全面回転ヘラケズリである。36は口径12.7cmの小ぶりの高台付碗である。高台は内傾し、貼り付けである。底部から体部にかけて腰をもち、体部は外傾に内湾気味に立ち上がる。口唇部でつよく外反する。底部は回転糸切り離しである。51は底部外面に回転ヘラケズリが施され、脚部は貼り付けで内面には指ナデの後がつく残る。

14-10グリッドからは、鉢の口縁部55が出土している。体部は内傾し口縁部で外傾し、口唇部は上を向く。外面に2本の沈線がめぐる。

14-11グリッド内北西からは、蓋14、長頸壺60、甕73・77が出土している。14は蓋の口縁部の破片である。かえりが付いている。60は長頸壺の口縁部である。頸部から引き直線的に立ち上がり、口縁部で器肉が極端に薄くなる。頸部外面に3条の櫛歯波状文が施されている。73は甕の口縁部である。内外面ともナデ調整している。77は頸部で下に補強帯が付いている。

14-11グリッドからは、蓋11、高台付碗35、盤128、高台付盤46、長頸壺63、土鉢94が出土している。11は蓋の口縁部の破片である。かえりが付いている。35は推定口径15.2cmの高台付碗である。底部が欠損していて高台の有無は不明だが、器高が高く、他の高台付碗に類似しているため高台付碗にした。体部は外傾に内湾気味に立ち上がり、口唇部が外反する。器肉は立ち上がるほど薄くなっている。ロクロ目が確認できる。

128は盤である。口縁部から底部の途中までの破片なので高台付盤や高盤の可能性もある。推定口径は25.8cmで体部は外傾に内湾気味に立ち上がり、口縁部外面がわずかにへこむ。口唇部は上に平坦面を持つ。底部の調整は回転ヘラケズリを施している。46は貼り付ける高台部である。63は長頸壺の胴部である。5条の櫛歯波状文が2段になっている。波状文の引き方が確である。

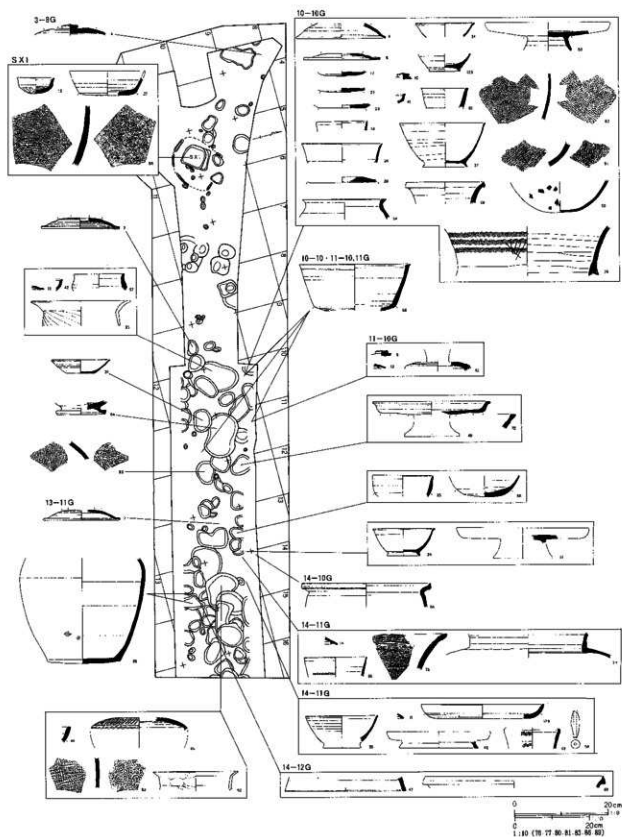
14-12グリッドからは、高台付盤の高台部47、甕69が出土している。47は貼り付けの高台部分である。上部には盤が付くが、厚みがあるしっかりした高台なので大型のものが考えられる。69は推定口径37.8cmの甕の口縁部の破片である。外反する口縁端部に粘土を貼り付けている。凸型である。

14-12グリッド内の東南に位置する不整形の粘土採掘坑からは、甕89の胴部から底部にかけてが出土している。底部は径19.2cmの平底で残存高は28.1cmである。胴部の丸みはあまりなく縦長の甕である。外面は平行叩きの痕がわずかに見られるが、全体にナデをしている。内面も均ように撫でられている。底部の調整もナデである。14-12グリッド出土遺物と接合した。

14-11グリッド内の粘土採掘坑からは、盤44、長頸壺66、甕82、土師器の甕92が出土している。44は内湾気味に立ち上がり、口唇部に平坦面を持つ。66は長頸壺の肩部である。外面には上から沈線が1本、櫛歯文、条線、沈線が2本、最後に1条の波状文が施されている。外面は自然釉が付着している。82は甕の胴部で外面は3cmの幅に、縦横共に7本の格子叩きで内面は中心まで残っている青海波文である。格子叩きに中心が見える青海波文や器肉が薄いなど他の甕の胴部とは異なっている。92は推定口径18.1cmのコの字状の口縁をもつ長頸壺の口縁部である。

15-11グリッドからは、環32・33、高台付盤48、甕71・91が出土している。32は底径6.4cmの環の底部である。形態は底部から体部にかけて腰をもち、外傾に内湾気味に立ち上がる。底部外面は回転糸切り離し後、外周ヘラケズリを施している。33は推定口径13.8cmの環で

第20図 城見上遺跡A区遺物分布図(1)



底部が欠損している。体部は外傾に内湾しながら立ち上がり、口唇部が外反する。器内は薄い。48は口径27.7cmの盤に底部外面の内側1.3cmのところから高台が削られたような痕跡が見られるため、高台付盤とした。底部と体部の境に角を持ち、体部には8本の櫛状工具で波状文が施されている。口縁部外面には沈線をめぐらし、口唇部は先細りする。底部の調整は回転ヘラケズリである。つくりが丁寧で焼きも良い。71は推定口径48.5cmの大型の甕の口縁部である。16-11グリッド内の出土遺物と接合する。91は甕の胴部の破片である。底部は平底と思われる。

15-11グリッド内の北側に位置する粘土採掘坑からは、甕88が出土している。推定口径15.0cm、器高25.8cmの小型の丸底甕で外面は胴部に3cmの幅で7本の平行叩きが施されている。胴部下半から底部にかけて叩きをナデ消している。内面は中心まで見える青海波文で、肩部の所は青海波文をナデ消している部分がある。底部には釉塊が付着している。施文順序は下から上、右から左である。

15-11グリッド内の南側に位置する2つの粘土採掘坑からは、蓋1、盤43・129、高盤53、壺59・65、甕70が出土している。1はかえりの付いた口径9.2cmの小ぶりの蓋でつまみの有無は不明である。天片部の調整は左回転ヘラケズリである。43は口縁部外面がくぼみ、口唇部に平坦面を持つ。129は口縁部から底部の途中までの盤の破片である。推定口径23.2cmで外傾に開く体部に口唇部は内面に斜めに面を持つ。体部下半から回転ヘラケズリを施している。53は高盤の胴部である。底部が屈曲する形態は他の胴部と同じであるが、底径が小さく器内が薄い。59は壺の口縁部である。頸部から外傾に直線的に立ち上がり、口唇部で先細りする。口縁部下半をつまんでいる。焼きが悪く、大粒の赤色粒子が目立つ。58とは異なる形態である。65は壺の底部である。平底から外傾に直線的に立ち上がるが、内面は腰に指ナデの強い段を持ち、クロロ目が見える。底部の調整は手持ちヘラケズリである。焼きが悪い。70は推定口径19.0cmの小型の甕の口縁部である。外傾

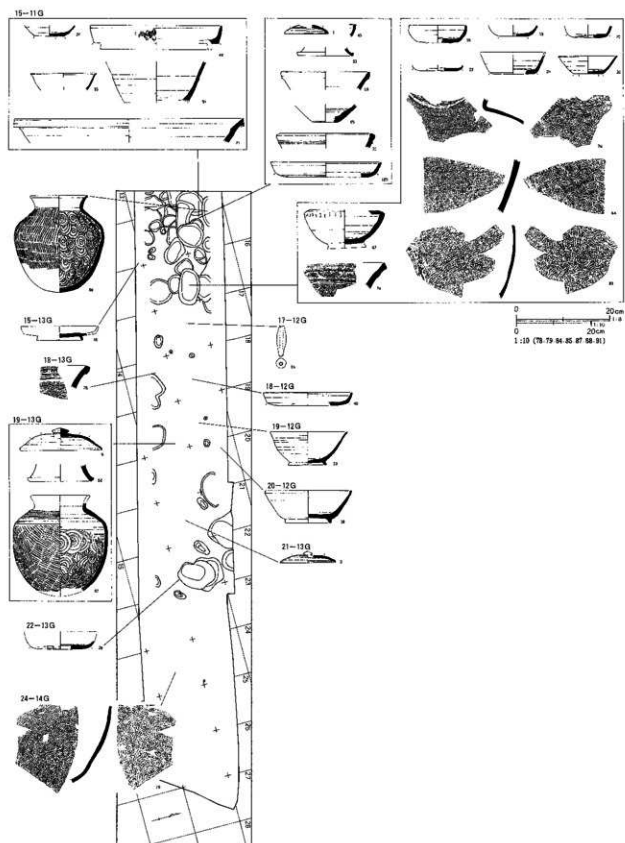
に立ち上がり、口唇部内面はわずかに内湾し、外側に面を持つ。沈線をめぐらせた下に粘土紐を貼り付けている。

15-13グリッドからは、高台付環の底部45が出土している。ヘラ切りの後全面回転ヘラケズリを施し、高台を貼り付けている。高台は立ち上がりよりも内側に付いている。内面は指ナデしている。

16-12グリッド内の北東に位置する粘土採掘坑からは、環16・19・20・23・24・30、長頸壺67、甕74・78・84・85が出土している。16は推定口径11.8cm、底径8.8cmの環である。形態は底部から内湾し、口縁部は直上し、端部は面を持つ。底部の調整は無く、ヘラ切りのままである。19は推定底径6.0cmの環の底部である。底部から内湾しながら立ち上がるが、口縁部は欠損している。底部の調整は手持ちヘラケズリである。20は推定底径7.6cmの環の底部である。底部から直線的に立ち上がり、19と同様口縁部が欠損している。底部の調整も19と同じだが、20のほうが器肉が厚い。23は推定底径10.2cmの環の底部の破片である。底部の調整は手持ちヘラケズリである。24は推定底径10.0cmの環である。厚みのある底部から直線的に立ち上がり、厚さも徐々に薄くなっている。口縁部は欠損して不明だが、自然に丸くなると思われる。底部の調整は回転ヘラケズリである。30は口径12.2cmの環である。体部は底部から外傾に直線的に立ち上がり、口唇部がわずかに厚くなる。底部外面の調整は回転糸切り離し後、外周回転ヘラケズリをし、さらにナデを施している。

67は長頸壺の胴部から底部にかけてで、高台が削がれている。平底の底部から外傾に内湾気味に立ち上がり、肩部は焼成不良により歪んでいる。肩部には3条の波状文の外側に2本の沈線がめぐり、胴部に押し引き櫛描文を施している。底部の調整は回転ヘラケズリである。74は甕の口縁部である。外傾に直線的に立ち上がり、73と同様、途中で両面がへこむ。口唇部は外側に平坦面を持つ。口縁部下半には沈線区画の中に5条の波状文が施されている。78は甕の肩部である。外面は縦斜格子に見える平行叩きをしたうえに浅く櫛描

第21図 城見上遺跡A区遺物分布図(2)



きを施している。施文が丁寧である。内面は青海波文が下から上に施されている。84は甕の胴部である。外面は3cmの幅に12本の細かい刻みの縦格子叩きで、内面は青海波文である。最大幅1.5cmと非常に厚みがある。85も甕の胴部である。横の内湾がきついで小型の甕かもしれない。外面は3cmの幅で6本の平行叩きが浅く施され、内面は青海波文である。器肉が薄い。鉄分を多く含み大粒の黒色粒が浮きでている。

17-12グリッドからは、土鍾95が出土している。

18-12グリッドからは、甕40が出土している。底部から体部にかけて腰をもち、体部は外傾に直線的に立ち上がり、口縁部は内側に肥厚している。底部の調整は回転ヘラケズリである。

18-13グリッドからは、甕の口縁部75が出土している。口唇部は角形で沈線が上に1本、下に2本あり、口縁部下半には7条の波状文が2段まで認められた。

19-12グリッドからは、高台付碗39が出土している。推定口径16.1cmの中型の高台付碗である。底部内面の中央がへこみ、体部は外傾に内湾気味に立ち上がり、口縁部でわずかに外反する。底部外面は全面を指ナデしている。ハの字状の低い高台が貼り付けられている。底部外面の外周には高台を貼り付けるときのへこみがめぐっている。

19-13グリッドからは、蓋5、高甕52、小型の甕87が出土している。付近には粘土探掘坑がある。5はほぼ完形の口径17.1cmの大ぶりの蓋で、径3.6cmの擬宝珠状のつまみを持ち、かえりは付いていない。天井部の調整は左回転ヘラケズリである。52は高甕の脚部である。底部が外側に屈曲する。87は小型の甕の肩部から胴部にかけてである。外面は平行叩き、内面は中心まで見える青海波文で88と同じである。肩部の内外面の工具によるナデが明瞭である。

20-12グリッドからは、高台付碗38が出土している。推定口径18.2cmの大型の高台付碗であるが、高さが低く、器肉も厚く、他の高台付碗とはその様相が異なる。底部から体部にかけて腰をもち外傾に直線的に立ち上がり、口縁部は薄くなり外面に沈線をめぐらせて直上

する。底部は回転条切り離しの後、低い高台を貼り付けている。

21-13グリッドからは、蓋2が出土している。口径11.6cmの蓋でかえりが付いている。口縁端部に面を持ち、つまみの形態は不明であり、天井部の調整は回転ヘラケズリである。

22-13グリッドからは、環28が出土している。推定直径12.8cmの環の底部の破片である。底部外面の調整は手持ちヘラケズリである。内面は丁寧なナデである。硬く、焼きしまっている。

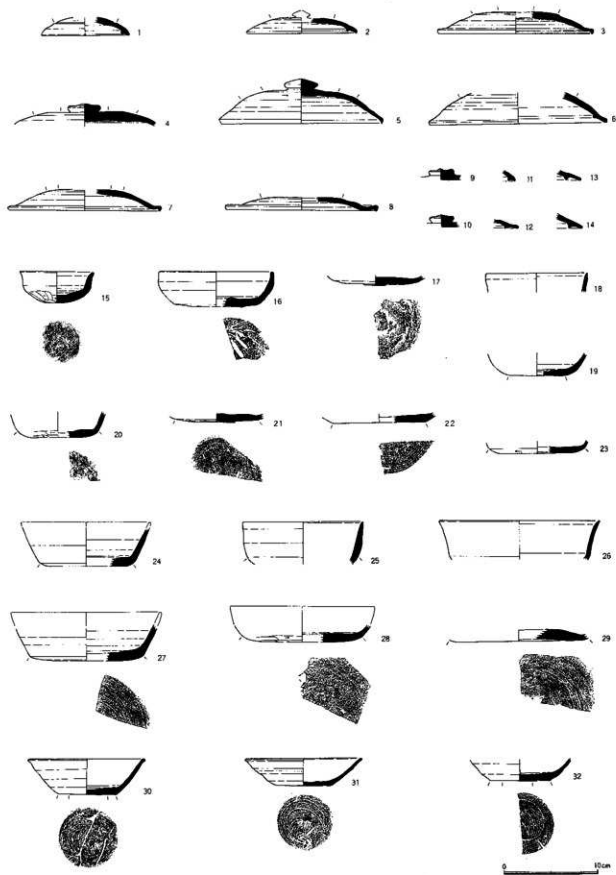
24-14グリッドからは、甕の胴部79が出土している。外面は3cmの幅に8本の縦斜格子の叩きが、内面は青海波文が施されている。

表採遺物は、蓋96-99、環100-118、高台付環119-124、甕126・127・130、高台付甕131、高甕132、鉢133-135、壺136-138、甕139-158、甕159、横瓶160、焼き台161、土師器の環162、甕163・164、土鍾165・166、紡錘車167・168がある。

蓋はかえりのついているものと端部を折り曲げたものがある。96のかえり蓋は推定口径23.7cmの大型で、かえりは端部から2cmほど内側に小さく付く。端部はわずかに曲げている。98はつまみの形態がわかるものである。つまみは径が3.3cmで中心の周辺がへこむ擬宝珠状である。99は推定口径16.1cmの中型のもので端部を内側に屈曲させている。天井部はすべて回転ヘラケズリしている。

環は底部をヘラケズリしたものと条切り離しのものがある。100は推定口径9.2cmの小型の環である。丸底で器肉が厚く、珍しい。外面は全体に上から下に左から右に手持ちヘラケズリを施している。内面は指ナデである。101はやや丸底の底部から、腰を持ち体部下半までは内湾気味に立ち上がるが途中で外反し、口唇部でさらに外反する。体部の器肉は外反するところから極端に薄くなる。底部はヘラ切りのままである。103は推定口径11.3cmの小型で口唇部が先細りする。底部が欠損しているが体部下半には回転ヘラケズリが施されている。102・104-106はヘラケズリの底部である。104

第22図 A区出土遺物(1)



は全面回転ヘラケズリ、その他は手持ちヘラケズリである。106は外面にヘラ記号がある。107は底部を回転糸切り離した後、外周回転ヘラケズリをして、ナデを施している。上げ底気味の底部から外傾に立ち上がり、器肉が体部4mmまで自然に薄くなり、口縁部で肥厚する。口唇部は丸くなる。108～110・113～115は12.0cm～13.2cmまでの口径を持ち、回転糸切り離しの底部から外傾に内湾気味に立ち上がり、口唇部で外反するものである。108は底部を撫でて、糸切り痕を消している。110は体部のクロク目がきつい。113は8枚の坏を重ね焼きしたものである。114は若干小ぶりで、115は器高が高めて底径が小さく柄に近い。111・112は推定口径16cmほどで、底部が欠損している。112の方が器高が低い。116～118は回転糸切り離しの底部である。116は推定底径が9.6cmと大きく、器肉も1.0cmと厚い。糸切りの後撫でている。118は底部外面に糸切りの中心に向かってヘラ記号がみられる。

高台付坏で復元できたのは119と120で、121～125までは体部下半から底部までしかない。119は推定口径19.6cm、高さ10.0cmの大型のもので柄に近い。口唇部が厚くなり、わずかに外反する。120は推定口径14.2cmの中型で外傾に内湾気味に立ち上がり、口縁部で外反する。その他は底径の大きさが8cm前後、6cm台、5cm台に分けられる。底部は回転糸切り離して、その後、高台を貼り付けている。122だけは底部外面を全体的に撫でていて、糸切りか不明である。焼きあがりがない。121と125は全体に撫でているが糸切り痕が見える。123は高台を貼り付けるための指ナデを外周にめぐらす。124は全くナデがみられない。鉄分を多量に含み黒色粒が浮きでている。高台はハの字に開くものと121や124のように開かないものがある。

盤としたものの中には底部が欠損しているため高台付盤や高盤の可能性のあるものが含まれているが、判断できないので盤とした。どれも口径が推定ではあるが22.0cm前後である。しかしその形態は様々である。126はわずかに残っている。底部は真っ平らで、体部が外傾に直線的に開き、口縁部は四角くなる。127は外傾

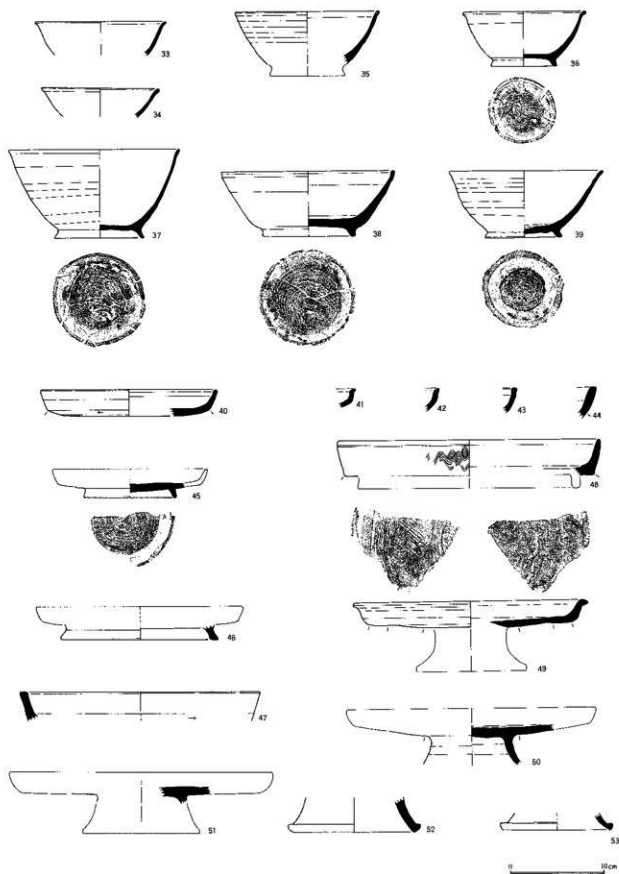
に立ち上がる底部から強い腰を持ち、体部は逆ハの字に開く。口唇部は外面に突出し、上に平坦面を持つ。130は底部と体部の境が無く、外傾に内湾気味に立ち上がる。口縁部外面は指ナデをしていて、わずかに凹んでいる。底部内面はナデを施している。底部外面の調整は回転ヘラケズリである。高台付盤としたものは131である。これは高台を貼り付けた底部で内面は不定方向のナデが、外面は回転ヘラケズリが中心から高台の外周0.6cmの幅で施されている。132はハの字に開いた高盤の胴部で端部を外に屈曲させている。良く焼きしまっている。

133は推定口径27.6cmの鉢の口縁部である。2本の沈線がめぐり、口唇部は上に平坦面を持っている。134も鉢であるが推定口径が23.6cmと133よりは小さい。口唇部は内側に丸くなる。外面の体部上半から口縁部にかけてはナデを、内面の体部下半にはヘラミガキを施している。磨かれた部分の器面は非常に滑らかである。135は鉢の底部の端から外傾に立ち上がる部分である。底部の調整は回転ヘラケズリである。

136は推定底径11.0cmの壺の底部で、その調整は回転糸切り離した後、外周回転ヘラケズリである。137は推定口径18.0cmの壺の口縁部である。138は小ぶりの短頸壺の頸部から胴部にかけてである。胴部は直上し肩部は内傾し、頸部で外に折れる。胴部内面は指ナデを施している。

甕は頸部が短いものと長いものがある。短いものは139で、胴部は内傾に内湾気味に立ち上がり、外反する口縁部を持つ。頸部から口縁部は3cmである。胴部外面は擬斜格子叩きが施された上から、幅2cmの工具で撫でられている。内面は青海波文の痕が撫でられて、薄く残っている。140～149は外傾に外反しながら立ち上がる甕の口縁部で波状文が施されているものと、無文のものがある。140～143と148は波状文が施されている。140は内外面に補強帯を貼り付けている。文様は沈線で3段に区画された中に上・中段は5条、下段は4条の波状文が施されている。141は6条の波状文が2段施されているが、破片のため下に何段続くのかは

第23図 A区出土遺物(2)

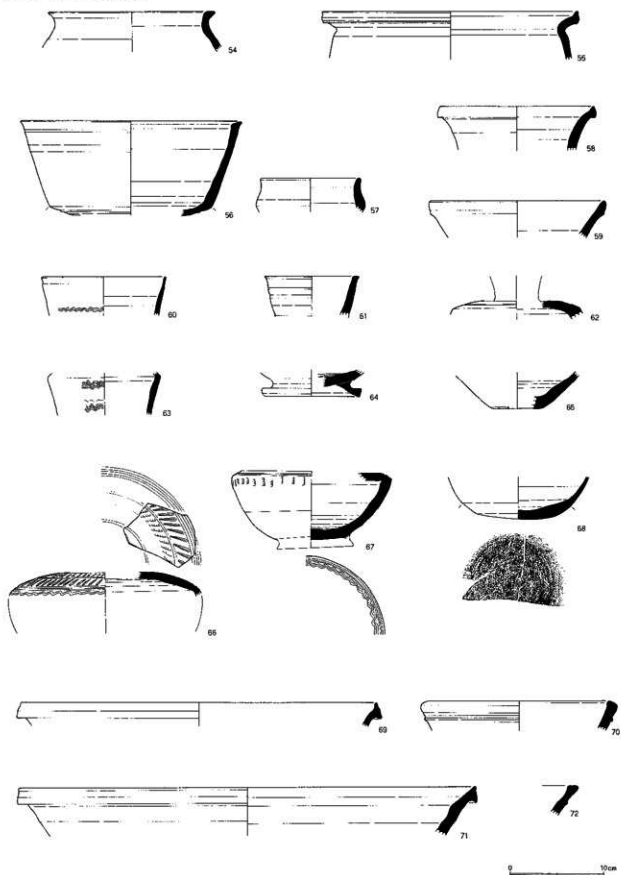


不明である。内面は指ナデのため凸凹している。142は外に折り返された口縁部に沈線が1本入り、その下に6条の波状文が施されている。焼成が不良である。143は口唇部が外側に大きく開き、上に平坦面を持つ。外面の外反する所に1本の条線がめぐり、その下に波状文の一部が確認できる。148は推定口径62.0cmの大型のものである。口縁部に3本の沈線が、その下に5条の波状文が4段施されている。波状文は浅く、明瞭さに欠ける。144~147と149は無文のものである。144~147は推定だが口径が20.0cmで149は推定36.1cmである。144は口縁部の上下に沈線がめぐり、口唇部は角形である。外面の調整はナデが施されているが、内面は自然釉が付着していて不明である。硬く焼きしまっている。146は口縁部は外反し口唇部が外側に開き、端部は外に斜めに面を持つ。内外面に自然釉が付着しているため、器面は粗く調整は不明である。147は口縁部で外反し口唇部はふくらむ。外面は撫でられている。149は口縁部外面には右から左、上から下に指ナデが施されている。150は補強帯を持つ甕の口縁部下半から頸部にかけての破片である。外面は幅3cmの板状工具を使用して、上から下、右から左に細かく叩いた後、指ナデを施して叩いた痕を消している。内面も指ナデである。151から155は胴部の破片である。外面は151と152が3cmの幅に7本と9本の擬斜格子叩きで、153が3cmの幅に9×9本の格子叩きで、154と155は7本と6本の平行叩きが施してある。内面は全て青海波文であるが、151は青海波文の端が、152は円の中心までが残っていて直径で約5cmある。154は下から上へ、右から左へ施文されたことがわかる。155はカーブがきつく、焼成が良好である。瓶類の可能性

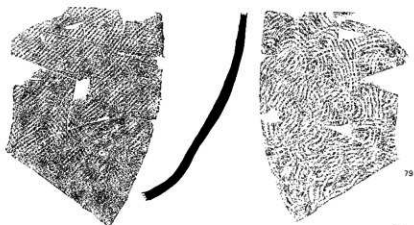
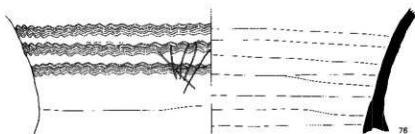
がある。156は底部である。大きさからは甕の底部が考えられるが、平底なうえに直角に近い角を持っているなど、他の甕とは異なる形態である。つくりは丁寧で胎土も焼成も良い。内外面とも叩きの後はみえず、ナデ調整が施されている。内面の底部と胴部の境には片岩の塊が付着している。157と158は底部である。どちらも底部の調整は不明で、底部に胴部を貼り付けている。底部外周には指でおさえたへこみがあるが、158はよりへこんでいる。159は甕の胴部である。外面は沈線がめぐり、その下はヘラケズリが施され、内面は撫でられている。160は横瓶の肩部である。外面は自然釉が付着しているため調整は不明である。161は焼き台である。推定口径12.0cm、推定底径13.6cmと底径の方がやや大きい。底部の端部は丸くなり、体部は内傾に直線的に立ち上がる。口縁部外面の調整は不明である。

162から164は土師器である。162は坏である。口縁部が欠損しているため、目安にしかないが12.5cmほどの口径であり、体部外面に沈線をめぐらせ、底部の調整はヘラケズリである。内面は撫でられていて、器肉が最大で0.4cmと薄い。163は甕の口縁部である。推定口径16.0cmの甕で口縁部は外反し口唇部は丸くなる。体部外面はヘラケズリが施されている。胎土の粒子は細かいが器面はざらついている。164は甕を胴部上半で切って、切り口を整えて焼いたものである。底径が5.4cmの平底の底部を持ち、口唇部には棒を押し当てて半円の凹凸をめぐらす。外面胴部上半は未調整で全面にひび割れがみえ、胴部下半はヘラケズリが施されている。内面は胴部に板状工具を当てた痕がみえるが、きれいに消されていて、底部は未調整である。底部外面の調整は不明で、ヘラ記号がある。

第24図 A区出土遺物(3)

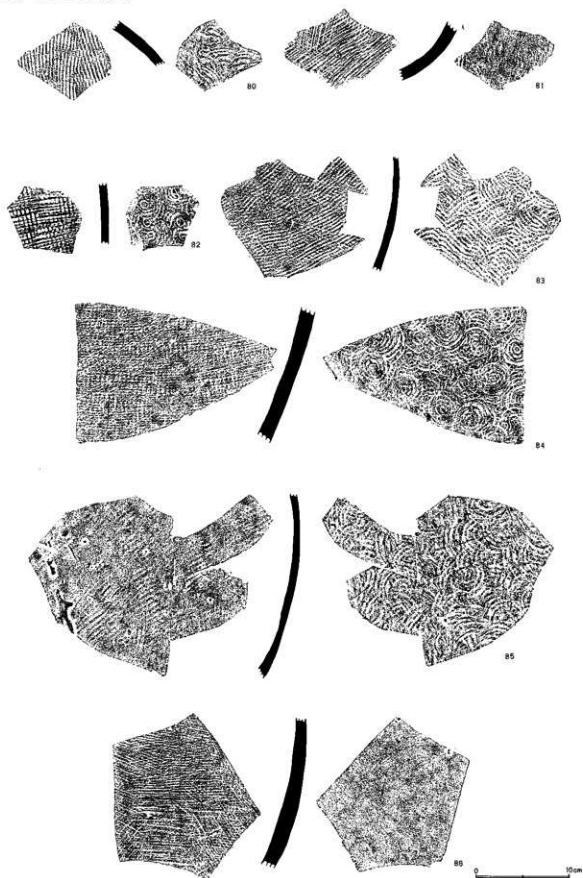


第25图 A区出土遗物(4)

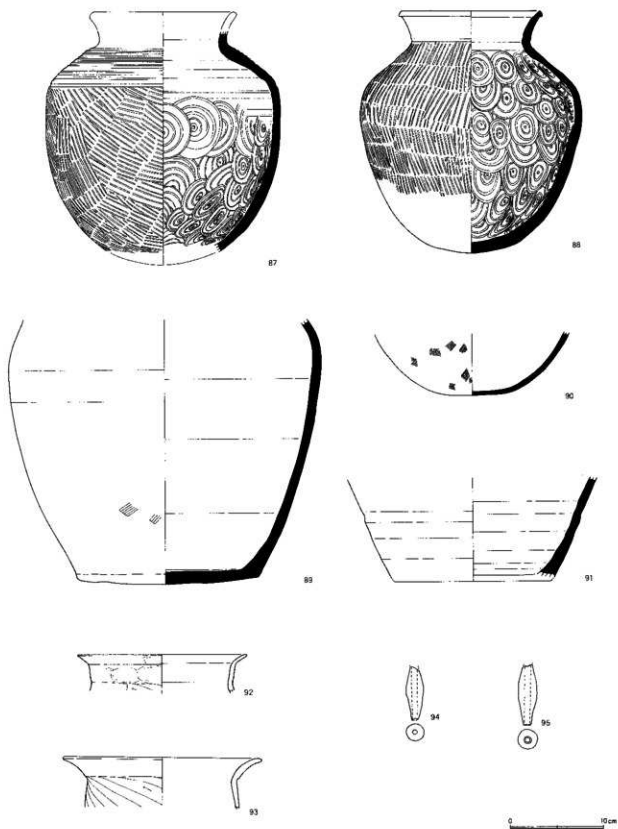


0 10 cm

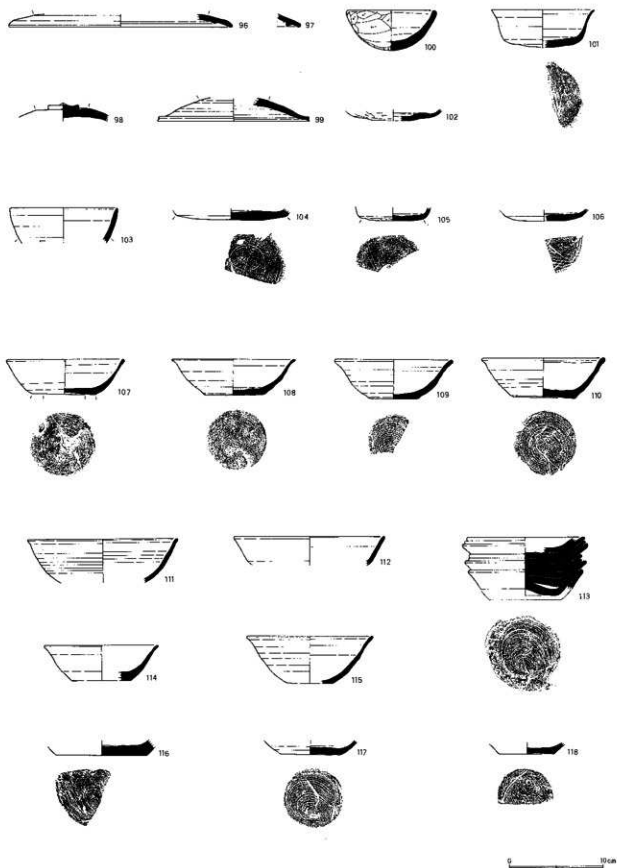
第26図 A区出土遺物(5)



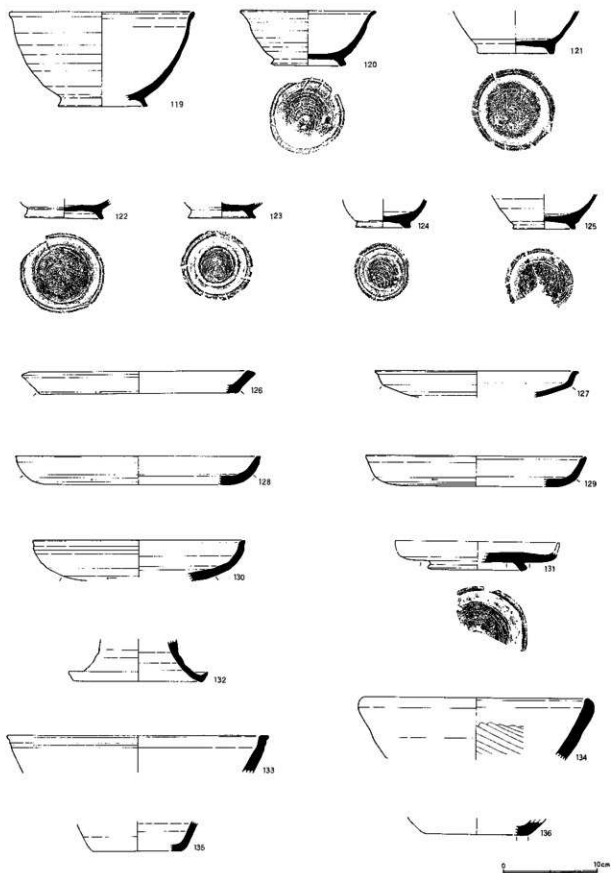
第27图 A区出土遗物(6)



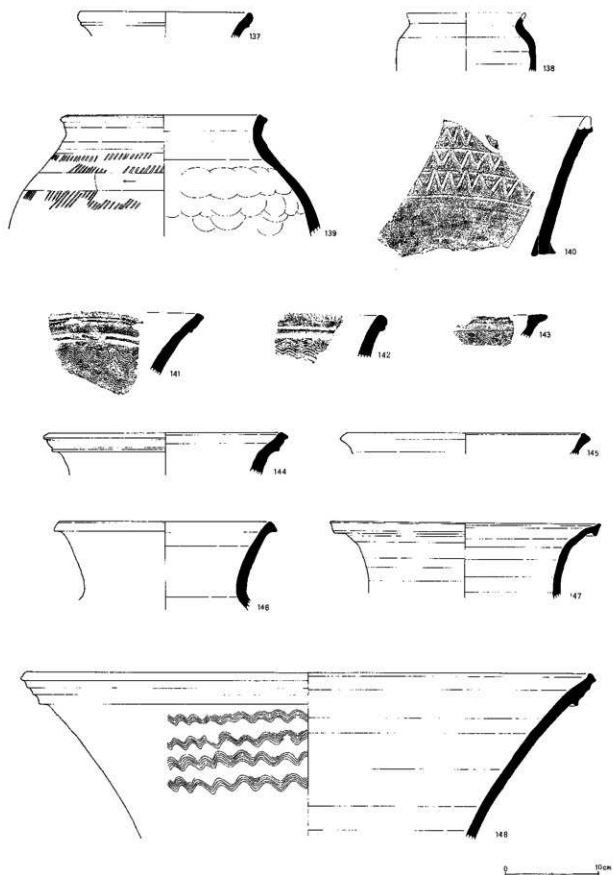
第28図 A区出土遺物(7)



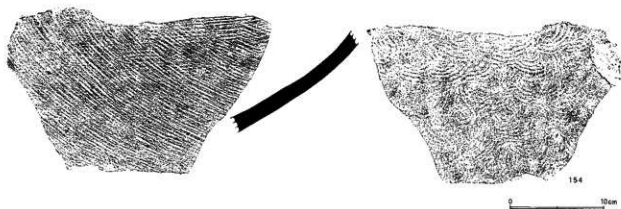
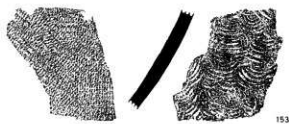
第29图 A区出土物(8)



第30図 A区出土遺物(9)



第31图 A区出土文物(10)



第32図 A区出土遺物(11)

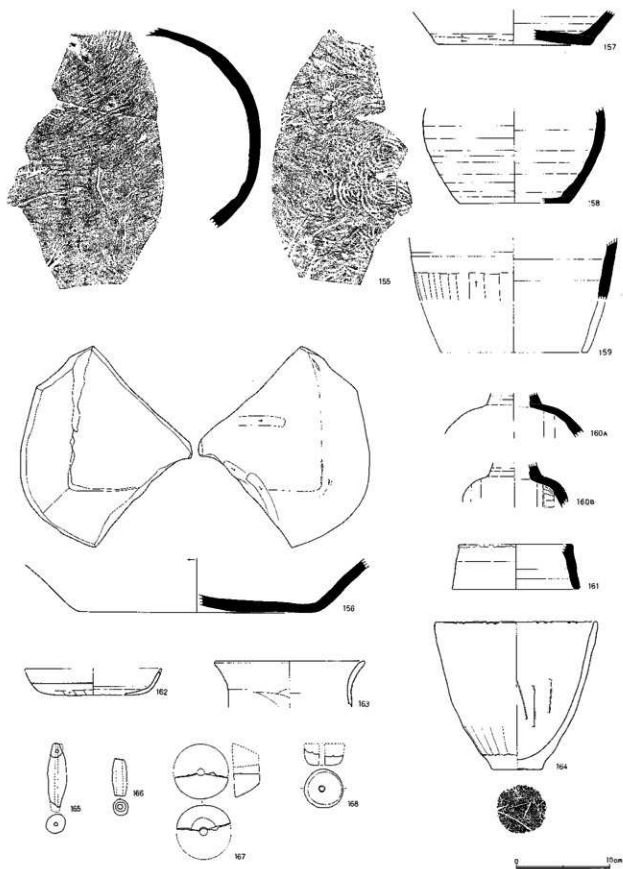


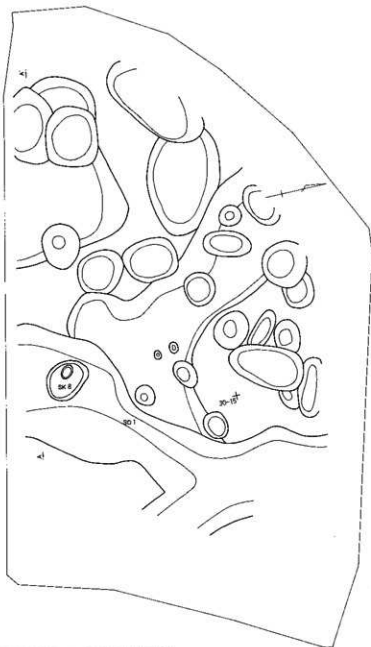
表2 A区出土文物观察表

序号	器 种	口径	器 高	底 径	胎 上	烧 成	色 调	残存率	出 土 位 置
1	壶	(9.2)	1.9		BCE	B	灰	20	SN-24·25
2	壶	11.6	1.7		BCE	A	灰	70	粘土探源坑 21-13G No2·3
3	壶	(16.3)	2.3		ABCE	A	暗灰	25	9-11G No2
4	壶		2.4		BCE	A	暗灰	30	3-8-4G
5	壶	17.1	4.7		ABCE	A	灰	100	粘土探源坑 19-13G
6	壶	(18.8)	3.2		ABCE	B	灰	15	10-10-10G
7	壶	(16.0)	2.2		ABCE	B	暗灰	15	13-11-22G
8	壶	(15.8)	1.4		ABCE	B	灰	15	10-10-17G
9	壶		1.2		ABCDE	C	乳灰	70	11-10G
10	壶		1.3		BCE	C	褐	70	10-10-14G
11	壶				BC	B	灰	10	14-11G
12	壶				BCE	B	灰	5	SN-1
13	壶				C	B	暗褐	5	11-10G
14	壶				ABCE	A	灰	10	SN-18
15	环	7.8	3.4		BCDE	A	暗灰	100	5-10G No18
16	环	(11.8)	3.7	(8.8)	ABCE	A	暗灰	25	SN-28 No1
17	环		1.1	(5.4)	BCE	B	黑灰	25	10-10-19G
18	环	(10.8)	2.0		BCE	B	暗灰	5	10-10-25G
19	环		2.4	(6.0)	BCE	C	褐色	25	SN-28
20	环		2.7	(7.6)	BCDE	B	褐色	20	SN-28
21	环		0.9	(8.8)	BC	B	暗灰	40	10-10-4G
22	环		0.9	(9.8)	BCE	C	乳灰	20	10-10-2G
23	环		1.3	(10.2)	BCE	B	灰白	20	SN-28 No5
24	环		4.1	(10.0)	ABCDEG	B	素灰	15	SN-28 No6
25	环	(12.7)	4.5		ABCE	A	灰	10	SN-14
26	环	(16.8)	4.6		ABCE	B	灰	5	10-10G
27	环		3.8	(12.0)	ABCE	A	灰	15	SX-1 5-10G No10
28	环		1.7	12.8	ABE	A	灰	20	22-13-24G
29	环		1.2		ABCE	B	黑灰	15	10-10-2G
30	环	12.2	3.8	6.0	CE	C	褐	80	SN-28 No12
31	环	12.2	2.9	5.7	ABCE	A	暗灰	90	SN-17 No1·2
32	环		2.3	6.4	ABCDE	A	灰	40	15-11G
33	环	(13.8)	3.5		BCE	A	灰	10	15-11G
34	环	(12.4)	3.0		CDEG	C	褐	15	10-10-22G
35	高台付筒	(15.2)	5.5		ABCE	B	灰	10	14-11-2G
36	高台付筒	12.7	5.8	6.8	ABCE	B	灰白	75	SN-15 No1
37	高台付筒	(18.0)	9.4	9.4	CE	C	乳灰	60	10-10-20G
38	高台付筒	(18.2)	6.9	9.8	ABCE	B	素褐	90	粘土探源坑 20-12G No1·2
39	高台付筒	(16.1)	7.1	7.8	ABCE	C	褐色	70	粘土探源坑 19-12G No1
40	盘	(18.7)	2.8	(17.2)	BCE	C	褐色	10	18-12G
41	盘		2.4		CE	B	灰	1	10-10-16G
42	盘		2.4		BCE	B	灰	5	SN-1
43	盘		2.6		BCE	B	乳灰	5	SN-24·25
44	盘		3.2		ACDE	B	灰	5	SN-20
45	高台付环		1.4	(9.6)	BCE	A	灰	35	15-13G
46	高台付盘		1.6	(16.8)	EG	B	灰褐	5	14-11G
47	高台付盘		3.1	(25.8)	CE	B	灰	5	14-12G
48	高台付盘	(27.7)	3.8		BCE	A	灰	5	15-11G
49	高 盘	(25.0)	(7.5)		ABDE	B	灰褐	20	SN-8
50	高 盘		6.0		CE	B	灰白	45	10-10-24G
51	高 盘				BCE	A	灰	20	SN-15
52	高 盘		3.8	(14.0)	ABC	A	素灰	10	19-13G
53	高 盘		1.7	(11.3)	CE	C	淡黄灰	1	SN-24·25
54	钵	(17.6)	4.2		ACE	B	素灰	10	10-10 24G
55	钵	(27.0)	5.1		ABCE	B	灰	10	14-10G

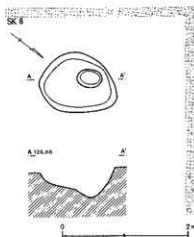
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出 上 位 置
56	鉢	(23.4)	10.0	(17.2)	ABCE	A	灰	10	10-10-15G、11-10G、11-11-10G
57	鉢	(10.4)	3.6		ABCE	B	灰	10	SN-1
58	甕	(16.2)	4.7		ABCE	B	暗灰	5	10-10-2G
59	甕	(18.7)	3.8		ABCE	C	暗褐	10	SN-24・25
60	長頸甕	(13.0)	4.2		BC	A	暗灰	10	SN-18
61	甕	(10.0)	4.2		AC	B	灰	10	10-10-9G
62	長頸甕		2.0		ABE	A	灰	10	11-10G
63	長頸甕		4.5		C	A	暗灰	5	14-11G
64	長頸甕		2.8	(10.1)	ABCE	B	暗灰	20	粘土採掘坑 No6
65	甕		3.9	(5.8)	AEG	C	茶褐色	10	SN-24・25
66	長頸甕		2.4		ABEF	A	青灰	15	SN-20
67	長頸甕		8.0	(7.6)	ABFG	C	灰	30	SN-28 No1
68	甕		4.5		ABCE	A	灰	50	SN-14
69	甕	(37.8)	2.5		ACE	B	淡灰	5	14-12G
70	甕	(19.0)	3.1		BCE	A	灰	5	SN-24・25
71	甕	(48.5)	5.1		BCE	C	褐色	10	15-11G、16-11-7G
72	甕		3.1		ABE	C	暗褐	1	SN-8
73	甕				ABC	A	黒灰	5	SN-18
74	甕		5.4		ABCDE	B	灰白	10	SN-28 No4
75	甕		4.8		BCE	A	黒灰	1	18-13G
76	甕	(38.0)	13.2		BC	A	暗灰	30	10-10-10G
77	甕	(31.1)	6.7	(28.4)	ABCDE	C	乳灰	10	SN-18 No2
78	甕		6.7		BCE	A	暗灰	20	SN-28 No11
79	甕				ABCE	A	青灰	10	24-14G
80	甕				ABCE	A	黒灰	1	SN-19
81	甕				BCE	A	青灰	5	10-10-10G
82	甕				ABC	A	黒灰	1	SN-20
83	甕				ABC	A	紫灰	5	10-10-10G、22-13-13G
84	甕				ABCE	A	黒灰	10	SN-28 No10
85	甕				ABCE	A	暗灰	15	SN-28 No14
86	甕				ABCE	A	紫灰	5	SX-1 5-9G No11
87	甕		(26.8)		ABCE	A	黒灰色	40	粘土採掘坑 19-13G No2
88	甕	(15.0)	25.8		BCE	A	黒灰	70	SN-21 No1
89	甕		28.1	19.2	ABCE	A	灰	45	SN-42 No1・4、14-12G No1
90	甕		9.1		BCE	A	紫灰	5	10-10-22G
91	甕		10.5		ABCDE	A	灰	20	15-11G
92	土師器甕	(18.1)	4.1		CE	C	赤褐	15	SN-20 No1
93	土師器甕	21.1	5.4		BCE	C	褐	10	SN-1
94	土師	径1.9	長さ5.7	重さ14.8g					14-11-10G
95	土師	径2.1	長さ6.6	重さ21.2g					17-12G
96	甕	(23.7)	1.3		BCDE	B	灰	5	一括
97	甕				CE	B	青灰	10	一括
98	甕		1.8		ABCE	A	灰	80	一括
99	甕	(16.1)	2.4		BCE	C	褐	20	一括
100	甕	(9.2)	4.2		ABCE	A	紫灰	35	一括
101	甕	(10.8)	4.0	(6.6)	BCE	C	褐灰	40	No258
102	甕		1.2	(8.4)	BCE	A	黒灰	20	一括
103	甕	(11.3)	3.7		BCE	A	灰	15	一括
104	甕		1.2	(11.8)	ABCE	B	暗灰	40	一括
105	甕		1.4	(6.5)	ABCDE	B	乳灰	40	一括
106	甕		1.2	(8.2)	BCDE	A	暗灰	25	一括
107	甕	12.3	3.7	6.8	ABCE	C	灰白	80	一括
108	甕	(13.0)	3.8	6.6	BCDE	C(S)	茶	55	一括
109	甕	(12.4)	4.1	(5.6)	ABCE	A	暗灰	15	一括
110	甕	12.8	4.2	6.6	ABCE	B	暗灰	85	一括
111	甕	(15.8)	4.5		ABCE	A	灰	25	一括
112	甕	(15.9)	3.0		BCDE	A	灰	10	一括

番号	器種	口径	器高	底径	胎上	焼成	色調	残存率	出土位置
113	環	(12.3)	(3.7)	(7.4)	AB	A	灰色	50	一括
114	環	(12.0)	3.7	(6.2)	ABCE	B	灰	20	一括
115	環	(13.2)	5.0	(5.0)	ABCE	B	灰	15	一括
116	環		1.6	(9.6)	ABCE	B	暗灰	30	一括
117	環		1.5	6.3	ABCE	B	灰	85	一括
118	環		1.3	5.9	ABCE	A	灰	50	一括
119	高台付環	(19.6)	10.0	(9.3)	ABCE	A	青灰	15	一括
120	高台付環	(14.2)	5.8	6.9	ABCE	A	灰	35	一括
121	高台付環		4.5	7.8	ABCE	B	灰	60	一括
122	高台付環		2.0	8.2	ABCE	A	灰白	80	一括
123	高台付環		1.1	6.9	ABCE	B	灰	90	一括
124	高台付環		3.0	5.8	ABCE	A	紫灰	70	一括
125	高台付環		3.7	(6.4)	ABCE	C	乳灰	65	10-10-20G
126	盤	(23.4)	2.3	(20.8)	ABCE	B	灰	10	一括
127	盤	(21.5)	2.8		BCDE	C	褐色	15	一括
128	盤	(25.8)	3.0	(19.8)	ABCE	A	灰	10	14-11G
129	盤	(23.2)	3.2	(16.2)	BCDE	C	乳灰	10	SN-24・25
130	盤	(22.4)	4.3	(14.6)	ABCE	B	暗褐色	20	一括
131	高台付盤	(17.4)	(3.0)	10.5	BCE	A	青灰	40	一括
132	高		4.5	(14.8)	BC	A	灰	30	一括
133	鉢	(27.6)	3.9		ABCE	C	灰	5	一括
134	鉢	(23.6)	6.6		CE	B	灰	10	一括
135	鉢		3.1	(9.4)	ABCE	B	灰	10	一括
136	壺		1.7	(11.0)	ABCE	B	灰	5	一括
137	壺	(18.0)	2.7		BCE	A	灰	5	一括
138	短頸壺		5.4		ABCE	A	暗灰	10	一括
139	甕	(20.6)	12.8		ABCE	A	青灰	25	一括
140	甕		13.8		ABCE	A	灰	20	一括
141	甕		6.8		ABCE	B	灰白	10	一括
142	甕		4.4		CE	C	褐色	1	一括
143	甕		2.4		ACE	A	灰	1	一括
144	甕	(24.8)	4.4		ABCE	A	暗灰	10	一括
145	甕	(25.2)	2.2		AC	B	淡灰	1	一括
146	甕	(22.4)	9.3		ABCE	A	黒灰	25	一括
147	甕	(28.6)	7.9		ABCE	A	暗灰	15	一括
148	甕	(62.0)	17.6		ABCDE	C	乳灰	15	一括
149	甕	(36.1)	4.5		ABCE	A	暗灰	10	一括
150	甕	(33.6)	9.5	(30.6)	ABCDE	B	暗褐色	20	一括
151	甕				ABC	B	暗灰	1	一括
152	甕				ABCE	A	黒灰	5	一括
153	甕				BCE	B	暗灰	5	一括
154	甕				ABCDE	A	暗灰	1	一括
155	甕				ACE	A	青灰	10	一括
156	甕		5.5		ABCE	A	青灰	25	一括
157	甕		3.7	(16.6)	ABCE	A	青灰	25	一括
158	甕		10.1	(11.6)	ABCE	A	灰	25	一括
159	甕		6.5		ACEG	B	灰	5	一括
160	横瓶		4.8		BCE	A	灰	10	一括
161	燒き台	(12.0)	4.7	(13.6)	ABC	B	灰褐色	20	一括
162	土師器環		2.6		BCDE	C	褐色	10	一括
163	土師器甕	(16.0)	4.9		CDE	C	暗褐色	10	一括
164	土師器甕	(17.0)	15.6	5.4	ABCDE	C	褐色	70	一括
165	土器	径2.0	長さ6.7	重さ23.4g					一括
166	土器	径1.6	長さ4.0	重さ10.4g					一括
167	紡錘車	径(5.8)	厚さ2.3	重さ39.8g					粘土採掘坑
168	紡錘車	径(4.2)	厚さ(2.3)	重さ20.2g					一括

第33図 B区粘土探掘坑・土壌



- 1 赤褐色 鉄分が付着した砂を少量含む
- 2 灰褐色 灰化粘土粒子、炭化物を少量含む
- 3 暗褐色 小礫、褐色粘土粒子を若干含む
- 4 赤褐色 小礫を多く含む砂礫層
- 5 赤褐色 鉄分が付着した砂礫層
- 6 赤褐色 褐色土と黒色土の混雑層、炭化物を少量含む
- 7 褐色 褐色土、灰化粘土ブロックを多く含む
- 8 赤褐色 褐色土と黒色土の混雑層、炭化物を少量含む
- 9 褐色 褐色土、黄灰色粘土ブロックを多く含む
- 10 赤褐色 鉄分が付着した粘土ブロックを多く含む
- 11 暗褐色 褐色粘土と小礫の混雑層
- 12 暗褐色 褐色土ブロックに粘土ブロックを含む
- 13 暗褐色 砂礫層に粘土ブロックを含む
- 14 灰褐色 褐色粘土ブロックに砂礫を少量含む



0 2m

(6) B区粘土採掘坑群

B区はA区の東側に現道を挟んで位置する。A区からB区に向かって緩く傾斜し、B区を小さな谷の底とし、末野遺跡C区は再び高くなっている。標高は約127.5mを測る。

調査区は東西約17mと狭いうえ、遺構までの埋土が厚いため、遺構面は100m程度になっている。

粘土採掘坑は調査区の全域に分布し、採掘坑群の範囲は捉えられない。粘土採掘坑の規模はA区より一回り小規模なものが多く目に付く。長径約3m、短径約2mにものが最も大きく、径1～0.7mで円形のものが多い。

粘土採掘坑の覆土をみると、深さが1m前後の深い採掘坑は、最下層に茶褐色土で鉄分が付着した、粘土ブロック、砂礫が多く認められる。一方、浅い採掘坑は、暗褐色土又は黄褐色土で、砂礫と粘土ブロックが混じった土である。覆土中程の層にも小礫を含む場合が多く、深い採掘坑の底面が、礫層の上位面近くに達していた可能性がある。

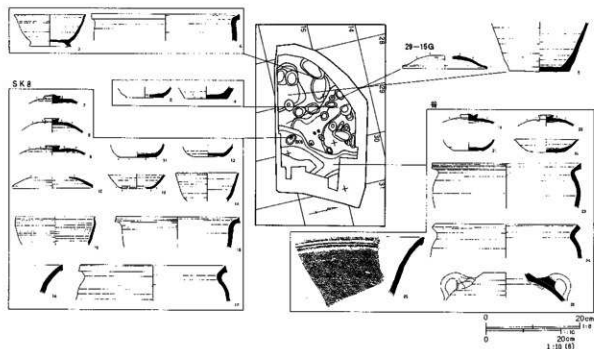
(7) B区出土遺物

B区から出土した遺物は、蓋、坏、高台付坏、碗、盤、高盤、鉢、壺、甕である。

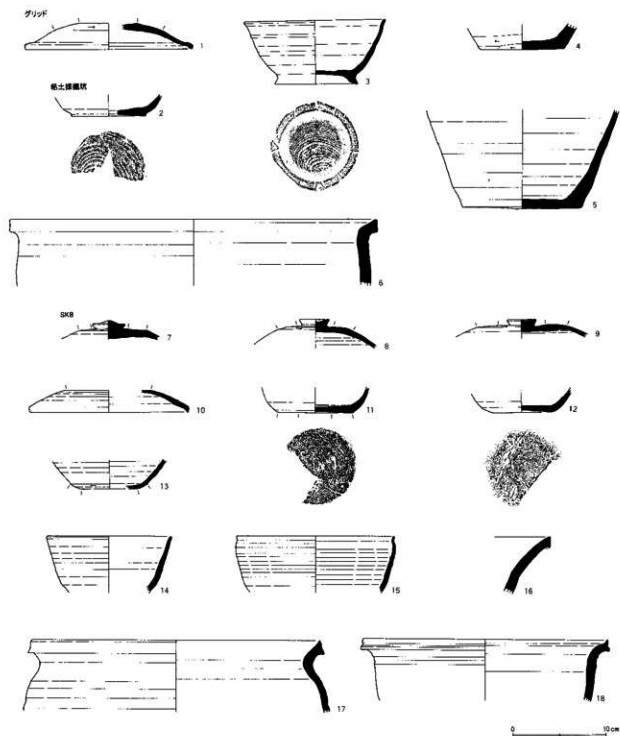
28-14・15グリッドにまたがる2つの粘土採掘坑からは、高台付坏3・鉢6が出土している。3は口径14.9cmで、口縁部が明瞭である。体部は外側に内湾気味に立ち上がり、口縁部でやや外反する。口唇部は丸くなる。底部は回転糸切り難しの後にハの字状に開いた高台を貼り付けている。高台の端部を指でつまんでいる。灰白色で焼成が良好である。6は推定口径39.0cmの鉢の口縁部である。直上する体部に口縁部は外反し端部は外側に面を持ち、口唇部は上を向く。外面上半と内面は撫でられている。

28-15グリッド内の粘土採掘坑からは、甕5が出土している。胴部下半から底部までのもので、底部は平底である。内面外周には指で押したへこみがあるので、底部に胴部を貼り付けたものと思われる。胴部外面下半はナデが施され、底部外面の調整は一定方向のヘラケズリである。胴部上半で重みに耐えられなくなったのか、外側に大きく歪んでいる。

第34図 城見上遺跡B区遺物分布図



第35図 B区出土遺物(1)



29-15グリッドからは、かえりのない蓋1が出土している。推定口径17.8cmの大ぶりの蓋で、外面の調整は天井部が回転糸切り離して、体部上半が回転ヘラケズリである。口縁端部は折り返している。つまみの有

無は不明である。

29-14グリッド内の粘土採掘坑からは、坏2、甕4が出土している。2は推定底径8.0cmの坏の底部である。底部は回転糸切り離してである。糸切りの位置が下なの

で底部と体部の境が柱状になっている。胎土に炭化物のような黒いすじがある。4は推定底径9.0cmの甕の底部である。底部に胴部を貼り付けたもので、外面の調整は一定方向のヘラケズリで、内面は指ナデである。

第8号土壌からは、蓋7～10、坏11～13、高台付坏14、碗15、甕16、鉢17・18が出土している。7～9はつまみのある蓋の天井部で口縁部の形態は不明であるが、かえりがない可能性が高い。天井部は回転ヘラケズリでつまみは貼り付けである。つまみの形態は7が径3.5cmで中心の周辺がへこんでいる擬宝珠状である。8は径3.2cmで中心の周辺がへこみ、中心はわずかにもりあがる扁平である。9は径2.9cmで8と同様のつまみを持つ。10は推定口径16.8cmのかえりのない蓋で、天井部は回転ヘラケズリが施され、体部はロクロ目がきつく、口縁端部を折り返している。体部内面には段ができています。つまみの有無は不明である。11から13は坏の底部である。11と13は底径約8.0cmで、底部外面の調整は回転糸切り離し後、外周ヘラケズリである。体部の立ち上がりとヘラケズリの位置が異なる。11は外傾に内湾気味に立ち上がり、底部は柱状である。13は外傾に直線的に立ち上がり、底部と体部の境を斜めに削っている。12は底径6.3cmで、底部外面は回転糸切り離しである。14は推定口径13.2cm、底部がないので高台の有無は不明だが器高が高いので高台付坏にした。15は推定口径16.8cmの碗で口縁部が内側にくびれ、口唇部はわずかに外反する。ロクロ目がきつい。底部は欠損している。16は甕の口縁部の破片である。口縁部は下に突出し、外に斜めに平坦面を持つ。口縁部中位に条線を1本めぐらす。17と18は鉢の口縁部である。形態が異なる。17は内傾に立ち上がりくびれを持つもので、口縁部は下に突出し、18は体部が直上し口縁部で大きく外反する。境には2本の沈線を、口唇部外面に1本の沈線をめぐらせている。

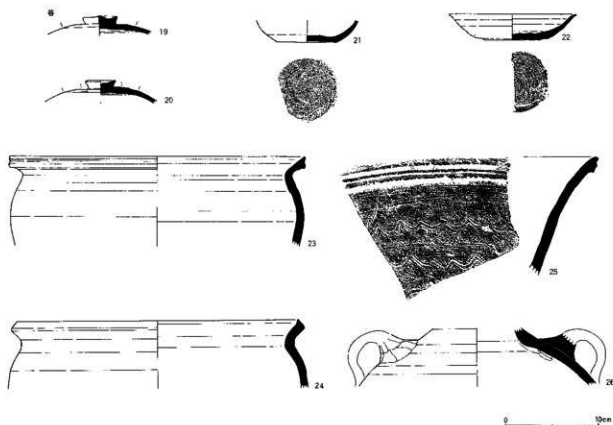
谷からは、蓋19・20、坏21・22、鉢23・24、壺26、甕25が出土している。19と20は蓋の天井部である。つまみは19が径3.4cmで中心の周辺がへこんでいる擬宝珠状である。20は径3.0cmで中心までへこんでいる扁

平つまみである。どちらも貼り付けのつまみで、天井部は回転ヘラケズリである。21と22は底部が回転糸切り離しの坏である。21は底径が6.4cmで体部は外傾に内湾気味に立ち上がるが、口縁部の形態は不明である。22は口径13.0cmであるが、器高が2.7cmと低く体部が非常に開いて立ち上がっているため、口径が広がっている可能性がある。口唇部はわずかに外反している。23と24は推定口径30.0cmほどの鉢の口縁部から胴部にかけてである。23は口縁部の外面は下に突出し、口唇部は外を向いているが、24は口唇部で内側を向いて尖る。25は外面に波状文が施された甕の口縁部である。外面は下に突出し、上部に2本の沈線がめぐり、下部は1本の沈線の下上に3本の波状文がめぐっている。その下にも波状文らしき線がみえるが、不明である。26は把手の付いた壺である。把手は根元しか無いか指で整形した後に胴部に貼り付けている。

表採遺物は、蓋27・28、坏29～32、高台付坏33～35、碗36、盤37、高盤38、鉢39、壺45・46、甕40～44がある。

蓋はかえりの付いているものとそうでないものがある。27は推定口径13.4cmのかえりの付いているもので、天井部は回転ヘラケズリを施している。28は推定口径15.9cmのかえりの付いていないもので、端部を屈曲させている。天井部の調整は27と同じである。坏は底部の調整が回転糸切り離しの後、外周回転ヘラケズリのものと回転糸切り離しのものがある。29は前者である。その他は後者であり、31と32は切りはなす位置が下なので、柱状になっている。高台付坏はすべて貼り付けの高台であるが、33・35と34に分けられる。33と35は底径が6.5cm前後で底部の調整は回転糸切り離しの後、外周回転ヘラケズリである。高台は太く短い。34は推定底径が8.5cmで底部は回転糸切り離しで、高台は細く長い。36は推定口径が16.0cmの碗で、体部は外傾に内湾気味に立ち上がり口縁部で直上し、口唇部がわずかに外反する。口縁部外面は指ナデでへこんでいる。27は推定口径21.4cmの盤で体部外面下半は回転ヘラケズリが施されている。高台付盤や高盤の可能性

第36図 B区出土遺物(2)



があるが、底部が欠損しているため不明である。38は高盤の底部から脚部にかけてである。底部を回転ヘラケズリした後、脚部を貼り付けている。脚部下半は推定である。39は推定口径29.8cmの鉢の口縁部で、外面に沈線をめぐらせて下に突出し、口唇部は上を向く。甕は口縁部・胴部・底部がある。40と41は底部で共に外面にはケズリが施されていて、下の方は削り残しがみられる。内面はナデが施される。底部の調整は、40は摩耗していて分らないが、41は一定方向に削っている。42～44は口縁部である。どれも波状文が施されているが、文様の構成や口縁部の形態が各々異なっている。42は外反する口縁端部に上下に突出した粘土帯をつけたもので、外面には3条の波状文がある。内面は特大の軸塊が付着している。43は外傾に直線的に立ち上がり、口縁端部でふくらみ、口唇部は内側を向く。波状文は4条と5条の2段になっているが、その下は不明である。44も外傾に立ち上がるが、42・43ほど急

ではない。口縁端部はふくらみ、沈線が2本めぐる。波状文は2段あるが、上の方が6条で下は不明である。45・46は壺の胴部の破片である。45の外面は3cmの幅に横7本、縦8本の格子叩きである。46は丸底の壺で外面は擬斜格子の叩きで内面は青海波文が施されている。

瓦は10を除くと全て小破片で、出土点数が少ないため、A区とB区を分離せず一括して掲載した。

分布は第1号土壌から1・2・7～9がまとまって検出された以外は、単発の出上であった。

瓦は凸面が縄叩きの1～5と、格子叩きの6～9、縦方向の削りの10がみられる。凹面は1～9が布目で、10が布目の後、縦方向の削りが施されている。1～9の縄叩きと格子叩きのものは、木野遺跡や箱石遺跡出土の瓦と近似しているが、10は他の遺跡からは共通するものは出土していない。また、1～9までが小破片であるのに対し、10は残存率がたかく、全体の形状が

第37图 B区出土遗物(3)

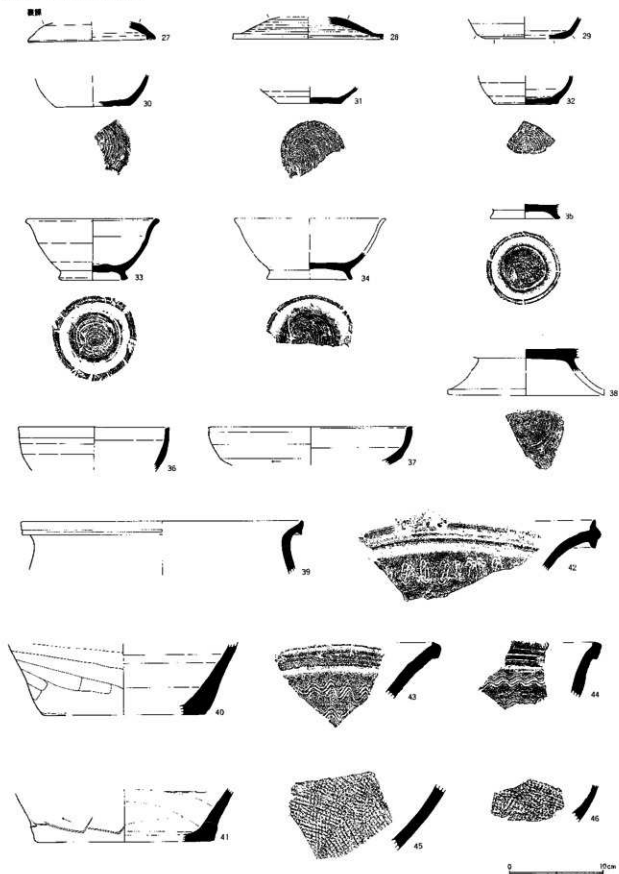


表3 B区出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出 上 位 置
1	蓋	(17.8)	2.8		ABCDE	B	褐灰	30	3群粘土探掘坑
2	環		2.3	(8.0)	BCDE	C	褐	30	4群粘土探掘坑
3	高台付環	14.9	6.8	8.7	ABCE	A	灰白	75	1群粘土探掘坑 No.1
4	甕		2.6	(9.0)	ACE	A	紫灰	30	4群粘土探掘坑
5	甕		10.5	12.6	ABCD	A	灰	80	2群粘土探掘坑 No.1
6	鉢	(39.0)	7.0		BCDE	B	暗灰	5	1群粘土探掘坑
7	蓋		2.0		ABCE	A	灰白	75	SK-8
8	蓋		3.1		ABCE	A	灰	90	SK-8
9	蓋		2.0		ABCE	A	灰	40	SK-8周辺
10	蓋	(16.8)	2.3		ABCD	A	灰	10	SK-8
11	環		3.7	8.0	ABCDE	C	乳灰	75	SK-8周辺
12	環		2.4	6.3	ABCDE	A	灰	75	SK-8
13	環		3.1	(8.1)	BCD	A	灰	10	SK-8
14	高台付環	(13.2)	6.0		BCE	B	灰	10	SK-8周辺
15	碗	(16.8)	5.9		ABCD	A	暗灰	10	SK-8
16	甕	(31.6)	6.0		ABCE	B	紫灰	10	SK-8
17	鉢	(30.6)	7.6		ABCD	A	暗灰	10	SK-8周辺
18	鉢	(26.0)	6.5		ABCDE	A	紫灰	8	SK-8
19	蓋		2.1		ABCE	A	灰	80	埋没谷
20	蓋		2.4		ABCE	A	灰	55	埋没谷
21	環		2.4	6.4	ABCDE	B	暗灰	60	埋没谷
22	環	(13.0)	2.7	6.4	ABCE	A	青灰	45	埋没谷
23	鉢	(31.5)	9.5		ABCD	B	灰	10	埋没谷
24	鉢	(30.0)	7.2		ABCE	B	灰	10	埋没谷
25	甕	(63.2)	12.5		ABCDE	A	灰	10	埋没谷
26	甕		6.2		ABCD	A	暗灰	15	埋没谷
27	蓋	(13.4)	1.9		CD	A	暗灰	10	一括
28	蓋	(15.9)	2.3		ABCE	A	暗灰	20	一括
29	環		2.3	(8.0)	ABCE	B	褐灰	10	一括
30	環		3.2	(7.6)	ABCDE	B	暗褐	20	一括
31	環		1.8	6.7	ABCDE	B	褐灰	55	一括
32	環		3.0	(6.4)	CDE	B	乳灰	25	一括
33	高台付環	(13.6)	6.5	(6.4)	BCE	C(s)	褐色	60	一括
34	高台付環		2.9	(8.5)	ABCDE	B	黄褐	40	一括
35	高台付環		1.5	6.7	BCDE	B	灰	100	一括
36	碗	(16.0)	4.6		BDE	C	褐	8	一括
37	甕	(21.4)	4.5		ABCE	A	灰	5	一括
38	高 甕		2.3		ABCE	A	灰	25	一括
39	鉢	(29.8)	6.7		BCE	C	褐	10	一括
40	甕		7.6	(17.0)	ABCEG	C	褐灰	20	一括
41	甕		5.5	(19.1)	ABCDE	A	黒灰	25	一括
42	甕		5.2		AC	A	黒灰	10	一括
43	甕		6.9		BCD	A	黒灰	10	一括
44	甕		5.8		BC	A	灰	5	一括
45	蓋		7.0		ABCE	A	暗灰	15	一括
46	蓋		3.8		AC	B	灰	15	一括

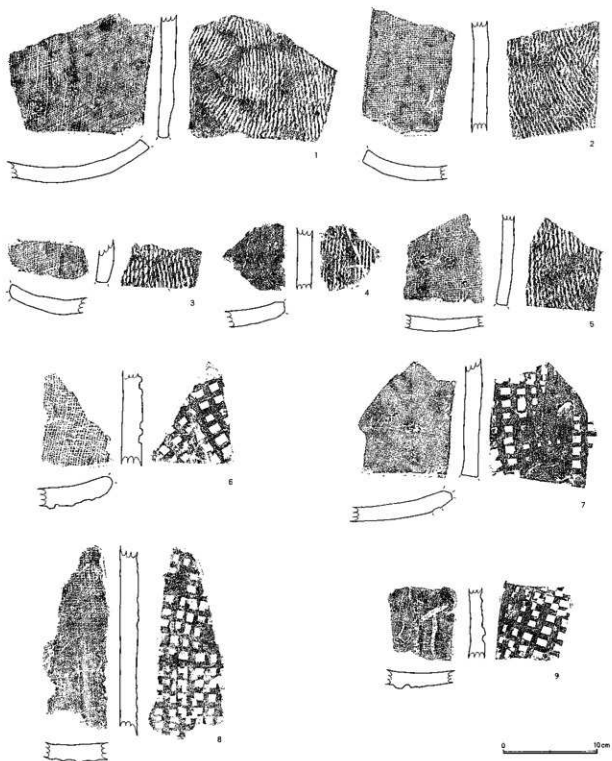
捉えられるなど、特異な存在である。

第1号土壇から出土した瓦は、凸面が細叩き2点、格子叩き3点と、両方の叩きが共存している。また、7は凸面端部に縦方向の削りがみられる。

10はA区一括で、遺構との関係は不明であるが、4点が接合し、広端面が完全形で復元できた。凸面、

凹面共に縦方向の削りが入念に施されており、凹面の中央に布目を残すだけである。形状は狭端部を欠損するため、長さは不明であるが、幅31cmと大きく、厚さも3cmと他の瓦が1.6～2cm前後であるのに対し、2～1.5倍の厚さである。凸面端部を斜めに切るように削りが施されている。

第38圖 城見上遺跡出土瓦(1)



第39図 城見上遺跡出土瓦(2)

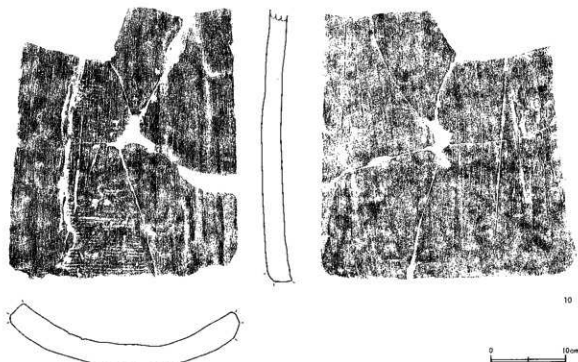


表4 瓦観察表

番号	種類	長さ	幅	厚さ	胎 土	焼成	色調	布目たて	布目よこ	凸 面	備 考
1	平瓦	13.0	15.2	1.7	ABCD	2	淡灰	14	16	縄目5	SK-1
2	平瓦	11.6	9.4	1.6	ABCD	2	灰	15	18	縄目4	SK-1
3	平瓦	4.5	7.9	1.6	ABD	3	灰	15	15	縄目3	埋没谷一括
4	平瓦	6.5	6.1	1.6	ABE	3	褐	18	21	縄目6	A区一括
5	平瓦	9.5	8.5	1.3	ABCD	2	淡灰	15	18	縄目4	埋没谷一括
6	平瓦	9.7	7.8	2.2	ABC	2	灰	17	12	3格子の長さ4.0、5.7	B区一括
7	平瓦	12.7	11.2	1.8	ABCD	2	暗灰	21	24	3格子の長さ3.7、4.6	SK-1一括
8	平瓦	19.7	8.0	1.9	ABCDG	3	褐灰	21	24	3格子の長さ4.2、4.6	SK-1一括
9	平瓦	8.0	7.5	1.6	AB	2	暗灰	21	27	3格子の長さ4.1、4.8	SK-1一括
10	平瓦	37.0	31.0	3.0	ABCE	1	灰	21	24	縦方向のナデ	A区一括

4. 中・近世の遺構と遺物

(1) 地下式土壇

地下式土壇3基が近接して検出された。発掘調査の時点を堅穴状遺構をSX1、地下式土壇をSX2～4と呼称した。遺物注記の混乱を避けるため、地下式土壇を第2号から初め連番とした。

第2号地下式土壇 (SX2) (第40図)

12-13グリッドに位置する。北側半分が調査区外に延びるため、全体の形状は把握できない。計測できる部分での最大長は約4mである。深さは1.6mを測り、覆土は底面に天井の崩落土が堆積している。遺物は検出されていない。

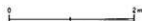
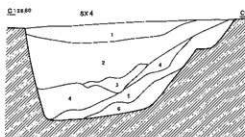
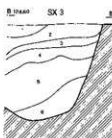
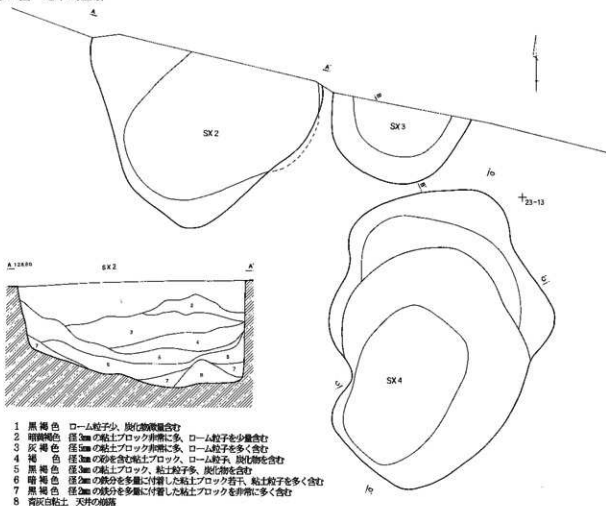
第3号地下式土壇 (SX3) (第40図)

22-12グリッドに位置する。全体の半分以上が調査区外である。現状では径2.2mの円形状になると思われる。深さは1.5mを測り、第2号地下式土壇とほぼ同じである。天井の崩落土は明確でないが、覆土4層が粘土ブロックを多量に含んでおり、天井の崩落土の可能性はある。遺物は検出されていない。

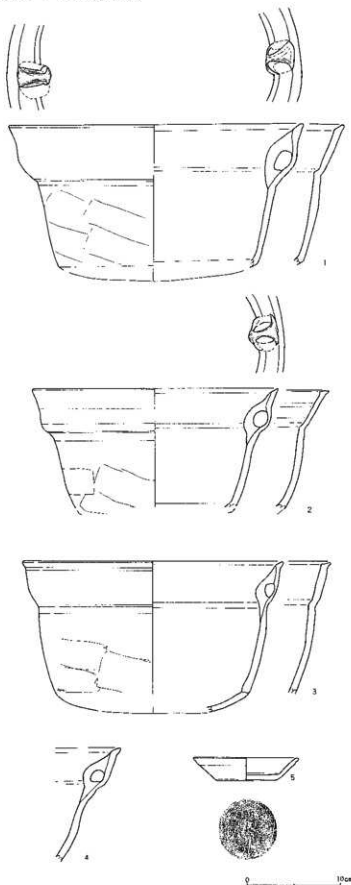
第4号地下式土壇 (SX4) (第40図)

22-13グリッドに位置する。遺構全体を調査できたのは、本例のみである。北側にクランプを有し、深い部分はやや崩れた方形をしている。大きさは長軸約4.

第40図 地下式土壌



第41図 グリッド出土遺物



7m、短軸約3mを測り、深さは1.5m、トラップの部分は約0.5mである。天井の崩落土は明らかでないが、第3号地下式土壇と同様、覆土5層にロームブロックを多量に含む層があり、天井の崩落土の可能性が指摘できる。遺物は検出されていない。

(2) グリッド出土遺物

遺物は全てA区グリッドからの検出である。

1～4は内耳鍋である。口縁がほぼ残存している、1・2は耳が2箇所に対峙している。3・4は部分的破片であるため、耳の数は明らかでないが、4個体とも整形等共通していることから、同一形態の内耳鍋であると思われる。1は底面を欠損するが、口縁部の残存率は9割以上である。口径31.6cm、底径(21.2cm)、器高(16.5cm)を測る。2は底面を欠損するが、口縁部の残存率は9割以上である。口径26.4cm、底径(16.5cm)、器高(13.5cm)を測る。3は残存率が30%である。大きさは、推定で口径(20.5cm)、底径(16.2cm)である。4は残存率10%程度の破片である。5はかわらけてはほぼ完形である。口径は11.3cm、底径6.4cm、器高2.4cmを測る。

【遺跡の基本土層】

土層堆積の良好な47-19グリッドの東面を、本遺跡の基本土層とする(第42図)。

第I層：褐色土 ハードローム。

第II層：暗褐色土 スコリアを微量に含む I層とIII層の中間的な色調。

第III層：黒褐色 黒色帯(武蔵野台地第2黒色帯にはば対応) 粘土質 マンガン、鉄分を多く含む、スコリアを少量含む。

先土器時代の遺物はこの層から出土している。

第IV層：暗黄褐色土 粘土質 マンガン、鉄分をやや多く含む、スコリアを少量含む。

第V層：暗黄褐色土 マンガン、軽石、スコリアを少量含む。

第VI層：暗褐色土 スコリアを少量含む。

第VII層：灰色をおびた暗黄褐色 マンガン、灰色粘土ブロックをやや多く含む。

第VIII層：灰褐色土 径2mm程度の砂を少量含む。

第IX層：灰色をおびた黄褐色土 マンガンを多く含む。

第X層：灰色をおびた黄褐色土 第IX層より色調は暗い。マンガンを非常に多く、灰色粘土ブロックをやや多く含む。

第XI層：灰褐色土 マンガンを少量含む。

第XII層：茶色をおびた灰褐色土 灰色粘土層をベースにマンガンを多く、径5mm程度の礫を若干含む。

第XIII層：茶色をおびた灰褐色土 灰色粘土層をベースにマンガンを少量、径5mm程度の礫を若干含む。

第XIV層：茶色をおびた青白色土 マンガンと鉄分を少量、径1cm程度の礫を多く含む。

※先土器時代の遺物は、第III層中から検出されている。層位の大まかな区分は、第II層がハードローム層、第III層が黒色帯、第IV～VI層はローム層、第VII層から下部は粘土層で、第X層中に小礫を含んでいる。

2. 先土器時代の遺構と遺物

(1) 層位

基本層位は上記したので、先土器時代の遺物と関わる、第I～IV層の堆積状況を概観する(第45図)。

土層断面はグリッドのラインに合わせ、調査時に複数作成したが、ここでは石器集中に関わるラインを抽出し、AラインからCラインの3本にまとめた。

Aラインは、45-18～48-18グリッドの南面で、東西方向に14.8mである。土層は各層とも東から西に緩く傾斜し、第3号溝の付近で第I層が消失している。

Bラインは、46-18～46-20グリッドの東面で、南北方向に約9.6mである。調査区を横断している。土層の堆積は、北から南に緩く傾斜する。46-20グリッド付近で傾斜を強め、第III層の層厚が薄くなっている。

Cラインは、47-19～47-20グリッドの東面で、南北7.7mである。基本的にBラインと共通するが、土壌の傾斜はBラインより急である。

(2) 石器集中

石器集中は4ヵ所検出された。各石器集中は近接しており、東西約14mの範囲にまとまっている。南北方向は、調査区が道路幅の約9mと限定されているため、全貌は把握されていないが、それほど広がることはないと思われる。規模は小さいが、中央に遺物が分布しない空白部分があり、当該期に多くみられるいわゆる環状ブロックの範囲で捉えることができる。

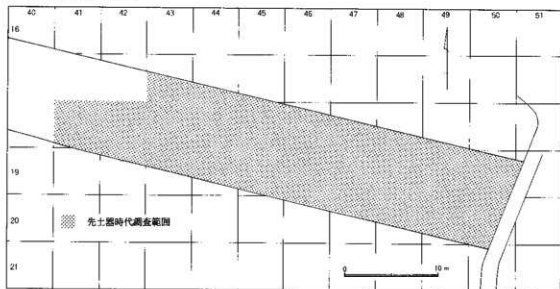
石器集中a (第47図)

46-19グリッド杭を中心に径約7mの範囲に散漫に分布する。第3号溝、第2号土壌等によって一部失われている遺物もあるが、状況は変わらないものと思われる。

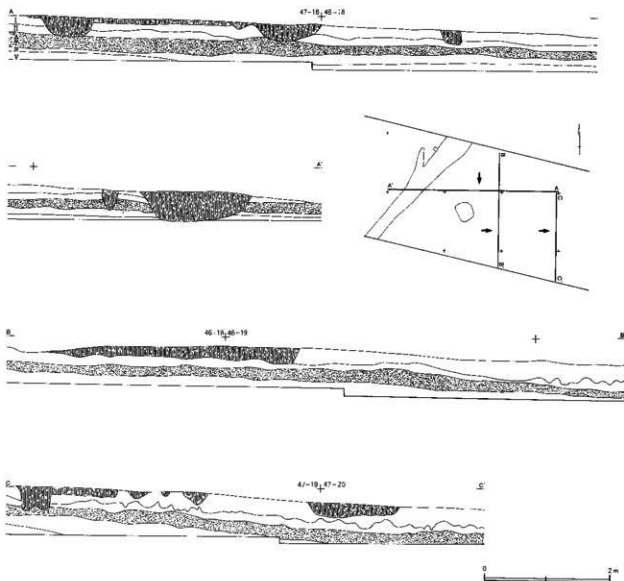
遺物は石器8点と礫2点である。

石器の内訳は剥片1点、砕片6点、礫器1点である。

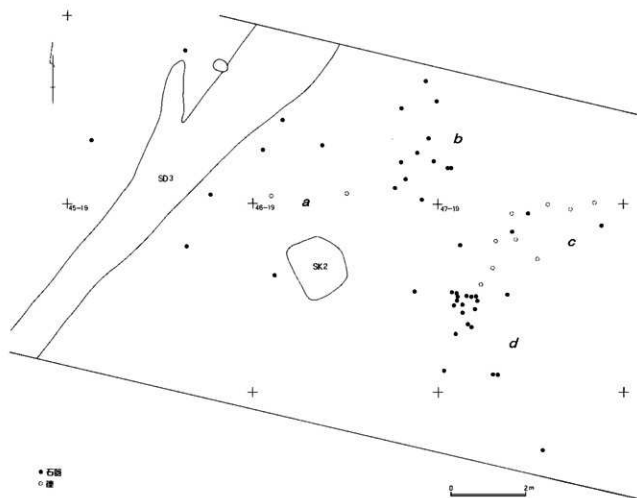
第44図 先土器時代調査範囲



第45図 先土器時代調査区土層断面図



第46図 先土器時代遺物分布図



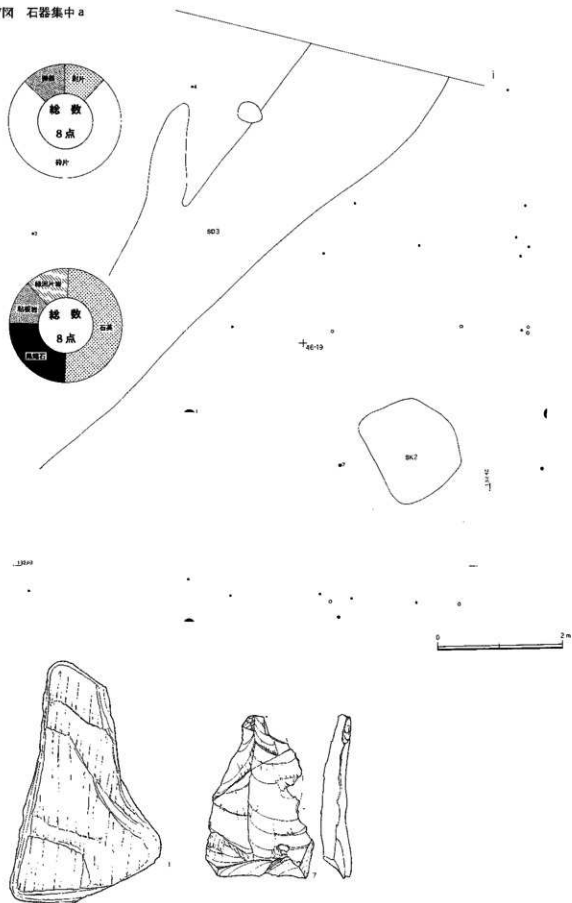
器種組成表

	石斧	ナイフ形石器	台形礫石器	石鏃	楔形石器	剥片	砕片	礫器	合計
石器集中a						1	6	1	8
石器集中b	1	1			1	8	2		13
石器集中c							2	1	3
石器集中d	2	2	1			13	4		22
集中外	1			1					2
合計	4	3	1	1	1	22	14	2	48

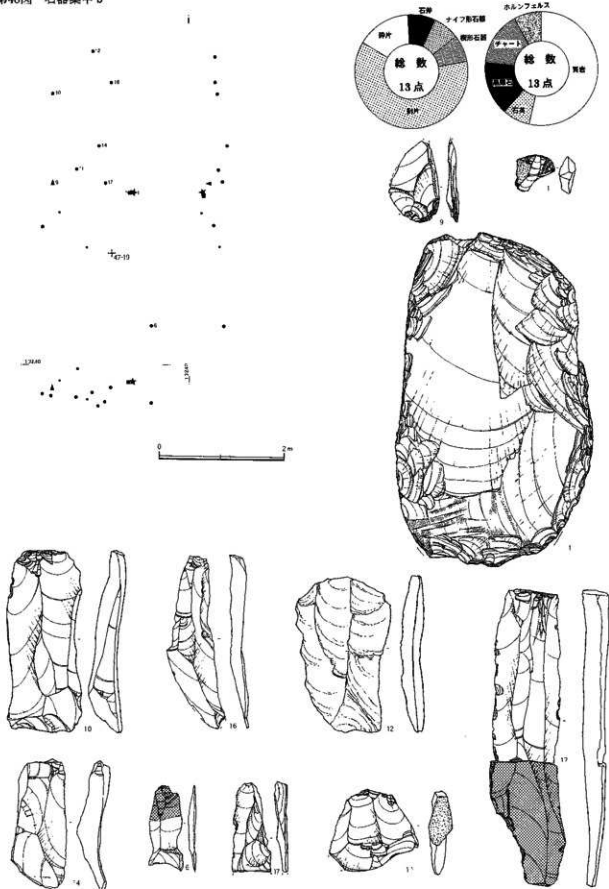
石器石材表

	頁岩	黒色頁岩	粘板岩	黒曜石	ガラス質黒色砂岩	チャート	石英	砂岩	緑泥片岩	中ランファルス	合計
石器集中a			1	2			4		1		8
石器集中b	7			2		2	1			1	13
石器集中c							2			1	3
石器集中d	14				2	2		1		3	22
集中外		1				1					2
合計	21	1	1	4	2	5	7	1	1	5	48

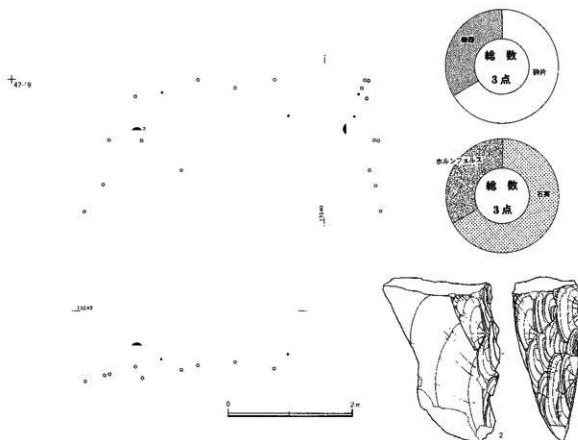
第47回 石器集中 a



第48図 石器集中b



第49図 石器集中 c



石器石材は、剥片に粘板岩、礫器に緑泥片岩、砕片は黒曜石と石英である。

石器集中 b (第48図)

46-18グリッドに位置する。東西1.5m、南北3.0mの範囲に比較的まとまっている。

石器は13点出土しており、内訳は局部磨製石斧1点、ナイフ形石器1点、楔形石器1点、剥片8点、砕片2点である。

石器石材は局部磨製石斧とナイフ形石器に頁岩、楔形石器に黒曜石が用いられ、縦長剥片は頁岩、ホルンフェルス、チャートと多様な石材が使われている。局部磨製石斧と同一母岩の石材は、石器集中 d にまとまっている。

石器集中 c (第49図)

47-19グリッドに位置する。東西約3.5m、南北約2.0mの範囲に散漫に分布する。遺物は礫が主体を占め、石器は3点のみ検出された。

石器は砕片2点と礫器1点である。石材は砕片が石英、礫器にはホルンフェルスが用いられている。

礫の多くは10~40gの小礫であるが、3点だけ150~200gの比較的大きな礫が含まれている。石材は砂岩と緑泥片岩が用いられている。

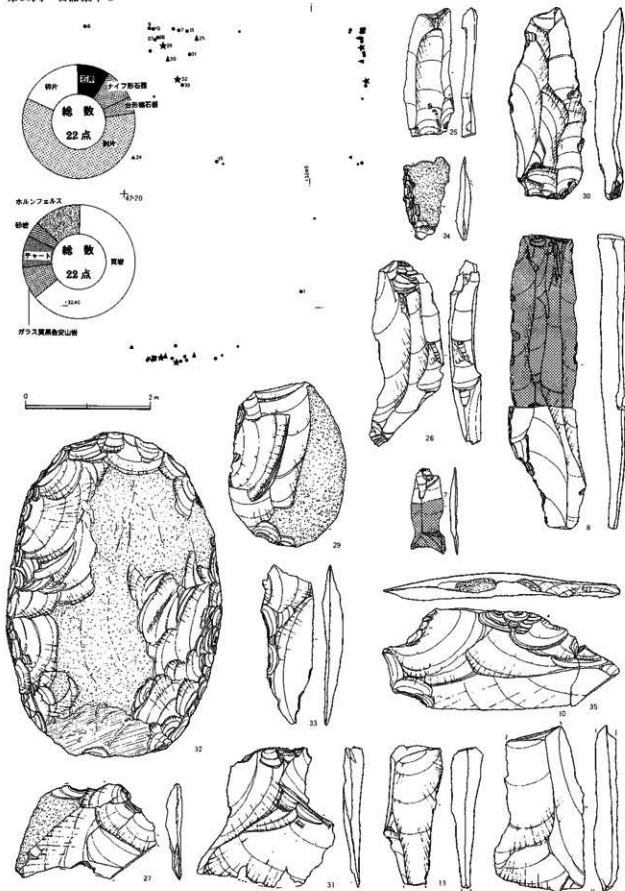
石器集中 d (第50図)

47-19グリッドに位置する。遺物は南北約2.5m、東西約2.5mの不整円形に分布し、中心部の径約1.0mの範囲に密集している。密集部に石斧2点とナイフ形石器2点がまとまり、台形様石器1点は南側に約1.0m離れて検出されている。

石器は総数22点である。最も資料数の多い石器集中になる。石器の内訳は、局部磨製石斧と打製石斧がそれぞれ1点、ナイフ形石器が2点、台形様石器1点、剥片13点、砕片4点と充実している。

石器石材は、頁岩が最も多く14点、次いでホルンフェルスが3点、ガラス質黒色安山岩とチャートが2点、

第50図 石器集中d



砂岩 1点となっている。石材と器種の関係をみると、頁岩は石器集中bの局部磨製石斧(1)と同一母岩の剥片類と、ナイフ形石器(25・30)、台形鎌石器(24)、縦長剥片等がみられる。ガラス質黒色安山岩は局部磨製石斧に、砂岩は打製石斧に用いられている。

(3) 出土石器

米野遺跡C区から出土した石器は、総数48点で内訳は石斧(局部磨製石斧2点、打製石斧2点)、ナイフ形石器3点、台形鎌石器1点、楔形石器、石鏃、縦長剥片類、礫器である。石器群の特徴は石斧、ナイフ形石器、大形縦長剥片の3器種の組み合わせにある。以下個別石器の観察をおこなう。

石斧(第51~54図)

石斧は、局部磨製石斧2点と打製石斧2点の計4点検出された。3は地点の詳細なデータが得られなかったが、4点とも同一時期のものである。

1(47-19-32) 局部磨製石斧。石器集中dから検出された。外形は楕円形で、横断面は厚手のレンズ状を呈している。刃部正面付近に研磨が面を形成しており、いわゆる大形の草鞋形局部磨製石斧である。

調整加工は、正面は中央部に原石面を残し、周縁から面的剥離が施されている。裏面は分割面と思われる剥離面を中央に大きく残し、周縁からの剥離がほぼ全周にめぐっている。また、刃部は再生と思われる剥離が刃縁から平行して施されている。

2(47-18-1) 局部磨製石斧。石器集中bから検出された。接合または同一母岩と思われる剥片類は、石器集中dに多く分布している。

外形は、両側縁がほぼ平行し隅丸方形に近いが、いわゆる草鞋形の範疇で捉えることができる。基端に原石面を残した盤状の剥片を素材とし、周縁剥離によって整形されている。横断面は上記の1と比べると、薄手である。断面の形状は、基部側は裏面が平坦で、正面は中央に稜があり薄手の三角形となっている。刃部付近は研磨が施されていることもあり、レンズ状に仕上げられている。

刃部は使用によるためか、破損が進んでおり、刃縁はほとんど残っていない。現存する部分の観察から、両面に入念な研磨が施されていたことが伺える。

石斧の素材は、基端部の原石面のあり方から、大形の礫を輪切り状とした厚手の剥片であると考えられる。また、裏面の平坦面は節理を利用した分割面で、素材剥片を作出したのは、正面刃部付近の右位からの横広の剥離面が主要剥離面であったと思われる。

3(001) 打製石斧。調査中のトラブルから、出土地点の記録はできなかった。しかし、発掘調査によって検出されたもので、出土地点及び層位は他の石器群と同じである。

石器は基端に原石面を残し、左側縁の上半部も古い段階の剥離面による側面を残している。平面の外形は、草鞋形もしくは洋ナシ形に近い形状をしている。横断面をみると、基部の上半部の裏面に細かな剥離が入念に施され比較的平坦にし、左側面は古い剥離面、右側面は原石面によって立ち上がり、正面は剥離面による平坦な面で構成され、台形状になっている。刃部付近は、表裏とも両側縁からの剥離が、基部中央部で対峙し稜を作っており、断面形は菱形に近い形状となっている。

調整加工は、基部上半部が周縁的な細かい剥離が目立つのに対し、下半部刃部側は面的剥離によって構成されている。

刃部は、裏面から正面に向かっての急角度の剥離が施され、刃縁の外形が直刃に近く中央部が尖る様になっている。刃部再生が繰り返行われていたことが伺える。

4(47-19-29) 打製石斧。石器集中d、局部磨製石斧(1)の近くから検出された。外形は、楕円形でいわゆる草鞋形の範疇に入る。

剥片素材で、正面の右側半分は原石面、裏面に上位方向からの主要剥離面を大きく残している。正面の左側には主要剥離面と同一方向からの剥離がみられる。調整加工は、正面→裏面の周縁的剥離が、側縁から刃部にかけて施され、形状を整えている。

刃部は素材剥片の縁辺の湾曲を利用した、円刃と

なっている。正面から裏面方向の調整加工が施されて、裏面の一部に磨耗痕が観察できる。他の石斧と比べ小形で薄手の刃部を有している。

ナイフ形石器 (第55図)

ナイフ形石器は、Bluntingが明確なものは少なく、縦長剥片の基部または端部の一部に、細かい加工が施されているものを、選別した。

5 (47-19-30) 石器集中d、ナイフ形石器(7)に近接して出土している。縦長剥片を素材とし、打面部を基端としている。正面を構成する剥離面は、主要剥離面と同一方向であることから、同程度の大形の縦長剥片を連続して作出していたことが伺える。先端はちょうつかい状になり、正面には主要剥離面と逆方向の剥離面がみられる。打面は単剥離面で幅2.3cm、厚さ0.6cmと大きい。調整加工は、基端部周辺の右側縁に正面→裏面の小剥離が施されている。また、使用によると思われる小剥離が、両側縁の基端上半部と先端部付近に観察できる。

6 (46-18-9) 石器集中bから出土した。基部加工のナイフ形石器で左刃である。先端を若干欠損するが、外形は基部が丸く平面形は丸みのある三角形状である。横断面は薄手で先端部は三角形、基部は台形状である。

素材は幅広の縦長剥片が用いられ、打面を基端に置くが、調整加工によって除去されている。

7 (47-19-25) 石器集中dから出土した。端部は一部欠損しているが、残っている部分にBluntingが観察できる。いわゆる端部加工のナイフ形石器である。

外形は長方形を呈し、横断面は台形状である。縦長剥片が素材に用いられており、正面を主に主要剥離面と同一方向の剥離面が3枚並んでいる。打面は単剥離面で幅1.7cm、幅0.75cmである。

台形縁石器 (第55図)

8 (47-19-24) 石器集中dから出土した。外形は逆三角形状を呈し、まさに台形縁石器といった感である。

素材は左位からの横広剥片が用いられ、打面は幅3.7cm、厚さ0.5cmの平坦な面で、一部正面からの剥離

面がみられる。正面は全体に原石面を残しており、2次加工として積極的に評価できる部分は少ない。正面左側にみられる剥離は、打面からの連続的剥離で頭部調整の可能性も高いが、基部付近の剥離面が、打面を切るように施されていることを考慮し、台形縁石器として捉えておきたい。

楔形石器 (第63図)

31 (47-18-1) 石器集中bから出土している。黒曜石は4点検出されているが、殆ど砕片で図示できたのは本石器のみである。正面及び裏面上部に原石面を残している。剥離面をみると、正面は上位から、裏面は右位からのものが目に付く。下半部は正面から裏面方向の力によって欠損している。剥離の規則性はあまりみられないが、上下両端がつぶれたような微細な剥離がみられることから、楔等として用いられたものと思われる。

石錐 (第63図)

32 (002) 遺跡周辺の表探資料である。当該期に属するのか、縄文時代のものか不詳な点もある。石錐が該期の石器群に組成される場合もあることから、ここに含めて説明する。

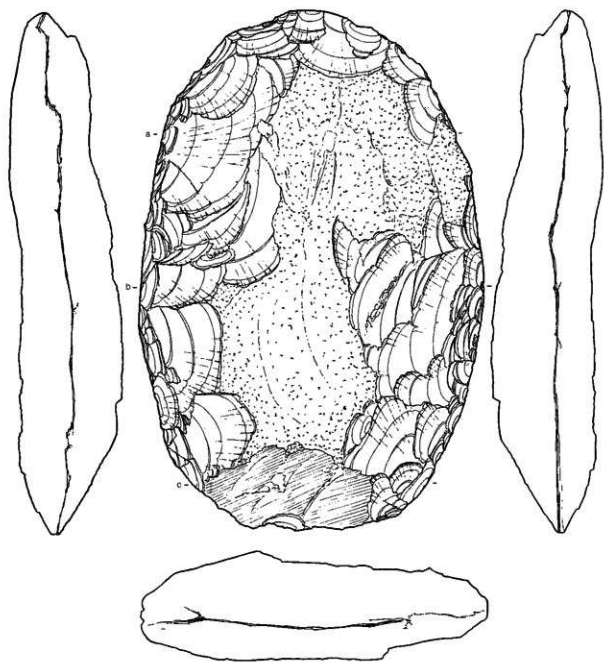
右位からの横広の剥片を素材に用い、裏面→正面の周縁的剥離がほぼ全周に施されている。錐部は上縁の中央に短く突き出ている。基部の外形は隅丸方形に整えられている。

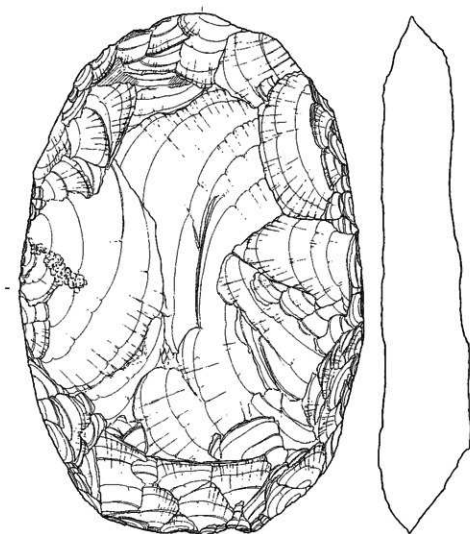
剥片 (第56～63図)

剥片は、頁岩を主体とする石刃状の大形縦長剥片、ホルンフェルスを中心とする幅広の縦長剥片、局部磨製石斧(2)と同一母岩と思われる原石面の残す幅広剥片と小形の貝殻状剥片の3つがある。

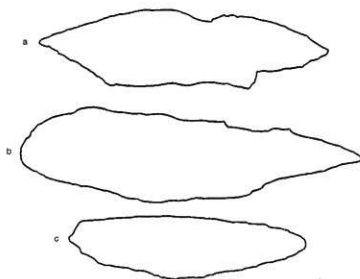
9 (46-18-17・46-19-8) 石器集中bから(46-18-17)、石器集中dから(46-19-8)が出土した。長さ15.8cmの大型縦長剥片である。下から6.5cmの部分で、裏面方向からの力によって2つに折れている。正面の剥離面は、主要剥離面と同一のものが並び、端部に90°逆方向の剥離面がみられることから、両設打面の石核から連続して、大形の縦長剥片が作出されていたこと

第51图 出土石器(1)

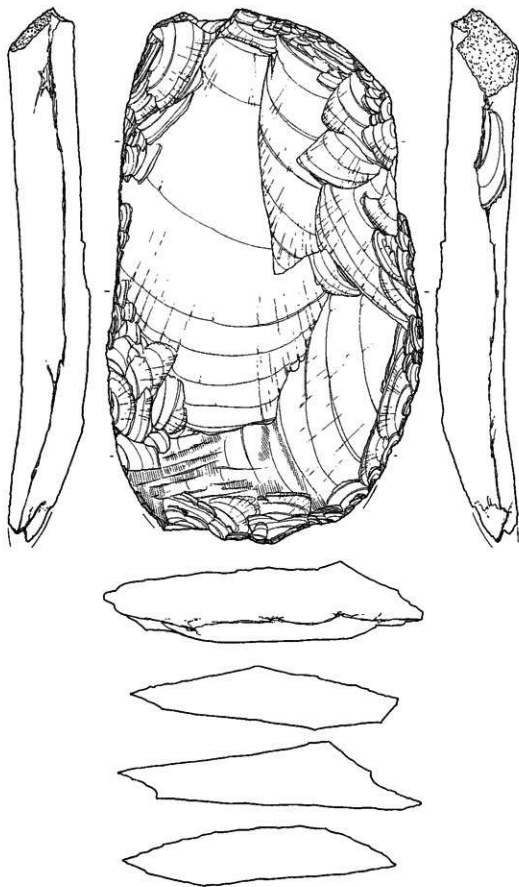


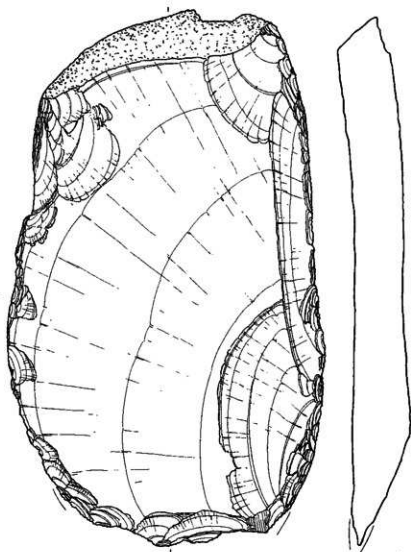


1 (47-19-32)

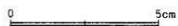


第52网 出土石器(2)

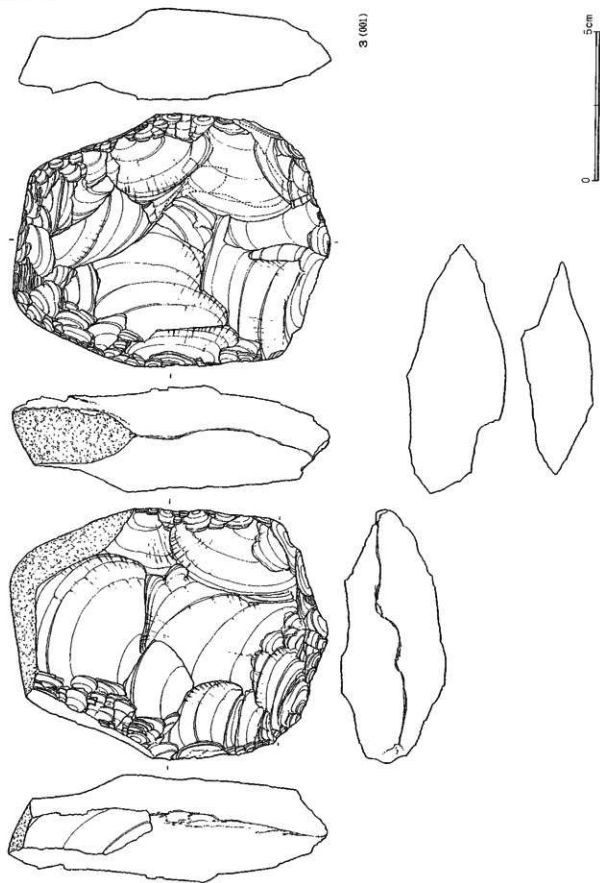




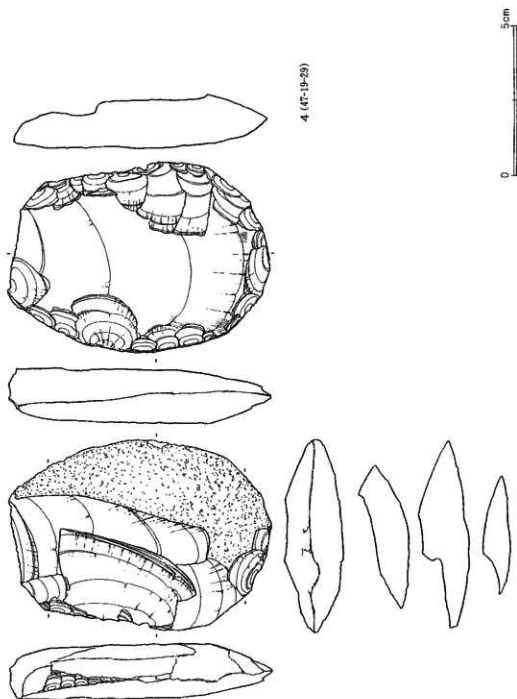
2 (47-18-1)

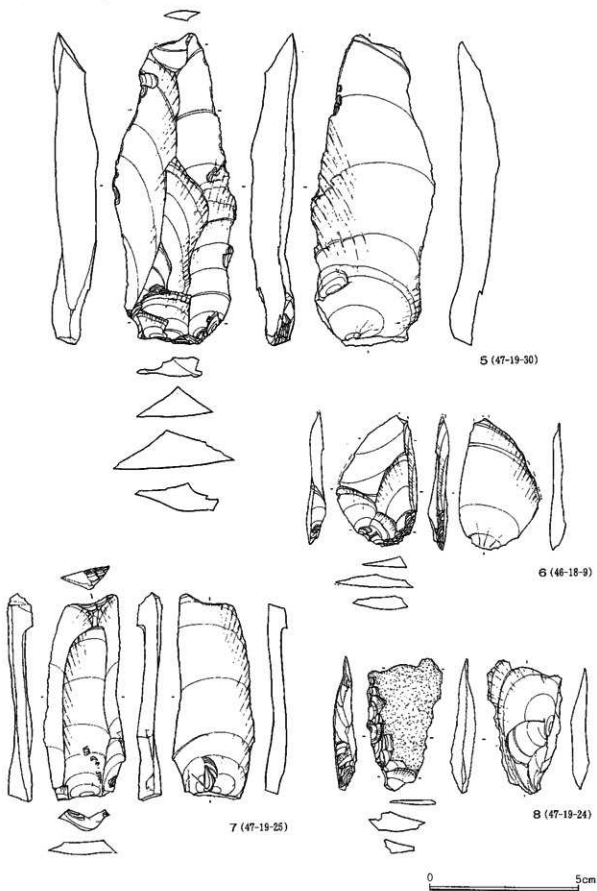


第531图 出土石器(3)

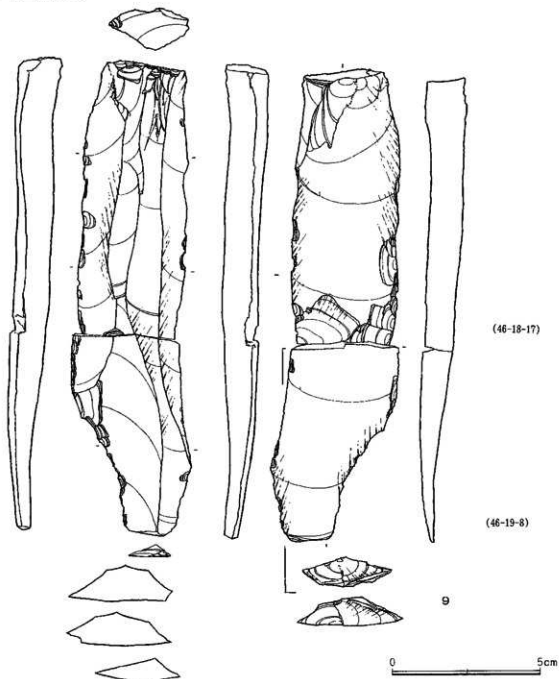


第54図 出土石器(4)





第56図 出土石器(6)



が同える。打面は単剥離面で幅2.6cm、厚さ1.4cmと大きく、剥片の幅と変わらない。

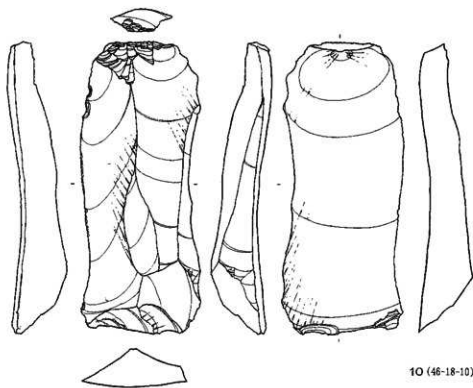
左側縁の下半部から中央部にかけて、細かい剥離がみられる。折れ面がこの剥離面を切っていることから、切断(折れる)前は石刃等として使用されていたと思われる。

2つに折れた後、上半部は折れ面付近の裏面に両側縁からの2次加工が施され、端部を窄まるように整形

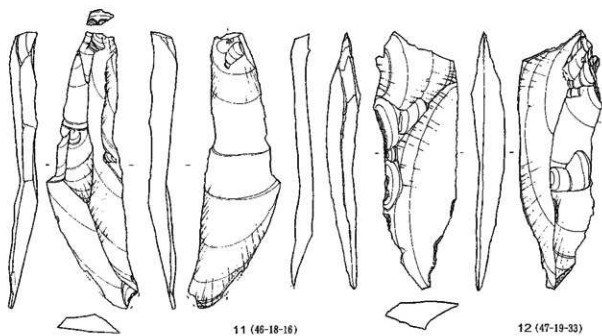
している。現状で何かの製品とは考えにくい、剥片を意図的に短くして、何かに加工しようとしたのかもしれない。

10 (46-18-10) 石器集中bから出土している。厚手の縦長剥片で、正面を構成している剥離面は、主要剥離面と加撃方向が共通する面が並び、先端に主要剥離面と180度異なる方向からの剥離面が観察できる。打面は単剥離面で幅2.1cm、厚さ0.8cmと大きい。横断面

第57图 出土石器(7)



10 (46-18-10)

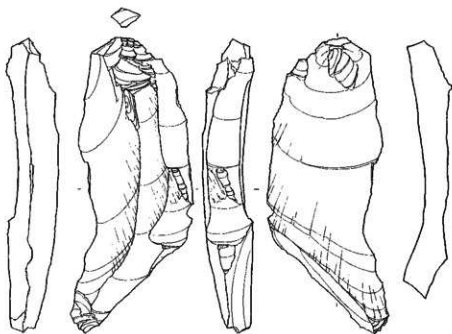


11 (46-18-16)

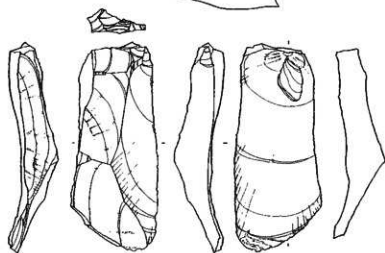
12 (47-19-33)

0 5cm

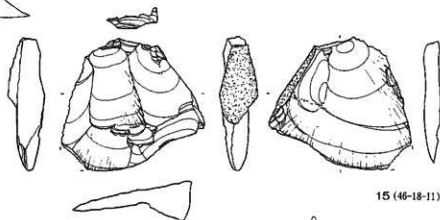
第58図 出土石器(8)



13 (47-19-26)



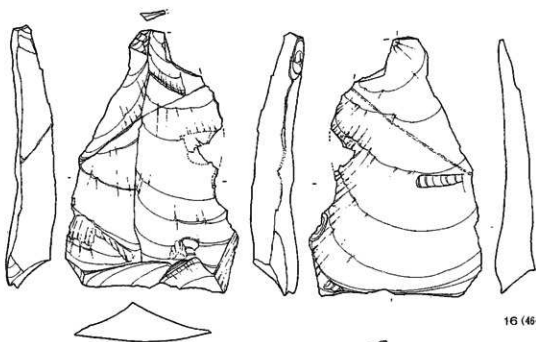
14 (46-18-14)



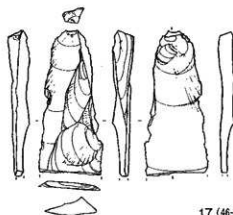
15 (46-18-11)

0 5cm

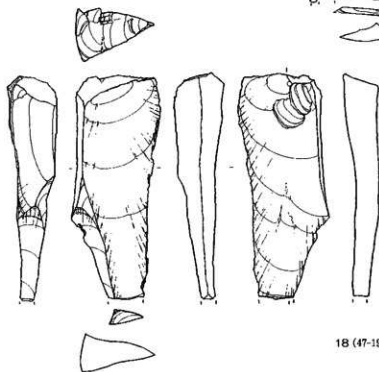
第59図 出土石器(9)



16 (46-19-7)

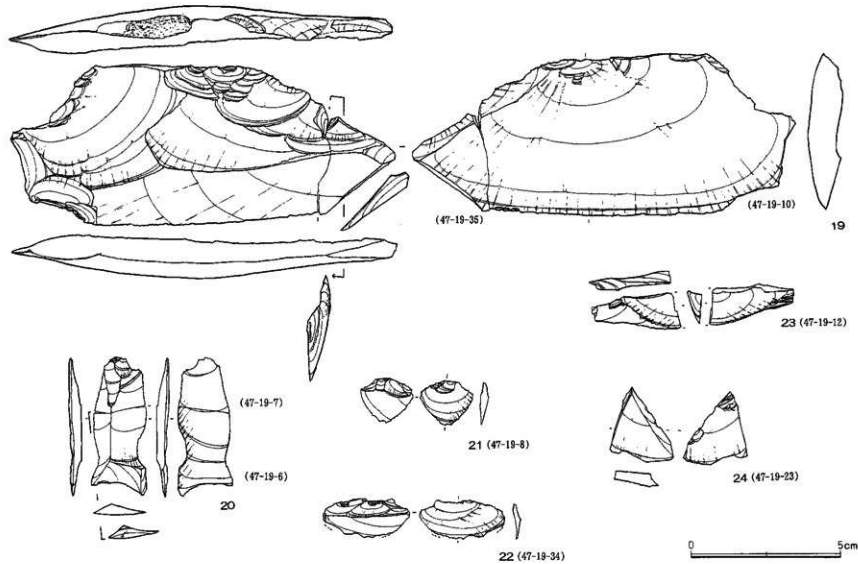


17 (46-18-7)

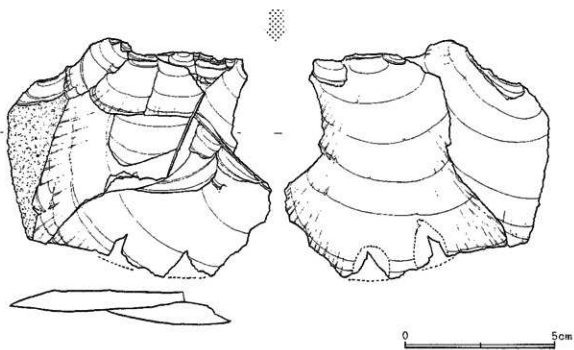
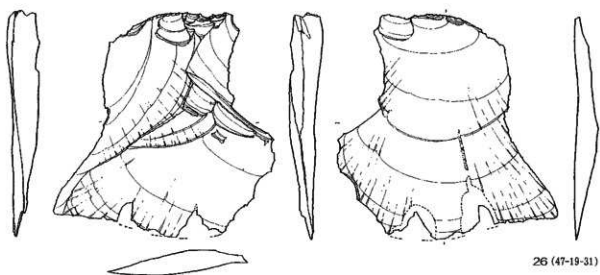
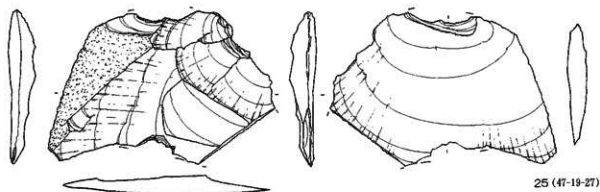


18 (47-19-13)

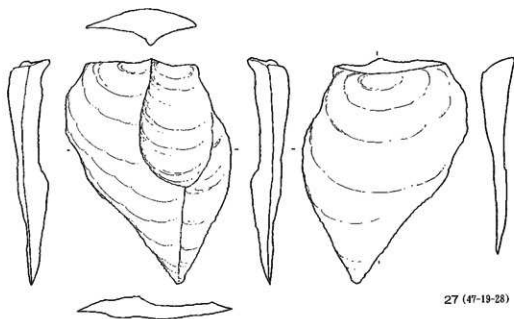
0 5cm



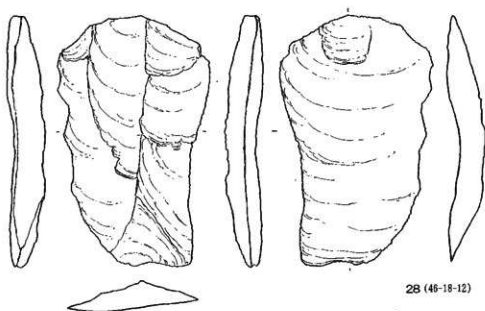
第61圖 出土石器(11)



第62図 出土石器(12)



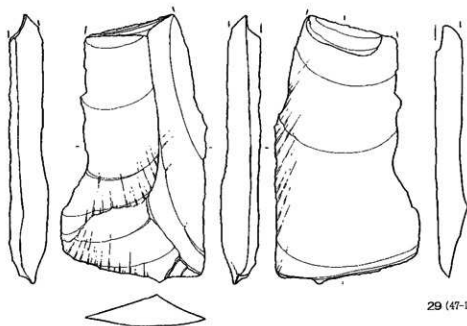
27 (47-19-28)



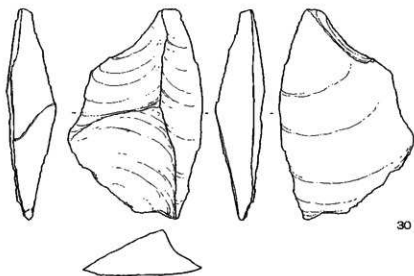
28 (46-18-12)

0 5cm

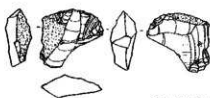
第63圖 出土石器(13)



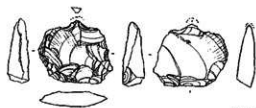
29 (47-19-9)



30 (47-20-1)



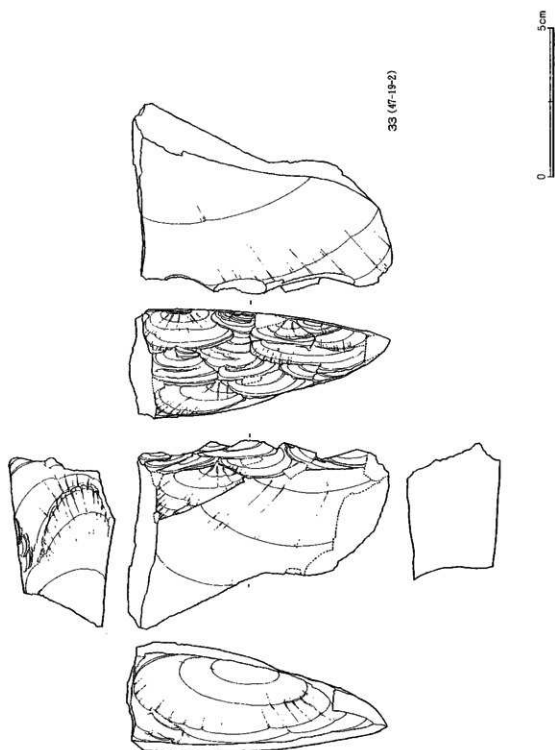
31 (47-18-1)

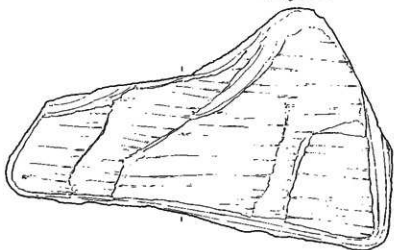
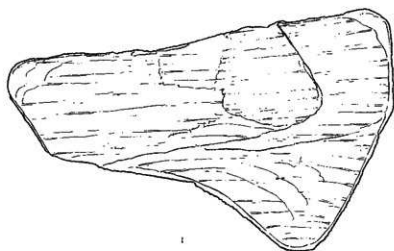


32 (002)

0 5cm

第64図 出土石器(14)

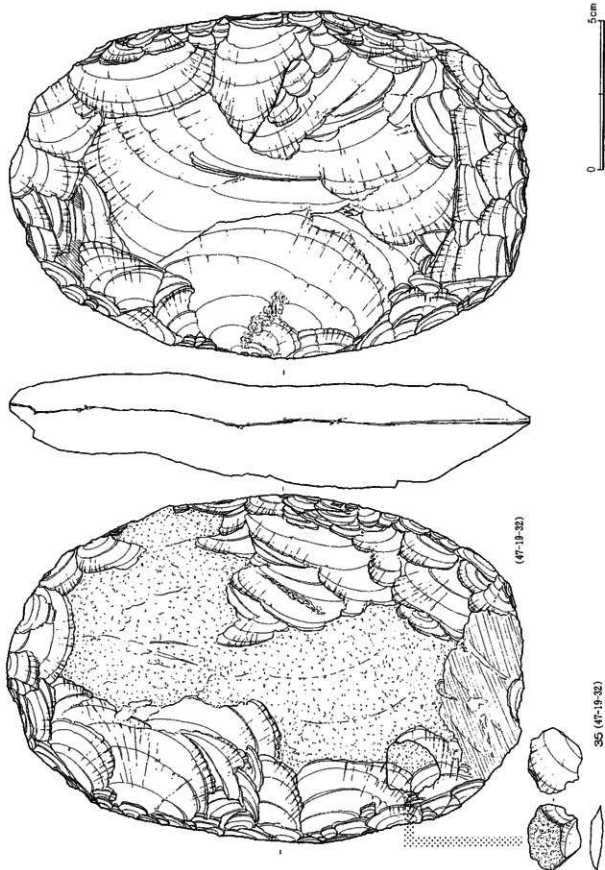




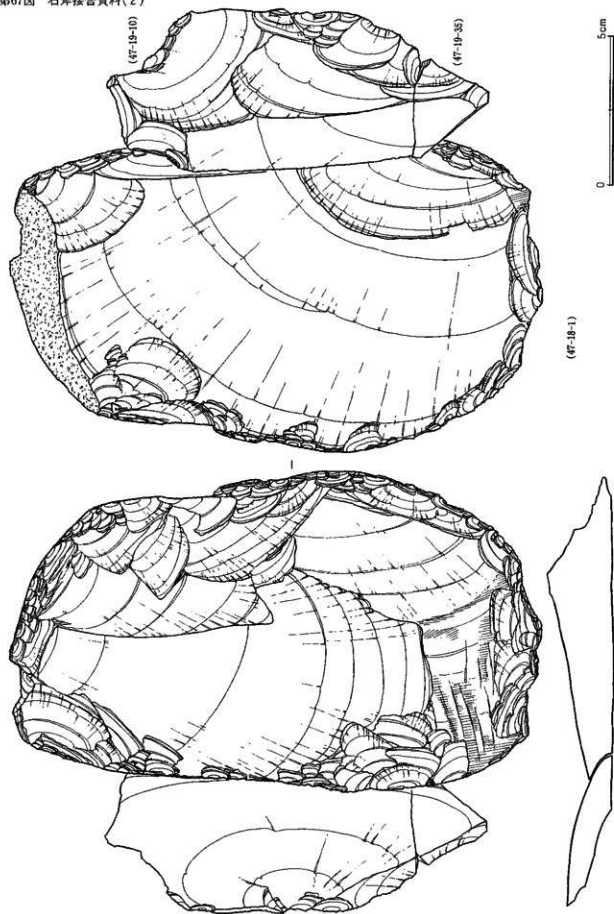
34 (45-19-1)



第66図 石斧接合資料(1)



第67図 石斧接合資料(2)



は三角形に近い形状をしている。左側縁に使用によるものと思われる。微細な剥離が観察できる。

11 (46-18-16) 石器集中bから出土している。やや不整形の細身の縦長剥片である。正面の剥離面は、主要剥離面の加撃方向と共通している。打面は単剥離面で幅0.9cm、厚さ0.5cmを測り、打面調整と思われる剥離がみられる。横断面は台形状である。左側縁下半部に使用痕と思われる。微細な剥離面が観察できる。

12 (47-19-33) 石器集中dから出土した。横広の剥片で、横断面は三角形形状である。上からの力によって折り曲げるようにして剥がされたものと思われる。

左側縁に細かい剥離による加工がみられ、縁が磨耗していることから、大形の石器の一部としてなんらかの機能を果たしていたと考えられる。

13 (47-19-26) 石器集中dから出土した。チャート製の厚手の縦長剥片である。横断面は台形を呈し、正面の剥離面は主要剥離面と共通する。打面は単剥離面で幅1.0cm、厚さ0.7cmである。

14 (46-18-14) 石器集中bから出土した。右側面に裏面方向からの大形の剥離面がみられる。横断面は厚手で左側面が直角となり、右側面は鋭利である。打面は幅1.9cm、厚さ0.8cmの複剥離面で構成されている。

15 (46-18-11) 石器集中bから出土した。右側面に原石面を残す幅広の剥片である。打面は単剥離面で幅1.8cm、厚さ0.7cmである。

16 (46-19-7) 石器集中aから出土した。打面部右側を欠損し、新しい欠損が右側縁にみられる。打面から基部中程まで広がり、端部はコ字状となる幅広の縦長剥片である。正面の剥離面は主要剥離面と共通するが、端部には異なる方向からの剥離面がみられる。横断面は三角形形状である。

17 (46-18-7) 石器集中bから出土した。端部を欠損する。打面は単剥離で幅0.8cm、厚さ0.5cmである。横断面は三角形である。

18 (47-19-13) 石器集中dから出土した。端部を欠損している。左側面は、剥片を剥がす前の剥離面がみられる。横断面は、厚手で直角三角形に近い形状をし

ている。打面は右方向からの剥離面で、幅2.7cm、厚さ1.8cmと大きい。

19 (47-49-10・47-19-35) 2点とも石器集中dから出土し、接合している。横広の人形の剥片で、局部磨製石斧(2)と接合する。打面は原石面で、正面下半部に局部磨製石斧の分断面がみられる。上半部は、打面側からの横広剥離が連続して剥がされており、幅広剥片を、素材として求めたのかもしれない。左側コーナーが緩く挟れ、その部分に細かい剥離が観察される。本石器を掻・削ぎ的に使っていた可能性は高い。

20 (47-19-7・47-19-6) 石器集中bから(47-19-7)、石器集中dから(47-19-6)が出土した。縦長剥片が折損したものと思われる。正面は、主要剥離面と同一方向の剥離面が2枚並び、端部に逆方向からの剥離面がみられる。打面は上位からの剥離によって失われている。横断面は薄手の三角形形状である。

25・26 (47-19-27・47-19-31) 石器集中dから出土した。接合は集中の中で完結する。局部磨製石斧(2)と同一母岩である。2点とも横広の剥片で、一部に原石面を残していることから、局部磨製石斧を製作するための、初期段階の剥片と思われる。打面は共に欠損している。

27~30 (47-19-28・46-18-12・47-19-9・47-20-1) 28が石器集中b、27・19・30は石器集中dから出土した。幅広の縦長剥片である。29・30は打面を欠損する。27・28は打面が残存しているが、風化が進んでいるため、観察不能であった。

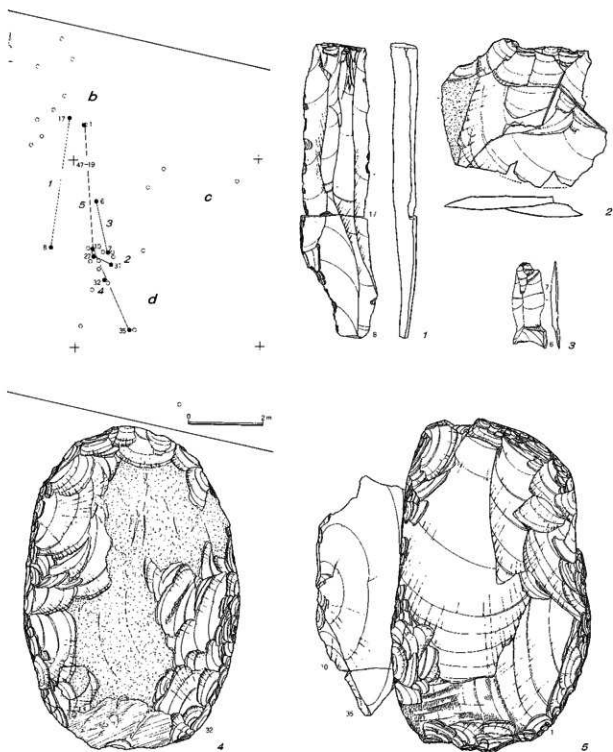
剥片

剥片は、局部磨製石斧(1・2)と同一母岩のもの、石英製のものがみられた。石英製の剥離面の観察が困難なものが多く、詳細は不詳である。

礫器 (第64・65図)

33 (47-19-2) 石器集中cから出土した。上部及び左側を欠損するため、全体の形態は捉えられない。右側面に裏面から表面に向かって、階段状の剥離が入念に施されている。この部分を刃部と考え、礫器に分類した。

第68图 接合图



34 (45-19-1) 石器集中aから出土した。明確な加工はみられないが、右側縁が緩く挟まれており、礫器に分類した。

礫

礫は石器集中cを中心に10点出土している。石材は緑泥片岩、砂岩、石英が用いられ、大きさは10~40gの小形のもの、150~200gのものがみられる。被熱等が確かなものは無い。

(4) 接合資料

接合は石器集中d内、および石器集中bと石器集中d間に5例、11点が認められた。接合は、石斧の製作等に関連するもの、剥片剥離によるもの、剥片の切断または折損によるものの3パターンがみられる。

1 (46-18-17・46-19-8) 石器集中bから(46-18-17)、石器集中dから(46-19-8)が検出された。大形縦長剥片の接合資料で、2つに切断している。左側縁に細かい剥離が連続しており、切断または折れる前に使用していたことが伺える。また、切断の後に上位の部分に剥離が施されており、何かに加工する予定であったか、簡易的な加工で何かに使用したものと思われる。接合距離は3.5mである。

2 (47-19-27・47-19-31) 石器集中d内、剥片の2枚の接合である。局部磨製石斧(2)と同一母岩である。正面の一部に原石面を残すことから、石斧の製作に関連した、初期段階の剥片と思われる。接合距離は0.6mである。

3 (47-19-7・47-19-6) 石器集中bから(47-19-6)、石器集中dから(47-19-7)が検出された。縦長剥片が2つに折損したものと思われる。接合距離は1.4mである。

4 (47-19-32・47-19-32) 石器集中c内で、同一の地点から検出されている。局部磨製石斧(1)の正面の左側刃部付近に、破片が接合する。製作過程によるものとは考えにくく、使用等による欠損と思われる。

5 (47-18-1・47-19-10・47-19-35) 石器集中bから(47-18-1)、石器集中dから(47-19-10・47-19-35)

が出土した。局部磨製石斧の製作過程に関連する接合である。

47-19-10と47-19-35は、石器集中d内での接合である。大形の横広剥片の一部が折損したもので、距離は2.3mである。この剥片は、石器集中bの石斧と3.3m離れて接合する。

剥片は原石面を打面とし、石斧の裏面にある分割面を切っている。そして、石斧の正面のより高い位置に打面がある。そのことを考えると、この剥片を剥がした時点では、正面に原石面を残し、現在の石斧より厚い状態であったことになり、直接石斧の素材となったとは考えにくい。石斧の素材剥片の作出は、裏面の分割面ではなく、下半部に残っている横広の剥離面が主要剥離面である可能性が指摘される。

(5) 母岩別分布

末野遺跡C区から検出された、石器の総数は48点である。石器に用いられた石材で、複数点あるものは頁岩、黒曜石、ガラス質黒色山岩、チャート、石英、ホルンフェルスである。その内、母岩分類が可能なものは、頁岩の2種類であった。

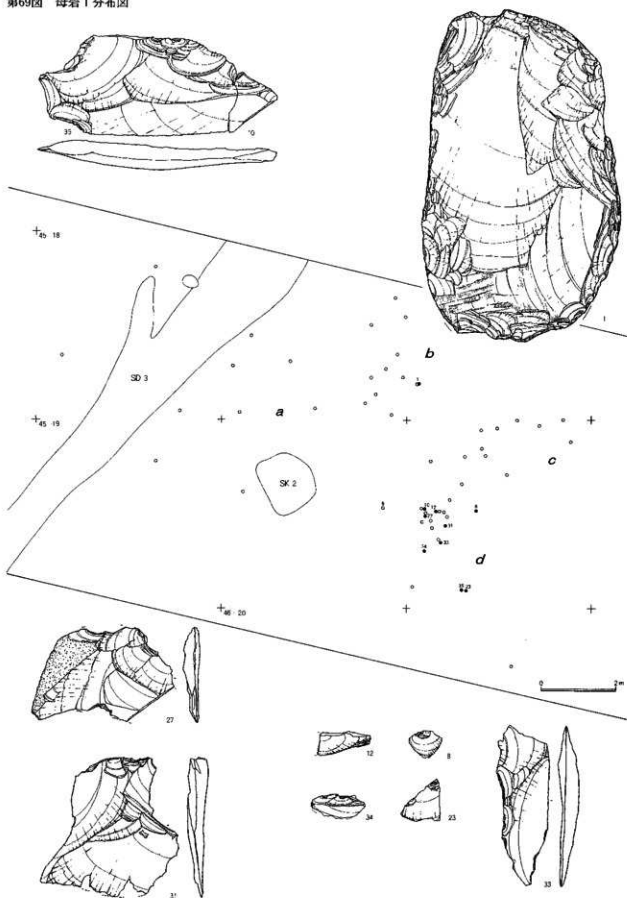
第1母岩(第69図) 頁岩。色調はオリーブ色がかった灰色で、珪質であるが剥離面の表面は少しざらつくが、原石面は滑らかである。

点数は10点と多く、局部磨製石斧、剥片、破片が含まれ、石斧の製作又は再生を伺わせる。分布は石器集中bに石斧が1点、他は石器集中dの密集部とその周囲から出土している。

第2母岩(第70図) 頁岩。色調は灰色の生地に灰オリーブ色の縞が入っている。剥離面の表面の木目は細かい。

点数は4点で、ナイフ形石器と縦長剥片である。他に剥片や破片が検出されておらず、接合しないことから、他の場所で剥離された後に、ナイフ形石器又は石刃として持ち込んだものと思われる。分布は石器集中bから縦長剥片2点、石器集中dからナイフ形石器2点が出土している。

第69圖 母岩 I 分布圖



第70図 母岩2分布図

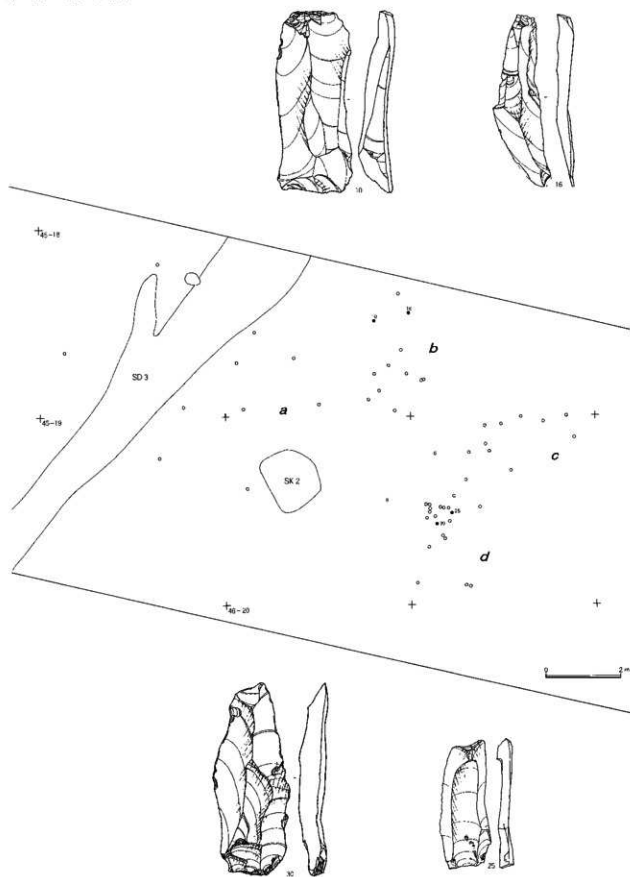


表5 先土器時代石器一覧

グリッド	No	石 器 集 中	北-南	西-東	標 高	器 種	石 質	長さ	幅	厚さ	重さ	図版 番号
45-18	1	a	478	388	131.922	砕片	黒曜石	0.95	1.00	0.25	0.88	34
45-18	3	a	328	68	132.010	砕片	石英	2.55	1.30	0.60	2.65	
45-18	4	a	92	320	132.196	砕片	黒曜石	(0.45)	(0.15)	0.25	0.09	
45-19	1	a	110	322	131.534	礫器	緑泥片岩	12.80	8.10	2.50	214.56	
46-18	1	a	278	80	131.880	砕片	石英	1.60	1.65	0.35	0.88	
46-18	2	a	356	32	131.965	砕片	石英	2.20	(1.30)	0.45	1.33	
46-18	3	a	480	48	131.830	礫	緑泥片岩				29.42	
46-18	5	a	342	184	131.810	砕片	石英	(1.25)	1.00	0.30	0.42	
46-18	6	a	470	252	131.800	礫	石英				8.79	
46-18	7	b	458	388	131.960	剥片	チャート	(4.80)	2.10	0.70	5.81	
46-18	8	b	436	416	132.190	砕片	黒曜石	1.50	1.35	0.25	0.32	
46-18	9	b	388	404	132.040	ナイフ形石器	頁岩	4.35	2.70	0.70	6.58	
46-18	10	b	246	404	131.940	剥片	頁岩	9.75	4.10	2.00	64.47	
46-18	11	b	366	442	131.910	剥片	頁岩	4.40	4.85	1.40	16.87	
46-18	12	b	178	468	131.980	剥片	ホルンフェルス	8.40	5.15	1.30	48.51	
46-18	14	b	328	478	131.800	剥片	チャート	6.95	3.00	1.65	26.51	
46-18	15	b	492	460	131.940	砕片	石英	0.90	0.35	0.35	0.16	
46-18	16	b	228	498	131.975	剥片	頁岩	9.20	3.10	1.00	16.65	
46-18	17	b	388	486	131.842	剥片	頁岩	15.80	4.20	1.60	76.04	
46-19	7	a	196	60	131.595	剥片	粘板岩	8.70	5.80	1.65	57.62	16
46-19	8	d	232	436	133.000	剥片	頁岩	15.80	4.20	1.60	76.04	
47-18	1	b	404	36	132.185	石斧	頁岩	17.80	10.70	2.70	649.40	2
47-18	1	b	404	36	132.185	楔形石器	黒曜石	1.95	2.10	0.90	2.44	
47-19	2	c	78	200	132.080	礫器	ホルンフェルス	(8.75)	(6.30)	3.70	222.71	33
47-19	3	c	20	242	131.850	砕片	石英	(1.65)	(1.25)	0.75	1.58	
47-19	4	c	14	360	131.800	礫	チャート				6.84	20
47-19	5	c	58	444	131.920	砕片	石英	(2.95)	1.85	0.70	4.13	
47-19	6	b	106	64	131.810	剥片	頁岩	4.65	1.85	0.45	3.02	20
47-19	7	d	240	86	131.790	剥片	頁岩	4.65	1.85	0.45	3.02	
47-19	8	d	240	186	131.790	砕片	頁岩	1.50	1.75	0.35	0.47	21
47-19	9	d	238	40	131.560	剥片	ホルンフェルス	(8.90)	4.90	1.35	49.84	
47-19	10	d	240	50	131.570	剥片	頁岩	5.40	12.70	1.30	98.85	19
47-19	12	d	240	80	131.580	剥片	頁岩	1.25	(2.90)	0.50	1.37	
47-19	13	d	240	100	131.600	剥片	チャート	(7.50)	3.05	1.70	29.39	18
47-19	14	c	26	198	131.730	礫	砂岩				41.13	
47-19	15	c	0	298	131.750	礫	片岩				11.55	17
47-19	16	c	0	422	131.700	礫	緑泥片岩				12.47	
47-19	17	c	94	156	131.690	礫	砂岩				14.28	18
47-19	18	c	96	208	131.540	礫	砂岩				38.66	
47-19	19	c	166	146	131.590	礫	砂岩				219.13	20
47-19	20	c	144	272	131.690	礫	緑泥片岩				152.65	
47-19	21	c	210	111	131.510	礫	緑泥片岩				160.59	24
47-19	23	d	452	160	131.634	砕片	頁岩	(2.50)	(2.10)	0.50	2.15	
47-19	24	d	440	16	131.762	合形礫石器	頁岩	4.45	2.05	0.80	6.67	8
47-19	25	d	252	108	131.632	ナイフ形石器	頁岩	6.90	2.80	0.80	13.48	
47-19	26	d	230	52	131.570	剥片	チャート	9.85	4.15	1.20	48.97	13
47-19	27	d	254	50	131.573	剥片	頁岩	5.15	7.10	0.40	29.08	
47-19	28	d	272	40	131.565	剥片	ホルンフェルス	7.45	5.50	1.45	33.70	27
47-19	29	d	266	64	131.596	石斧	砂岩	8.80	6.35	2.40	124.50	
47-19	30	d	286	70	131.591	ナイフ形石器	頁岩	10.30	4.15	1.80	52.01	5
47-19	31	d	278	104	131.550	剥片	頁岩	7.50	7.35	1.10	36.65	
47-19	32	d	320	86	131.519	石斧	ガラス質黒色安山岩	17.30	11.60	3.70	923.92	1
47-19	32	d	320	86	131.519	砕片	ガラス質黒色安山岩	1.80	2.20	0.50	2.09	
47-19	33	d	328	94	131.520	剥片	頁岩	8.65	2.90	1.15	19.38	12
47-19	34	d	346	48	131.585	砕片	頁岩	1.35	2.90	0.30	0.72	
47-19	35	d	448	148	131.571	剥片	頁岩	5.40	12.70	1.30	98.85	19
47-20	1	d	152	286		剥片	ホルンフェルス	(7.00)	4.50	1.70	34.74	
001						石斧	黒色頁岩	10.60	8.45	3.60	365.08	3
002						チャート	石鏃	2.15	2.50	0.75	3.87	

2. 奈良・平安時代の遺構と遺物

(1) 住居跡

第1号住居跡(第71・72図)

48-18グリッドに位置する。床面まで削平が進んでいるため、現存するのはカマドと貯蔵穴のみで、住居の大きさは不詳である。貯蔵穴は東西方向に2基が切り合っているように見えるが、新旧関係は把握できなかった。住居に伴う柱穴等のピットは検出されていない。遺物はカマドと貯蔵穴から検出されている。また、貯蔵穴に遺物と混じって片岩の壁状礫が、覆土の上層にあたかも引いたように検出された。

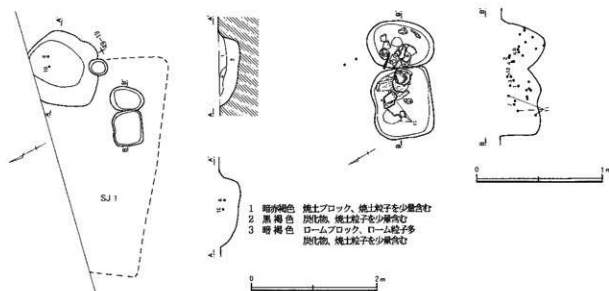
遺物は、カマドから壺10、環6が、カマド内ピットからは柄9が、貯蔵穴からは環1・3、高台付環7、壺11、甕12が、貯蔵穴の東側のピットからは環2・4・5、高台付環8が出土している。1～6は、底部が回転糸切り離しの環である。6は摩耗が激しい。1～3は口径12.0cm前半で体部が外傾に内湾気味に立ち上がり、口唇部がやや外反するものである。1は底部外面にヘラ描きされている。3は体部中位に強い稜線がある。4は推定口径13.7cmで他の環よりも大きい。体部も外傾に直線的に立ち上がり、口縁部でふくらむ。7は口縁部が欠損しているが底部の大きさや形態から8と同

様であると考えられる。8は推定口径15.6cmで口唇部がやや外反するものである。底部は糸切り痕が摩耗してははっきりしないが回転糸切り離しの後、高台を貼り付けている。9は推定口径18.0cmの柄で、体部は外傾に内湾気味に立ち上がり、口縁部で外反する。内外面ともクロロ日が明瞭である。底部は欠損しているため、調整や高台の有無は不明である。10は推定口径17.4cmのかえりを持たない蓋である。つまみの有無は不明で、天井部は回転ヘラケズリが施され、口縁端部を屈曲させている。外面は摩耗が激しい。11は推定口径18.8cmの壺の胴部から底部にかけてであり、平底の底部で胴部は外傾に直線的に立ち上がるが胴部上半から欠損している。胴部外面はナデの後、下にケズリを施し、内面はナデの後、指で押圧した痕が残る。底部外面は一定方向のヘラケズリが施されている。12は甕の口縁部である。外面は無文で口縁端部には上下に粘土が貼り付けられる。1～4以外は焼成が良くない。

第2号住居跡(第73・74図)

49-18グリッドに位置する。第1号住居跡と近接している。遺構の遺存は悪く、床面まで削平が進んでいる。そのため、現存するカマドとピットから、住居の

第71図 第1号住居跡(L=132.60m)



第72図 第1号住居跡出土遺物

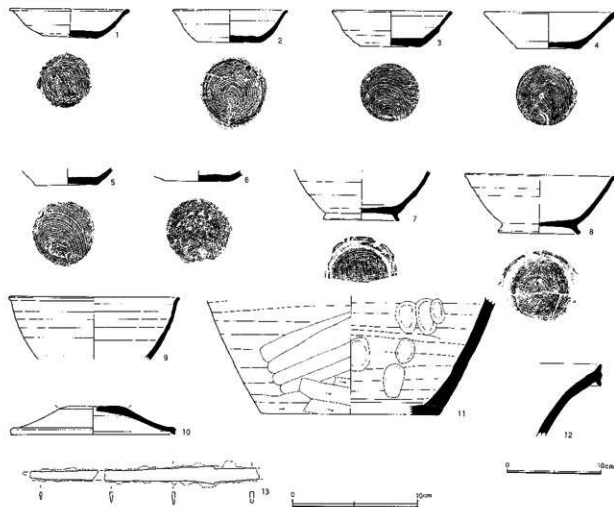


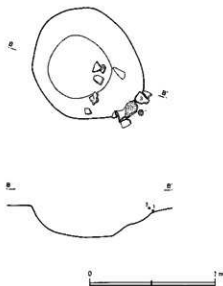
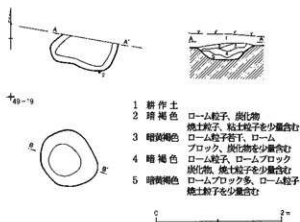
表6 第1号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	杯	12.4	3.0	5.9	ABCE	A	灰	75	貯蔵穴No 8
2	杯	(12.0)	3.4	6.6	BE	B	灰白	50	PitNo12
3	杯	12.4	3.8	6.4	BE	A	灰	80	貯蔵穴No 9
4	杯	(13.7)	3.8	6.4	ACE	A	灰	60	PitNo14
5	杯		1.7	6.4	BCE	B	灰白	80	PitNo15
6	杯		1.1	6.8	ACDE	B	褐	80	カマド内No.3
7	高台付杯		5.3	(8.0)	BCDE	C	褐	40	貯蔵穴No.3
8	高台付杯	(15.6)	6.2	(8.2)	BCE	C	灰白	65	PitNo16
9	碗	(18.0)	6.6		ABCE	C	褐灰	15	カマド内 Pit
10	蓋	(17.4)	3.0		BCDE	C	褐灰	10	カマド内No.1
11	甕		12.5	(18.8)	ABCDE	B	褐灰	20	貯蔵穴No.1・2・5
12	甕	(41.2)	7.7		AC	B	褐灰	5	貯蔵穴No.10・11

表7 第2号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	蓋		0.8		E	B	褐	100	PitNo 7
2	高台付杯		4.2	(7.2)	BCE	B	灰白	40	カマド内No.3
3	甕	(27.0)	10.0		ABCE	A	暗灰	5	PitNo 6

第73図 第2号住居跡 (L=132.60m)



方向を推定することもできなかった。しかし、ビットから遺物が出土していることから、貯蔵穴の可能性もあり、第1号住居跡と対面するように切り合うか、同一方向にスライドさせた可能性も考えられる。

遺物は、カマド周辺から高台付環2が、ビットからは蓋1、甕3が出土している。2は推定底径7.2cmで、底部は回転糸切り離しの後、高台を貼り付けている。1はつまみ径3.3cmで、中心の周辺がへこんだ扁平つまみである。底に回転糸切り痕がある。3は甕の口縁部である。口縁部は外反し、口縁端部は上下に粘土帯を貼り付けている。口縁部から頸部にかけては、間隔の広い2条の波状文が3段施されている。

第74図 第2号住居跡出土遺物



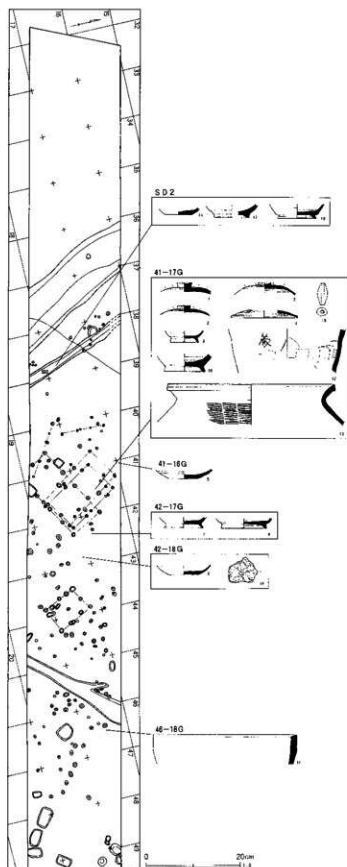
(2) C区出土遺物

C区からは、蓋、環、高台付環、壺、鉢、甕、鉄滓、土鍬が出土した。

第2号溝からは、環16、高台付環17・18が出土している。17は溝の最下層から、18は中層から出土した。16は底径5.7cmの環で底部は回転糸切り離しである。内面の中心がへこんでいる。17と18は高台はともに貼り付けであるが、17の高台は直立して貼り付き、18はハの字に開く。底部の調整は、17は回転糸切り離しで18は回転糸切り離しの後、外周回転ヘラケズリを施している。17は内面が黒色である。

41-17グリッドからは、蓋1~4、高台付環9、壺10、甕12・13、土鍬15が出土している。蓋はつまみのあるものと不明のものがある。1~3はつまみ径が2.7cm前後で大井部は回転ヘラケズリの後、回転糸切り離しをしてつまみを貼り付けている。つまみの形態は扁平だが1は厚く、中心の周辺がへこんでいる。2は中心の周辺がへこんでいる。3は中心までへこんでいる。4は推定口径14.0cmで、端部を屈曲させている。9は推定底径6.0cm、小ぶりの高台付環の底部である。底部は回転糸切り離しの後、高台を貼り付けている。10は底径8.6cmの高台の付いた壺の底部である。底部の調整は摩耗していて不明である。内面のクロロ日が非常に明瞭である。12は甕の胴部である。外面には「蔵」と判読できるヘラ描きが見え、その右にも縦の線がみえるが欠損していて何とかいえるかは分らない。黒灰色で光沢をもつ。内面は無義の当て具に一部を左方向への横ヘラナデが施されている。13は推定口径35.2cmの甕の口縁部である。外面には3cmの幅に7本の平

第75図 末野遺跡C区遺物分布図



行叩きが一部残っている。内面は無調整である。

41-16グリッドからは、坏5が出土している。底径は6.4cmである。底部は回転糸切り離しで口縁部が欠損している。体部は外傾に内湾気味にかなり開きながら立ち上がる。

42-17グリッドからは、高台付坏7・8が出土している。底径は7が8.0cmで8が9.6cmである。どちらも回転糸切り離しの後高台を貼り付けている。8の底部は撫られている。

42-18グリッドからは、坏6、椀型滓14が出土している。6は底径6.1cmで底部が回転糸切り離しである。体部は5と同じだが6のほうが唇肉が薄くなる。14は表面に円形のクレータ状や不整円形の凹みが見られる。底面は弓状を呈し、炉底部に溶解したものと考えられる。

46-18グリッドからは、鉢11が出土している。推定口径30.4cmの鉢の口縁部である。口縁端部は内に斜めに平坦面を持つ。内外面とも指ナデが施されている。

表採遺物は、高台付坏19・20、すり鉢21である。19は推定口径14.5cmで体部は外傾に直線的に立ち上がり、口縁部でふくらむ。外面はクロロ目がきつい。底部は回転糸切り離しの後、高台をハの字状に貼り付けている。20は底径6.8cmの高台付坏の底部で、外面は回転糸切り離しの後、外周回転ヘラケズリを施し、高台を貼り付けている。21は底径8.5cmのすり鉢の底部である。外面には中心に糸切り痕が残るが、摩耗していて不明である。

瓦はグリッドからの出土で、全て小片である。調整加工がわかるもの4点を掲載した。1～3は凸面の調整は縦方向の削りである。4は第1号住居跡の貯蔵穴一括の資料であるが、胎土の感じから、他の瓦と異なっている。

第76図 C区出土遺物

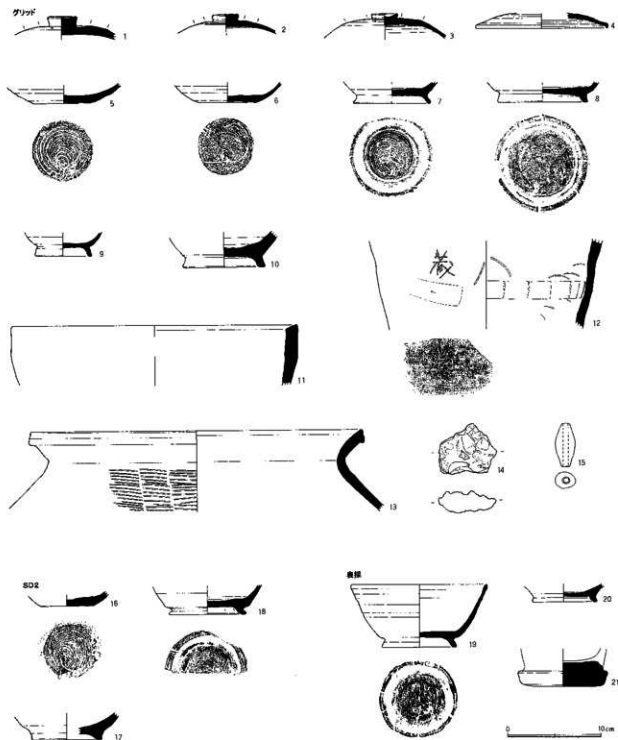


表8 C区出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	蓋		2.4		BCE	C	灰白	55	41-17-14G
2	蓋		2.2		BCE	A	灰	60	41-17-14G
3	蓋		2.7		ACE	A	灰	30	41-17-14G
4	蓋	(14.0)	1.6		ACE	A	灰	20	41-17-14G
5	環		2.0	6.4	ABC	B	灰	80	41-16G
6	環		2.1	6.1	CE	B	褐	70	42-18-9 G
7	高台付環		2.3	8.0	ABDEG	B	乳灰	80	42-17-20G
8	高台付環		2.1	9.6	ABDE	B	褐	95	42-17-17G
9	高台付環		2.5	(6.0)	AC	A	暗灰	60	41-17-8 G
10	蓋		3.7	8.6	ABCDE	C	褐灰	80	41-17G
11	鉢	(30.4)	6.4		BCDE	C	褐	10	46-18G
12	甕		9.3		ABCD	A	黒灰	5	41-17-20G
13	甕	(35.2)	8.7		ABE	A	灰	10	41-17-11G、41-17-18G、44-18G、一括
14	柄型洋	長さ5.0	厚さ2.2	重さ95.99 g					42-18G
16	環		1.2	5.7	ABCE	A	灰	80	SD-2
17	高台付環		2.8	(7.2)	BD	B	褐	30	SD-2 最下層
18	高台付環		3.1	8.0	ACE	B	灰	50	SD-2 中層
19	高台付環	(14.5)	6.7	7.9	ABCE	B	灰	70	一括
20	高台付環		1.9	6.8	AC	B	灰	70	一括
21	鉢		2.5	8.5	ABCE	C	灰	80	一括

第77図 C区出土瓦

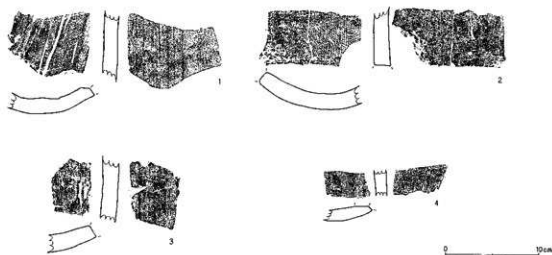
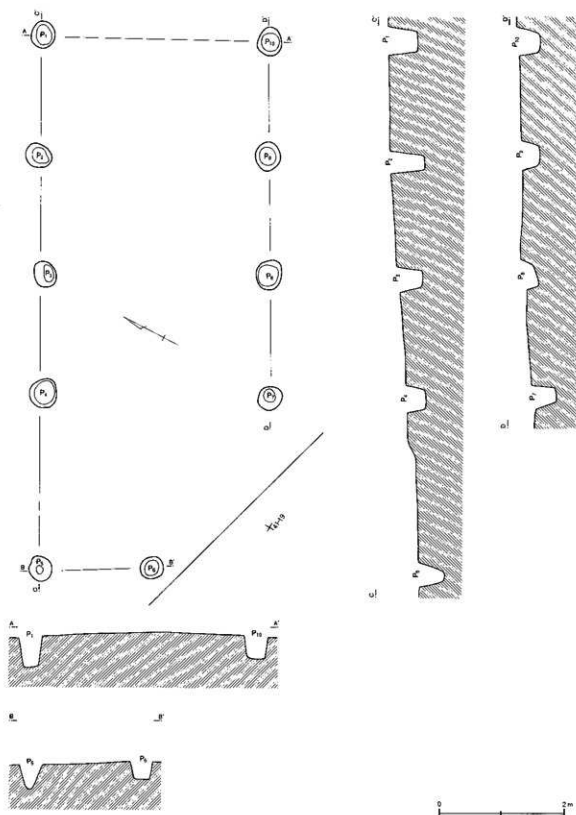


表9 C区出土瓦観察表

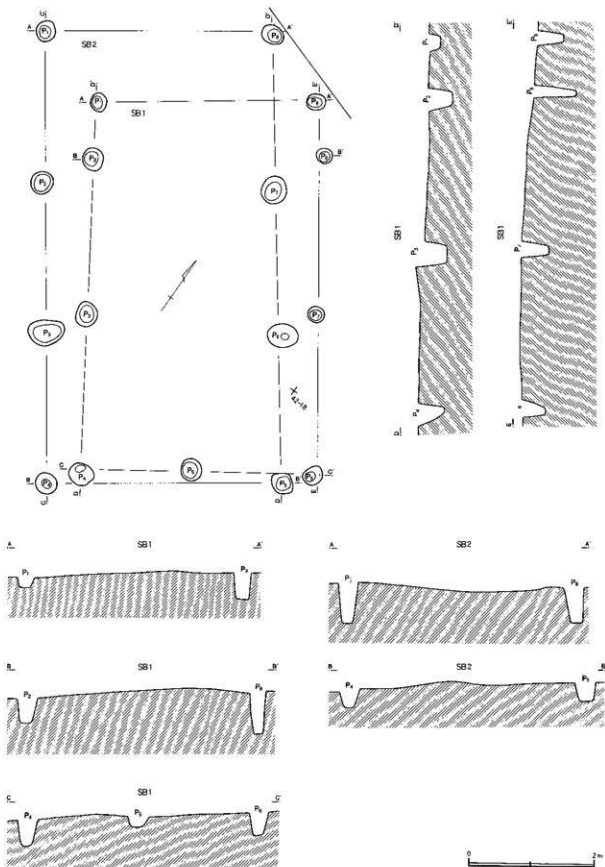
番号	種類	長さ	幅	厚さ	胎土	焼成	色調	表面まで	表面より	凸面	備考
1	平瓦	7.0	9.4	1.7	ABE	1	褐灰	24	21		42-17G
2	平瓦	5.9	11.3	1.7	ABDE	3	褐				
3	平瓦	6.4	5.3	1.7	ABDE	3	褐	15	33		42-17G
4	平瓦	2.7	5.5	1.2	ABC	1	灰	21	24		SJ-1内 Pit1一括

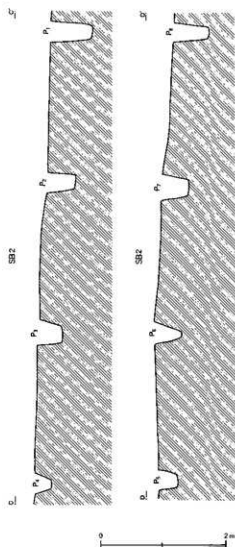
4. 中・近世の遺構と遺物

第78図 第3号掘立柱建物跡 (L = 131.00 m)



第79图 第1·2号掘立柱建物跡(L=131.00m)





(1) 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は、溝に挟まれた東西40～44グリッド列、約20mの範囲に4棟が重複または近接する。掘立柱建物跡の主軸は、第1・2・4号が同じなのに対し、第3号だけ90°異なっている。

第1・2号掘立柱建物跡（第79図）

14-17グリッドに位置する。第1・2号掘立柱建物跡は、主軸をほぼ同じくして重複している。第1号掘立柱建物跡は、1間×2間の側柱掘立柱建物跡で、北庇が付属している。桁行5.9m、梁行3.55mを測り、桁行の方位はN-33°-Wを指す。桁行の柱間は概ね2.5mである。柱の深さはP1が0.16m、P2が0.38m、P3が0.45

m、P4が0.45m、P5が0.18m、P6が0.36m、P7が0.43m、P8が0.66m、P9が0.45mと0.4m前後であるが、P8だけ66cmと深い。

第2号掘立柱建物跡は、1間×3間の側柱掘立柱建物跡で、桁行7.15m、梁行3.65mを測り、桁行の方位はN-36°-Wを示す。桁行の柱間は概ね2.4mである。柱の深さは確認面からP1が0.67m、P2が0.42m、P3が0.38m、P4が0.26m、P5が0.30m、P6が0.42m、P7が0.42m、P8が0.55mと0.4～0.6mである。

第3号掘立柱建物跡（第78図）

南西コーナーが調査区外となるため、柱1本は未検出である。1間×4間の側柱掘立柱建物跡で、桁行8.44m、梁行3.62mを測り、桁行の方位はN-64°-Eを指す。桁行の柱間は概ね1.8～1.9mである。P4とP5の間だけ2.8mと広い。柱の深さは確認面からP1が0.46m、P2が0.50m、P3が0.31m、P4が0.30m、P5が0.40m、P6が0.26m、P7が0.31m、P8が0.20m、P9が0.21m、P10が0.31mと0.4m前後である。

第4号掘立柱建物跡（第80図）

43-18グリッドに位置する。1間×2間の側柱掘立柱建物跡で、やや歪んでいる。桁行は西側3.55m、東側3.9m、梁行は北側2.65m、南側2.84mを測る。桁行の方位はN-30°-Wを指す。桁行の柱間は1.7m、1.85m、2.35m、1.55mである。柱の深さは確認面からP1が0.45m、P2が0.25m、P3が0.24m、P4が0.55m、P5が0.46m、P6が0.45m、P7が0.60mと0.25～0.55mと統一性に欠ける。

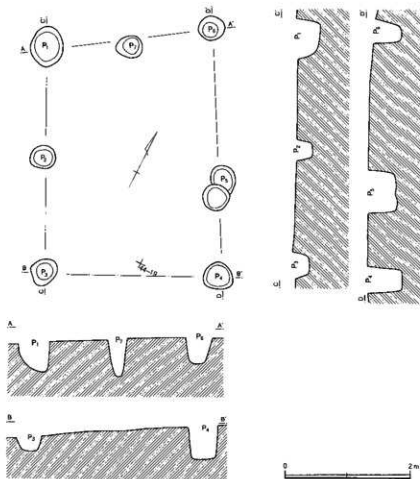
(2) 土壇

土壇は東西40～41グリッド列で、掘立柱建物跡と近接する第1・8号土壇と、東西46～48グリッド列にまとまる一群がみられる。平面形は全体に方形で、掘り方は浅く、底面が平坦なものが多い。遺物の伴う土壇は無く、時期等は不詳である。

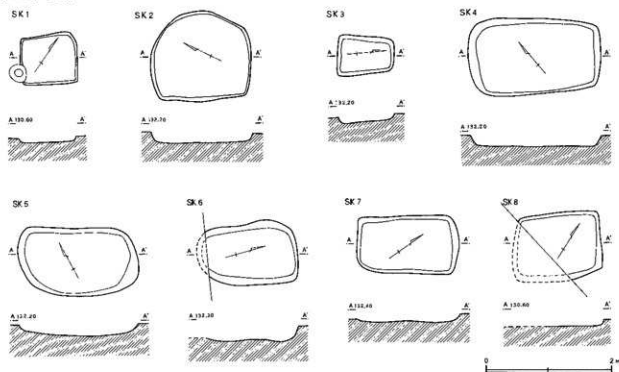
第1号土壇（第81図）

40-18グリッドに位置する。平面形は方形で長軸0.9m、短軸0.8mを測る。深さは0.1m未満と浅く、底面

第80図 第4号掘立柱建物跡(L=131.70m)



第81図 土坑



は平坦である。主軸はN-55°-Eを指す。

第2号土坑 (第81図)

46-19グリッドに位置する。平面形は方形であるがやや不正形である。長軸は1.6m、短軸1.4m、深さ0.1mを測る。底面は平坦である。主軸はN-26°-Wを指す。

第3号土坑 (第81図)

47-20グリッドに位置する。平面形は台形で長軸0.9m、短軸0.65m、深さ0.1mを測る。底面は平坦である。主軸はN-3°-Eを指す。

第4号土坑 (第81図)

48-20グリッドに位置する。平面形は方形で長軸2.1m、短軸1.2m、深さ0.2mを測る。底面は平坦である。主軸はN-50°-Wを指す。

第5号土坑 (第81図)

48-20グリッドに位置する。平面形は楕円形で長軸2.0m、短軸1.1m、深さ0.15mを測る。底面は平坦である。主軸はN-60°-Wを指す。

第6号土坑 (第81図)

48-20グリッドに位置する。平面形は南側の一部が調査区外になるが、ほぼ楕円形になるものと思われる。長軸は推定で1.5~1.7m、短軸1.0m、深さ0.2m。底面は北側に深い部分があり、全体に安定せず凸凹である。主軸はN-11°-Eを指す。

第7号土坑 (第81図)

49-20グリッドに位置する。平面形は方形で長軸1.65m、短軸0.9m、深さ0.1mを測る。底面はほぼ平坦である。主軸はN-37°-Eを指す。

第8号土坑 (第81図)

41-18グリッドに位置する。南側半分が調査区外のため、全体の形状は把握できない。平面形は方形で長軸は推定で1.4m、短軸1.1m、深さ0.1mを測る。底面は平坦で、主軸はN-54°-Eを指す。

ビット5 (第82図)

44-18グリッドで、掘立柱建物跡の北東側約3mの地点に位置する。平面形は径約0.8mの円形で、深さはかわらけの出土した部分は浅く、北側が0.3mと深く

なる。

かわらけは口縁11.8cm、底径2.3cm、器高7.0cmで残存率は90%である。内面に梵字「ア」と規磨が墨書されている。

(3) 櫛列

第1号櫛列 (第83図)

40-17グリッドに位置する。南北方向にビットが4本直線に並んでいる。ビットの間隔は1.4~1.6mである。掘立柱建物跡の主軸とは一致しない。

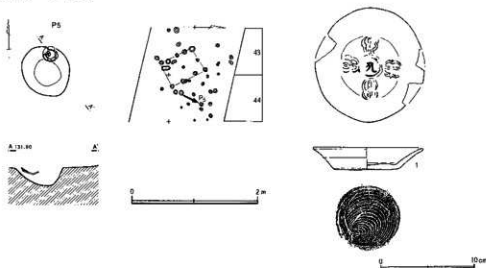
第2号櫛列 (第83図)

40-18グリッドに位置する。東西方向であるが、北に33°振れている。緩い斜面に直交するように、ビットが4本並んでいる。P2は大きさが小さくビットの間隔が合わないことから、関連しないと思われる。ビットの間隔は1.8~2.0mである。第1櫛列同様掘立柱建物跡の主軸とは一致しない。

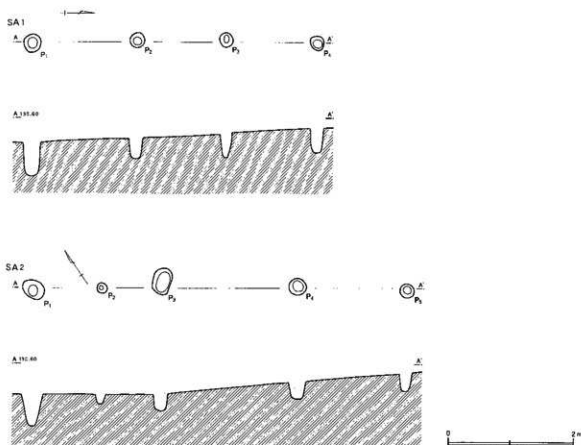
(4) 溝

第1・2号溝のあたりで、埋没谷が確認された。谷の埋土をみると、第III層に須恵器が多く包含され、第IV~VI層に縄文土器が微量包含される。この点から、谷部は平安時代以降に完全に埋まり、中・近世の段階は平坦な地形であったと思われる。

第82図 ビット5・かわらけ



第83図 第1・2号溝列



第1・2号溝 (第84図)

東西グリッド38列に第1号溝、36・37列に第2号溝が位置し、共に調査区を北西方向に横断している。2本の溝はほぼ平行するように掘られている。第1号溝の溝幅は、遺構確認面で1 m前後、断面の観察からは幅2 m以上であったと思われる。第2号溝は溝幅が5 m前後である。

溝の構築時期は断面の観察から、第1号溝が耕作土の直下第II層を切るように掘りこまれているのに対し、第2号溝は第IV層上面から掘られている。2本の溝の間に時期差があり、第2号溝→第1号溝の順で構築されたことは明らかである。また、谷の埋土との関係から、奈良・平安時代以降であることが層位的に確認された。

第3号溝 (第85図)

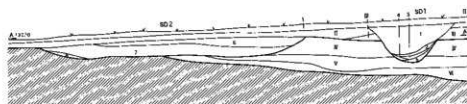
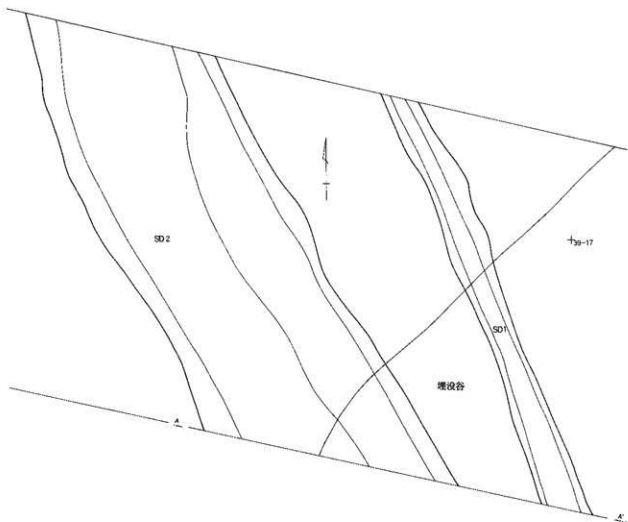
東西45・46グリッド列に位置し、調査区を北東方向に横断している。溝幅は1～2 mで深さは確認面から0.4 mである。45-18グリッドの部分に、南北方向に突起状の溝の一部と思われる掘りこみがみられるが、断面から溝の主体のほうが新しいことが観察できた。本溝と第1・2号溝を南側に延長すると南側25 m地点付近で、やや鋭角になるが交差する、掘立柱建物跡群を囲む溝の可能性が指摘されている(鈴木孝之 1995)。

(5) グリッド出土遺物

かわらけ (第86図)

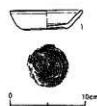
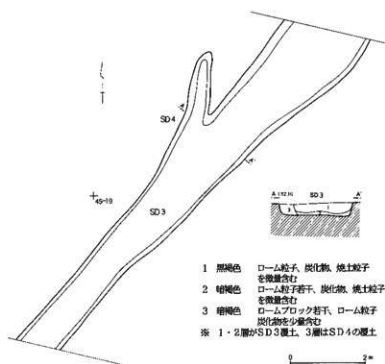
口径7.6 cm、底径2.0 cm、器高4.5 cmと小形である。ほぼ完形品で、内面に炭化物が付着しており、灯明皿と考えられる。

第84図 第1・2号溝



- | | | |
|---------------------------------|---------|-----------------------|
| I 新 作 土 | 1 黒 褐 色 | 焼土粒子、炭化物を少量含む |
| II 暗 褐 色 | 2 暗茶褐色 | 焼土粒子、炭化物を少量含む |
| III 黒 色 | 3 灰 褐 色 | 白色粘土粒子若干、ローム粒子を少量含む |
| IV 暗茶褐色 | 4 暗茶褐色 | ローム粒子、鉄分を少量含む |
| V 黒 褐 色 | 5 暗 褐 色 | 灰白色粘土粒子、鉄、鉄分を少量含む |
| VI 暗黄褐色 | 6 黒 褐 色 | ローム粒子を少量含む |
| ※田圃に溝痕跡を多く包含、IV-VI層に陶文土器を微量包含する | 7 暗 褐 色 | ローム粒子若干、焼土粒子、炭化物を少量含む |
| | 8 暗黄褐色 | ロームブロック多、炭化物を少量含む |

0 2 m



5. その他の時期の遺物

(1) 出土土物

石器 (第87図1～6)

縄文時代の遺構等は検出されていないが、遺構確認の際に石器類が検出された。欠損等が少なく遺存の良好なものを図示した。

1 磨製石斧 刃部下半部が欠損する。側面を一部意識しているが、横断面は円形に近い。

2 打製石斧 外形は基部に浅い抉りを有する。いわゆる分銅形に近い。刃部は円刃で、裏面に磨耗痕がみられる。

3 打製石斧 外形は両側縁が直線的な、いわゆる短冊形である。刃部は直線的で、正面に磨耗痕が見られる。

4 打製石斧 外形は3に比べ、最大幅が刃部付近にある。いわゆる楕形に近い。側縁は正面→裏面に急角度の剝離が施され、側面を有する感があり、横断面は方形を呈する。刃部は正面→裏面方向の剝離によって厚手で直線的に仕上げている。

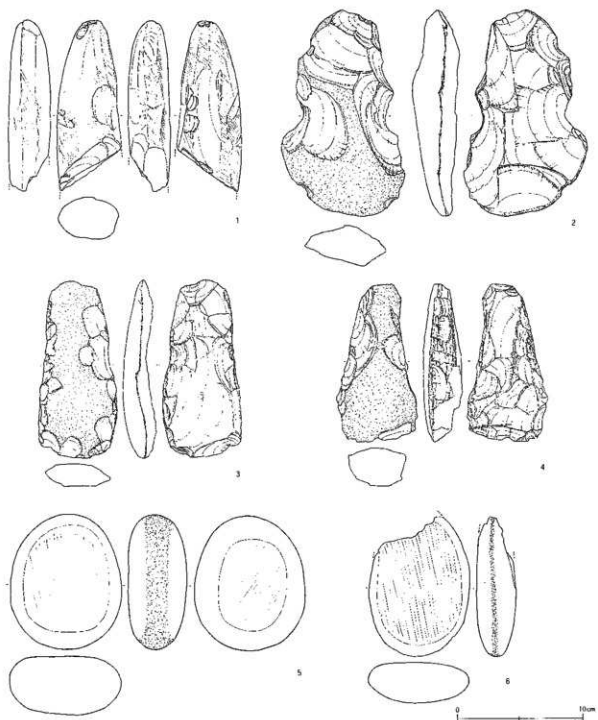
5 磨石 表裏両面に僅かに磨痕が観察できる。側面は敲打痕がみられる。

6 磨石 上半部及び裏面の一部が欠損する。扁平な礫が用いられている。

表10 石器一覧表

番号	出土地点	器 種	長 さ	幅	厚 さ	重 さ	石 材	備 考
1		磨製石斧	13.5	5.2	3.4	338.2	緑泥片岩	
2	39-17-10G	打製石斧	16.2	9.9	3.8	478.23	砂岩	
3	42-18-6G	打製石斧	14.0	6.3	2.7	269.29	砂岩	
4		打製石斧	12.4	6.4	3.1	275.29	ホルンフェルス	
5	SJ-1	磨石	10.6	8.8	4.7	709.23	閃緑岩	
6	40-17G	磨石	11.0	8.0	3.2	373.93	安山岩	

第87図 出土石器



VI 末野遺跡D区

1. 遺跡の概要

末野遺跡D区は、竪穴の検出されたE・F区の西側にあたり、地形的には城見上遺跡B区の谷部から、末野遺跡C区で緩やかに標高が高くなり、C区50-19グリッド周辺をピークに、東側に緩やかな斜面となっている。標高は131~127mである。

D区の遺構は、あまり密集しておらず、何方かと言えば希薄な区画である。主な遺構と遺物は、平安時代は住居跡1軒と土壌、溝2条と粘土探掘坑が2群である。中・近世は欄列2条と井戸2基が検出された。

本区画で検出された住居跡は、1軒のみであった。住居跡が検出されたグリッドは、59-22グリッドで、末野遺跡C区の第1・2号住居跡と約50mの地点に位置する。住居跡の遺存状態は、第1・2号住居跡同様に床面直上まで削平されており、良くないが、貼床及び焼上の分布範囲が確認できたので、大きさがある程度想定できた。

土壌は調査区の西端と、住居跡の周辺に一部重複して数基、粘土探掘坑に近接して、小さなまとまりが幾つかみられる。遺物が伴うのは少ないが、概ね平安時代のものと考えられる。

溝は調査区の中央部を東西方向に、57~66グリッド列、約45mの長さである。溝の幅は一定しておらず、

性格は不明である。覆土中から平安時代の遺物が出土している。

粘土探掘坑は、東西65~72グリッド列と、東西76~80グリッド列の2つのまとまりがみられる。それぞれのまとまり部（粘土探掘坑群）は、前者が調査区の北側半分から調査区外に延びている。土壌の平面形は楕円形で径3~4mのものと、径1m前後で円形のものが見られる。密集度はそれ程高くはない。

一方、76~80グリッド列の粘土探掘坑は、長径2m前後の楕円形のものと、径1m前後の円形のものが10m範囲によく密集するグループと、1辺が2~3mの方形に近いものと不整形のグループに細分できる。また、探掘坑群内79-23グリッドに、遺物が密集する地点があった。粘土の探掘が終わった後の凹地に、遺物を廃棄したものと考え、SX11として扱った。

中・近世の遺構は、欄列2列と井戸2基が検出されているが、遺物は検出されていない。

遺物は、ほとんどが平安時代の須恵器類である。注目されるものは、第3号住居跡から検出された羽口の破片と、SX11からまとまって出土した坏類と、把手付きの鉢が挙げられる。

2. 奈良・平安時代の遺構と遺物

(1) 住居跡

第3号住居跡（第89~92図）

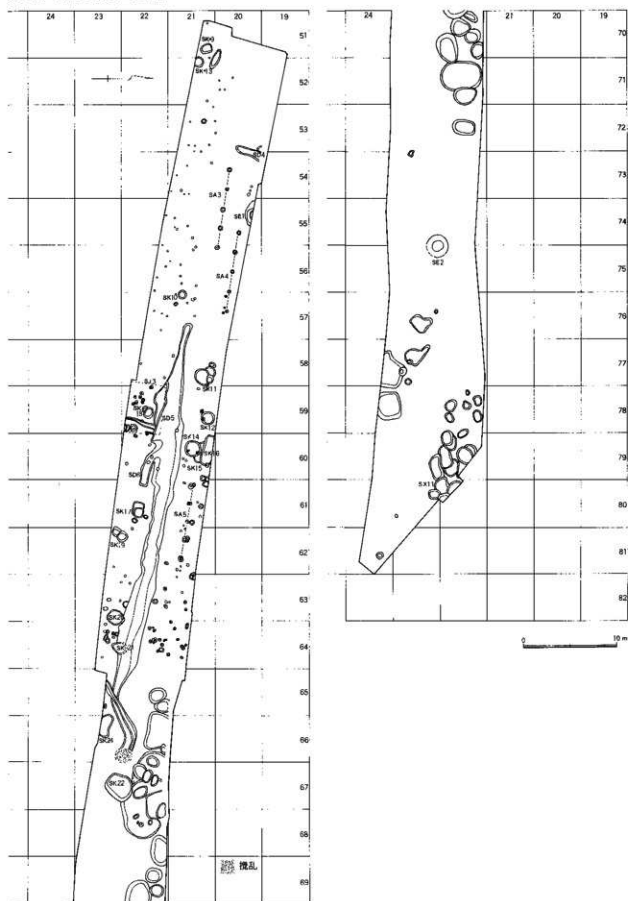
59-22グリッドに位置する。住居跡の遺存状況は悪く、床面の直上まで削平され、壁の立ち上がりは確認されていない。そのため、正確な規模は不明であるが、貼床の分布、焼上の分布から、ほぼ規模が想定できる。南側は調査区外にのび、北側は第5号溝によって壊されているが、東西は約5.5mである。住居跡に関連する遺構は、カマドと貯蔵穴の一部、周溝と思われる溝の一部で、ビットは幾つかみられるが柱穴と思われるも

のは検出されていない。主軸はN-98°-Eを指している。

焼土の分布は、カマドと貯蔵穴の周囲に限らず、住居の東側全体に及んでいる。また、羽口に破片が検出されていることから、工房跡としての機能も有していたものと想定される。

遺物の出土状況は、貯蔵穴とカマド及びその周囲にまとまり、南側の調査範囲ぎりぎりの部分から出土している。焼土の分布の広がりや、重複しているものが多い。

第88図 末野遺跡D区全体図

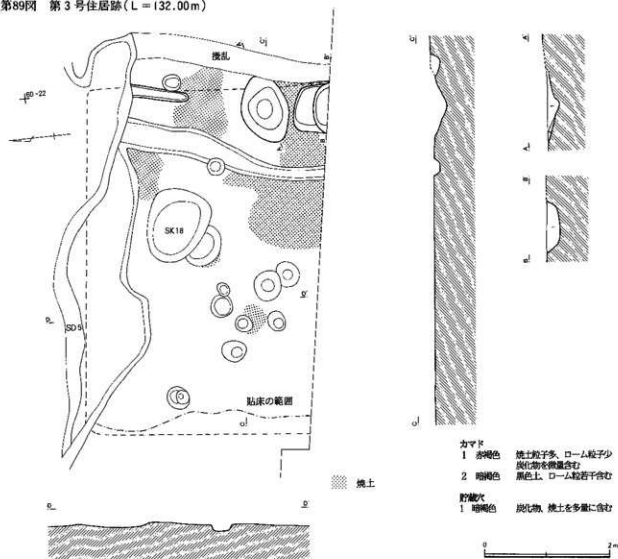


遺物は、蓋9、坏1～5・8、高台付坏10～13、碗6・7、皿14～19、高台付皿20～23、甗24、土師器の甕25、羽口26が出土している。

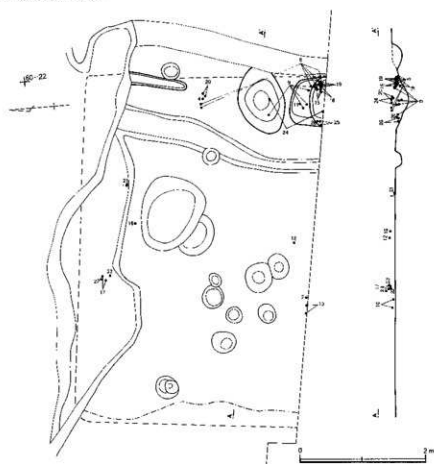
坏はすべて底部が回転糸切り離しであるが、5だけは磨耗が激しくはっきりしない。口径は12cm台で底径は5.5cmから6.5cmの間が多いが8だけは7.2cmある。6と7は碗で共に底部が欠損していて高台が付いていた可能性もある。7は歪みが多い。9は口径16.6cmのかえりのない蓋である。つまみはなく天井部が回転糸切りされた後、回転ヘラケズリを施している。口縁端部を屈曲させている。高台付坏は高台が貼り付けのものである。底部は12以外は回転糸切り離しで、12は不明である。10はクロロ目がきつい。皿は15のように

体部が外傾に内湾気味に立ち上がり口縁部でわずかに外反するものや、16のように体部が外傾に外反気味に立ち上がり、口縁部で更に外反するものや、19のように外傾に平たく立ち上がるものがある。底部は回転糸切り離しであるが、16は磨耗してははっきりしない。18はナデ消している。高台付皿は外傾に外反気味に立ち上がり口縁部で更に外反する。底部は回転糸切り離しの後高台を貼り付けているが、21～23は高台が取れている。24は甗の胴部である。外面下半には細かいケズリが施されていて、内面には直径1cm程の穴が開いている。25は土師器の甕の口縁部である。推定口径19.8cmでコの字状をしている。

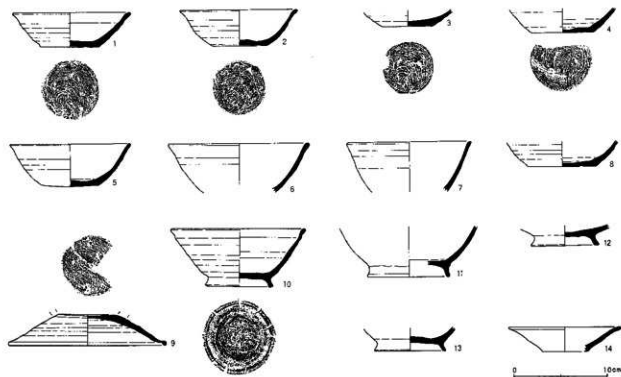
第89図 第3号住居跡(L=132.00m)



第90図 第3号住居跡遺物出土状況



第91図 第3号住居跡出土遺物(1)



第92図 第3号住居跡出土遺物(2)

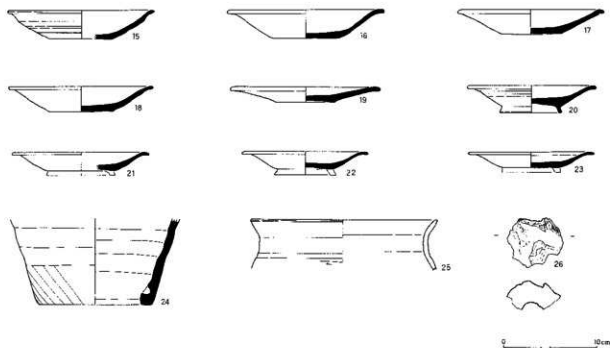


表11 第3号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	環	(12.1)	3.6	6.2	ACE	B	褐灰	75	No 5
2	環	(12.2)	3.8	5.5	BCE	B	褐灰	35	No162
3	環		1.7	5.5	ACDE	C(*)	褐	80	粘土層上位
4	環		2.5	6.4	ABCE	B	灰	55	No10
5	環	(12.6)	4.5	6.0	BE	C	褐灰	35	No 7・12・13・42・44・74・87
6	碗	(14.8)	5.2		ACE	B	灰白	40	覆土
7	碗	(13.0)	5.2		AC	B	暗灰	20	覆土
8	環		2.6	(7.2)	AC	A	暗灰	40	貯蔵穴
9	蓋	16.6	3.3		ABCE	B	灰白	65	No20・33・99・100・117
10	高台付環	(14.0)	6.1	6.4	ABCE	B	暗灰	65	No188・189
11	高台付環		5.3	(8.6)	ABCE	B	灰白	20	No106
12	高台付環		2.1	(7.0)	BCE	B	褐	40	No179
13	高台付環		2.5	7.4	ABC	A	暗灰	40	粘土層上位
14	皿	(11.8)	2.6	(4.8)	AC	A	黒灰	25	Pit 1
15	皿	(15.4)	3.0	(6.6)		A	暗灰	30	No34・35・36
16	皿	(16.7)	3.0	6.9	ABE	C(*)	褐	35	No143
17	皿	(15.6)	2.0	6.2	AE	B	灰白	25	No 2・144 Pit 1
18	皿	(15.4)	2.7	(6.6)	ABCE	B	褐	25	No76・79
19	皿	(16.0)	1.6	6.3	ABCE	B	灰白	50	No40・47・68・69
20	高台付環	(13.8)	2.9	6.6	ACE	B	褐	50	No 9・58
21	高台付環	(14.6)	1.9		BC	B	灰褐	25	No 5
22	高台付環	(13.4)	1.8		CE	C	灰褐	40	No145
23	高台付環	(13.4)	1.7		ABCE	B	黒褐	35	No 1
24	瓶		9.1	(12.0)	BE	B	褐	15	貯穴内 No21・127
25	土師器甕	(19.8)	5.3		CEH	C	褐	10	No102・123
26	羽口	長さ (5.1)	幅 (6.0)	孔徑 (2.3)	重さ 53.29 g				No85

(2) 土壌

末野遺跡D区から検出された土壌は、第9～24号の15基である。分布は調査区の西端に2基、住居跡の周囲58～62東西グリッド列に8基、粘土探掘坑に近接する63～67東西グリッド列に、4基のまとまりがみられる。第10号土壌は若干離れるが、住居跡周辺のグループに含まれる。

第9号土壌 (第93図)

51-21グリッドに位置する。平面形は楕円形で、長径は約1.2m、短径は0.9mである。深さは0.2mで底面は平坦である。覆土の下層に炭化物を含んでいる。主軸はN-83°-Eを指す。

第10号土壌 (第93図)

57-21グリッドに位置する。平面形はほぼ円形で、径は約0.8mである。深さは0.2mで底面は平坦である。

第11号土壌 (第93図)

58-21グリッドに位置する。土壌2基とビット3基が重複している。平面形は2基とも楕円形になると思われる。中心の土壌は長径約2.0m、短径約1.6mで、深さは0.3mを測る。底面はほぼ平坦である。

遺物は、須恵器の甕の小破片が検出されている。

第12号土壌 (第93図)

59-21グリッドに位置する。平面形はほぼ円形で、径は約1.2m、深さは0.15mを測り、底面は平坦である。

第13号土壌 (第93図)

52-21グリッドに位置する。一部調査区外となるが、平面形はほぼ円形で、径は約1.0mである。深さは0.25mで底面は平坦である。

第14～16号土壌 (第93図)

60-21グリッドに位置する。3基の重複で、第16号は調査区外に延びている。第14号の平面形はほぼ円形で、径は約1.5m、深さ0.2mである。15号は14号と16号に挟まれ形状は明らかでない。第16号は平面形が方形で、長径3.2mを測る。短径は計測できない。深さは0.3mである。底面は全て平坦である。

第17号土壌 (第93図)

61-22グリッドに位置する。東西に2基が重複して

いる。平面形は両方とも方形である。東側の土壌は長径約1.5m、短径約1.2mを測る。深さ0.1mと浅く底面は中央部に向かって斜めに下がっている。西側の土壌はほぼ正方形で1辺の長さ約1.0mである。深さは0.15mで底面は平坦である。主軸は共にN-72°-Wを指す。

第18号土壌 (第93図)

59-22グリッドに位置する。平面形は楕円形で長径約1.2m、短径0.9m、深さ0.2mである。底面は東から西に深くなっている。長軸はN-71°-Wを指す。

遺物は、須恵器の環と蓋の小破片が検出されている。

第19号土壌 (第93図)

62-23グリッドに位置する。東西方向に2基が重複している。新旧関係は東側の土壌が西側の土壌を切っている。東側の土壌は、平面形が方形で長径は推定で1.0m、短径0.9mを測る。深さは0.35mと深く底面は平坦である。東側の土壌は、平面形が隅丸の正方形に近く、1辺は約1.1mである。深さは0.3mで底面はほぼ平坦である。東側の土壌の主軸は、N-39°-Eを指す。

第20号土壌 (第93図)

63-23グリッドに位置する。北側の一部が第5号溝と重複する。平面形は楕円形で長径1.8m、短径1.5m、深さ0.15mである。底面は平坦で、主軸はN-37°-Eを指す。

第21号土壌 (第93図)

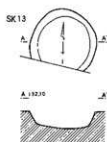
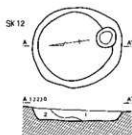
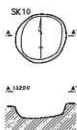
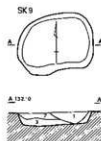
64-23グリッドに位置する。北側は第5号溝によって壊されているが、平面形は楕円形になると思われる。長径は計測不能、短径は1.3m、深さ0.2mで底面は平坦である。主軸はN-16°-Eを指す。

第22号土壌 (第94図)

67-22グリッドに位置する。平面形は隅丸方形で長径3.0m、短径2.6m、深さ0.8mを測る。底面はほぼ平坦である。主軸はN-38°-Eを指す。

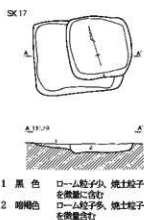
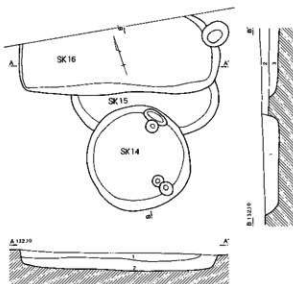
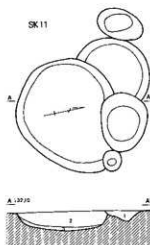
遺物は、第103図4・5の土師器の甕2点が出土した。甕5の出土状態は、覆土上層であるが1個体まとまっている。

第93図 土壌(1)



- 1 暗褐色 ローム粒子若干、黒色土を少量含む
2 暗褐色 ローム粒子を非常に多く含む
3 暗褐色 炭化物を含む

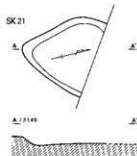
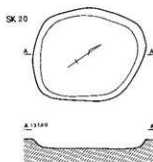
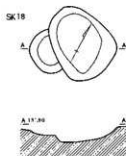
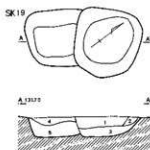
- 1 黒褐色 ローム粒子、炭化物を少量含む
2 暗褐色 ローム粒子を少量含む



- 1 黒褐色 ローム粒子、黒色土のブロックを少量含む
2 暗褐色 ロームブロック、ローム粒子、黒色土のブロックを多量に含む
3 暗褐色 黒色土のブロック多、ローム粒子、ロームブロックを少量含む

- 1 黒褐色 ローム粒子、黒色土ブロックを少量含む
2 暗褐色 ローム粒子を少量含む
3 暗褐色 ロームブロック、ローム粒子を多量に含む

- 1 黒色 ローム粒子少、焼土粒子を微量に含む
2 暗褐色 ローム粒子多、焼土粒子を微量含む

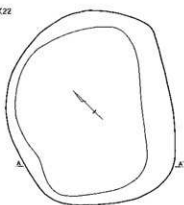


- 1 黒褐色 ローム粒子を少量含む
2 暗褐色 ローム粒子を若干含む
3 暗褐色 ローム粒子多、ロームブロックを若干含む
4 暗褐色 ローム粒子を若干含む
5 暗褐色 ローム粒子を多量に含む

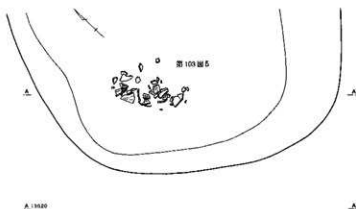


第94図 土坑(2)

SK22



SK24



A 109



0 2m

第24号土坑 (第94図)

66-23グリッドに位置する。南側が調査区外となる為、未検出である。平面形は楕円形で長径約2.4m、短径は想定で約1.2m前後になると思われる。深さは0.2~0.1mと浅く、底面は平坦である。主軸はN-64°-Wを指す。

遺物は、須恵器の環、甕、壺の破片が検出されている。

(3) 溝

第4号溝

53-54-20グリッドに位置する。南北方向の溝で、調査区に僅かに入っている。詳細は不明である。

第5号溝 (第95図)

調査区の中央部に東西57-66グリッド列に、約45mの長さにわたり直線に掘られている。溝の幅は狭い所で0.8m、広い所で2.5mと一定していない。深さは0.2~0.3mで、底面は幅が広いところでは平坦である。

65・66東西グリッド列で南からの細い溝と絡み、北側に曲がっている。断面図によって、南からの溝のほうが新しいことがわかった。先端部に攪乱があるため溝の収束の状況は不明である。

遺物は、須恵器の環類、甕、羽釜、砥石、碗型滓等が検出されている。碗型滓は、本溝によって一部壊されている。第3号住居跡出土の羽口と、関連させて評価することもできそうである。

第6号溝 (第95図)

60-22グリッドに位置する。第5号溝から枝分かれするように、東西方向に3m前後確認できる。覆土は第5号溝と大きな違いはみられない。深さは0.1mと浅く、底面は平坦である。

(4) 粘土採掘坑

粘土採掘坑は、大きく東西66-72グリッド列のまとまりと、東西76-80グリッド列のまとまりに分けることができる。この2つをそれぞれ粘土採掘坑群として以下に説明する。なお、城見上遺跡の粘土採掘坑群から数えると、第3番目と第4番目の粘土採掘坑群になる。

東西66-72グリッド列粘土採掘坑群 (第96~97図)

66-72グリッド列に位置する。標高は128~130mで、西から東の緩やかな斜面である。採掘坑群は、東西約40mの範囲にわたって、調査区の北側半分に分布しており、その片寄りから調査区北側に広がっていることが伺える。南側の分布限界は、調査区内で捉えられている。

採掘坑の平面形は、径約3~4mで楕円形のもの、径約1m前後の円形に近いものが見られる。密集度はそれ程高くないが、楕円形の採掘坑の隙間に小形で円形の採掘坑が埋められている感じである。採掘坑の深さは、確認面から深いもので1m前後、浅いもので0.3m前後であるが、調査区壁面の土層観察から、実際はもっと深かったことが伺える。

採掘坑内及びその周辺グリッドから、遺物の検出は少ない。

東西76-80グリッド列粘土採掘坑群 (第98図)

76-80グリッドに位置する。標高は127~129mを測り、西側から東側に向かう緩い斜面に形成されている。採掘坑群の分布をみると、76-78グリッド列で調査区の南側にまとまるグループと、78-80グリッド列の北側にまとまるグループに分けることができる。前者をグループa、後者をグループbと仮称して説明する。

グループaは、東西約11mの範囲に散漫に分布する。

採掘坑の平面形は、約2~3mの隅丸方形のものと、1.5m前後の不整形のものがみられ、深さは遺構確認面から、概ね0.5m前後である。

グループbは、東西約12mの範囲にまとまっており、特に東側の調査区範囲付近は密集している。採掘坑の平面形は、径約2m前後の楕円形のもの、径1m前後の円形のものが見られる。深さは切り合いが激しいためか、遺構確認面から0.3~0.5m程度である。

(5) 性格不明遺構

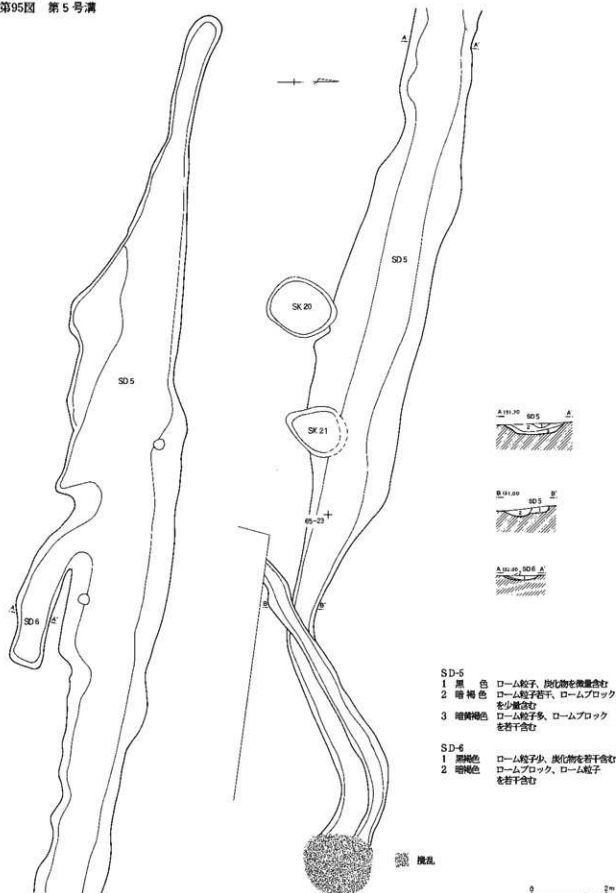
SX11 (第99~105図)

79-22グリッドに位置する。76-80グリッド列粘土採掘坑群のグループbとした範囲と重複する。しかし、一つの採掘坑に遺物が全て収まるわけではなく、やや広い範囲に分布している。採掘坑の遺物との関連は不詳であるが、近接する末野遺跡E区に、同時期の集落があることから、粘土の採掘が終わり凹地となった部分を利用して、遺物を廃棄したのと考えられる。

遺物の分布は、南西~北東に約2.0m、北西~南西に1.0mの範囲に遺物が密集する。出土レベルは約0.3mのレベル幅を持つが、接合状況から同時かもしくは、短期間のうちに一括廃棄されたものと思われる。

遺物は、蓋12~20、坏1~8、高台付坏9~11、鉢22・24、甕21、土師器の甕23が出土している。出土状況は第99図で示し、遺物は、廃棄された状態で検出された。坏は13.0cmから12.0cmの口径を持ち、体部は外側に内湾凹味に立ち上がり、口唇部で外反するものが大半を占める。底部は回転糸切り離しでクロロ目がきつい。3だけには口径のわりに底径が7.4cmと大きく、器高も4.2cmと高めで他の坏とは異なる。体部の立ち上がりか他より垂直に近く、底部は回転糸切り離しの後、外周手持ちヘラケズリを施している。高台付坏は13cm台から14cm台の口径を持ち、高台を貼り付けるものである。底部は9と10が回転糸切り離しで11は摩擦が激しく不明である。蓋はすべてかえりがない。周辺かへこむ扁平のつまみを持つものは、器高が3cm以上で、天井部の回転ヘラケズリが斜めになっている。つまみ

第95図 第5号溝



の有無が不明のものは、器高が2cm台で、天井部が平らに回転ヘラケズリされていて、体部が口縁の手前で強くへこんでいる。前者は12~15で、後者は16~20である。12は器高が4.8cmと他の蓋よりも高い。13と14は形態が同様で口径に大小がある。15は口径12.5cmで最も小さい。16は口径が15cm台、17・18・20は口径が16cm台で、19は20cmと大きさに差がある。21は甕の胴部下半から底部にかけてで、底部の調整は一部ヘラケズリが残っている。22は推定口径25.5cmの鉢で底部が欠損している。23は土師器の甕の口縁部である。コの字状をしている。口唇部にナデによる凹みがあり、器面はざらつき増減している。24は推定口径36.7cmの大型の把手付きの鉢で、底部は欠損している。把手は両側に1つずつ付いている。胴部外面は上半が横位の、下半が縦位のナデが施されている。

(6) D区出土遺物

D区から出土した遺物は、蓋、坏、高台付坏、高台付皿、碗、盤、高盤、鉢、壺、甕、羽釜や土師器の壺、甕、その他には砥石や鉄滓がある。

53-19グリッドからは、高台付坏41が出土している。底径7.8cmの底部で外面は回転糸切り離しの後、高台を貼り付けている。

第1号井戸からは、蓋12、高台付皿13、長頸壺14、甕11が出土している。11は補強帯の付いた甕の頸部である。胴部内面には左から右に当て具底が薄く残っている。12は推定口径18.4cmのかえりのない蓋で体部は外反しながら開き、端部はわずかに曲がる。13は底部を回転糸切り離しの後、高台を貼り付けていると考えられる。14は長頸壺の頸部で、沈線が2本めぐらる。

56-20グリッド内の中央に位置するビットからは、碗型滓43が出土している。

第11号土壌からは、甕1が出土している。口縁部外面は無文で強いナデを施している。口縁端部には上下に粘土帯がひろがる。

第18号土壌は第3号住居跡に重複している。この土壌からは蓋2、坏3が出土している。2は推定口径

13.8cmのかえりの付いていない蓋で、口縁端部は屈曲している。天井部は不明である。3は推定口径11.2cmの坏で体部は外傾に立ち上がり、口縁部はふくらみ、やや外反する。底部は回転糸切り離しである。内面は釉で黒灰色を呈している。

第5号溝からは、坏20~23、高台付坏24、碗25、鉢26、羽釜27・28、砥石29、碗型滓30が出土している。坏は全て底部のみである。20は推定底径7.4cmの坏Gの底部で、手持ちヘラケズリが施される。21は推定底径9.4cmで全面回転ヘラケズリである。22は推定底径7.6cmで糸切り離しの後手持ちヘラケズリが施される。23は推定底径7.4cmで回転糸切り離しである。24は推定底径7.6cmの高台付坏の底部である。外面は回転糸切り離しの後高台を貼り付けている。25は推定口径13.4cmの碗である。底部が欠損しているため、高台の有無は不明である。26は推定口径26.8cmの鉢の口縁部である。

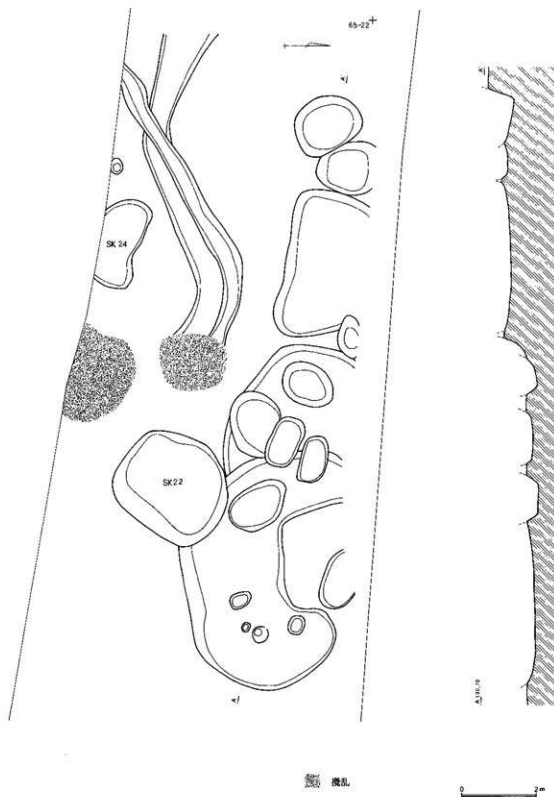
第24号土壌からは、蓋8・9、坏6、壺10、甕7が出土している。6は推定口径13.0cmの器肉が非常に分厚い坏である。口縁部は外にふくらむ。底部は手持ちヘラケズリされている。この坏以外にはこの形態のものはない。7は甕の口縁部で外反しながら立ち上がり、端部に斜めの面を持つ。外面は3cmの幅で9本の縦斜格子叩きが、内面はナデが施されている。8はかえりのない蓋、9はかえりの付いている蓋である。8は天井部が回転ヘラケズリで口縁端部はわずかに屈曲している。10は壺の胴部上半である。

66-23グリッドからは、甕42が出土している。推定口径18.6cmの小ぶりの甕の口縁部である。

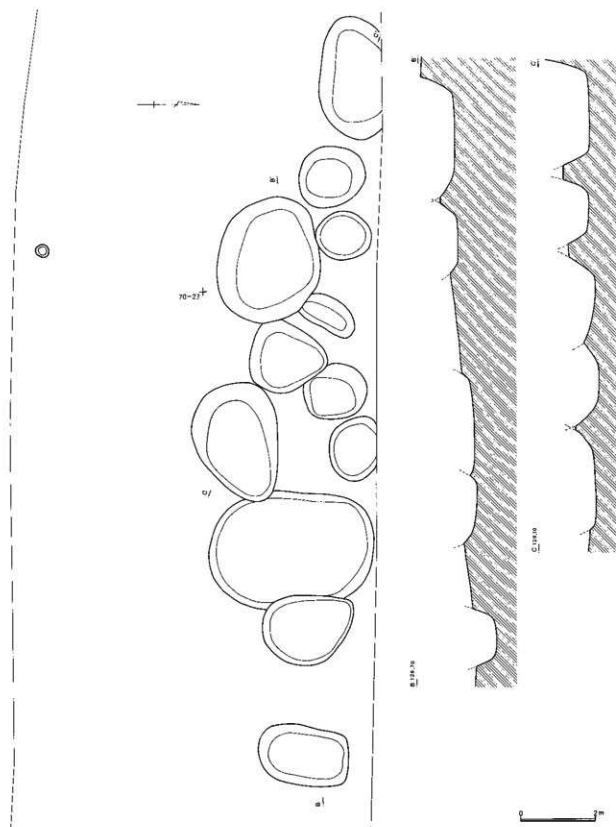
67-22グリッド内の粘土採掘坑からは、甕19が出土している。口径21.4cmの甕で丸底気味の底部から外傾に外反気味に立ち上がり、口縁部でさらに外反する。底部は外周手持ちヘラケズリをしてから、全体を撫でている。他の甕とは異なり、坏を大きくしたようである。

第22号土壌からは、土師器の甕4・5が出土している。4は推定口径25.8cmの長胴甕の口縁部で、直上す

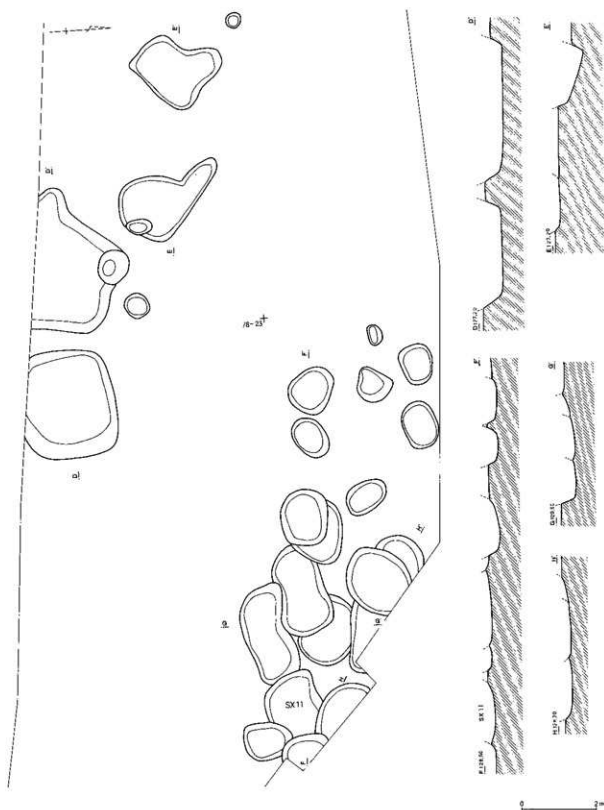
第96図 粘土採掘坑(1)

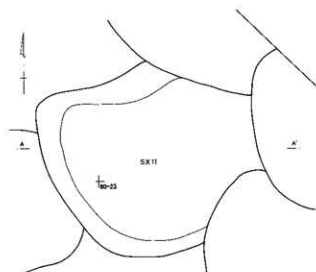


第97図 粘土採掘坑(2)

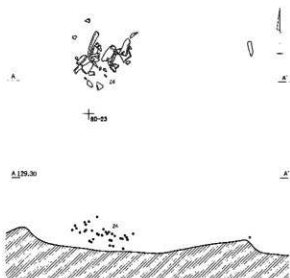


第98図 粘土採掘坑(3)

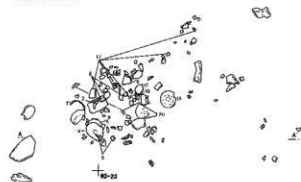




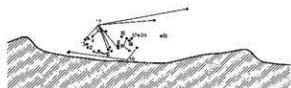
遺物出土状況 (1)



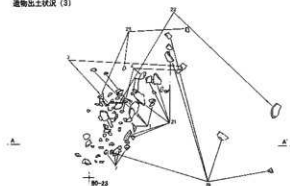
遺物出土状況 (2)



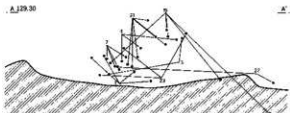
A 129.30



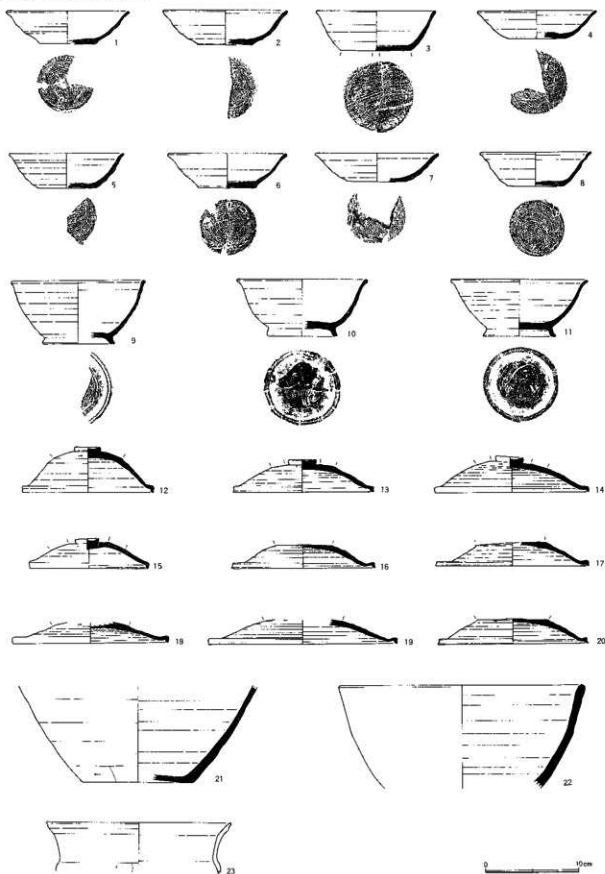
遺物出土状況 (3)



A 129.30



第100図 S X II出土遺物(1)



第101圖 S X II出土遺物(2)

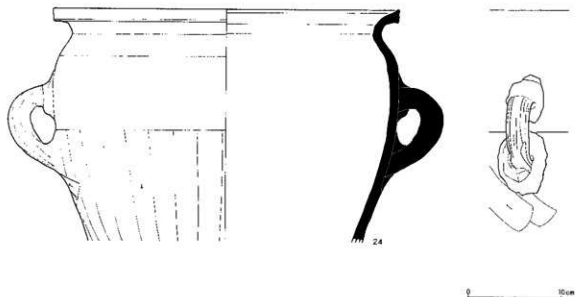
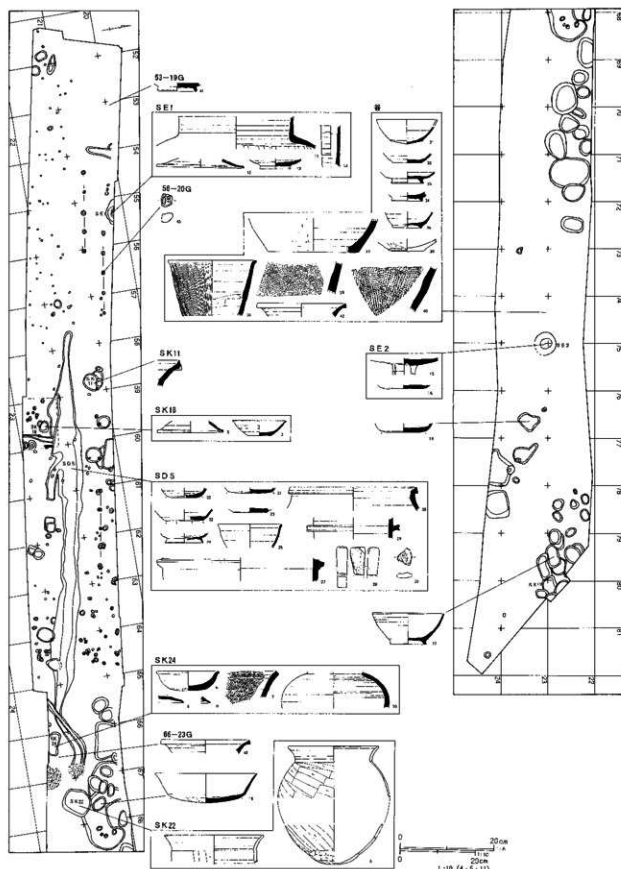


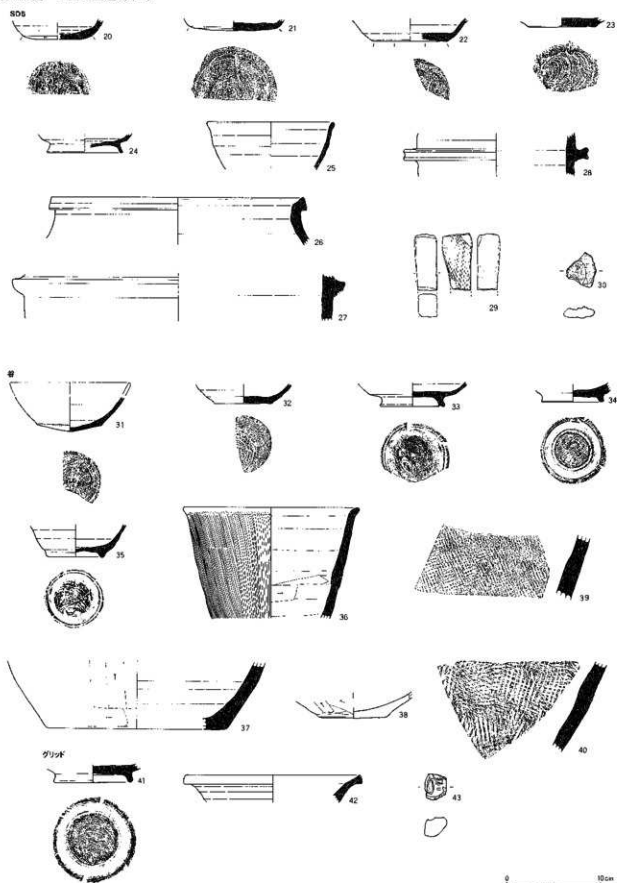
表12 S X II出土遺物觀察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	編考
1	坏	(13.0)	3.5	(6.0)	ABCE	B	灰褐	40	No61・66・157・167
2	坏	(13.2)	3.6	(6.0)	ABCE	B	灰	20	No217
3	坏	(12.5)	4.2	7.4	ABCE	A	灰	40	No45・234
4	坏	(12.5)	2.9	6.1	ABCE	B	淡灰	30	No47・57・175
5	坏	(12.1)	3.7	(6.2)	ABCE	A	灰	20	No114・No137
6	坏	(12.8)	3.6		ABCE	B	灰	30	No231・232・253
7	坏	(13.1)	3.0	(6.3)	ABCE	B	灰	70	No115・118・204・222
8	坏	(11.8)	3.6	6.0	ABCE	A	暗灰	40	No206
9	高台付坏	(14.0)	6.7	(7.7)	ABCE	B	黑灰	30	No100・143・240
10	高台付坏	(13.6)	6.1	(7.4)	ABCE	B	灰褐	60	No140・168
11	高台付坏	14.6	6.1	7.8	ABCE	C(s)	灰白	95	No139
12	蓋	(13.8)	4.8		ABCE	A	灰	30	No142
13	蓋	14.9	3.4		ABCE	A	灰	90	No28
14	蓋	16.2	3.7		ABCE	A	灰	70	No148
15	蓋	12.5	3.2		ABCE	A	暗灰	80	No215
16	蓋	(15.1)	2.5		ABCE	C	褐	20	No173
17	蓋	(16.1)	2.4		ABE	A	灰	50	No33・50・188・189・235・255
18	蓋	(16.4)	2.2		ABCE	B	灰	30	No162
19	蓋	20.0	2.5		ABCE	A	灰	30	No9・15・37・39・116
20	蓋	(16.0)	2.6		ABCE	A	灰	60	No131
21	甕		10.3	(11.8)	ABE	B	淡灰	20	No21・55・56・77・169・172
22	鉢	(25.5)	10.9		ABCE	A	灰	20	No11・174
23	土師器 甕	(20.0)	5.5		ABEFH	B	橙褐	5	No31・256
24	鉢	(36.7)	24.7		ABCE	A	暗灰	40	No88・110・145・147・163・165・185・194・198・200・201・203・213・223・234・238・241・243・他

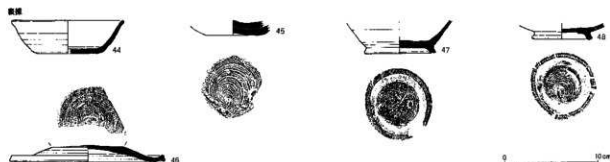
第102図 末野遺跡D区遺物分布図



第104図 D区出土遺物(2)



第105図 D区出土遺物(3)



る胴部から外反する。胴部外面はケズリが、口縁部内外面にはナデが施されている。5は胴部中位が欠損している甕である。口径23.5cmで口縁部がくの字に外反する。丸底の底部を持ち、胴部外面はケズリが施されている。

72～77・22・23グリッド内の谷からは、坏31・32、高台付坏33～35、鉢36、甕37・39・40、土師器の甕38が出土している。31は推定底径6.8cmで底部は中心が尖り、回転糸切り離しのままである。器肉が薄く、胎土も緻密である。32は推定底径6.1cmで底部は回転糸切り離しである。高台付坏はいずれも底径が6.0cm台で回転糸切り離しの後、高台を貼り付けている。33は高台が底部の内側に、34と35は底部と体部の境に付いている。34は内面の刺離面に糸切り痕が残されている。36は推定口径18.9cmの鉢で外傾に直線的に立ち上がる体部に、外反する口縁部を持つ。体部外面はハケ目、体部内面と口縁部にはナデが施されている。37は推定底径19.1cmの平底の甕の底部である。底部の調整はヘラケズリを施している。38は土師器の甕の底部である。底径7.4cmの平底でヘラケズリが施されている。二次的被熱を受け、外面はピンク色に変色している。39と40は甕の胴部の破片である。39は外面に3cmの幅で9本の細かい平行叩きが、内面には櫛状工具による横位のナデが施されている。40は外面に3cmの幅で5本の平行叩きが、内面には青海波文が施されている。

第2号井戸からは、坏16、高盤15が出土している。15は高盤の底部から脚部にかけてである。脚部には3

方に透かしが入っている。16は底径8.0cmの坏の底部である。外面は回転糸切り離し、内面には中央に指ナデが施されている。

76-23グリッドの粘土採掘坑からは、坏18が出土している。推定底径9.0cmで底部は手持ちヘラケズリが施されている。

79-22グリッド内の南に位置する粘土採掘坑からは、高台付坏17が出土している。口径15.0cmで体部は外傾に内湾気味に立ち上がり、口唇部まで自然に薄くなる。高台は貼り付けで、底部の調整は摩耗していて不明である。内面は赤褐色である。

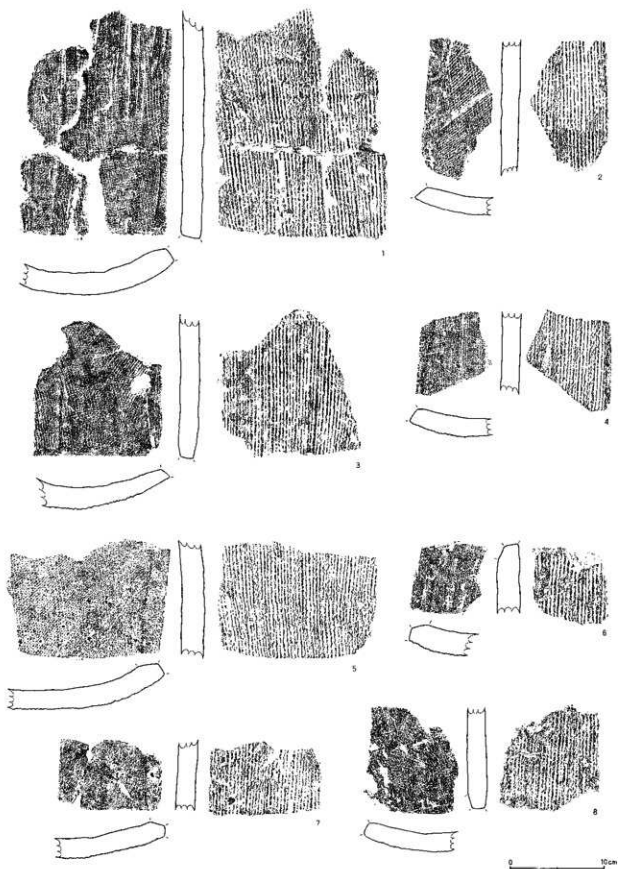
表採遺物は、蓋46、坏44・45、高台付坏47・48である。46は推定口径16.4cmのかえりのない蓋である。つまみはなく、天井部は回転ヘラケズリで口縁部手前でへこみ口縁部は外反する。口縁端部で屈曲する。44は推定口径11.7cmの小ぶりの坏で、体部は外傾に内湾気味に立ち上がり、口唇部でわずかに外反する。底部は回転糸切り離しである。45は2枚重ねの底部で、下の方の底径は6.2cmで回転糸切り離しである。47は底径7.4cmで体部は外傾に直線的に立ち上がる。底部外面にヘラ記号がみえるが、判読はできない。48は底径6.2cmで47よりもひと回り小さい。底部はともに回転糸切り離しの後、高台を貼り付けている。

瓦は、全て平瓦の破片である。凸面が縄目叩きのものが多く、凸面に格子叩きのものが少量みられる。11～14号第24号土壌にまとまる以外は、グリッド一括が殆どである。

表13 D区出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎上	焼成	色調	残存率	備考
1	甕	(39.8)	5.5		ACE	A	黒灰	5	SK-11
2	甕	(13.8)	2.5		AC	A	暗灰	10	SK-18 No.9
3	坏	(11.2)	3.2	(4.9)	ACE	A	青灰	20	SK-18 No.4
4	土師器 甕	(25.8)	7.8		BCE	B	褐	5	SK-22
5	土師器 甕	23.5	(31.4)	10.0	CDEGH	C	橙褐	60	SK-22
6	坏	(13.0)	4.0	(7.9)	BCE	B	灰	25	SK-24
7	甕	(23.0)	5.5		ABCDE	B	褐灰	10	SK-24
8	甕	(14.8)	1.4		BCDE	C	灰白	5	SK-24
9	甕	(14.8)	1.4		ACE	C	灰白	5	SK-24
10	表		7.8		ACE	A	青灰	15	SK-24 No.2
11	甕		8.6		ABCE	A	暗灰	25	SE-1
12	蓋	(18.4)	1.8		ACE	B	褐灰	10	SE-1
13	高台付皿		1.6		BCE	A	灰	20	SE-1
14	長頸壺		8.9		CE	A	灰白	90	SE-1
15	高坏	3.6			ABC	A	暗灰	80	SE-2
16	坏		0.9	(8.0)	CDE	B	褐	80	SE-2
17	高台付坏	15.0	6.7	7.6	ABE	C	橙褐	80	粘土探堀坑 No.1
18	坏		1.9	(9.0)	ACE	B	灰	35	粘土探堀坑 No.6
19	甕	21.4	6.2	16.3	ABE	B	茶褐	80	粘土探堀坑 67-22G No.1
20	坏		2.2	(7.4)	BCE	A	暗灰	45	SD-5
21	坏		1.2	(9.4)	ABCDE	A	灰	55	SD-5 66-22G
22	坏		2.4	(7.6)	BC	A	黒褐	25	SD-5
23	坏		1.0	(7.4)	ACE	B	灰	45	SD-5
24	高台付坏		2.0	(7.6)	ACE	A	暗灰	45	SD-5
25	碗	(13.4)	5.0		BC	B	灰	10	SD-5
26	鉢	(26.8)	5.0		ABCE	B	灰	10	SD-5
27	羽釜		5.0		ACE	B	灰褐	15	SD-5
28	釜		4.5		ABCE	C	暗灰	10	SD-5
29	磁石	幅3.2 長さ6.0 重さ78.42g							SD-5
30	碗型 罎	長さ3.7 幅3.2 厚さ1.3 重さ20.78g							SD-5
31	坏		3.7	(6.8)	CD		灰褐	20	埋没谷
32	坏		2.0	(6.1)	ABC	B	黒灰	20	埋没谷
33	高台付坏		2.5	6.7	ABC	B	黒灰	30	埋没谷
34	高台付坏		1.9	6.5	ABCE	B	灰	30	埋没谷
35	高台付坏		3.4	6.3	ABCE	B	灰	30	埋没谷
36	鉢	(18.9)	11.8		ABCG	B	暗灰	30	埋没谷
37	甕		7.2	(19.1)	ABC	A	灰	5	埋没谷
38	土師器 甕		2.6	7.4	ABG	C	橙褐	30	埋没谷
39	甕				ABC	A	灰	1	埋没谷
40	甕				CDG	B	褐灰	1	埋没谷
41	高台付坏		1.7	7.8	ABC	A	暗灰	90	53-19G
42	甕	(18.6)	2.9		CE	A	青灰	10	66-23G
43	碗型 罎	長さ3.7 幅2.3 厚さ2.0 重さ22.85g							Pit.1 56-20G
44	坏	(11.7)	3.5	(6.5)	ACE	B	黒灰	20	一括
45	坏		1.5	6.2	ABCE	A	紫灰	80	一括
46	甕	(16.4)	1.8		ACE	A	青灰	25	一括
47	高台付坏		3.4	7.4	ABCDE	B	灰白	65	一括
48	高台付坏		1.7	6.2	ACE	A	暗灰	90	一括

第106图 D区出土瓦(1)



第107図 D区出土瓦(2)

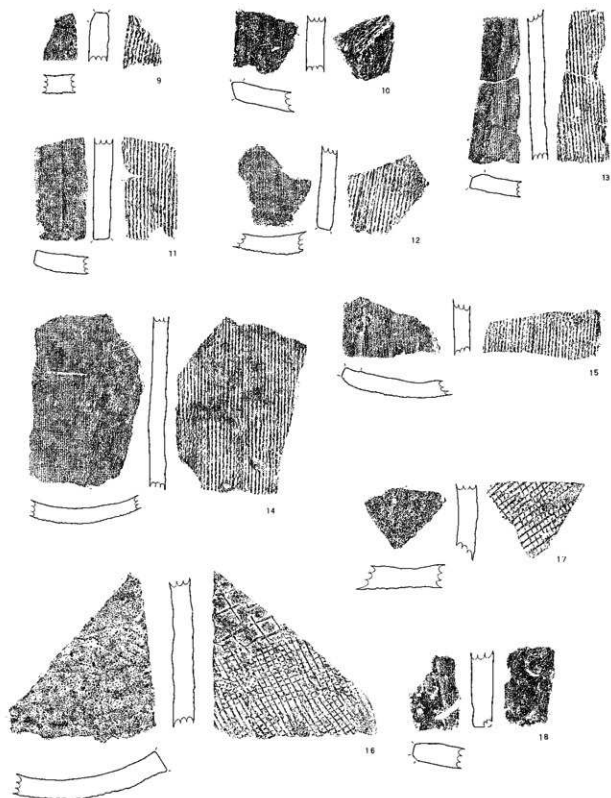


表14 D区出土瓦観察表

番号	種類	長さ	幅	厚さ	胎土	焼成	色調	番号まで	番号より	凸面	備考
1	平瓦	24.3	17.0	2.5	ABCEG	2	灰	18	17	縄目6	埋没谷
2	平瓦	14.3	8.3	2.0	ABEG	3	褐	12	18	縄目5	D区一括
3	平瓦	15.2	14.2	2.1	ABCE	2	淡灰	18	20	縄目6	埋没谷
4	平瓦	9.6	9.0	2.0	ABEG	3	褐	18	21	縄目6	65-23G
5	平瓦	12.5	17.7	2.4	ABCG	2	暗灰	12	15	縄目5	D区一括
6	平瓦	7.3	7.6	2.5	ABCEG	2	灰	21	18	縄目5	72-23G
7	平瓦	7.7	11.8	2.1	ABCG	2	暗灰	21	24	縄目5	埋没谷
8	平瓦	11.2	9.9	2.0	ABCE	2	灰	21	18	縄目5	SE-02
9	平瓦	5.1	3.7	2.1	ABCG	2	暗灰	21	15	縄目5	埋没谷
10	平瓦	6.1	5.8	1.9	ABCG	2	暗灰	21	15	縄目6	埋没谷
11	平瓦	10.8	6.2	2.0	ABEG	3	褐	15	15	縄目6	SK-24
12	平瓦	9.1	7.2	2.0	ABEG	3	褐	12	15	縄目5	SK-24
13	平瓦	16.2	5.5	1.6	ABEG	3	褐	18	15	縄目5	SK-24
14	平瓦	18.6	12.6	1.8	ABEG	3	褐	19	21	縄目5	SK-24
15	平瓦	5.0	11.9	1.8	ABCG	2	暗灰	15	12	縄目5	SD-5
16	平瓦	17.5	17.3	2.2	ABCEG	1	灰			3 格子の長さ1.7, 2.9	72-23G
17	平瓦	8.0	9.9	2.3	ABCEG	1	灰			3 格子の長さ2.0, 2.0	D区一括
18	平瓦	8.5	5.4	2.3	ABE	3	褐	27	21		SD-5一括

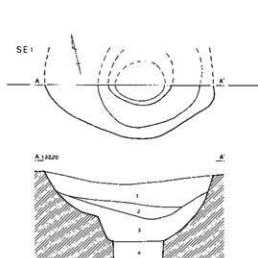
3. 中・近世の遺構

(1) 井戸

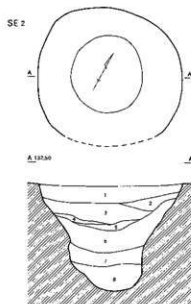
第1号井戸 (第108図)

55-20グリッドに位置する。北側約2/3が調査区外であるため、全体の調査はできていない。須恵器及び
第108図 井戸

瓦が出土しているが、遺構の帰属は中世以降と思われる。調査は底面まで達していないが、深さ1mの部分で窄まり、下は径約0.8mとなっている。



- 1 暗黒褐色 ローム粒子を少量含む
- 2 茶褐色 焼土粒子、炭化物を少量含む
- 3 暗黄褐色 ローム粒子、粘土ブロックを少量含む
- 4 黄褐色 ローム粒子、粘土ブロックを多く含む



- 1 黒色 炭化物、焼土粒子、ローム粒子を微量含む
- 2 赤褐色 焼土粒子、炭化物多、ローム粒子少量を含む
- 3 暗褐色 炭化物多、焼土粒子、ローム粒子を少量含む
- 4 灰色 ローム粒子を少量含む
- 5 暗褐色 焼土粒子、ローム粒子を少量含む
- 6 黒褐色 焼土粒子若干、ローム粒子、炭化物を少量含む
- 7 暗茶色 鉄分を含んだ粘土層
- 8 暗茶色 鉄分を多く含んだ粘土ブロックを多く含む

0 2 m

第2号井戸 (第108図)

75・23グリッドに位置する。平面形は径約2.4mの円形で、深さは約1.7mである。上層に炭化物、焼土粒子を含み、下層は鉄分を含んだ粘土ブロックが多くみられる。

(2) 柵列

第3号柵列 (第109図)

54・55-20グリッドに位置する。ピットの間隔は概ね2.0mで、全長は8.3mを測る。深さは確認面から

0.25～0.35mである。主軸はN-81°-Wを指している。

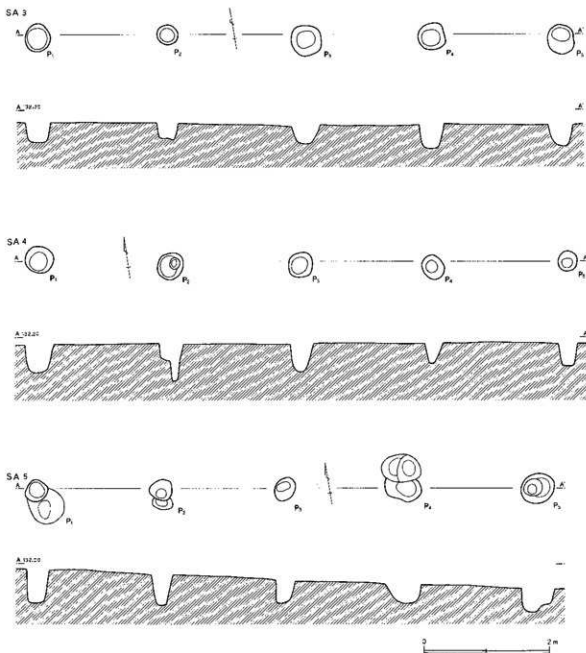
第4号柵列 (第109図)

55～57-20グリッドに位置する。ピットの間隔は2～2.1mで、全長は8.4mを測る。深さは確認面から0.3～0.45mである。主軸はN-82°-Wを指している。

第5号柵列 (第109図)

61・62-21グリッドに位置する。ピットの間隔は2.0m前後で、全長は8.0mを測る。深さは確認面から0.3～0.5mである。主軸はN-80°-Wを指している。

第109図 第3・4・5号柵列



第110図 出土石器

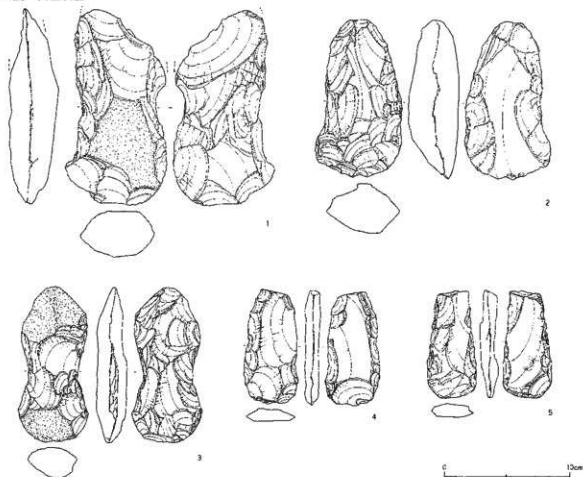


表15 石器一覧

番号	出土地点	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	備考
1	64-20-15G	打製石斧	15.4	8.1	4.0	517.91	砂岩	
2		打製石斧	12.4	6.9	4.0	362.37	ホルンフェルス	
3		打製石斧	12.2	5.6	2.5	202.72	ホルンフェルス	
4		打製石斧	9.0	4.4	1.2	66.61	ホルンフェルス	
5		打製石斧	8.4	3.9	1.4	63.76	砂岩	

4. その他の時期の遺物

石器（第110図）

1 打製石斧 上半部が欠損する。外形は基部の挟り（はさみ）は浅く方形に近い。刃部は表裏方向からの刺激によって厚手に仕上げられ、平面形は円刃である。基部の横断面は厚くレンズ状を呈している。

2 打製石斧 外形は基端部が丸く整えられ、最大幅が刃部付近にくる、撥形に近い形状をしている。刃部は裏面に分割面の平坦面を残し、調整加工が裏面→正面方向に厚手に施されている。平面形は円刃である。基部中央部の横断面は厚手の菱形を呈している。

3 打製石斧 基部に挟りが施される。いわゆる分銅

形である。刃部及び基端部の表面に原石面を残し、調整加工は両側縁から平坦刺激が深くまで施されている。刃部は円刃である。

4 打製石斧 上記の打製石斧と比較すると小形薄手である。側縁は直線的で平行しており、いわゆる短冊形である。調整加工は周縁的に施され、刃部は不規則ながら直刃に近い。

5 打製石斧 4同様に小形薄手である。側縁は基端部に向かって狭まり、いわゆる撥形に近似する。調整加工は周縁的に施されている。刃部は整った円刃で、磨耗痕が刃縁の両面に観察できる。

VII 花園城跡

1. 遺跡の概要

(1) 地理的環境

花園城跡は、寄居駅の北西約2kmに位置している。地形的には上武山地の東縁部に相当し、眼前に流れる荒川を西に流れ、秋父山地、東に眼を向けると広大な櫛引台地が展開している。まさに、秋父の玄関口、交通や戦略上要衝の地に立地していることがわかる。周辺には北方2kmに招保城、南東2.5kmに鉢形城、北西0.5kmに花園御岳城、北西2kmに要害山城、2.3kmに円良田(虎ヶ岡)城、4.5kmに仲山城、西方5kmに天神山城など、荒川流域を中心に戦国期の山城が多数存在する。

花園城は最高部で標高201.9m、麓から頂部までの比高差は約80mである。城の南側から西麓を経て、北側まで、円良田湖に源をもつ林寺川の谷筋が深く入り込み、自然の要害を形成している。東側は丘陵が連続し、尾根伝いに進むと、城の北東に聳える鐘撞堂山(標高330.1m)に至る。花園城の山容を眺めると、北及び西斜面の傾斜が急で、南斜面のそれは比較的緩い。後に触れるように城構造を概観しても、南側に主要遺構を配しており、南側からの攻撃に対する防御を強く意識していたことが伺える。また、北西500mにある花園御岳城は、眼下に花園城を見渡せる位置にあり、戦略上からも花園城北辺の防御施設であったのであろう。

(2) 歴史的環境

『新編武蔵風土記稿』榛澤郡の項によれば、花園城跡は「新築の初めを尋るに、往古相模守小野時季が九代の孫、五郎政行始て此山の頂に当城を築き、猪俣を改て在名をもて藤田と号す、累世相続して三郎太夫行保・右衛門尉能國・左衛門尉能兼・太郎兵衛能行・(中略)三郎左衛門國行・左衛門太夫國村・右衛門佐康邦まで十五代在城す」と記され、武蔵七党の一つ猪俣党の五郎政行が築城し、康邦に至るまで15代、藤田氏の居城であったとの伝承が記されている。

また、同書では、「関東戦争の時、管領山上上杉氏に

属し、四家老の一に居しは、康邦父祖の時よりや、(中略)天文十五年四月北條左京太夫氏康、川越夜軍に同上杉に打勝しに及て、康邦時勢を考へ遂に北條氏に通ず、氏康藤田が東国の旧家なれば、多年人身を得し事を思ひ、其末子新太郎氏邦を養子として、親族の約を成んとす、康邦是に応じ抱の城岩田天神山及当城を氏邦に譲り、其身は長子弥八郎二男弥六郎二人を携て、郡中用土の城に退きぬ、氏康又氏邦が武名を慕ひ、右衛門佐の名を請て、四男新四郎に與へければ、康邦は新左衛門と改め、父子共に家号を用土と改む、夫より氏邦の持となりしが、天正十八年鉢形没落の時、当城もともにをちいれり」と記している。

花園城に居を構えた藤田氏が、戦国期には山上上杉氏の四家老の一人として重要な地位を占めるまでに成長していたこと、河越夜戦(1546年)において北條氏康軍に上杉軍が敗北し、関東における後北條の支配が強固になるに及んで、藤田康邦は北條氏康の三男氏邦を養子として迎え、居城天神山城、花園城を明渡したこと、自らは用土城に隠居し、用上新左衛門と改名したこと、また、北條氏邦の支配に入った花園城は、天正18年(1590)、豊臣秀吉の小田原攻めに伴う侵攻を受け、鉢形城と共に落城したと、藤田氏及び花園城の盛衰を伝えている。

花園城の築城年代に関しては、藤田氏の伝承にあるように平安末期に遡ることはできないであろうが、具体的な構築時期年代を知ることはできない。現在の遺構が何時整備されたのかも不明であるが、一説には十三代圓行、十四代國村頃完成したといわれている(中田正光「秋父路の古城址」)。また、十五代藤田康邦は山上上杉家の重臣として勢力を振るったが、天神山城を築き居城としたといわれ、花園城、鉢形城は持ち城として機能したようである。いづれにせよ、典型的な戦国期の山城であり、「藤田氏系城郭」の代表例として著名である。

北條氏邦が藤田康邦の養子となったのは、永禄四年(1561)頃といわれている。氏邦は当初、藤田氏の旧城天神山城に入ったが、上州を視野に入れた戦略上の問題から鉢形城に本拠を移した。鉢形城の支城は「毛利家文書」により、倉賀野、箕輪、前橋、沼田、深谷の5城が存在したことが知られているが、それ以外にも北武蔵一帯にかなりの支城が存在した。荒川沿いに秩父谷に辿ると、鉢形城から、虎ヶ岡城、天神山城、高松城、「吉田の盾」、根古屋城まで、上州方面には用土城、猪俣城、雄ヶ岡城、金窪城まで一定間隔に支城が配置されていたという(小和田哲男「後北条氏の鉢形領と鉢形城」)。

ここには何故か花園城が組み入れられていないが、鉢形城に最も近い城でもあり、鉢形城を補完する重要な城として位置付けられていたことは疑いなかろう。

(3) 遺構の概要

今回の調査区は、花園城の西裾部を南北にかすめるように設定された。検出された遺構は溝跡2条に留まり、城跡に直接関連する遺構は残念ながら発見されなかった。遺物に関しては少林寺川河床から採集された近世後期の天目茶碗と思われるものがあるので、戦国期の遺物は検出されなかった。

ここでは、調査に関連して作成された花園城の航空測量図を基に、城跡の構造と特色を記しておく。

城郭は東西に延びる丘陵の尾根を利用して構築されているが、東北部は一部上取りによって削られている。標高201.9mの丘陵西端頂部に一の郭、その東に二の郭、三の郭、東の郭を順に配している。三の郭で標高約195m、一の郭との比高差約7mである。西側の小規模な堅堀から東の郭を囲する大堀切まで東西約300m、南北長は、本郭北側に付随する郭から、二の郭南面の二重堅堀に取り付く腰郭まで約110m、全体に東西に長い尾根に沿った縄張りである。

各郭を囲する堀切は、鉢巻状に郭を取り巻きながら北斜面に落ちている。城の東端は尾根を直線的に分断する深い堀切により周囲と区画されている。この堅堀の北斜面は削平され不明であるが、南側は山麓まで長

く延びている。

南斜面にはこの堅堀を含めて4本の大型堀が構えられている。本郭及び二の郭の南側にあるそれは、土手状の高まりで堀が縦に2分割され、いわゆる「二重堅堀」となっている。西側(本郭南面)の堅堀は斜面上半が二重に、東側(二の郭南面)のそれは、裾野まで二重堅堀となって延び、上端は1本となる。その先は屈曲して二の郭と三の郭を囲する堀切に連結する。

各郭下の南及び南西斜面は、斜面が緩やかであるため、重点的に防御施設を設けている。大規模な堅堀で寄せ手の動きを分断し、これに小規模な堅堀、横堀、大小の腰郭を複雑に配置するなど、防御のための工夫が随所に凝らされている。また、本郭をはじめ、いくつかの郭には、片岩系の板石を平積みにした石積みか塼所に築かれ、郭の崩落防止措置がとられている。但し、後世の開墾が及んでおり、石積みや腰郭状の平場の一部には改変が加わっているという。

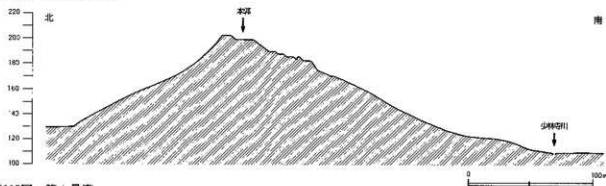
花園城本郭周囲を鉢巻状に取り巻く堀と、南面の「二重堅堀」は、極めて特徴的な城郭構造で、岩田天神山城、千馬山城でもみることができる。いずれも藤田氏との関わりが強い城跡で、「藤田氏系城郭」(中田正光前掲書)といわれている。



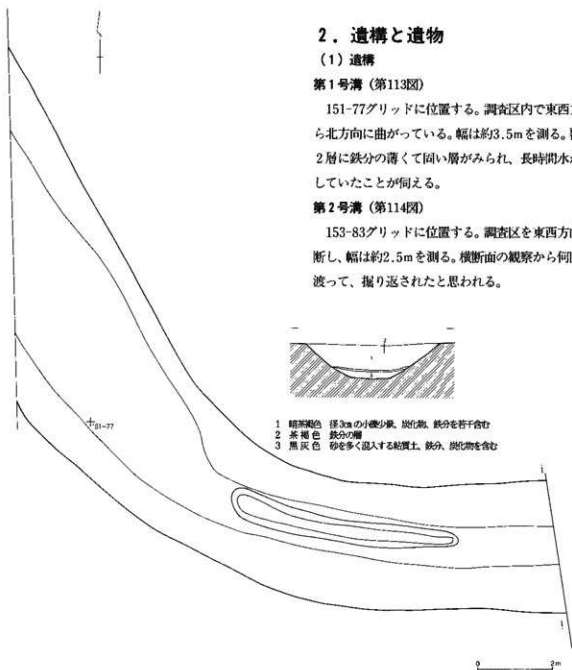
第111図 花園城跡全体図



第112図 花園城横断面



第113図 第1号溝



2. 遺構と遺物

(1) 遺構

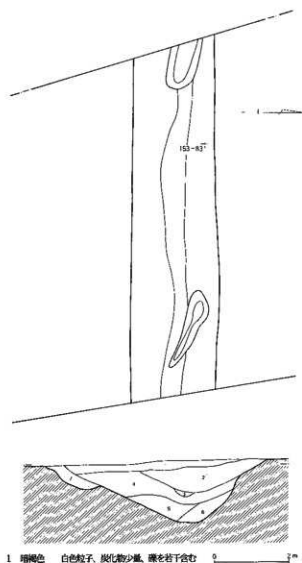
第1号溝 (第113図)

151-77グリッドに位置する。調査区内で東西方向から北方向に曲がっている。幅は約3.5mを測る。覆土第2層に鉄分の薄くて固い層がみられ、長時間水が存在していたことが伺える。

第2号溝 (第114図)

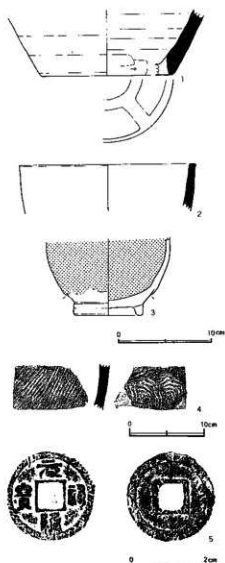
153-83グリッドに位置する。調査区を東西方向に横断し、幅は約2.5mを測る。横断面の観察から何回かに渡って、掘り返されたと思われる。

第114図 第2号溝



- 1 暗褐色 白色粒子、炭化物少量、礫を若干含む
 2 黒褐色 白色粒子、炭化物少量、礫を多く含む
 3 暗褐色 径1cmの小礫多数、炭化物を少量含む
 4 茶褐色 径5mmの片岩、石英を多数に含む
 5 青灰色 緑泥片岩の小礫を多数に含む
 6 暗褐色 径2cmの小礫を多く含む
 7 茶褐色 径5cmの礫を多数に含む

第115図 出土遺物



(2) 遺物

遺構からは遺物が出土しなかった。調査区の周辺から表採された遺物で、器形が想定できるものを図示した。

1は須恵器の瓶の底部破片である。2は須恵器の鉢の口縁の小破片で、口径は推定復元した。3は少林寺川

の川床からの表採された天目茶碗である。口縁部分を欠損する。外面は黒色の釉が厚く、高台近くにたまりのような膨らみがみられる。内面は、表面と同じ黒色の釉が全面に均一に施されている。帰属時期は近世で17世紀後半と思われる。4は須恵器製の胴部の小破片である。5は北宋の「元祐通宝」で初鑄年は1086年である。

表16 出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎上	焼成	色調	残存率	備考・出土位置
1	瓶			(14.2)	ABC	B	灰	20	表採
2	鉢	(19.0)			ABC	B	暗灰	5	表採
3	天目茶碗			5.5				80	表採
4	甕				BC	A	灰		表採

VII 箱石遺跡

1. 遺跡の概要

箱石遺跡は、今回報告する遺跡群の東南端に位置する。調査は秩父鉄道にK区とL区とに分けて実施した。ここで報告するのはL区のみ、K区の一部は未調査である。調査区は、ほぼ南北方向に設定され、その延長線は荒川に直交している。1998年度に国道144号線を跨いで南側の調査を実施した。その成果、古墳跡、住居跡等が検出されており、遺構が広がっていることが確認された。

検出された主な遺構は、6世紀後半の古墳1基と、平安時代の住居跡8件、土器焼成に関連すると思われる土壌(SX)が6基、土壌2基、中・近世の掘立柱建物跡1棟である。

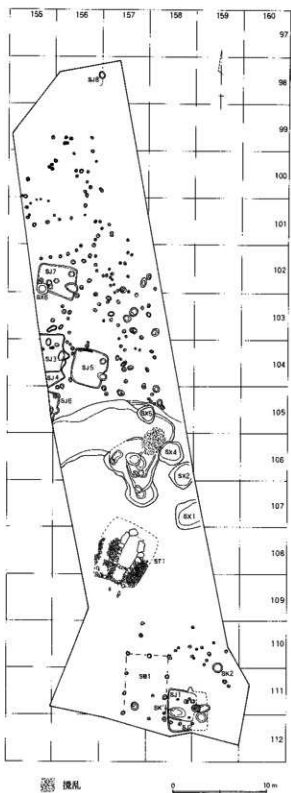
古墳は副張りをもつ横穴式石室で、円筒、朝顔形埴輪と人物、鞍、家などの形象埴輪が出土している。また、石室内から鎌、弓金具が検出されている。

平安時代の住居跡は、102～105南北グリッド列に5軒がまとまり、北側の98～106グリッドに1軒、158～111・112グリッドに2軒の重複がみられる。遺構は耕作等によって床面近くまで削平が進んでおり、遺存が良好なものはない。そのため、遺構に伴う遺物は少なく、縄文時期を決めかねる住居跡もあるが、概ね同時期であると考えられる。

土器焼成に関連すると思われる土壌(SX)は、古墳の周溝内に並ぶように5基検出され、1基だけ離れて第7号住居跡と重複している。土壌層土には焼土粒子、炭化物が含まれ、多量の焼き歪みした坏の破片が投棄されていた。今回の調査区では、土器焼成に関連する直接的な遺構は明確に出来なかったが、それに関連し、また廃棄の場として捉えられる。

中・近世の掘立柱建物跡は、調査区の南端に位置し、一部調査区外まで広がっている。

第116図 箱石遺跡全体図



2. 古墳時代の遺構と遺物

(1) 古墳跡

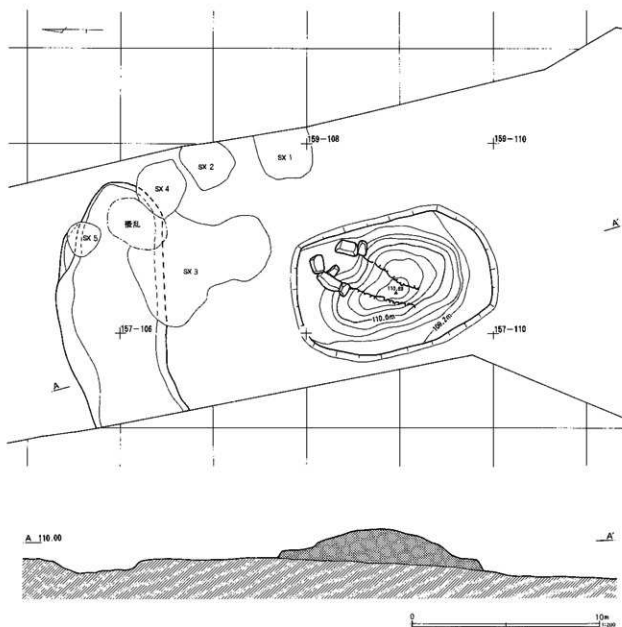
第1号墳

第1号墳は今回の調査によって新たに所在の確認されたもので、従前は僅かな高まりを残す塚と考えられていた。周囲は畑地として利用されていたため墳丘の裾部を中心に大きく削平をうけ、既に横穴式石室の一部が露出し、天井石や奥壁は抜き取られていた。

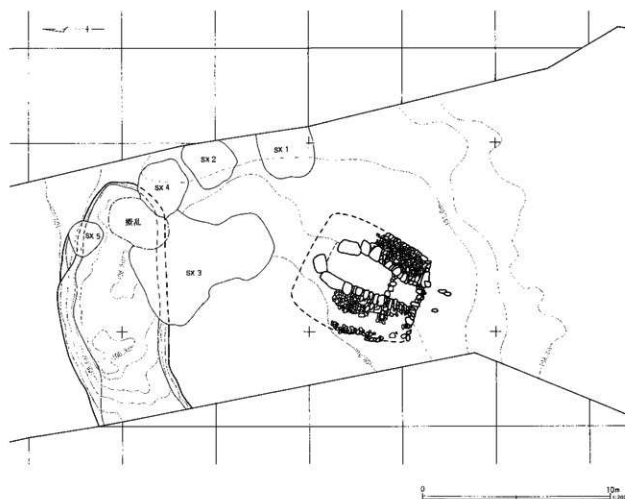
周辺における古墳の所在は、今まで全く知られてい

なかったが、平成10年度に当事業団が実施した国道40号線南側の調査において3基の古墳跡が検出され、現状では河岸段丘面上の広い範囲に古墳跡の存在が予想されるようになった。さらに、調査地点の西方約600mの秩父往還道沿いに『祖廟古墳迹』と刻まれた石碑が残されており、何も記録を残さずに消滅してしまった古墳が存在していたことを物語っている。

第117図 第1号墳全体図(1)



第118図 第1号墳全体図(2)



(a) 墳丘及び外部施設

位置 L区の中央からやや南側に寄った156～159-105～110グリッドを中心に位置する。地形的には荒川左岸に発達した河岸段丘の平坦面に立地し、南に向かって緩やかに傾斜する標高109m付近に所在している。周溝の北側から東側にかけては土器生産関連遺構と想定されるSX1～5が連続的に重複しており、墳丘部分を大きく破壊していた。

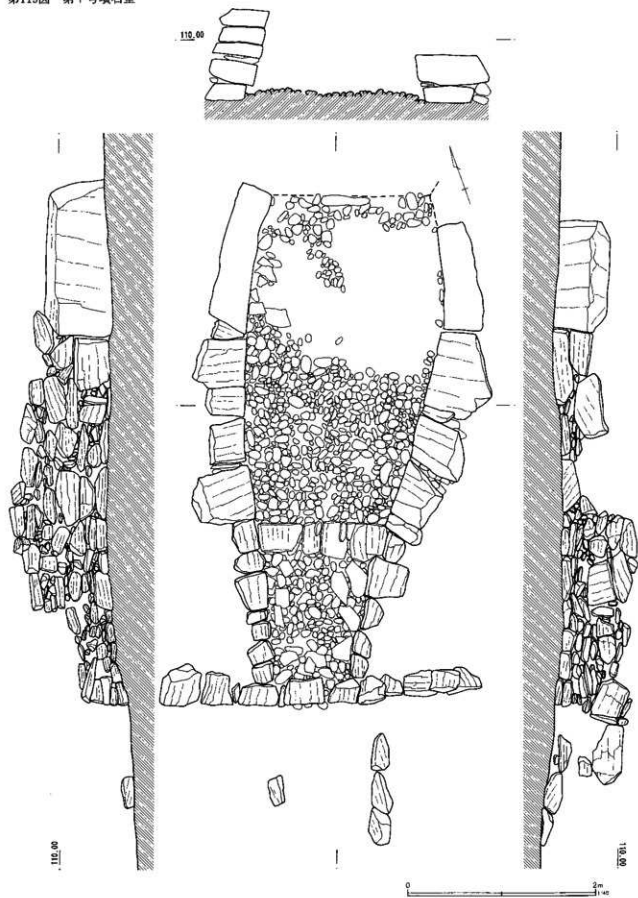
墳丘 調査開始時は南北長8.2m、東西長5.6m、高さ1.4mの楕円形を呈する墳丘を残存していたにすぎなかった。墳丘の築成法に関しては、墳丘の遺存状況が良好でないことから判然としなが、土層断面の観察によれば埴輪を多量に含む暗褐色土を主体に積み上げている状況が判明した。そのため葺石や墳丘テラス面等を確認することはできなかったが、周溝覆土内へ

の礫の流入がほとんど認められなかったことから、当初から葺石はなかったものと推測される。

周溝 調査区の制約もあり周溝は北側部分だけが明瞭に検出され、北東側で陸橋状に周溝が一部途切れていることが確認された。一方、石室の開口する南側から東側にかけては明確な周溝は確認されず、弧状に巡る等高線の落ち込みが認められたにすぎない。このような状況から本来周溝を均一に巡らしていなかった可能性も十分考えられる。

周溝の規模は、確認面において上幅4.7～5.6m、深さ0.6～0.7mを測る。断面形は底面の幅広い逆台形を呈し、底面からの立ち上がりは墳丘側が急傾斜で、外側は比較的緩やかである。底面は概ね平坦で、陸橋部側に向かって掘り込みが徐々に深くなり、最深部で標高108.3mを測る。

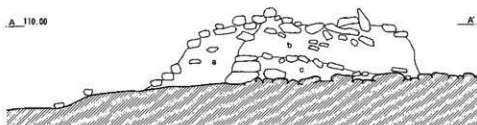
第119図 第1号墳石室



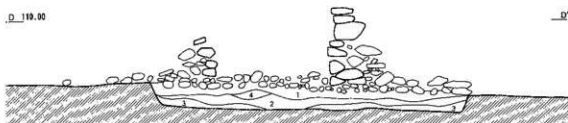
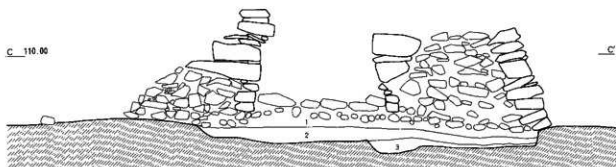
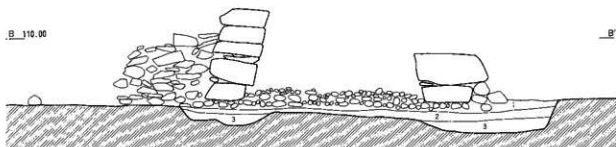
第120図 第I号墳石室閉塞状況



第121図 第I号墳石室断面図

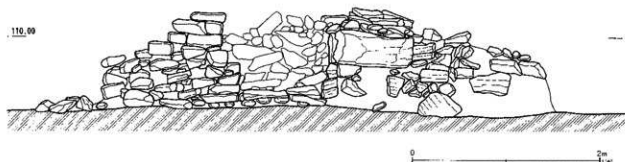


- a 黒色 小礫を多く含む
b 暗褐色 小礫を多く含む
c 灰褐色 小礫、砂粒を多く含む



- 1 黒色 焼土粒子、砂粒、炭化物を少量含む
2 暗灰褐色 砂粒を多く含む
3 暗褐色 黒色粒子を少量含む
4 灰褐色 小礫、砂粒を多く含む

0 2m 1m



墳形・墳丘規模 周溝が部分的にしか検出されなかったため墳形や墳丘規模についての確証は得られなかったが、墳丘部における石室の構築位置や開口部の状況などから円墳の可能性が高いものと考えられる。

同様に円墳と仮定した場合の墳丘規模は、墳丘の中心点を石室の奥壁付近に設定すると、周溝の墳丘側上端との距離が約9mを測ることから墳丘径約18m、周溝を含めた規模は約25mに復元され、比較的規模の大きな古墳であったことが知られる。

埴輪 墳丘の大半が削平されていたため、埴輪は原位置をとどめるものが全くなく、配列状況を復元することは困難である。出土した埴輪は普通円筒埴輪、朝顔形円筒埴輪、形象埴輪等が認められ、コンテナ約4箱分出土した。出土状況は、残存した墳丘部の表土層や石室内部への流入土中から出土しているほか、大半が周溝覆土へ流れ込んだ状態で検出された。また、SX1～3の覆土中に混入した埴輪も一定量含まれていた。

(b) 主体部

主体部は南々西方向に開口した胴張り無袖型横穴式石室である。調査前、既に天井石と奥壁を消失しており、玄室の壁体の一部が露出していた。このような状況から副葬品等の出土はほとんど期待できなかったが、調査の進捗に伴い石室入口部と閉塞施設が比較的良好な状態で遺存していることが確認され、石室の構造的特徴について多くの知見を得ることができた。

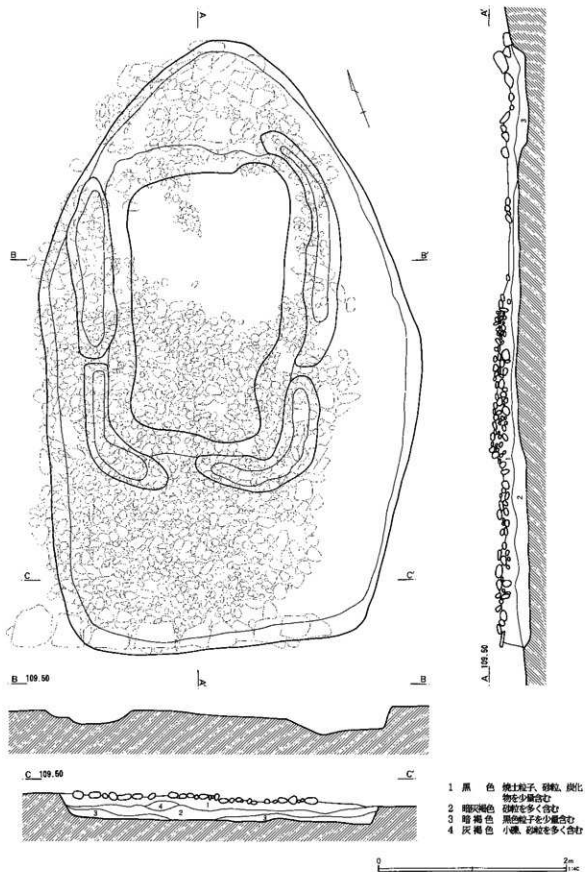
平面形態・規模 主体部は玄室と羨道の境の壁体部に

明瞭な袖部をもたない無袖型の横穴式石室で、玄室の側壁には緩やかな胴張りか認められた。石室は天井石と奥壁が抜き取られ、玄室及び羨道の側壁下部を残存しているだけであったが、羨門及び閉塞部は比較的良好に遺存していた。壁体部分は人頭大の結晶片岩の割石を乱石積みして、隙間に円礫や拳大の割石を充填していた。石室規模は全長約5.4m、玄室長約3.45m、玄室最大幅2.07m、玄門幅1.4m、羨道長1.95m、羨門幅0.83mをそれぞれ測る。石室の主軸方位はN-20°-Eである。

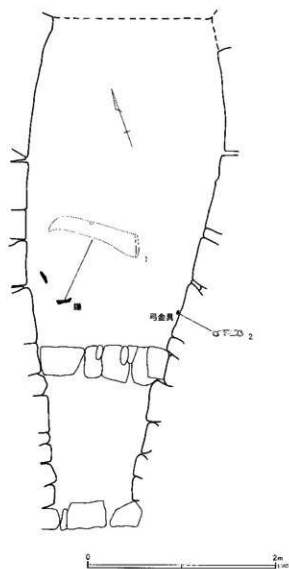
玄室 既に奥壁が抜き取られていたため玄室の平面形態は明確でないが、玄室中央よりやや奥寄りに最大幅をもつ胴張りプランで、側壁の円弧は緩やかである。壁体の特徴は、奥壁に接する位置に腰石として大型の片岩を据え、側壁の根石にも比較的大き目の石材を選択していた。側壁は中・小振りの石材を5段前後しか残存していないため側壁上部の様相は不明であるが、約12°前後持ち送りして積み上げていた。

羨道 羨道は羨門部に向かって徐々に幅を減じており、羨道奥には5個の割石を1列に並べた櫓石が据えられていた。側壁の残りはあまり良好でないが、東側壁側では割石が6～7段ほど遺存しており、ほぼ垂直に積み上げられていた。羨門部は裏込めに移行するように直線的に割石を配列していた。前庭部の様相については明確でないが、羨門部の延長上に東側に3個、西側に1個の割石が配列されていた。

第123図 第I号墳石室礎敷地形・掘り方



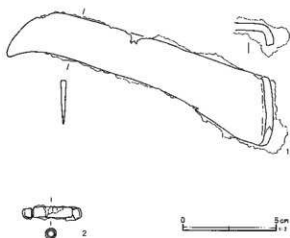
第124図 第1号墳石室遺物分布図



閉塞部 閉塞は長径20～30cmの割石を2～3重に積んで堅固に行なわれ、とりわけ羨門部は入念に閉塞していた。上面の閉塞石を除去したところ、小礫を多量に含む暗褐色土を間層に挟んで、さらにその下にも割石を用いた閉塞石が確認されたことから、追葬に伴って閉塞を繰り返した様子が窺われた。

裏込め 石室の背後には結晶片岩の中・小振りの割石を用いて裏込めが堅牢に施されていた。比較的残りの良かった南東隅部では10段前後に積み上げられた裏込め被覆が確認された。裏込めの範囲は南北約7.5m、東西約5.9mの馬蹄形と推定されるが、墳丘の築成方法との関連については明確にし得なかった。

第125図 第1号墳鉄製品



石室の下部構造 石室の下部には、裏込め部分を含む範囲に掘り方を掘削していた。規模は長さ6.5m、幅4mの舟形を呈しており、玄室の床面部分のみを矩形に掘り残して、壁石の設置部分に溝を巡らしていた。掘り方の内部は暗灰褐色土や暗褐色土を主体とする土砂で埋め戻して平坦に整地し、その上に拳大の円礫をほぼ一面に2～3重に敷き詰め、礫敷地形が施されていた。なお、石室の根石はこの上に直接置いて積み上げを開始している。

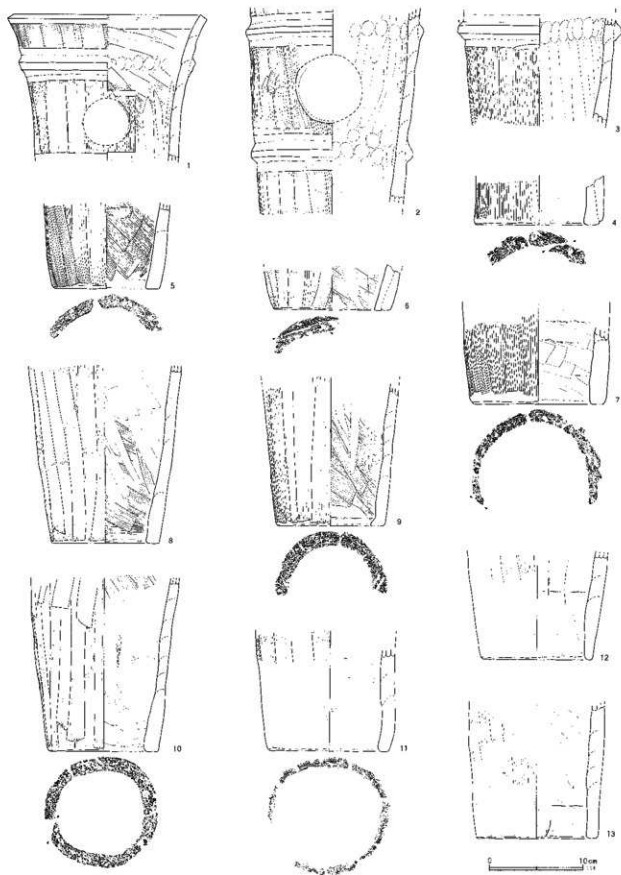
(c) 出土遺物

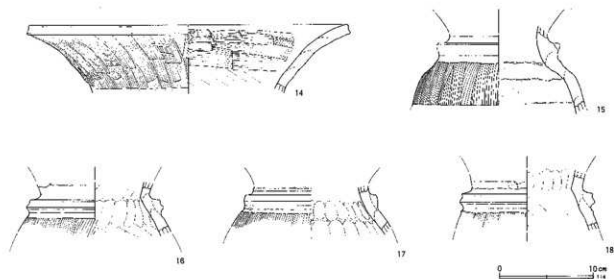
石室内は敷石面にまで擾乱がおよんでいた。玄門寄りの部分がかろうじて旧状をとどめており、その部分から鎌1点、弓金具1点が出土した(第125図)。

鎌 1の鎌は玄門寄りの左側壁際から刃部を北に向けた状態で敷石の上に置かれていた。錆化が著しいが、ほぼ完存している。全長14.7cm、刃部幅2.3cm×厚さ0.3cm、基部幅3.6cm×厚さ0.4cm、重量59.47gである。刃部はかなり研ぎ減りし、基部をほぼ直角に折り返している。柄の装着角度は約114°である。

弓金具 2の弓金具(両頭金具)は玄門寄りの右側壁際から単独で出土した。円筒形の筒金具に両頭棒を打ち込み、反対側を叩いて丸頭状にして筒金具からの離脱を防いでいる。筒金具の外表面には木質が付着し、木目は長軸と直交する。鉄製で、全長3.1cm、筒部長2.05cm、筒部径0.55cm、重さ2.62gである。

第126図 第1号墳円筒埴輪





(d) 埴輪

円筒埴輪 円筒埴輪は2条凸帯3段構成の普通円筒埴輪（以下「円筒埴輪」と呼称）と朝顔形円筒埴輪（以下「朝顔形埴輪」と呼称）が出土している（第126～129図）。主体を占める円筒埴輪は、胎土・焼成・色調・形態等から大きくA～E類に分類される。このうちA類はハケメの相違からA1類とA2類に細分される。

A1類（1・8・27・30・36・37・52）は、全体の器形の分かるものはないが、2条凸帯3段構成が基本形で最上段の幅が短かく（1）、最下段が長く伸びた（8）プロポーションと想定される。

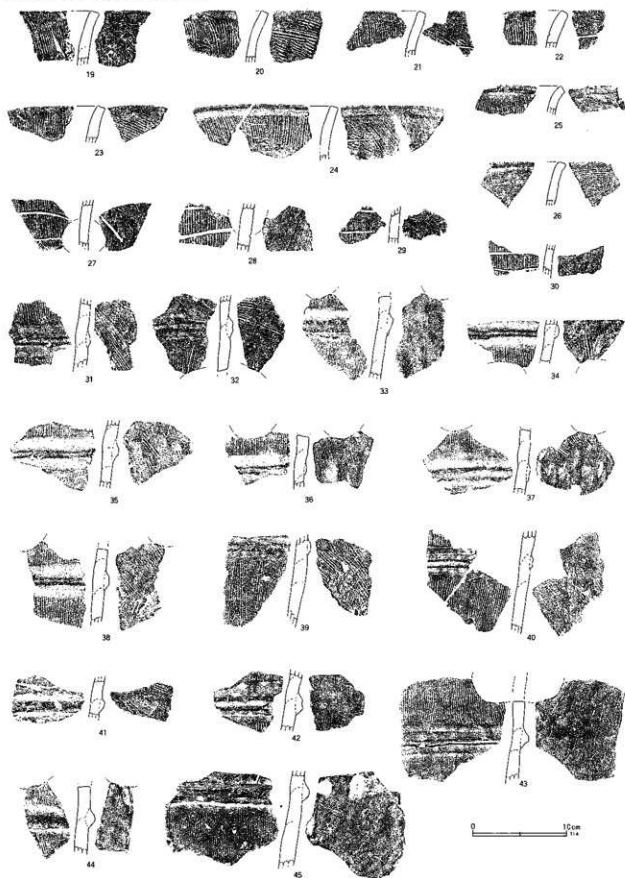
口縁部は緩やかに外反し、凸帯は断面低M字形のものと低台形の2種類が認められる。凸帯幅1.3～2.4 cm、凸帯高0.3～0.5 cmと幅が狭く、低平である。透孔は径5 cmのやや小さめの円孔で、右回りに穿孔している。外面調整は一次調整の縦ハケで、幅2 cm当たり11～13本のやや目の細かいハケ工具を用いている。内面調整は右傾斜ハケの後に、縦位の指ナデを丁寧に施す。底部調整を施すものではなく、最下段内面に横ハケあるいは右傾斜ハケを施している。胎土は角閃石粒子や赤色粒子の混入が多く、砂っぽい。焼成は全体に良好で、色調は橙褐色を基調とし、淡褐色のものもある。なお、27・30には中間段外面の透孔脇に2本線のヘラ記号が認められる。

A2類（6・9・19～24・28・29・31～35・38・39・51）は、基本的にA1類と同様の特徴を示しているが、器面調整に用いられたハケ工具がA1類に比べやや粗いことから区分した。全体の形状の分かるものはないが、最下段が長く伸びており（9）、A1類に類似したプロポーションと想定される。

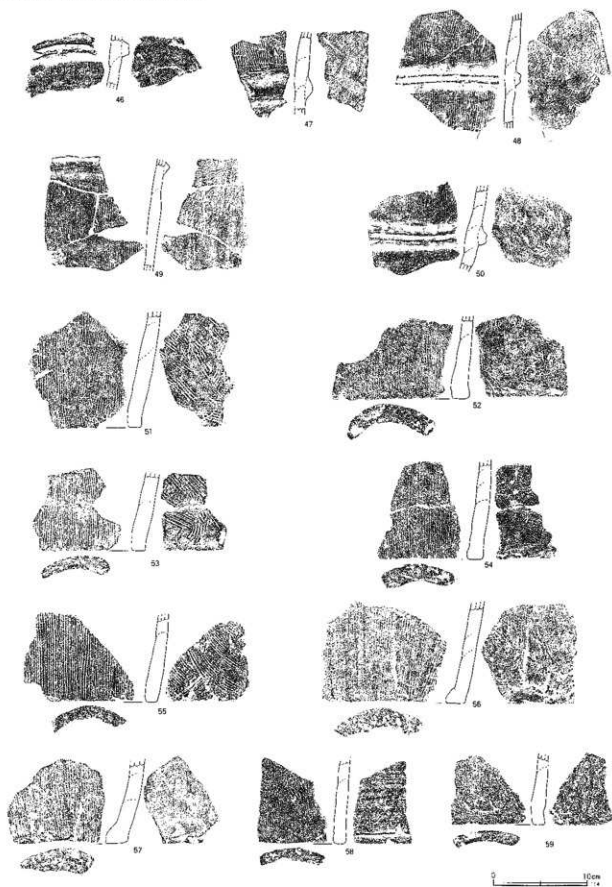
口縁部は緩やかに外反して開き、凸帯は断面低M字形のものと低台形の2種類が認められる。凸帯幅1.7～2.5 cm、凸帯高0.3～0.6 cmと幅が狭く、低平である。透孔は円孔と考えられ、右回り穿孔である。外面調整は一次調整の縦ハケで、幅2 cm当たり10本前後でA1類に比べやや粗い。内面調整は右傾斜ハケの後に、縦位の指ナデを丁寧に施す。底部調整を施したものではなく、基部の粘土帯の接合はR接合（6）で、内面にナデ（9）や右傾斜ハケを施す。胎土は角閃石粒子や赤色粒子の混入が多く、A1類に共通している。焼成は全体に良好で、色調は橙褐色を基調とし、赤褐色のものも一部含まれる。なお、21・22・24には口縁部内面に横線状のヘラ記号が一部残存している。また、28・29の中間段外面の透孔部分にA1類と共通する2本線のヘラ記号が認められる。

B類（5・10・40～42・53～57）は基本的な特徴はA類に共通しているが、色調が赤褐色を基調としているものを一括した。

第128図 第1号墳円筒埴輪拓影(1)



第129図 第1号墳円筒埴輪拓影(2)



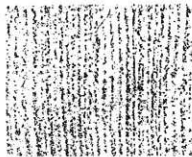
第130図 第1号埴田筒埴輪ハケメ拓影



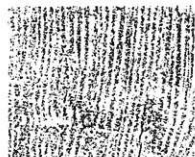
A1類 (1)



A2類 (9)



B類 (19)



C類 (2)



D類 (48)

(番号は実測図に対応する)



口縁部の形態は不明であるが、最下段が20cm前後まで長く伸びた器形と考えられる。凸帯は低M字形・M字形・低台形等のバリエーションが認められ、凸帯幅1.6~2.4cm、凸帯高0.3~0.7cmと幅が狭く、低平である。外面調整は一次調整の縦ハケで、幅2cm当たり10~12本を数える。内面調整は右斜斜ハケの後に縦位の指ナデを丁寧に施しており、A類に共通する。底部調整を施すものではなく、56・57のように自重で変形しているものが含まれ、基部の接合はR接合(10)である。胎土は角閃石粒子や赤色粒子の混入が多い。焼成は全体に良好で、色調は赤褐色を基調としている。なお、41には中間段外面の凸帯に接してヘラ記号の一部が認められる。

C類(2~4・7・43~45)は、全体の形状の判明するものはないが、後述する朝顔形埴輪と胎土・焼成・色調等の特徴が共通しているため、朝顔形埴輪の円筒部の破片も一部含んでいる。

口縁部の形態は不明であるが、凸帯は突出度の高い断面台形で、凸帯幅2.0~2.5cm、凸帯高0.7~0.8cmを測り、A・B類との識別は容易である。透孔は径7cm前後の大きめの円孔と推定され、左回り穿孔である

(2)。外面調整は一次調整の縦ハケで、幅2cm当たり10~12本を数えるやや目の細かいハケ工具を用いている。口縁部の破片が確認できないため明瞭でないが、内面調整は全体にナデを丁寧に施しているのが特徴である。底部調整を施すものではなく、基部の接合はL接合(4・7)で、A・B類とは異なる。胎土は片岩・雲母・白色針状物質・赤色粒子等を混入しており、A・B類に認められない混入物が含まれている。焼成は全体に柔らかい焼き上がりで、色調は橙褐色を基調とし、淡褐色に近いものもある。

D類(11~13・25・26・46~50)は、胎土・焼成・色調等の基本形特徴はC類に共通しているが、板押圧による底部調整が認められるものを一括した。C類同様、朝顔形埴輪の円筒部片を含むものと思われる。全体の器形は判然としないが、口縁部は緩やかに外反して開く(25・26)。凸帯は断面M字形のものが多く、三角形(49)に近いものもみられる。凸帯幅1.6~2.5cm、凸帯高0.5~0.8cmと突出度が大きい。透孔は全体の形状の分かるものはないが、円孔と推定される(48)。外面調整は一次調整の縦ハケで、幅2cm当たり10~12本を数える。内面調整はナデ調整を丁寧に施す。板押圧

による底部調整を施すものがある(11~13)。また、11は内面に一部へう削りを施す。胎土はC類に共通し、片岩・雲母・白色針状物質・赤色粒子等の混入が認められる。焼成は全体に柔らかい仕上がりで、色調は橙褐色から淡褐色までやや幅がある。なお、へう記号をもつ破片はない。

E類 (58・59) は、前述の分類に該当しないものを一括した。底部の破片のみで、胎土・焼成・色調等の特徴はC・D類に類似している。外面は第一次調整の縦ハケ、内面はナデを施し、底部調整はない。

朝顔形埴輪 口縁部(14)と肩部(15~18)の破片が数点認められている。前述したように、胎土・焼成・色調等の基本的な特徴はC・D類に共通しており、円筒部の破片では両者を明確に分離することは難しい。14は口縁部の破片で、大きく外反して開き、口径34.6cmに復元される。15は肩部の破片で、頸部に断面三角形の凸帯を巡らす。16~18は頸部に断面M字形の凸帯を巡らした肩部の破片で、凸帯の形態はD類に類似し、肩部の屈曲は弱い。

形象埴輪 形象埴輪は、人物・馬・鞍・盾・大刀・家・不明等の破片が出土している(第131~135図)。樹立位置を想定できるものはないが、武器・武具形埴輪が比較的多く出土している。また、胎土・焼成・色調等の特徴は円筒埴輪C・D類に近似しており、胎土に白色針状物質、片岩、雲母等が含まれている。

1は人物直輪の顔の部分である。左頬から顎にかけての破片で、粘土塊を貼付して顎を形作り、口はへうで切り込んでいる。2~4は男子の下げ豆目良である。粘土塊を棒状に成形したもので、2・3は作りか丁寧で、4は指頭によるナデ痕を残す。5は女子の烏田髷の破片である。粘土板成形で、撥形を呈するものと思われる。6~8は腕の破片で、いずれも中実成形である。7は胴部に接合するため基部をホソ状に作り出している。

9~14は人物埴輪の胴部や腰部に格子目状の沈線を描き、その上に連続刺突文を施した破片を一括した。このうち9・10・13・14は同一個体の可能性の高いも

ので、胴部及び腰部に格子目刺突文を施し、凸帯で腰帯を表現している。11は幅広の粘土帯の上に丸棒状の工具を格子目状に刺突した破片で、腰帯の表現と想定される。12は幅広の粘土帯に鋸歯状に刺突文を施した破片で、粘土粒を貼付している。15は半身像の首の襟にあたる部分で、円筒形の台部に断面三角形の裾を貼付している。外面に幅広の剝落痕が認められることから大刀を佩用していたものと思われる。

16・17は馬形埴輪の耳と考えられる破片である。先端を尖らせた粘土板を断面U字形に折り曲げ、内外面ともナデを施す。18は馬形埴輪の蹄泥から腹部にかけての破片である。蹄泥部分には粗いハケメを施しただけで、踵などの痕跡はみられない。内面はナデを丁寧に施している。19~21は鈴の破片である。馬形埴輪の胸繫や尻繫等に貼付されることの多いものである。19は中空に作られた半球形の鈴にへう先で鈴口を刻み、中心に丸棒を刺突している。一方、20・21は中空に作った球形の鈴で、へう先で鈴口を浅く刻み、基部を本体部分に貼付している。

22~33・35・40は、いわゆる奴隸形の鞍形埴輪と考えられる破片である。鑑表現部の破片数から少なくとも5個体以上が樹立されていたと想定される。

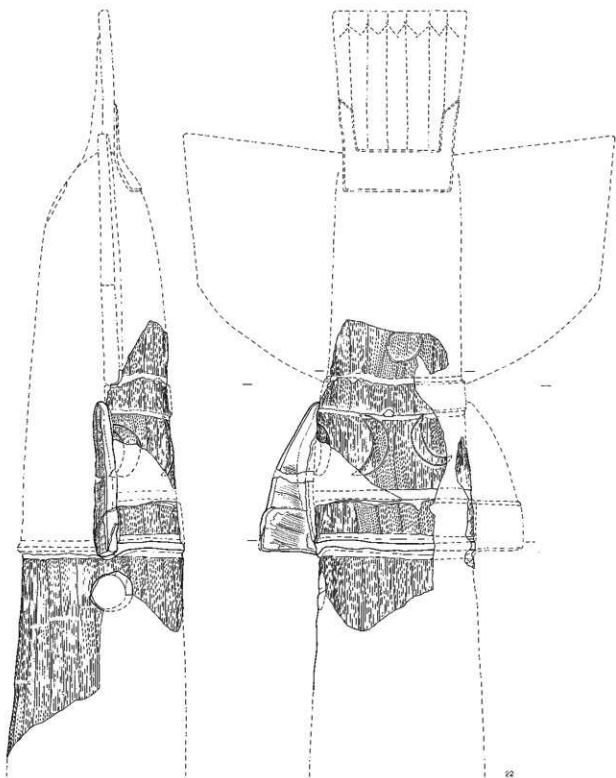
22は矢筒部下半から台部にかけての破片で、鑑表現部及び矢筒部上半、背板等を欠損する。台部から矢筒部にかけては粘土紐の巻き上げによって円筒形に成形され、台部の側面上端に円形の透孔が穿孔されている。矢筒部は裾広がり形態で、正面の中央と下端に横帯を巡らしていたようであるが剥離している。中央部の横帯は正面のみに貼付されている。同様に、裾部の横帯も正面下端に巡らし、背面は僅かに折り返しているだけである。中央の横帯の上端には線刻により円文が描かれていた。おそらく、鞍を背負うための紐の結び目を表したものと考えられる。また、矢筒下半部には三日月形の線刻が描かれており注目される。矢筒部の側面には背板を挿入するための縦位の穿孔が認められ、裾部を挿入して接合していた。

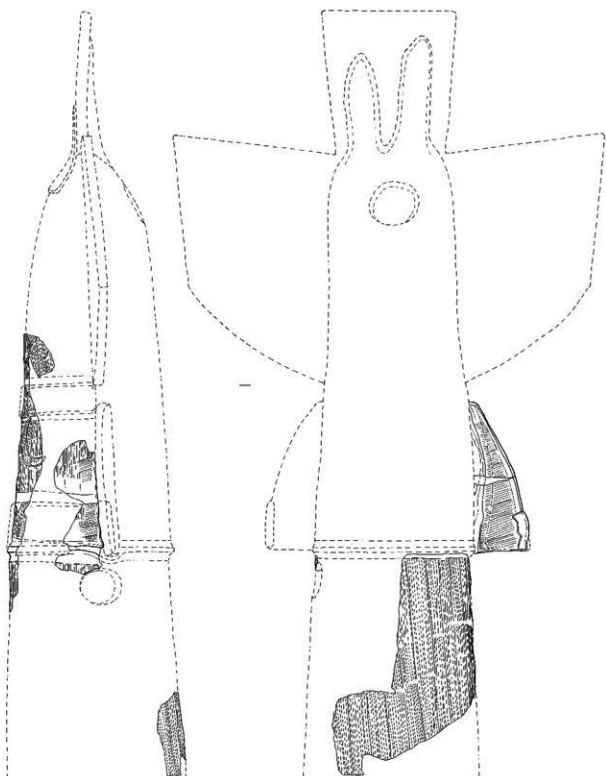
なお、矢筒部上半や背板の形状については類例をも

第131図 第1号墳形象埴輪(1)

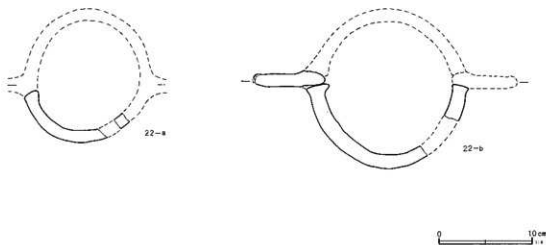


0 10 cm
1:1





0 10 cm
1/4



とに図上復元したが、鎌表現部は同一個体の可能性のある23を破線で図示している。また、巻末に提示してある写真図版では、22と23を組み合わせた状態で石膏復元したものを掲載した。

23～28は穀形埴輪の鎌表現部の破片である。鎌はすべて沈線による矢印形によって表現されている。23は逆台形状の粘土板の表面に6本の鎌を沈線で描き、側縁部に粘土紐を貼り付けて縁余部を表現している。また、背面には2本の粘土紐を貼り付けた補強帯の剝離痕が認められる。24～27は鎌表現部の先端付近の破片で、いずれも単沈線の矢印表現による鎌が描かれている。このうち、26・27の背面には補強帯の剝離痕が残されている。28は鎌表現部の破片で、先端部を欠損しているため詳細は不明であるが、背面に2本の補強帯の剝離痕が残されている。

29～33は穀形埴輪の背板及び裾部の破片と考えられる板状の破片である。29は背板の翼部の破片で、矢筈部との接合が下端のホヅ状突起によって行われた稀少例である。正面及び背面ともにハケメ調整を施す。30は裾部の破片で三角形を呈し、正面及び背面ともナデを施す。31は裾部の破片で22の矢筈部と同様の三日月形の線刻が描かれている。32は裾部の鰭と矢筈部の破片で、円筒形に仕上げた矢筈部を切開して、鰭を挿入した状況が良好に観察できる。33は裾部の鰭と想定

されるが、側縁が引く弧を描いており、他の鰭の形態とやや異なる。線刻が一部残されているが、詳細は不明である。

34は器種不明の器財埴輪の破片で、2重弧線が線刻されている。35は穀形埴輪の背板部分と想定される。矢筈部との剝離痕は29に類似し、線刻がみられる。

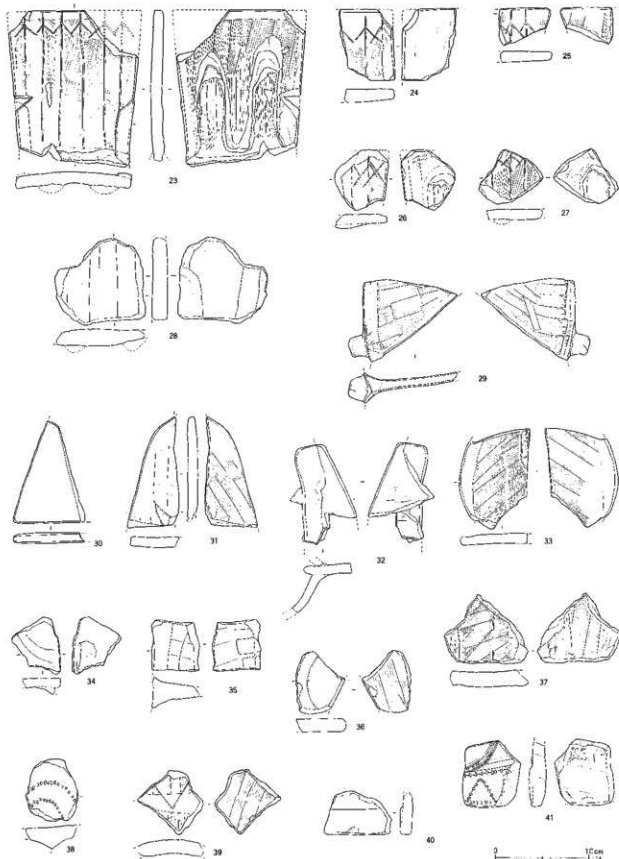
36・37は板状の破片で、器種不明の器財埴輪である。両者とも線刻が描かれている。36は側縁部が直線的に整えられ、弧線が線刻されている。37はハケメ調整を施し、2本の平行する線刻が認められる。

38は円筒部に貼付された板状の小破片で明確でないが、盾形埴輪の盾面の一部と想定される。丸棒状の工具を用いて曲線的な連続刺突文を施す。

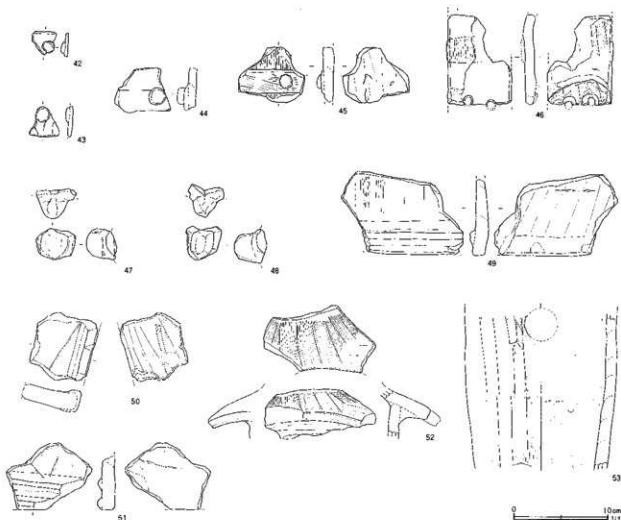
39は円筒形に近い破片である。縦ハケを施した後、横位のナデを加え、鋸歯状の線刻を施す。器種については不明であるが、穀形埴輪の矢筈部の可能性も考えられる。40は穀形埴輪の裾部と考えられる板状の破片で、下端に幅広の粘土帯を貼り付けている。41は器種不明の板状の破片である。下端に幅広の粘土帯を貼り付け、沈線と連続刺突文を組み合わせた鋸歯文状の装飾が施され、前述した人物埴輪としたものに表現が類似している。また、凸線上面にも連続刺突文を施しているが、その詳細は不明である。

42・43は薄い粘土板に円形の粘土粒を貼付した小片

第134図 第I号墳形象埴輪(4)



第135図 第I号墳形象埴輪(5)



である。器種については不明であるが、43には線刻が一部残る。44・45は円筒部の本体に凸帯を巡らし、その上に円形の粘土粒を貼り付けたもので、器種は不明である。45は表面にハケメを施し、凸帯を切り込んだ透孔が一部残存する。

46は僅かに湾曲した板状の破片である。図示した下端には丸棒状の工具を用いて小円孔が2個並んで表面から刺突されている。また、表面に凸帯状の刻線痕がみられ、裏面には円形の刻線痕が明瞭に観察できる。器種を特定することは難しいが、人刀形埴輪の柄頭に接する勾金部分の破片とも考えられる。47・48は人刀形埴輪の三輪玉の破片で、粘土塊成形である。

49～51は家形埴輪の破片である。49は壁体の基底部で表面下端に1条の凸帯を巡らしている。表面にはハ

ケメが一部残る。50は入母屋造の上屋根の破片である。破風の部分に該当し、粘土板の端部に粘土板を薄く巻き付け、外側を凸帯状に肥厚させている。表面に線刻を施し、内面にはハケメを残す。51は上屋根と下屋根を別々に作る組み合せ式の入母屋造の上屋根と考えられる破片である。上屋根の基底部に該当し、外面に鋸歯状に線刻が施され、2条の凸帯を巡らす。

52は断面形が人物埴輪の上着裾に類似しているが、側縁に緩いカーブを描いた切り込みが認められ、人物埴輪の裾部とは異なる。形態的には蓋の笠部に類似しているが、器種についての決め手は欠く。

53は形象埴輪の白部片である。透孔は円形で、右回り穿孔。外面調整は縦ハケ、内面調整は丁寧にナデを施す。

埴輪観察表・計測表 凡例

円筒埴輪

1. ここで扱う円筒埴輪とは普通円筒埴輪と朝顔形円筒埴輪の総称であり、形象埴輪とは図示方法及び観察表の記述方法が一部異なる。
2. 円筒埴輪の図示方法については原則として手描き実測に努め、残存率の低いものは拓写図とした。
3. 分類は事実記載部分で行った分類と対応する。
4. 胎土は肉眼で観察される範囲の混入物を記載した。A…石英、B…白色粒子、C…白色針状物質、D…長石、E…角閃石、F…赤色粒子、G…黒色粒子、H…雲母、I…片岩、J…砂粒を基本とし、それ以外の特徴のあるものはその都度備考欄に明記する。
5. 焼成はA…良好、B…普通、C…不良の3ランクに大きく分けた。
6. 色調は全体の大部分を占めている色調を記載した。A…暗赤褐色、B…赤褐色、C…橙褐色、D…淡褐色、E…乳白色、F…灰褐色、G…黒褐色の大きく7段階に分けた。
7. 残存率は5パーセント毎に記載したが、大まかなもので厳密なものではない。
8. 外面調整及び内面調整は器表の主體的な調整法を記す。ハケメは2cm当たりの本数で示し、若干の変位幅を含めている。また内面のハケメ調整のうち右傾斜ハケメは向かって右下がりのハケメ、左傾斜ハケメは同じく左下がりのハケメを指す。
9. 備考欄には出土遺構名、成形、その他の製作技法等の特記事項を記した。
10. ヘラ記号のある場合は内外面の位置とその存在を記した。

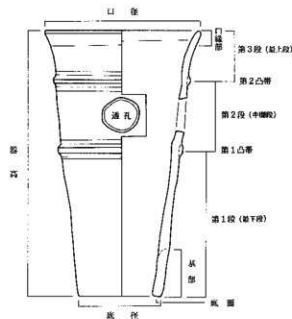
形象埴輪

1. 形象埴輪の種類は人物(男・女)、動物(馬)、器財(簀・盾・大刀)、家、その他(不明等)に区分され、掲載・記述の順序も概ねこれに従っている。
2. 胎土・焼成・色調・調整(ハケメ)については円筒埴輪と同じ基準である。

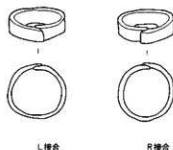
埴輪計測表

1. 埴輪各部の名称及び計測位置は第136図に示す通りである。
2. 口径及び底径については復元値の場合に()を付けた。また器高は残存高の場合に()を付けた。
3. 凸帯幅は下場部分を計測点とする。また凸帯高は器面からの突出度を計測した。
4. 朝顔形埴輪は頸部径を備考欄に記載した。

第136図 円筒埴輪凡例図



基部成形



(埴輪を例立させて見た様子)

表17 第1号填出土円筒観覧表(第126~129図)

番号	器種	胎上	焼成	色調	残存率	外面調整 木/2cm	内面調整 木/2cm	備考
1	円筒 A1類	ADEFJ	A	C	40%	縦ハケ	12 右傾斜ハケ・ナデ11	ST1 凸帯低M字形 透孔(右回り穿孔)
2	円筒 C類	AFHJ	B	D	40%	縦ハケ	12 ナデ	SX3 凸帯台形 透孔(左回り穿孔)
3	円筒 C類	AFHJ	B	D	40%	縦ハケ	12 ナデ	SX1 凸帯台形
4	円筒 C類	ACFHJ	B	D	40%	縦ハケ	11 ナデ	SX2 基部L接合
5	円筒 B類	ADEFJ	A	B	50%	縦ハケ	11 右傾斜ハケ 11	ST1 基部内面ナデ 角四石多量
6	円筒 A2類	ADEFJ	A	C	40%	縦ハケ	11 右傾斜ハケ・ナデ12	ST1 基部R接合
7	円筒 C類	ACFHI	B	D	55%	縦ハケ	10 ナデ	ST1 基部L接合
8	円筒 A1類	ADEFJ	A	C	40%	縦ハケ	13 右傾斜ハケ・ナデ14	ST1 角四石多量
9	円筒 A2類	ADEFJ	A	B	50%	縦ハケ	10 右傾斜ハケ・ナデ 9	ST1 基部内面ナデ 角四石多量
10	円筒 B類	AEFGJ	A	B	80%	縦ハケ	11 右傾斜ハケ・ナデ11	SX1・2 基部R接合 角四石多量
11	円筒 D類	CFHIJ	B	C	90%	縦ハケ	11 ナデ・ヘラケズリ	SX1 底部調整(板押圧)
12	円筒 D類	CFHIJ	C	D	40%	縦ハケ	10 ナデ	ST1 底部調整(板押圧)
13	円筒 D類	ACFJ	B	D	40%	縦ハケ	10 ナデ	ST1 底部調整(板押圧)
14	朝顔 C類	ACFHJ	B	D	30%	縦ハケ	11 横ハケ・ナデ 11	SX3 赤色粒多量
15	朝顔 C類	CEFHJ	B	C	20%	縦ハケ	10 ナデ	SX3 赤色粒多量 凸帯三角形
16	朝顔 D類	ACFHJ	A	D	20%	縦ハケ	10 ナデ	ST1 凸帯M字形
17	朝顔 D類	CFHIJ	B	D	20%	縦ハケ	10 ナデ	ST1 凸帯台形
18	朝顔 D類	ACFHJ	B	D	30%	縦ハケ	12 ナデ	ST1 凸帯M字形
19	円筒 A2類	ADEFJ	A	C		縦ハケ	10 右傾斜ハケ 10	ST1 器面風化
20	円筒 A2類	ADEFJ	A	C		縦ハケ	10 横ハケ・ナデ 8	ST1 角四石多量
21	円筒 A2類	ADEFJ	A	C		縦ハケ	10 右傾斜ハケ 8	ST1 内面へラ記号
22	円筒 A2類	ADEFJ	A	C		縦ハケ	11 ナデ	SX2 内面へラ記号
23	円筒 A2類	ADEFJ	A	C		縦ハケ	10 右傾斜ハケ 9	SX3 角四石多量
24	円筒 A2類	ADEFJ	A	C		縦ハケ	10 右傾斜ハケ 8	SX3 内面へラ記号
25	円筒 D類	ACFHI	B	D		縦ハケ	10 ナデ	SX1 器面風化
26	円筒 D類	ACFHI	B	D		縦ハケ	11 横ハケ 11	ST1 器面風化
27	円筒 A1類	ADEFJ	A	C		縦ハケ	12 右傾斜ハケ・ナデ12	ST1 外面へラ記号 透孔(右回り穿孔)
28	円筒 A2類	ADEFJ	A	C		縦ハケ	10 ナデ	ST1 外面へラ記号 透孔
29	円筒 A2類	ADEFJ	B	C		縦ハケ	10 ナデ	SX2 外面へラ記号
30	円筒 A1類	ADEFJ	A	C		縦ハケ	13 ナデ	ST1 外面へラ記号
31	円筒 A2類	ADEFJ	A	C		縦ハケ	11 右傾斜ハケ 11	SX3 凸帯低M字形
32	円筒 A2類	ADEFJ	A	C		縦ハケ	10 右傾斜ハケ・ナデ11	ST1 凸帯低M字形 透孔
33	円筒 A2類	ADEFJ	A	C		縦ハケ	11 ナデ	ST1 凸帯低M字形 透孔(右回り穿孔)
34	円筒 A2類	ADEFJ	A	C		縦ハケ	10 縦ハケ 8	SX3 凸帯低台形 透孔(右回り穿孔)
35	円筒 A2類	ADEFJ	A	C		縦ハケ	10 右傾斜ハケ・ナデ10	SX1 凸帯低台形 角四石多量
36	円筒 A1類	ADEFJ	A	C		縦ハケ	12 ナデ	ST1 凸帯低台形 透孔(右回り穿孔)
37	円筒 A1類	ADEFJ	A	C		縦ハケ	12 右傾斜ハケ・ナデ10	SX1 凸帯M字形 透孔(右回り穿孔)
38	円筒 A2類	ADEFJ	A	C		縦ハケ	10 右傾斜ハケ 10	SX3 凸帯低台形 透孔(右回り穿孔)
39	円筒 A2類	ADEFJ	A	B		縦ハケ	11 右傾斜ハケ 10	ST1 凸帯低台形 角四石多量
40	円筒 B類	ABEFJ	A	B		縦ハケ	12 右傾斜ハケ・ナデ12	SX1・2 凸帯低M字形
41	円筒 B類	ADFHI	B	B		横ハケ	10 ナデ	ST1 外面へラ記号 凸帯低台形
42	円筒 B類	ADEFJ	A	B		縦ハケ	11 縦ハケ 12	SX3 凸帯M字形 角四石多量
43	円筒 C類	CEFHJ	B	D		縦ハケ	11 ナデ	SX1 凸帯台形 透孔(左回り穿孔)
44	円筒 C類	ABFHJ	B	D		縦ハケ	11 ナデ	ST1 凸帯台形 透孔
45	円筒 C類	ACFHJ	A	C		縦ハケ	12 ナデ	ST1 凸帯台形
46	円筒 D類	ACFHI	A	D		縦ハケ	12 ナデ	ST1 凸帯M字形
47	円筒 D類	ACFHI	B	D		縦ハケ	11 右傾斜ハケ・ナデ11	ST1 凸帯台形
48	円筒 D類	ACFHI	A	C		縦ハケ	11 ナデ	SX3 凸帯M字形 透孔
49	円筒 D類	ACFHI	B	C		縦ハケ	11 ナデ	ST1 凸帯三角形
50	円筒 D類	ACFHI	A	C		縦ハケ	12 ナデ	ST1 凸帯M字形 片石・雲母多量
51	円筒 A2類	ADEFJ	A	C		縦ハケ	11 右傾斜ハケ・ナデ 9	SX3 角四石多量
52	円筒 A1類	ADEFJ	B	C		縦ハケ	13 ナデ	SX1 基部内面ナデ 器面風化
53	円筒 B類	ADEFJ	A	B		縦ハケ	12 右傾斜ハケ 10	ST1 基部内面ナデ 底面平坦
54	円筒 B類	ABEFJ	A	B		縦ハケ	11 右傾斜ハケ 11	ST1 角四石多量
55	円筒 B類	ADEFJ	A	B		縦ハケ	10 右傾斜ハケ 10	ST1 底面平坦
56	円筒 B類	AEFJ	A	B		縦ハケ	10 右傾斜ハケ 10	ST1 底面変形
57	円筒 B類	ADEFJ	A	B		縦ハケ	11 ナデ	ST1 底面変形
58	円筒 E類	AFHIJ	C	D		縦ハケ	10 ナデ	ST1 底面平坦 器面風化
59	円筒 E類	ADFHIJ	C	D		縦ハケ	10 ナデ	ST1 底面平坦 器面風化

表18 第1号墳出土円筒埴輪計測表 (第126～129図)

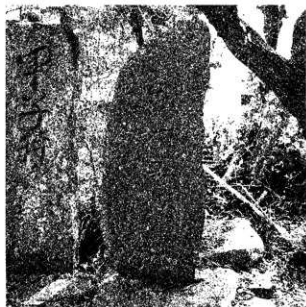
単位(cm)

番号	器種	口径	器高	底径	第1段幅	第2段幅	第3段幅	凸帯幅	凸帯高	備考
1	円筒 A1類	(21.2)	(15.6)				5.5	2.2	0.5	第2・3段部分
2	円筒 C類		(22.0)			13.3		2.3	0.8	第1・2段部分
3	円筒 C類		(11.5)					2.0	0.8	第2段部分
4	円筒 C類		(5.2)	(13.7)						第1段部分
5	円筒 B類		(9.1)	11.2						第1段部分
6	円筒 A2類		(4.8)	(12.4)						第1段部分
7	円筒 C類		(10.8)	14.4						第1段部分
8	円筒 A1類		(18.8)	(11.4)						第1段部分
9	円筒 A2類		(15.9)	11.6						第1段部分
10	円筒 B類		(18.6)	11.7						第1段部分
11	円筒 D類		(12.7)	12.8						第1段部分
12	円筒 D類		(11.4)	(12.0)						第1段部分
13	円筒 D類		(14.5)	(12.9)						第1段部分
14	朝顔 C類	(34.6)	(7.2)							口縁部
15	朝顔 C類		(9.4)							肩部 頸部径(10.6)
16	朝顔 D類		(5.8)					2.0	0.7	肩部 頸部径(11.5)
17	朝顔 D類		(5.2)					1.9	0.6	肩部 頸部径(12.4)
18	朝顔 D類		(6.5)					2.0	0.8	肩部 頸部径(11.8)
31	円筒 A2類							1.7	0.3	凸帯部
32	円筒 A2類							2.3	0.5	凸帯部
33	円筒 A2類							2.5	0.6	凸帯部
34	円筒 A2類							1.8	0.4	凸帯部
35	円筒 A2類							2.4	0.6	凸帯部
36	円筒 A1類							1.3	0.3	凸帯部
37	円筒 A1類							2.4	0.4	凸帯部
38	円筒 A2類							2.4	0.5	凸帯部
39	円筒 A2類							1.9	0.3	凸帯部
40	円筒 B類							1.7	0.3	凸帯部
41	円筒 B類							1.6	0.5	凸帯部
42	円筒 B類							2.4	0.7	凸帯部
43	円筒 C類							2.2	0.8	凸帯部
44	円筒 C類							2.5	0.7	凸帯部
45	円筒 C類							2.4	0.7	凸帯部
46	円筒 D類							1.8	0.8	凸帯部
47	円筒 D類							2.5	0.7	凸帯部
48	円筒 D類							1.7	0.6	凸帯部
49	円筒 D類							1.6	0.5	凸帯部
50	円筒 D類							2.1	0.7	凸帯部

表19 第1号墳出土形象埴輪観察表 (第131～135図)

番号	器種	胎上	焼成	色調	外面調整	本/2cm	内面調整	本/2cm	備考
1	人物 顔	ACFHI	A	D	ナデ		ナデ		ST1 器面風化
2	人物 美豆良	ACFHI	C	D	ナデ		ナデ		ST1 棒状
3	人物 美豆良	ACFHI	C	D	ナデ		ナデ		ST1 棒状
4	人物 美豆良	ACFHI	B	C	ナデ		ナデ		SX3 棒状
5	人物 髷	AFHIJ	B	D	ハケメ・ナデ	13	ハケメ・ナデ	13	ST1 髪形・島髷
6	人物 腕	ACFHI	B	D	ナデ		ナデ		ST1 中実作り 腕部彎曲
7	人物 腕	AFHIJ	B	D	ナデ		ナデ		ST1 中実作り 腕基部彎曲
8	人物 腕	AFHIJ	B	D	ナデ		ナデ		ST1 中実作り 器面一部剥落
9	人物 胴部	ACFHI	B	C	ナデ		ナデ		ST1 格子目刺突文
10	人物 胴部	ACFHI	B	C	ハケメ	12	ナデ		ST1 格子目刺突文
11	人物 腰帯	AFHIJ	A	D	ナデ		ナデ		ST1 粘上帯格子目刺突文
12	人物 腰帯	ACFHI	B	D	ナデ		ナデ		ST1 粘上帯彫刻刺突文・粘上粒貼付
13	人物 腰帯	ACFHI	B	C	ハケメ・ナデ		ナデ		ST1 格子目刺突文 腰帯剥落
14	人物 腰帯	ACFHI	B	C	ハケメ・ナデ		ナデ		ST1 格子目刺突文
15	人物 商部	ACFHI	B	C	ハケメ	15	ナデ		ST1 大刀剥落痕

番号	器 種	胎 土	焼成	色調	外面調整 本/2cm	内面調整 本/2cm	備 考
16	馬 耳	AFHIJ	B	D	ナデ	ナデ	ST1 粘土板成形
17	馬 耳	AFHIJ	B	C	ナデ	ナデ	ST1 粘土板成形
18	馬 埴泥	ACFHI	A	D	横ハケ	12 ナデ	ST1 表面黒色
19	鈴	ACFHI	A	C	ナデ	ナデ	ST1 中空作り 丸棒刺突痕
20	鈴	CFHIJ	B	D	ナデ	ナデ	ST1 中空作り 基部赤彩痕
21	鈴	CFHIJ	B	D	ナデ	ナデ	ST1 中空作り
22	釈 矢筒部	ACFHI	A	C	縦ハケ	12 ナデ	ST1 正面四文・三日月文線刻
23	釈 籬部	ACFHIJ	A	C	ハケメ	10 ハケメ	10 ST1 鎌車線矢印表現 6本
24	釈 籬部	AFHIJ	C	C	ハケメ	12 ナデ	ST1 鎌車線矢印表現
25	釈 籬部	ACFHIJ	B	C	ハケメ	ハケメ	ST1 鎌車線矢印表現 器面風化
26	釈 籬部	ACFHIJ	B	B	ハケメ	12 ハケメ	12 ST1 鎌車線矢印表現 背面補強帯剥落
27	釈 籬部	ACFHIJ	B	C	ハケメ	12 ハケメ	12 SX1 鎌車線矢印表現 背面補強帯剥落
28	釈 籬部	AFHIJ	B	D	ハケメ	ナデ	ST1 鎌車線表現 背面補強帯剥落
29	釈 筒部	ACFHI	A	D	ハケメ	12 ハケメ	12 SX1 ホゾ状突起
30	釈 筒部	ACFHIJ	C	C	ナデ	ナデ	ST1 器面風化
31	釈 筒部	AEFHI	C	C	ハケメ	12 ハケメ	12 SX2 弧線線刻
32	釈 筒部	AEFHI	B	C	ハケメ	ナデ	ST1 矢筒部へ懸挿人
33	釈 筒部	AEFHI	C	C	ハケメ	12 ハケメ	12 ST1 線刻
34	不明	AEFHI	B	C	ナデ	ナデ	ST1 弧線線刻 釈筒部か
35	釈 筒部	ACFHI	B	C	ハケメ	12 ハケメ	10 ST1 弧線線刻
36	不明	ACFHI	B	D	ナデ	ハケメ	12 SX3 弧線線刻 釈筒部か
37	不明	ACFHI	A	D	ハケメ	15 ハケメ	11 ST1 線刻 釈筒部か
38	盾	AFHIJ	B	D	ナデ	剥落	ST1 盾面弧状刺突文
39	不明	ACFHI	B	C	ハケメ・ナデ	12 ハケメ	12 ST1 盾面状線刻 釈筒部か
40	釈 筒部	ACFHI	B	D	ナデ	ナデ	ST1 下端粘土帯貼付
41	不明	ACFHI	B	C	ナデ	ハケメ・ナデ	12 ST1 盾面状刺突文
42	不明	AFHIJ	B	D	ナデ	剥落	ST1 粘土粒貼付
43	不明	AFHIJ	B	D	ナデ	剥落	ST1 粘土粒貼付 線刻
44	不明	ACFHIJ	B	D	ハケメ・ナデ	ナデ	ST1 粘土粒貼付
45	不明	ACFHIJ	A	D	ハケメ	12 ナデ	ST1 粘土粒貼付 透孔
46	不明	AFHIJ	A	C	ナデ	ハケメ・ナデ	12 ST1 勾金か 小円孔2個
47	大刀 三輪玉	ACFHIJ	B	C	ナデ	剥落	ST1 粘土塊成形
48	大刀 三輪玉	ACFHI	B	C	ナデ	剥落	ST1 粘土塊成形
49	家 胴体部	AFHIJ	B	C	ハケメ	10 ナデ	ST1 基底部凸帯1条 器面風化
50	家 上層部	ACFHI	A	D	ハケメ・ナデ	横ハケ	14 ST1 入母屋造破風 線刻
51	家 上層部	AFHIJ	C	C	ハケメ	11 ナデ	ST1 基底部凸帯2条 鋸歯状線刻
52	不明	ACFHI	A	C	縦ハケ	11 ナデ	ST1 側面に弧状の割り込み
53	不明 器台部	ACFHI	B	C	縦ハケ	13 ナデ	ST1 透孔(右回り穿孔)



「祖廟古墳遺」碑（寄居町木野所在）

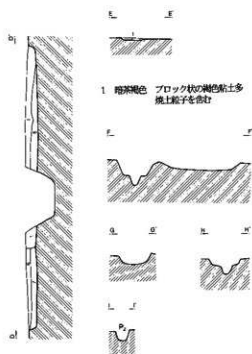
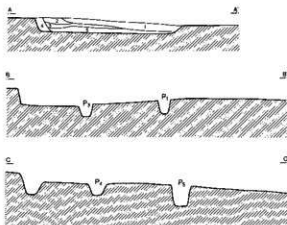
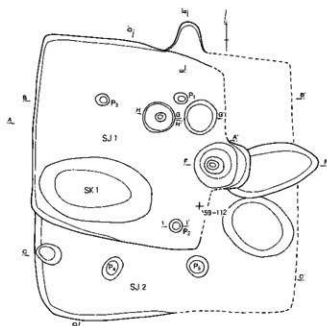
3. 平安時代の遺構と遺物

(1) 住居跡

第1・2号住居跡 (第137~138図)

158-111グリッドに位置する。第1号住居跡と第2号住居跡が重複している。土層断面の観察から、新旧関係は第2号住居跡→第1号住居跡の順である。遺構の遺存状態は悪く、東側は床面まで削平されているため、平面形態及び規模等は推定の域を出ない。

第1号住居跡は、約3mの正方形に近く、主軸はN-98°-Eを指す、東カマドである。柱穴は3本検出された、南西の柱穴は第1号土壌によって壊されているも第137図 第1・2号住居跡(L=108.50m)



- 1 黒褐色 少量の小石、焼土粒子、炭化物粒子を含む
- 2 青色 粘土
- 3 黄色 粘土
- 4 茶褐色 焼土粒子少、炭化物粒子を含む
- 5 暗赤色 焼土ブロック多、炭化物粒子少、小石を少量含む
- 6 茶褐色 焼土粒子微、炭化物粒子少、茶褐色土粒子を含む
- 7 黒色 小礫、焼土粒子微、炭化物粒子を含む

0 2m

第138図 第1・2号住居跡出土遺物

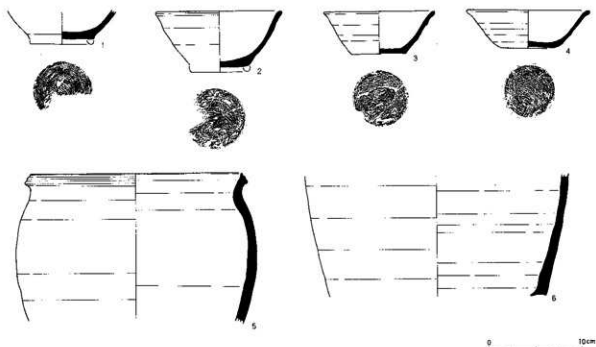


表20 第1・2号住居跡出土遺物観察表

番号	遺構	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	SJ-1	高台付杯			(6.2)	ABC	B	灰	40	158-111G
2	SJ-1	高台付杯	(13.5)		6.5	AC	B	灰	40	158-111G No.24・60・62・72
3	SJ-1	杯	(11.9)	4.5	5.9	ABC	B	灰	50	158-111G No.18・19・23・69・70
4	SJ-2	杯	(13.1)	4.0	5.5	ABF	B	灰	50	159-112G No.5
5	SJ-1	鉢	(22.8)			ABCE	A	灰	20	158-111G No.101
6	SJ-1	甕				ABCE	A	灰	10	158-111G No.99

若干不明な点が残る。いずれにせよ、SX等の関連を考慮すると、工房跡であっても不自然ではない。

第2号住居跡は、現存する辺は西側だけであるが、正方形に近いものと思われる。また一辺の長さは約

4.5mである。主軸はほぼ真北を指す。カマドは北側と、第1号住居跡のカマドの東側延長線上に浅い凹みがあり、カマドの可能性も高いが、新旧関係は不明である。柱穴は南側の2本が検出されたが、第1号住居跡と重

第139図 第3・4号住居跡・出土遺物(L=109.50m)

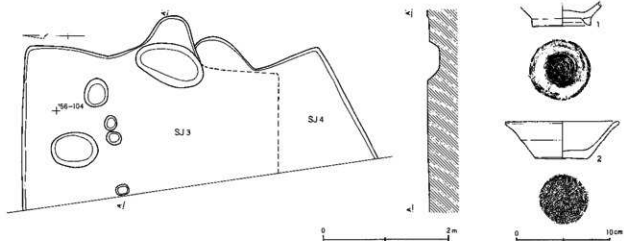


表21 第3・4号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	高台付杯			6.4	ABD	C	黒褐色	30	カマドNo.3
2	杯	(12.1)	3.9	5.0	ABDH	C(s)	褐色	70	カマドNo.40・44

複する北側部分は不明である。遺物は須恵器の高台付杯、杯、鉢、甕等と瓦の小片である。

第3・4号住居跡（第139図）

155-104グリッドに位置する。遺構の西側部分は調査区外となるため、未調査である。2軒が重複しているが、他の住居跡と同様に床面近くまで削平が進んでいるため、覆土の観察から新旧関係は捉えられなかった。カマドは、東側壁中央部の突出し部がそれになるものと思われる。

遺物は、カマド部分から酸化焰の高台付杯と杯が出土した。また、瓦の小破片が何点か出土している。

第5号住居跡（第140～141図）

156-104グリッド、第3・4号住居跡の東側に近接する。住居跡の遺存状態は、箱石遺跡では良好な方である。掘り込みは0.1m以上あり、覆土に焼土粒子、炭化物が少量含まれていた。平面形は一辺約3.5mの正方形に近く、主軸はN-104°-Eを指す。

カマドは東壁の中央部に位置し、覆土は上層が暗褐色又は黒褐色土で焼土粒子、炭化物を少量含み、下層は赤褐色土で焼土粒子を多量に含んでいる。

カマドに向かって左側に貯蔵穴があり、周溝と思われる溝が、北壁に沿って一部みられる。柱穴は確認されていない。

遺物は、カマドから土師器の甕が2個体。覆土中から酸化焰の杯と羽釜の破片、大形の土鍬が出土している。

表22 第5号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	杯	(11.6)	4.0	5.1	ABCE	C(s)	灰褐色	40	No.130
2	羽釜	(20.0)			ABCD	C(s)	褐色	10	No.15
3	土師器甕	21.4	15.3		ABFG	B	橙褐色	50	カマドNo.36・38・39・79
4	土師器甕	(22.8)	12.3		ABCFG	B	赤褐色	30	カマド
5	土鍬	径3.9 長さ8.1 重さ108.5g							No.117

第6号住居跡（第142～143図）

156-105グリッド、第3・4号住居跡の南側に近接する。全体の2/3以上が調査区外となるため、平面形及び規模は不詳である。カマドは東壁に位置し、覆土に焼土粒子、炭化物を含んでいる。また、手前に土塊状の浅い凹があり、覆土は黒褐色で炭化物粒子が含まれていることから、カマドの底部の可能性が高い。

カマドに向かって左側に、貯蔵穴と思われる長さ0.5mの土溝がある。

遺物はカマドから、酸化焰の高台付杯が3個体と土師器の甕が出土している。

第7号住居跡（第144図）

155-102グリッドに位置する。平面形は長軸が約4.0m、短軸が0.3m前後の長方形で、主軸はN-101°-Eを指す。深さは0.1m以下のため、覆土の観察はできなかった。南西コーナーにSX6が重複している。

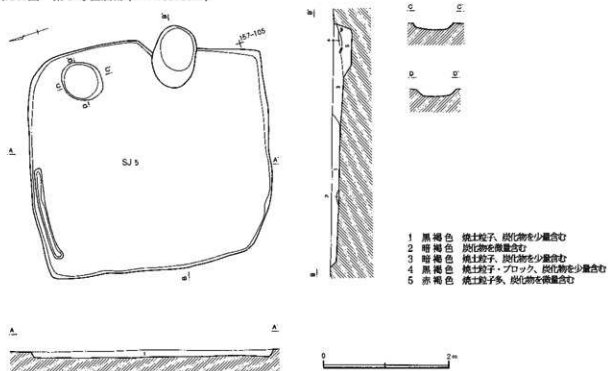
カマドは東壁のほぼ中央部に設置されている。掘り込みは0.2mと浅いが、覆土の上層に黒色土で炭化物粒子と焼土粒子を多く含み、下層に明黒褐色土で焼土粒子を微量と炭化物粒子を含んでいる。

カマドに向かって左側に、貯蔵穴と思われる径約0.7mの土溝がある。深さは床面から0.2mで、底面は平坦である。

住居内に幾つかのビットがみられるが、柱穴と思われるものは検出されなかった。

遺物は、カマドから須恵器の皿が1点、ほぼ完全な形で出土した。

第140図 第5号住居跡(L=109.50m)



第141図 第5号住居跡出土遺物

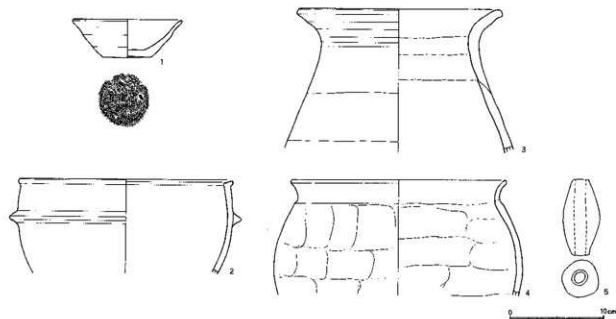


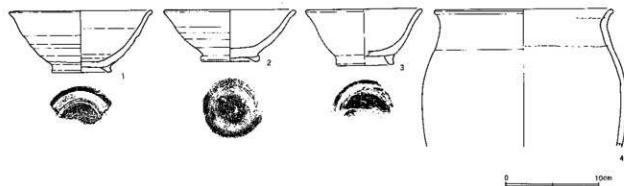
表23 第6号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	高台付杯	(15.6)	6.5	6.4	ABCDE	C(s)	褐色	30	カマド
2	高台付杯	(13.8)	5.5	6.0	DEF	C(s)	茶褐色	40	カマド
3	高台付杯	(12.6)	6.0	(5.8)	ADE	C(s)	茶褐色	30	カマドNo.1
4	土師器甕	(19.0)			ABCE	C	褐色	30	カマドNo.17・87

第142図 第6号住居跡(L=109.50m)



第143図 第6号住居跡出土遺物



第144図 第7号住居跡・出土遺物(L=109.50m)

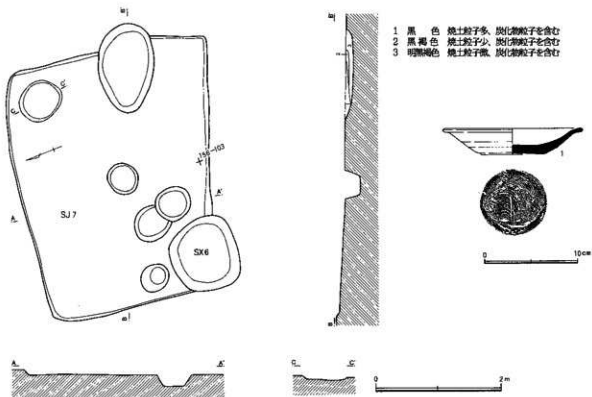


表24 第7号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	皿	15.0	2.7	6.8	ABDF	B	暗灰	80	カマド

第8号住居跡(第145図)

157-98グリッド、調査区の北端に位置する。削平によってほとんど壊されている。僅かにカマドの痕跡と思われる、径約0.7mの皿状の窪みがみられるだけである。遺物は検出されなかった

(2) 土器焼成に関連する遺構(SX)

箱石遺跡から覆土中に焼土粒子、炭化物を含む土壌が幾つか検出された。その多くには多量の遺物が含まれており、土器焼成またはそれに関連する遺構と思われる。それをSXとして他の土壌と分けて扱った。

SXは157-159-105-107グリッドにまとまり、古墳の周溝の中に5基が並んでいる。また、SX6の1基が約15m北西に離れている。

SX 1 (第146図)

158-107グリッドに位置する。東側一部が調査区外となる。調査された範囲の平面形は、隅丸方形で南北が短軸、東西が長軸になると思われる。短径は約3.0mを測る。深さは0.8mで底面は平坦である。覆土は北から南の方向に三角堆積した後、ほぼ水平に堆積している。下層には古墳に伴うと思われる礫が、比較的多く含まれ、上層に埴輪の破片が含まれている。

遺物は高台付環、環、甕の破片、瓦等が出土しているが点数は少ない。

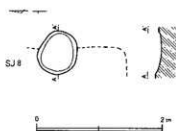
SX 2 (第146図)

158-106グリッドに位置する。東側の一部が調査区外となるが、ほぼ全体が調査されている。平面形は長径約3.0m、短径約2.5mの楕円形を呈し、深さは0.4-0.7mで底面は北側が深く南側が浅くなっている。覆土は上層に炭化物を微量、下層に炭化物、焼土粒子を若干含んでいる。

遺物の点数は多く、器種の内訳は高台付環を主体に環、皿、甕、瓦等と豊かである。

高台付環は、胎土が膨張し器厚が1.0cm以上に膨らんでいるもの(3、12、13)がある。3はSX4との間で接合している。底部の内面が膨張によって、表面が剥落しており、器形が著しく歪んでいる。13は残存率

第145図 第8号住居跡(L=109.50m)



がほぼ半分であるが、元来ならば口縁に向かって開く器形であるが、箱型になってしまっている。

酸化焙のものも多く出土している。作りは全体に粗く、特に14は高台からその上までの部分に、輪積の痕をそのまま残している。

皿は実測できたのは1点のみであった。残存率は半分である。

大形の甕の口縁破片が検出されている。波状文が複数段施文されている。

鉢は口縁部の破片が検出された。残存率はそれほど高くないが、2個体実測図を作成した。

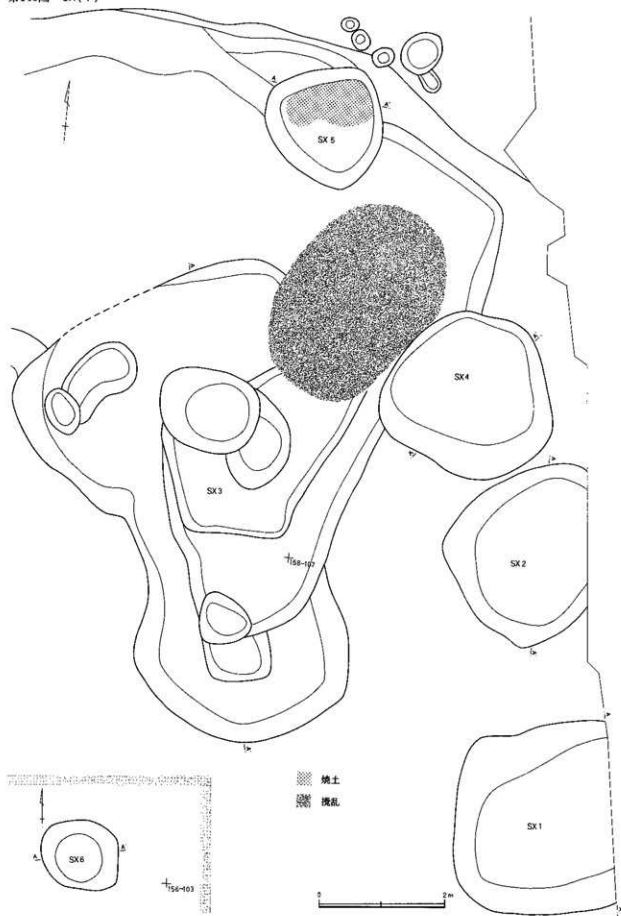
瓦は、大形の破片を少量含んでいる。凸面が縄目叩きのものと、縦方向の削りが施されるものの2つが出土している。

SX 3 (第146図)

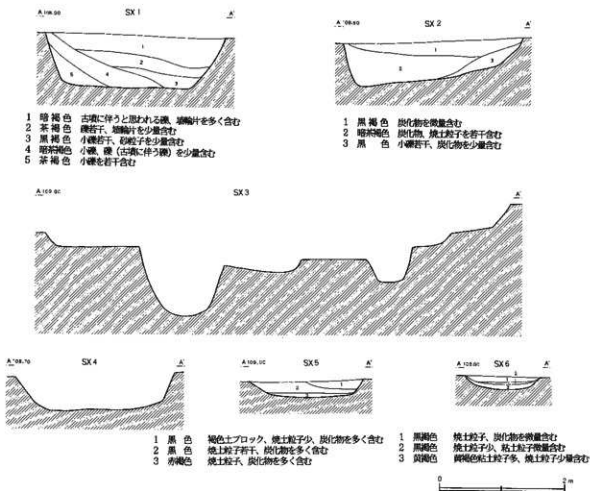
157-106グリッドに位置する。古墳の周溝が残る部分にあたり、北東側に撓乱が入っているため、SX4との関係や周溝との関係に一部不明な部分もあるが、調査区内でほぼ全体が把握できていると思われる。

平面は瓢箪のような形をし、長軸は約7.5m、短軸は広い所で約6.0m、狭い所で3.5mを測る。深さは、部分的に確認面から約1.5mと約1.0mとなるが、全体に墳丘側に向かって斜めに浅くなっている。他のSXが土器焼成に関連する土壌(粘土採掘坑及び不良品の廃棄場)であるのに対し、本遺構は古墳の周溝を利用した窯跡の可能性も考えられる。しかし、調査段階で壁面が著しく被熱している等の所見は認められず、可能性の域を出ることは出来ない。1998年度当事業団が発掘調査を実施した、本地区の南側の調査区で、古墳の周溝

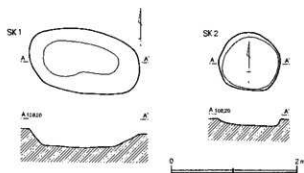
第146図 SX(1)



第147図 SX(2)



第148図 土壇



を利用した窯跡が検出されており、本遺構も関連させて考えたい。

検出された遺物の点数は多く、器種の内訳は高台付環を主体に、須恵器の環、土師器の環、甕、羽釜、瓦等と内容も充実していた。

高台付環は、高台部分の破片が非常に多い。SX2と同様に器厚が膨張しているものが多い。31、36は器厚

が1.0cm前後まで膨らんでいる。それ以外のものも、器形が著しく歪んでいるものが多く含まれている。また、酸化焙ものも数多く出土している。

甕は口縁の小破片と、底部の破片が少量検出された。羽釜は、遺跡全体としては少なく、本遺構から図示できるもの2点がまとまっている。

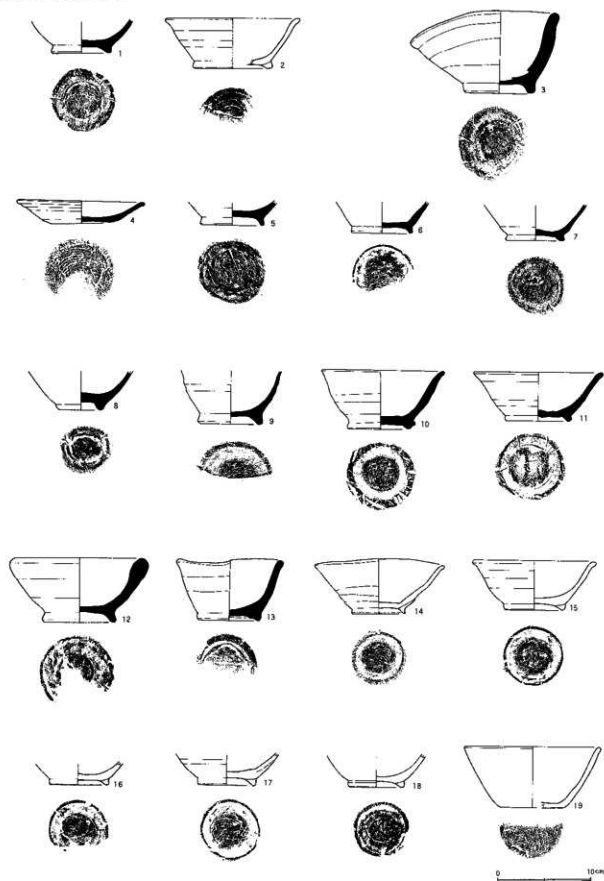
瓦は出土した点数は多いが、ほとんど小破片であった。凸面が隅目叩きのものを主体に、削りのものが含まれている。他のSXから出土した瓦の傾向と変わらない。

SX 4 (第146図)

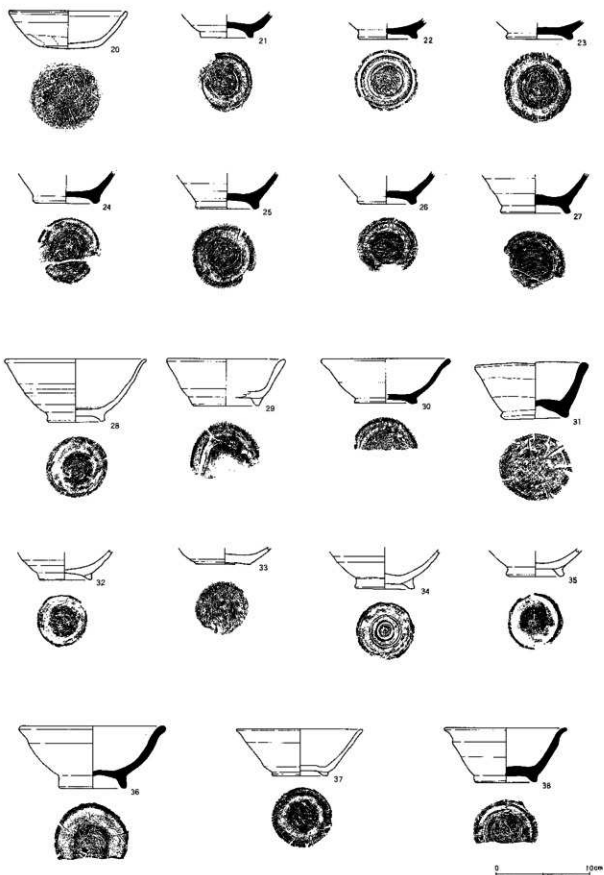
158-106グリッドに位置する。古墳の周溝が浅くなるところで、SX3と一部重複する。SX2と近接するが重複することはない。

平面形は多少歪んだ円形で径は約2.5mである。深

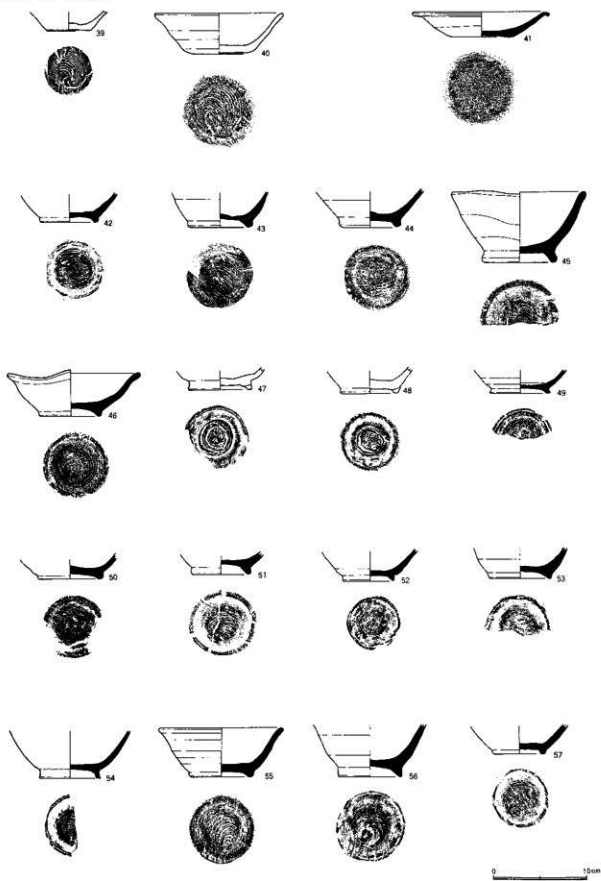
第149図 出土遺物(1)



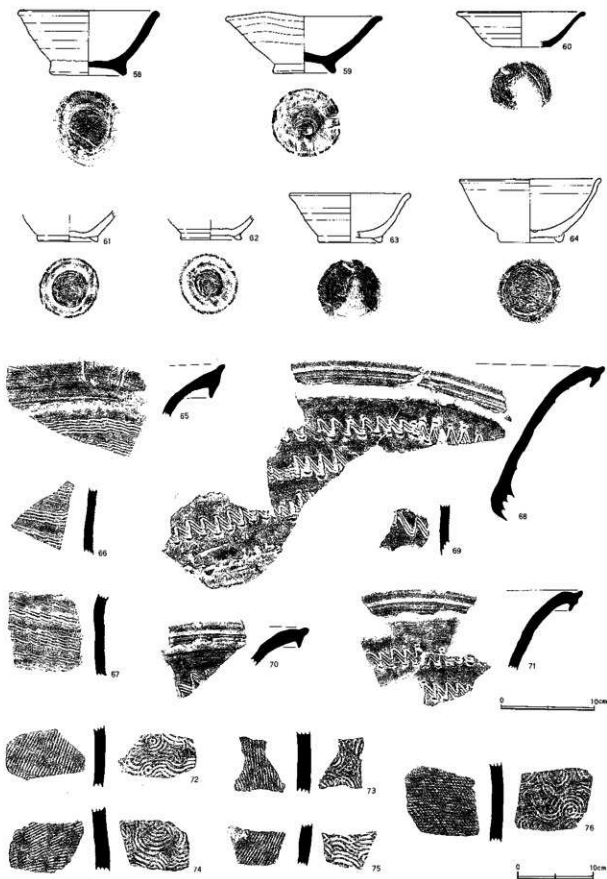
第150図 出土遺物(2)



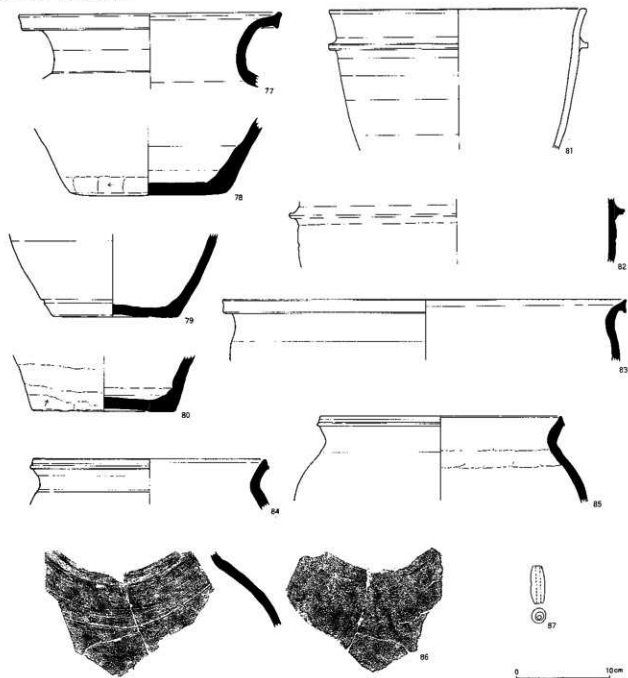
第151図 出土遺物(3)



第152図 出土遺物(4)



第153図 出土遺物(5)



さは0.5mで底面はほぼ平坦である。

検出された遺物は少なく、図示できたのは、瓦が3片だけである。

SX 5 (第146図)

157-105グリッドに位置する。平面形は三角に近い円形で、径は約1.9mを測る。深さは確認面から0.25mと他のSXと比べると浅く、遺構の性格が異なる可能性も考えられる。底面は平坦である。覆土は黒色土で、

焼土粒子、炭化物を微量含んでいる。底面に近い部分は、厚さ数cmに赤褐色土で焼土粒子、炭化物を多く含んだ層が観察できた。焼土の分布は、特に北側半分に多く、範囲を平面的に把握することができた。

出土した遺物は、実測可能なものは、酸化焙の環が2個体と瓦の小破片1点だけである。点数的には少ない。

表25 SX・グリッド出土遺物観察表

番号	遺構	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	SX-1	環			6.2	ABDEF	C	褐	40	159-107G No76
2	SX-1	高台付環	(14.5)	5.4	8.5	CDE	C(s)	橙褐	30	158-105G No2
3	SX-2 SX-4	高台付環	(13.4)	8.9	8.4	ABCEF	C	灰	50	158-106G No206
4	SX-2	皿	13.3	2.4	6.4	AEF	B	灰	50	158-106G
5	SX-2	高台付環			6.6	ABC	C	灰褐	30	158-107G No35
6	SX-2	高台付環			6.3	ABEF	B	灰	30	158-106G No93
7	SX-2	高台付環			6.0	ABE	C	灰褐	60	158-106G No101
8	SX-2	高台付環			4.6	ACE	C	褐	50	158-106G No153
9	SX-2	高台付環			6.3	ABEF	C	灰褐	30	158-106G
10	SX-2	高台付環	12.8	6.2	6.5	ABC	C	灰	80	158-106G No103・107
11	SX-2	高台付環	(13.6)	5.2	6.6	ABEF	C	灰	40	158-106G No110
12	SX-2	高台付環	(13.5)	6.9	7.4	ABF	C	灰	50	158-106G No206
13	SX-2	高台付環	(11.0)	6.5	(6.3)	ABCF	C	灰	40	158-106G
14	SX-2	高台付環	13.8	5.9	5.6	ABCF	C(s)	灰	80	158-106G
15	SX-2	高台付環	(13.0)	5.2	6.1	ABCE	C(s)	茶褐	70	158-106G No281
16	SX-2	高台付環			6.2	ABEF	C(s)	橙褐	30	158-106G No116
17	SX-2	高台付環			5.8	ABEF	C(s)	橙褐	40	158-106G
18	SX-2	高台付環			5.8	ADF	C(s)	橙褐	30	158-106G
19	SX-2	環	(14.2)	6.5	(6.8)	ACD	C(s)	黒褐	40	158-106G
20	SX-3	土師器環	(12.6)	4.0	6.4	ADG	B	橙褐	60	157-106G No290
21	SX-3	高台付環			5.6	ABCE	B	灰	30	157-106G No329
22	SX-3	高台付環			6.0	ABCE			20	157-106G
23	SX-3	高台付環			6.2	BE	C	淡灰	20	157-106G No420
24	SX-3	高台付環			6.5	ABFH	C	淡灰	30	157-106G
25	SX-3	高台付環			6.5	ABCD	C	灰褐	30	157-106G No252
26	SX-3	高台付環			5.4	ABCDE	C	灰褐	40	157-106G
27	SX-3	高台付環			7.2	ABCE			30	157-106G
28	SX-3	高台付環	(15.0)	6.7	(6.2)	ABCD	C(s)	褐	30	157-106G No302
29	SX-3	高台付環	(12.6)	5.0	(6.8)	ACE	C(s)	褐	50	157-106G
30	SX-3	高台付環	(13.7)	4.7	6.3	ACG	C	灰	30	157-106G 158-106G
31	SX-3	高台付環	(12.0)	6.0	6.6	ABC	C	灰	40	157-106G No274
32	SX-3	高台付環			5.5	ACF	C(s)	褐	30	157-106G No21
33	SX-3	高台付環			5.9	BDF	C(s)	褐	30	
34	SX-3	高台付環			6.2	ADEF	C(s)	橙褐	40	157-106G No336
35	SX-3	高台付環			5.8	ADEF	C(s)	褐	30	157-106G No333
36	SX-3	高台付環	(15.8)	6.6	7.0	ACE	C	灰	50	No307
37	SX-3	高台付環	13.3	5.0	5.8	ABCD	C(s)	茶褐	40	157-106G
38	SX-3	高台付環	(13.0)	5.8	6.3	ABC	C	灰	50	157-106G No431
39	SX-5	環			4.8	AC	C(s)	褐	30	158-105G
40	SX-5	環	(13.7)	4.3	5.8	CDGH	C(s)	黒褐	60	157-106G No4
41	SX-6	皿	14.7	2.7	6.3	ACE	C	褐	90	
42	ST-1	高台付環			6.2	ACE	B	淡灰	30	カクラン内
43	ST-1	高台付環			6.3	ABCF	C	灰	50	カクラン内
44	ST-1	高台付環			5.8	ABCEF	C	灰	40	カクラン内
45	ST-1	高台付環	(14.4)	7.6	7.8	ABCF	C	灰	40	カクラン内
46	ST-1	高台付環	(14.3)	4.6	6.3	ABCF	C	灰	50	ゆがみ強
47	ST-1	高台付環			6.2	CDG	C(s)	褐	30	カクラン内
48	ST-1	高台付環			5.9	BDE	C(s)	褐	30	
49	グリッド	高台付環		2.5	(6.4)	BCDE	A	灰	30	158-106G、159-106G
50	グリッド	高台付環			6.5	CE	C	褐	30	
51	グリッド	高台付環			6.0	ABE	C	灰	20	158-106G No37
52	グリッド	高台付環			5.2	ABE	C	灰	50	158-106G
53	グリッド	高台付環			6.5	BC	C	灰	30	158-106G、159-106G
54	グリッド	高台付環			6.4	ABC	A	灰	30	156-106G No12
55	グリッド	高台付環	(13.1)	5.3	6.1	ABC	C	灰	40	158-106G、159-106G

番号	遺構	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
56	グリッド	高台付環			6.6	ABCG	C	灰	50	158-106G、159-106G
57	グリッド	高台付環			5.6	ABCE	C	灰褐	40	158-106G、159-106G
58	グリッド	高台付環	(14.6)	7.0	(7.3)	AC	C	灰	40	158-106G、159-106G
59	グリッド	高台付環	(16.5)	6.1	6.3	ABG	C	灰	50	158-106G、159-106G、焼きひずみ有り
60	グリッド	環	(13.5)	3.8	(6.1)	ABC	B	灰	40	156-106G No7
61	グリッド	高台付環			6.3	ABEF	C(s)	褐	30	158-107G No20
62	グリッド	高台付環			6.1	ABCE	C(s)	褐	30	
63	グリッド	高台付環	(12.7)	5.2	6.5	ACG	C(s)	褐	40	158-106G、159-106G
64	グリッド	高台付環	14.9	6.7		DE	C(s)	茶褐	80	
65	SX-2	甕				ABCDE	A	灰	25	
66	SX-2	甕				ABCE	B	灰	25	158-106G No228
67	ST-1	甕				ABCE	B	褐	25	墳丘南面
68	SX-2・SX-3	甕				ABCE	A	灰	25	157-106G No258・301・302・334、波状紋3本一単位3段
69	SX-3	甕				ABC	B	灰褐	25	157-106G、波状紋3本一単位
70	SX-3	甕				ABCF	B	灰	25	157-106G No819
71	グリッド	甕				ABCF	B	灰	10	158-106G、159-106G
72	ST-1	甕				ABCF	B	灰褐	20	
73	SX-1	甕				ABCE	B	灰褐	20	
74	ST-1	甕				ABCE	B	灰褐	20	
75	ST-1	甕				BCE	B	褐	20	
76	ST-1	甕				ABCE	A	青灰	20	
77	ST-1	甕	(28.0)			ABCE	A	灰	30	カクラン内
78	グリッド	甕			(17.0)	ABCE	C	灰褐	30	
79	ST-1	甕			13.4	ABCF	A	灰	40	156-106G、157-105G、157-106G、158-106G
80	SX-3	甕			15.4	ABCE	B	褐	30	157-106G No231
81	SX-3	羽釜	(27.6)			ABCDE	C(s)	茶褐	20	157-106G No413
82	SX-3	羽釜				ABCDE	B	灰褐	10	157-106G、158-106G
83	SX-2	鉢	(43.0)			ABCE	A	淡灰	10	158-106G No169・231
84	グリッド	甕	(25.0)			ABCE	B	淡灰	20	158-106G、159-106G
85	SX-2・SX-3	鉢	(26.0)			ABCE	C	褐	20	158-106G No279、157-106G、158-106G
86	SX-2・SX-3	壺				ABCF	B	褐	20	158-106G No149、157-106G No286
87	ST-1	土縁径1.5 長さ4.1 高さ9.2g								

SX 6 (第146図)

155-102グリッドに位置する。第7号住居跡の南西コーナーに重複している。平面形は方形に近い楕円形で、長径約1.2m、短径約1.0mを測り、深さは0.2mで底面は平坦である。覆土は下層が黄褐色土で焼土粒子を少量含み、上層は黒褐色土で焼土粒子、炭化物を微量含んでいる。

SX6のみ離れて存在することから、同一の性格のものか疑問もあるが、覆土中に焼土粒子、炭化物を含む点など共通する点があり、土壌と区別しSXとした。

出土した遺物の点数は少ない。実測できたものは須恵器の皿1点のみであった。

(3) 土壌

第1号土壌 (第148図)

158-111グリッド、第1・2号住居跡の西側に重複している。平面形は楕円形で長径約1.8m、短径約1.0m、深さ0.3mを測る。底面は平坦である。

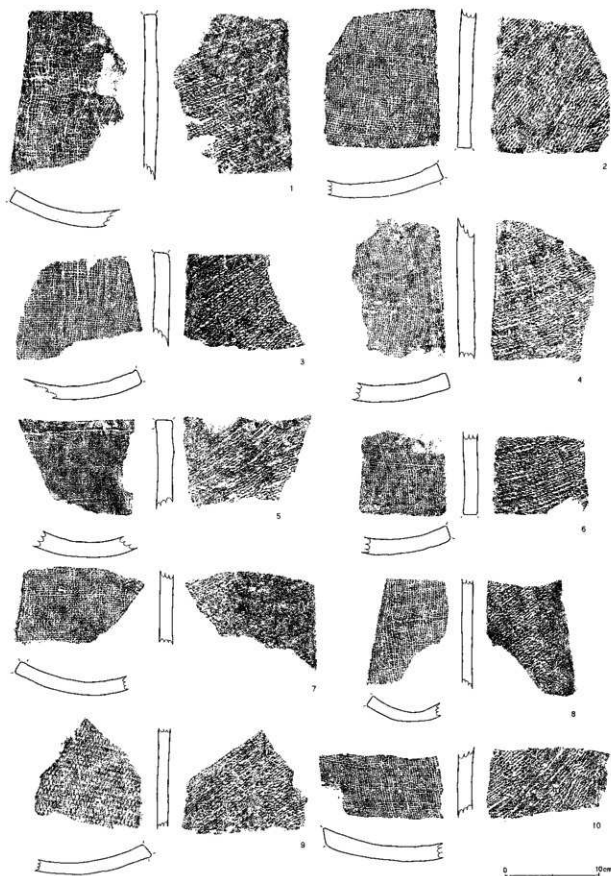
遺物は検出されていない。

第2号土壌 (第148図)

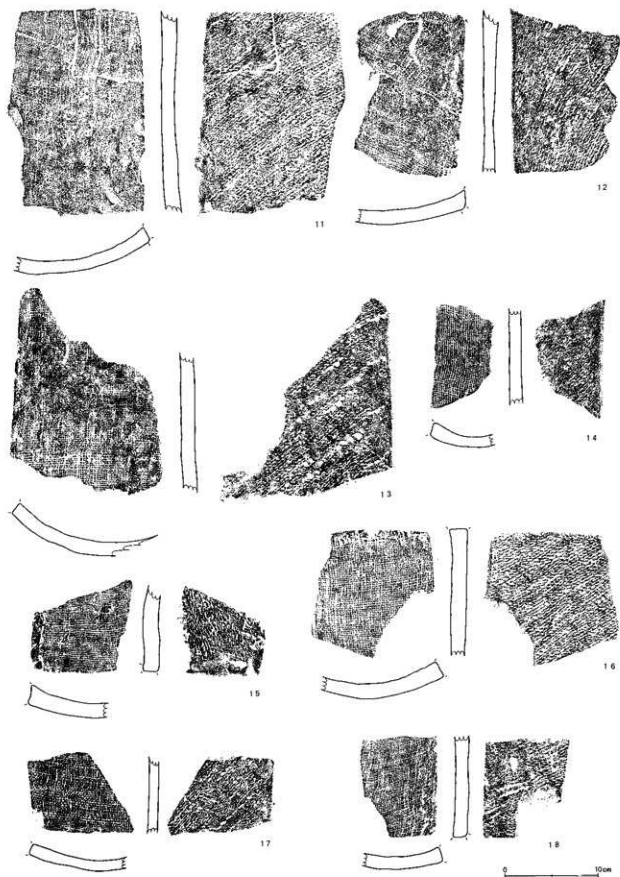
159-110グリッド、第2・3号住居跡の北東に位置する。平面形はほぼ円形で、径は約0.9mである。深さは0.1mと浅く、底面は平坦である。

遺物は検出されていない。

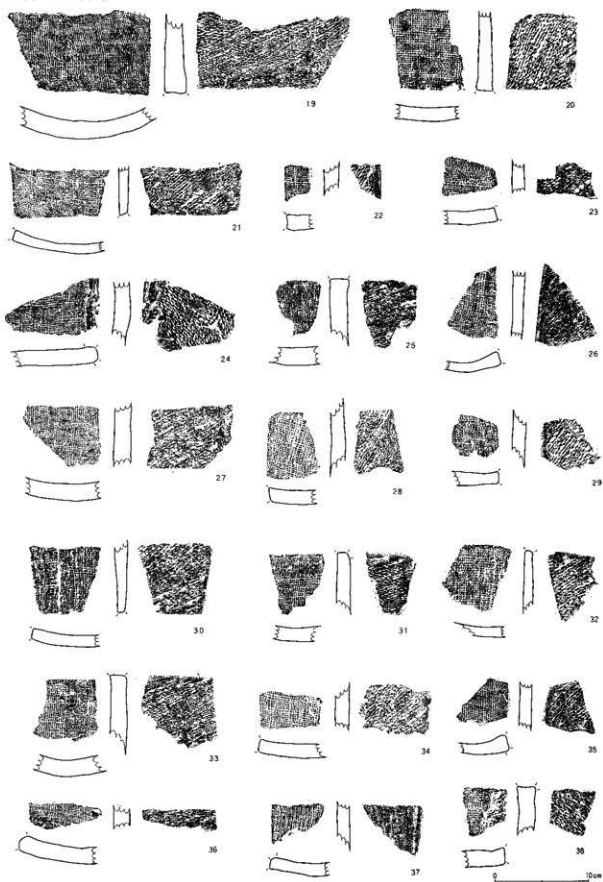
第154图 出土瓦(1)



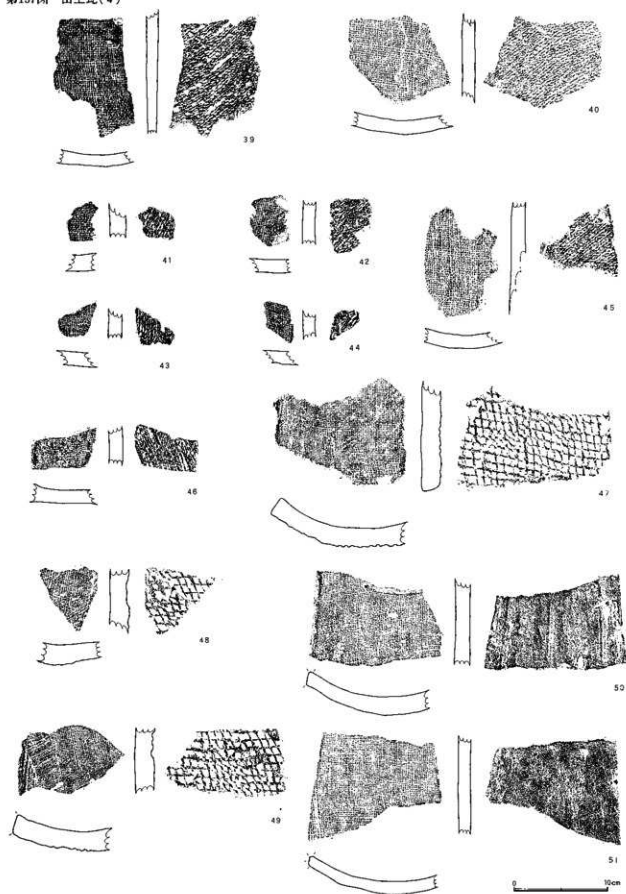
第155図 出土瓦(2)



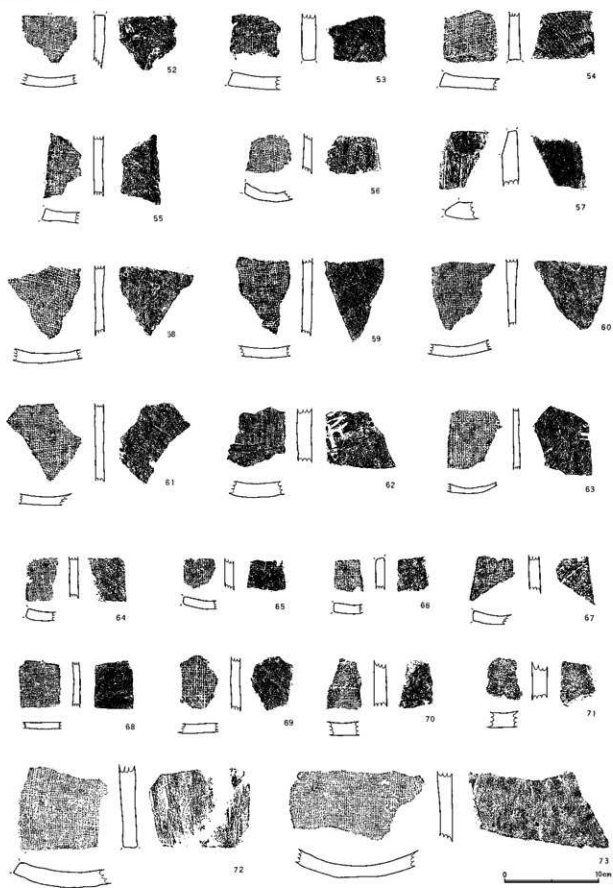
第156图 出土瓦(3)



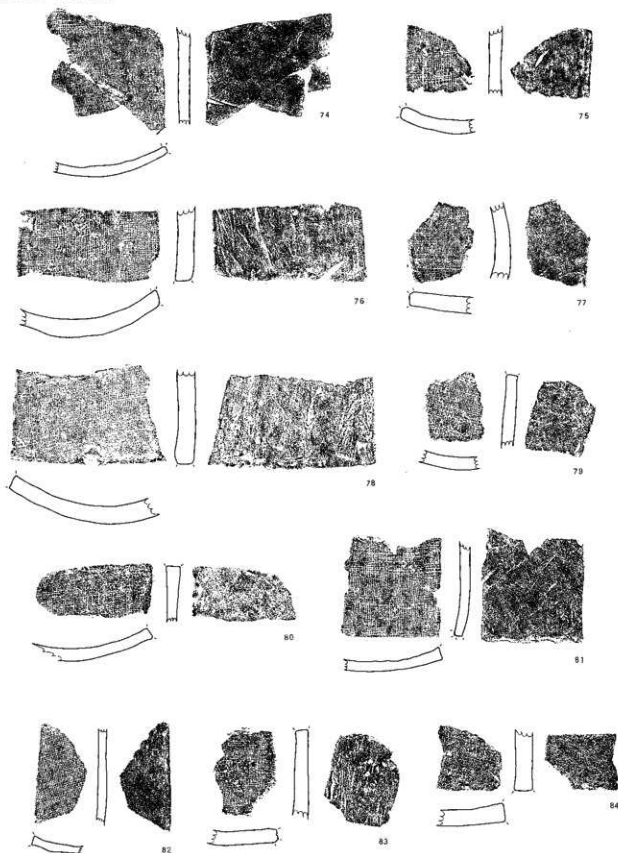
第157圖 出土瓦(4)

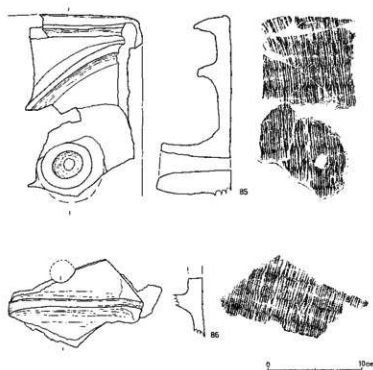


第158圖 出土瓦(5)



第159図 出土瓦(6)





(4) グリッド及び古墳周溝出土の遺物

古墳の周溝及びその周囲のグリッドから、遺物が多数検出され SX との関連資料に考えられる。検出された遺物は、高台付坏が主体を占め、甕、瓦等の破片が多く含まれるなど、SX から検出された器種構成とはほぼ同じ傾向を示している。

高台付坏は膨張し非常に厚手になっているものが多く、ほとんどのものは器形が著しく歪んでいる。甕等の破片も多い。土鍾が1点出土している。

瓦は凸面に縄目叩き、格子叩き、削りのものがみられ、箱石遺跡から出土している全てのタイプが検出されている。特に、格子叩きは SX から検出されていないので注目される。

鬼瓦の破片が古墳周溝内から検出された。接合をしたのは一部であったが、破片は全て同一個体と思われる。作りは粗く、裏面に布後が残る、目の部分は裏面まで貫通している。

表26 瓦観察表

番号	種類	長さ	幅	厚さ	胎土	焼成	色調	布目たて	布目よこ	凸面	備考
1	平瓦	17.3	12.2	1.5	ABCDE	3	黄褐	15	12	縄目7	SX-2(158-106G)
2	平瓦	14.2	12.3	1.6	ACD	2	褐	14	15	縄目5	158-106G 159-106G
3	平瓦	10.4	12.1	1.6	ABC	2	灰	13	18	縄目6	SX-3(157-106G)
4	平瓦	14.9	10.6	1.8	ABC	2	灰	21	15	縄目6	157-106G
5	平瓦	9.6	13.2	1.8	ABCDE	3	黄褐	27	24	縄目6	SX-2(158-106G)
6	平瓦	8.5	9.6	1.6	ACE	3	暗褐	21	13	縄目6	SX-3-栴(158-106G)
7	平瓦	9.2	13.7	1.4	ACDE	3	茶褐	15	14	縄目7	SX-2(158-106G)
8	平瓦	12.1	8.1	1.1	ACE	3	暗褐	18	15	縄目6	158-106G 159-106G
9	平瓦	10.6	12.6	1.4	ABCEG	3	橙褐	6	13	縄目6	裏面はごき日風 158-106G 159-106G
10	平瓦	7.1	12.6	1.7	ACD	2	褐	20	15	縄目6	SX-3(157-106G)
11	平瓦	22.6	15.0	1.6	ACE	3	暗褐	21	21	縄目5	SX-2(158-106G)
12	平瓦	17.3	11.5	1.5	ACE	3	暗褐	18	15	縄目6	SX-2(158-106G)
13	平瓦	18.5	17.2	1.5	ABE	3	褐	14	16	縄目7	SX-1(158-107G)
14	平瓦	12.5	7.0	1.5	ABE	3	褐	21	15	縄目6	SX-4-栴
15	平瓦	9.3	8.1	1.8	ACE	3	暗褐	14	20	縄目6	SX-3(157-106G)
16	平瓦	14.6	13.0	1.7	ACDE	3	暗褐	13	14	縄目6	SX-2(159-107G)
17	平瓦	8.0	11.0	1.2	ACE	3	暗褐	12	12	縄目6	SX-3(157-106G)
18	平瓦	10.6	9.0	1.5	ACD	2	褐	18	21	縄目6	ST-1
19	平瓦	8.1	15.9	2.3	ACE	3	褐	22	16	縄目9	SX-3(157-106G)
20	平瓦	7.0	8.5	1.4	ACD	2	褐	16	13	縄目6	SX-1
21	平瓦	5.1	10.5	1.0	ABCE	2	灰	17	15	縄目6	SX-3(157-106G)
22	平瓦	3.4	2.9	1.7	ACD	2	褐	18	21	縄目6	SX-1(157-107G)
23	平瓦	3.0	6.2	1.4	ACE	3	暗褐	15	15		
24	平瓦	7.2	8.2	1.7	ACE	3	暗褐	16	21	縄目6	SX-3(157-106G)
25	平瓦	7.2	5.8	1.9	ABCDE	3	暗褐	18	15	縄目6	SX-2(158-106G)
26	平瓦	8.2	5.9	1.4	ACE	3	暗褐	18	15	縄目9	

番号	種類	長さ	幅	厚さ	胎土	焼成	色調	釉目まで	釉目より	凸 面	備 考
27	平瓦	6.5	8.5	1.8	ABCDE	3	灰褐	21	16	縄目6	SX-3(157-106G)
28	平瓦	7.4	5.0	1.5	ACE	3	褐	12	15	縄目9	SX-3(157-106G)
29	平瓦	5.2	5.4	1.4	ACD	2	褐	15	18	縄目7	
30	平瓦	7.6	8.0	1.3	ACD	3	茶褐	12	15	縄目9	SX-4一括
31	平瓦	6.6	5.2	1.5	ACDE	3	茶褐	16	15	縄目6	SX-2(158-106G)
32	平瓦	7.3	4.7	1.0	ACDE	3	茶褐	12	15	縄目5	SX-2(158-106G)
33	平瓦	8.0	8.1	1.8	ACDE	3	茶褐	17	13	縄目7	SX-2(158-106G)
34	平瓦	5.1	7.4	1.5	ACD	3	茶褐	14	13	縄目6	SX-4一括
35	平瓦	5.4	5.7	1.6	ACDE	3	茶褐	15	15	縄目6	158-106G 159-106G
36	平瓦	1.9	8.4	1.7	ACE	3	褐	18	15	縄目6	SX-3(157-106G)
37	平瓦	6.6	5.1	1.3	ACDE	3	茶褐	15	15		SX-2
38	平瓦	4.7	4.4	1.8	ABCDE	3	橙褐	15	18	縄目6	158-106G 159-106G
39	平瓦	13.0	8.2	1.2	ACE	3	暗褐	14	18	縄目5	SX-2一括
40	平瓦	9.0	11.0	1.4	ACE	3	褐	14	18	縄目5	SX-3(157-106G)
41	平瓦	3.3	4.0	1.7	ACD	2	褐	15	18	縄目6	158-106G 159-106G
42	平瓦	5.9	4.6	1.4	AHE	3	褐	18	15	縄目6	ST-1
43	平瓦	3.3	3.8	1.5	ACD	2	褐	15	15	縄目6	158-106G 159-106G
44	平瓦	2.3	2.9	1.4	ABCDE	3	橙褐	15	15	縄目6	158-106G 159-106G
45	平瓦	13.1	8.8	1.5	ACE	3	暗褐	14	15	縄目6	158-106G 159-106G
46	平瓦	4.2	7.5	1.5	ACE	3	褐	15	21	縄目6	SX-5(157-105G)
47	平瓦	10.6	15.5	2.1	ABCE	2	橙褐	18	15	3格子の長さ2.7、2.5	158-106G 159-106G
48	平瓦	7.0	7.1	2.0	ABCE	2	橙褐	21	18	3格子の長さ2.8、2.3	158-106G 159-106G
49	平瓦	7.0	12.0	2.1	ABCE	2	橙褐	19	17	3格子の長さ2.8、2.4	158-106G 159-106G
50	平瓦	9.5	14.4	2.0	ACD	3	茶褐	21	16		SX-2(158-106G)
51	平瓦	11.3	14.4	1.3	ACD	3	茶褐	18	16		SX-2(158-106G)
52	平瓦	5.6	5.8	1.1	ABCE	2	灰	18	18		ST-1期素
53	平瓦	5.3	6.3	1.5	ACE	3	暗褐	18	15		SX-3(157-106G)
54	平瓦	5.0	8.5	1.2	ABCDE	2	褐	18	18		SJ-3カマド
55	平瓦	7.5	4.1	1.2	ABCE	3	褐				SX-3一括
56	平瓦	4.0	5.3	1.0	ABC	2	灰	15	18		SX-3 157-106G
57	平瓦	4.8	4.9	1.7	C	2	暗灰	9	18		ST-1
58	平瓦	11.3	5.2	1.2	ACE	3	茶褐	3	15		SJ-3カマド
59	平瓦	8.5	6.1	1.0	ACE	3	茶褐	18	15		SJ-3カマド
60	平瓦	7.1	7.7	1.1	ACE	3	茶褐	18	15		SJ-3カマド
61	平瓦	8.5	5.6	0.9	ACE	3	茶褐	18	15		156-105G
62	平瓦	5.9	7.1	1.5	ABCD	2	灰	30	30		SJ-1(158-111G)
63	平瓦	6.5	5.6	0.7	BC	2	素	20	15		SJ-1(158-111G)非常に器肉薄い
64	平瓦	4.5	3.5	1.0	ABCE	2	灰褐	18	18		ST-1
65	平瓦	3.2	4.3	0.9	ABCE	3	褐	18	21		ST-1
66	平瓦	3.4	3.3	1.0	AE	3	褐	15	15		SX-3(157-106G 158-106G)
67	平瓦	5.1	3.6	1.1	ABCE	3	褐	15	12		SX-3(157-106G 158-106G一括)
68	平瓦	5.0	4.2	0.8	BCE	2	橙	27	27		非常に器肉薄い
69	平瓦	5.9	4.3	1.0	ACE	3	茶褐	15	15		
70	平瓦	4.7	3.3	1.4	ABCE	3	褐	18	18		SX-2(158-106G)
71	平瓦	4.7	3.8	1.6	BCDE	3	褐	21	18		158-106G 159-106G
72	平瓦	8.5	10.8	1.7	ACD	3	茶褐	17	16		SX-3(157-106G)
73	平瓦	7.7	13.4	1.5	ACD	3	茶褐	19	17		SX-2(158-106G)
74	平瓦	10.1	13.0	1.3	ABCDE	2	褐	19	18		SJ-1(158-111G)
75	平瓦	7.6	8.4	1.5	ACD	3	茶褐	17	16		SX-4一括
76	平瓦	8.2	15.3	1.9	ACD	3	茶褐	19	17		SX-3(157-106G)
77	平瓦	8.1	6.7	1.7	ACE	3	茶褐	18	21		SX-3(157-106G)
78	平瓦	9.7	17.1	2.1	ACD	3	茶褐	18	16		SX-2(158-106G)
79	平瓦	7.5	6.8	1.3	ACE	3	茶褐	21	18		ST-1灰様
80	平瓦	6.0	11.0	1.4	ACE	3	茶褐	15	15		SX-3(157-106G)
81	平瓦	12.0	10.5	1.1	ABCDE	2	褐	19	18		SJ-1(158-111G)
82	平瓦	7.3	7.7	0.9	ABCEG	3	褐	18	17		SJ-3カマド
83	平瓦	9.6	7.1	1.5	ACD	3	茶褐	19	18		SX-3(157-106G)
84	平瓦	6.0	7.5	1.8	ACE	3	茶褐	21	18		SX-3(157-106G)
85	鬼瓦										ST-1
86	鬼瓦										ST-1

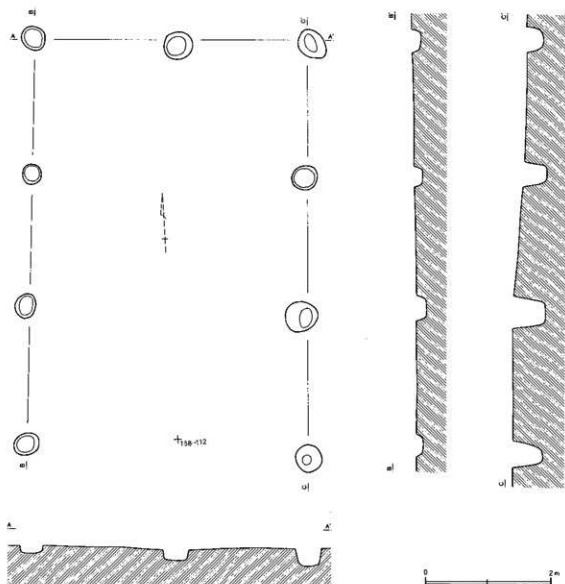
4. 中・近世の遺構と遺物

(1) 掘立柱建物跡

第1号掘立柱建物跡 (第161図)

調査区南側の157・158-111グリッドに位置する。南側が調査区外となるため、建物全体の規模は不詳であるが、 2×4 間の側柱建物と推定される。柱間は $2.05 \sim 2.25$ mとほぼ一定している。柱の径は $0.4 \sim 0.5$ mで深さは $0.1 \sim 0.2$ mのものが多く、一部 0.5 m前後のものがみられる。主軸方位はN-4°-Eである。

第161図 第1号掘立柱建物跡 (L=108.50m)



(2) グリッド出土遺物

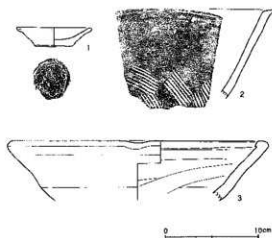
中・近世の遺物は、遺構に伴うものは無く、グリッドから何点か検出された (第162図)。

1はかわらけである。ほぼ完形で、口径 (7.8) cm、底径4.0cm、器高2.0cmである。

2は片口鉢の破片である。口縁内部が折り曲げるように厚くなっている。

3は播鉢の破片である。

第162図 グリッド出土遺物



第163図 出土土器



第164図 出土石器

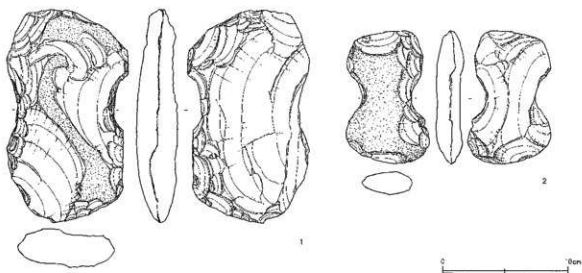


表27 石器一覧

番号	出土地点	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	石 材	備 考
1	SD-1	打製石斧	16.8	9.7	3.3	629.64	砂岩	
2	SD-1	打製石斧	10.5	6.6	2.2	178.38	ホルンフェルス	

5. その他の時期の遺物

(1) 出土遺物

縄文土器 (第163図)

1, 2は中期五領ケ台式で、1は胴部破片、2は口縁部の破片である。

3は中期加曾利E式の胴部破片。2本の沈線が垂下し、その間に縄文が施文されている。

4は中期の口縁部破片である。

石器 (第164図)

1は打製石斧である。外形は基部の挟りは浅く長方形を呈している。裏面に分割面、正面に原石面を残し調整加工は周縁に施されている。刃部は直線的である。

2は打製石斧である。1より一回り小形である。外形は基部の挟りが深く、刃部は丸く、基端は直線的である。裏面に分割面、正面に原石面を大きく残している。

IX 結語

1. 末野遺跡C区出土の石器群について—AT 降灰以前の石斧を中心として—はじめに

末野遺跡C区から先土器時代の石器集中4ヵ所が、径14mの範囲から検出された。遺物の出土層位は、第Ⅲ層の黒褐色で粘性の強い土層中である。石器群の内容は、総点数48点と僅少であるが、内訳は局部磨製石斧2点と打製石斧2点、ナイフ形石器3点と台形礫石器1点、楔形石器1点、石錐1点(表採)、縦長剥片類、礫器である。点数のわりに製品の占める割合が高く、石斧を主体とした良好な資料である。

遺跡の所在する寄居町は、山岳地帯を蛇行しながら流れていた荒川が、平野部に向かって開ける地点にあたり、荒川の流域区分でB区とC区の境である。地形的には江南台地の西端で、上武山地を背後に、眼前を荒川が東流し、その向こう側に外秩父山地が迫っている。遺跡の標高は約130mである。

江南台地はロームの堆積が1m前後と薄く、先土器時代遺跡の調査例が少ないこともあり、武蔵野台地の基本土層との対比が進んでいないのが現状である。川本町白草遺跡の報告書では、暗色帯より上層にAT、As-BP群、As-YPが検出され、細石器石器群の包含層が検討された。しかし、暗色帯に関しては、立川ローム層中の暗色帯と異なる腐食組成があり、中部ローム層上限の暗色帯の可能性もあるとし、立川ローム第2黒色帯との比較に関しては慎重であった。末野遺跡の発掘調査で、黒色帯中から石器が検出されたことから、再度重鋳物分析を実施した。その結果、暗色帯の上位からATが検出され、暗色帯の中段から大山倉古軽石(約4.5～4.7万年前)に由来すると考えられる、斜方輝石が検出された。しかし、量が少なことから降下層準は不明とし、より下位の可能性が高いとしている。暗色帯はAT降灰より以前とする点は両分析とも一致した。次に、暗色帯の年代の下限に関してであるが、テフラ及び腐食組成の分析から、直接立川ローム第2黒色帯と対比するのは難しく、年代を占めに考える要

素のほうが目に付く。いずれにせよ、石器群が暗色帯中より検出されたことは、調査段階で確認されており、考古学の立場から検討を行う必要がある。

(1) 末野遺跡出土石器

a) 石器組成

末野遺跡の石器組成は、石斧、ナイフ形石器、台形礫石器、楔形石器、縦長剥片、礫器等である。石斧4点は全て異なる石材が用いられている。剥片石器類は頁岩を主に用いられているが、石核は検出されてないことから、遺跡内で剥片剥離作業が行われていないと考えられる。一方、局部磨製石斧と同一母岩の資料が10点検出され、内2点が石斧に接合、2点の剥片が接合している。また、破片も検出されていることから、石斧の製作又は刃部再生に関わるものと思われる。石斧の接合に関しては後述するとして、それ以外の剥片類を検討する。

b) 剥片類

剥片類は、大形縦長剥片と石英を主体とする不定形の破片に大別できる。

大形縦長剥片は、同一母岩の頁岩製のもの4点(内2点はナイフ形石器)、頁岩製の単独母岩で長さ16cm近いものは、側縁に使用によると思われる細かい剥離が観察できる。ナイフ形石器以外も、道具として使用されていたことが伺える。打面は単剥離で、厚手幅広である。

チャート製の剥片は、殆ど単独母岩で、頁岩製の剥片と比較すると、正面の剥離面が主要剥離面の剥離方向とずれ、厚手のものが目に付く。打面は個体差が大きく、小さめで単剥離のもの、複剥離面のもの、非常に厚手のもの等がみられる。

頁岩製の剥片類がナイフ形石器・石刀等として意図的に遺跡内に持ち込まれたと考えるならば、チャート

製の剥片類は、直接利用するためと言うよりか、何等かの石器を作る必要が生じた時のための、素材として持ち込まれたものと思われる。

ホルンフェルス製の剥片は、頁岩・チャート製の縦長剥片と比べると、少し幅広である。表面の風化が進んでいるため、打面や側縁の細かい剥離に関する観察は不詳であった。

石英の砕片は、節理によってブロック状に割れたものが多く、小形であるため、剥離面の観察は殆どできなかった。遺跡に持ち込まれた意図は不明である。

c) ナイフ形石器・台形椽石器

ナイフ形石器と分類したのは3点である。第55図5は、基端部の周囲に微細な剥離が観察できることから、ナイフ形石器と考えた。明確な調整加工は、殆どみられないが、両側縁に使用によると思われる細かい剥離が観察できる。外形は左右対称で先端は、コ字になっている。素材剥片は単剥離幅広の打面で、バルブは大きく膨らんでいる。主要剥離面は若干波打っているがほぼ平坦である。正面の剥離面は、主要剥離面と同一方向からの加撃であるが、左右に振れているため、求心状にも見える。稜線は中央に直線的に通っている。先端に主要剥離面と逆方向の剥離面があり、平面形は幅広コ字となっている。横断面は厚手で、先端上半部は三角形、基端部付近は側面を有する五角形となっている。

第55図6は、打面部付近に微細な剥離が観察でき、ナイフ形石器と分類した。調整加工は基端部に部分的に施され、打面は除去されている。外形は、全体に丸味が強く、特に基端は円形に近いいわゆる杓状を呈している。該期にこの様な形状のナイフ形石器は少なく、台形椽石器と外形が近い感である。素材剥片は薄手幅広で、他の頁岩製縦長剥片と比較すると、目的剥片とするより、石核の調整剥片か石斧等の整形剥片を利用したものと思われる。

第55図7は、端部に加工が施されている。上記の2点と比べ調整加工はしっかりしているが、その部分にガジが入っており、惜しまれる。素材剥片は、単剥離

幅広の打面で、バルブは大きく膨らんでいる。正面の剥離面は主要剥離面と同一方向で、横断面は台形である。

第55図8は、打面が最大幅となる横広剥片を素材に用いられている。正面は原石面で覆われ、剥離面は左側縁からの平坦剥離がみられるが、打面からの加撃で、素材剥片作出の際のものか、調整加工が半断に苦しむ。しかし、基部側の一部に打面を切って、正面→裏面の剥離が観察できることを積極的に評価し、平面形状から台形椽石器と分類した。

d) 局部磨製石斧・打製石斧

石斧は4点出土した。1点は出土状況等のデータが記載できなかったが、同一層位であり石器集中の中からの出土で、4点ともに有意なまとまりの資料である。埼玉県内で局部磨製石斧と打製石斧が複数点、一緒に出土した例は少なく、貴重な資料といえる。後に周辺地域の石斧と比較検討する前に、4点を観察することにする。

第167図1は、局部磨製石斧である。外形は最大幅が基部中央に位置し、左右上下と共に対称の楕円形で、いわゆる草鞋形の典型例といえそうである。刃部は直刃に近く、正面に研磨面、裏面に刃縁からの平坦剥離がみられる。裏面の剥離面は他の面より新らしく、刃部再製が施されたことが伺われ、もとは円刃であったと思われる。縦断面をみると裏面は凸、正面は直線的になっている。

同一地点から出土した砕片が接合するが、整形加工等によるものか、製作の際に生じた亀裂が埋まっている間に剥落したものかは不明である。

第167図2は、局部磨製石斧である。裏面に分划面、正面に主要剥離面、基端部に原石面を残している。整形加工は、正面に基端部からの縦長の剥離面によって器厚を薄くし、後は両側縁にによって整えている。外形は方形に近いが、いわゆる草鞋形の範疇で捉えられる。刃部は刃縁を大きく欠損しているが、僅かに残っている部分から刃部が両面に研磨が施されていたことが伺える。

第167図3は、打製石斧である。外形は最大幅が刃部付近で六角形に近い形状をしている。刃部は、裏面からの急角度の剥離によって直線的になっている。縦断面をみると裏面から正面方向に斜めに切る様になっており、刃部再生が何度か行われたと思われる。元来はもう少し長く、草鞋形(楕円形)であったと想定できる。

第164図4は、打製石斧である。剥片を素材とし薄手である。外形はいわゆる草鞋形で、調整加工は裏面の周縁に施されている。刃部は円刃で、裏面に磨耗底が観察できる。

以上、石斧に関してみてきた。次に局部磨製石斧(2)の接合状況を観察し、素材の原石と製作過程の復元を試みる。

c) 石斧の接合

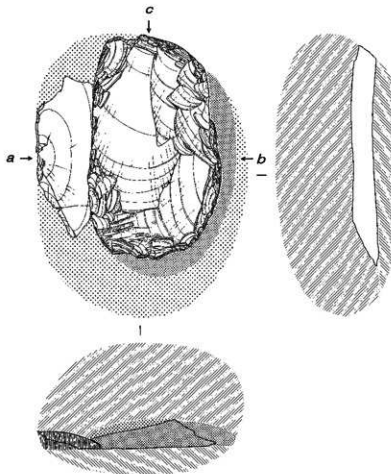
局部磨製石斧(2)とその同一母岩の資料10点が検

出された。遺跡内での剥片剥離の痕跡が殆どみられない末野遺跡で、本母岩のみ3点の接合関係があり、碎片を含むなど特異な存在である。しかし、石斧の製作を想定すると、資料数が絶対的に少ないのも事実で、他の遺跡で作られた石斧と、その際に生じた剥片の一部を遺跡内に持込んだものと、刃部再生のために調整剥離を行ったと考えたほうが妥当である。

接合資料と石斧表面の剥離面の観察といった限られたデータであるが、原石と素材剥片について若干触れることにする。第165図は石斧に残されている原石面から、原石の大きさ及び素材剥片の大きさを、想定したものである。粗い網が原石、細かい網が素材剥片の大きさを示し、右下がりの斜線が分割された剥片、左下がりの斜線が石核を表している。横断面の芯の濃い部分が素材剥片と接合資料を示している。

まず、製作の順序にそってみると、裏面の平坦面の観察から、原石を節理によって分割している。次に、石斧の素材剥片は、裏面基端部の原石面と分割面の角度から分割された剥片ではなく、もう一方の塊(石核)から作出されていることが伺える。石核に対しa→の横広剥片を剥がしているが、裏面の分割面の共有から、この剥片が素材剥片の剥がされる前の剥離面であることがわかる。素材剥片はその後、b→の加撃によって厚手横広剥片が剥がされている。その際の主要剥離面は、石斧の正面下部の刃部付近に残されている。刃縁の丸みは、素材剥片の端縁のラインを利用しているものと思われる。次に、剥片の厚さを減らす目的か、または主要剥離面の丸みを取り除くのが目的かはわからないが、c→からの剥片面が正面にみることができる。調整加工は、主に右側縁からの階段状剥離によって幅を減じているが、全体に素材剥片の形状を利用しているように思われる。

第165図 石斧の原石・素材剥片想定図



(2) 遺跡の石斧分布図

a) 遺跡の分布

関東平野は三方を山地に囲まれ、東側は太平洋に向かって開けている。平野の中央には南北方向に荒川低地、中川低地があり、当時は深い溪谷であったと考えられている。また、平野の北側に台地が角の様に山地部に入り込んでいる部分が2ヶ所ある。

関東平野のAT降灰以前の遺跡で、石斧を出土した遺跡の地点を地図上に示した。その分布を見ると、遺跡は均一的に分布しておらず、平野の中央部に空白部を残し、幾つかのまとまりに分けられる。それぞれのまとまりを地域として捉え概観する。

地域a: 関東山地と足尾山地の間に、角の様に台地等が突き出た地域である。また利根川が山地から平野部へ向かう地域で、扇状地形成している。

遺跡は、利根川の支流部に善上、後田遺跡が、岩野丘陵に古城、白倉下原遺跡が、大間々扇状地に岩宿、下熊平遺跡が位置し、本地域の南端に末野遺跡が位置している。

地域b: 足尾山地と八溝山地の間に、ほぼ真北に向かって、思川低地、鬼怒川低地、小貝川低地に沿って台地が突き出ている地域である。遺跡は、礪山遺跡と殿山遺跡の2ヶ所であるが、今後の調査で遺跡数の増加が予想される地域である。

地域c: 太平洋に沿って八溝山地の東側に那珂台地、東茨城台地等が北に向かって突き出ている地域である。現在遺跡は武田、戸森、半田遺跡等とそれほど多くないが、地域bと同様に調査の進展によって遺跡数が増えるものと考えられる。

地域d: 下総台地遺跡は、関東平野で当該期の遺跡が最も密集する地域である。他の地域が山地を背後に持つのに対して、関東平野の東部に山地とは離れて位置している。武蔵野台地と東京低地を挟んで対峙し、南関東地域を形成している。

遺跡の数は多く、複数の石斧を出土した遺跡だけでも中山新田、御山、坊山、草刈六之台、人綱山田台No.8遺跡等が挙げられる。

地域e: 武蔵野台地は関東山地の東側に位置する台地で、遺跡数は下総台地と並んで多い地域である。遺跡の分布は、台地の全体に及んでいる。末野遺跡と対比される、大形の楕円形を呈する石斧が多数出土している。また、一つの遺跡で複数の分化層から石斧が検出されており、編年研究の上でも重要な地域である。

地域f: 相模野台地は関東山地の東側で、多摩丘陵を挟んで武蔵野台地と並んでいる。ローム層の堆積が厚く、遺跡の遺存状況は良好なものが多く、先土器時代研究の中心地域である。しかし、該期に関しては堆積が厚いため調査例は少ない。

遺跡は栗原中丸、古岡、根下遺跡からそれぞれ破片または1点が出土している。複数出土したのは大和市(仮)配水地内遺跡が挙げられるだけである。

b) 地域a: 群馬県・埼玉北部地域の遺跡

上記の地域区分で、末野遺跡と深く関わると思われる地域aの遺跡を概観し、比較材料とする。

岩宿遺跡 (No.2、第167図5～6)

岩宿遺跡は、日本先土器時代研究の端緒となった遺跡として学史的に著名であるが、資料的にもまた重要な石器群である。石器群は3枚の文化層が検出され、岩宿Ⅰ石器文化が該期に相当する。出土層位は、第Ⅲ層暗褐色ローム層中である。

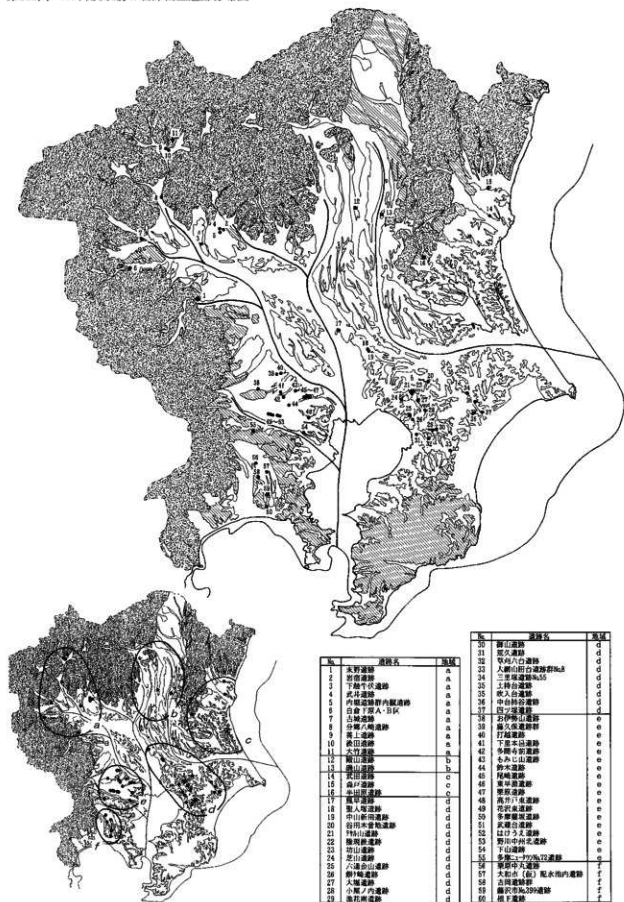
石器は29点検出された。内容は石斧2点(1点は局部磨製石斧)、ナイフ形石器3点、削器、楔形石器、剥片(大形の縦長剥片を含む)、石核等がある。

5は、正面に原石面を残す大形厚手の剥片を素材とし、周縁からの平坦剥離と階段状剥離によって楕円形に仕上げている。刃部に研磨痕のある局部磨製石斧である。末野遺跡出土の石斧(3)と、形状や大きさが非常に近似している。

6は厚手の横広剥片を素材とし、正面は面的剥離、裏面は周辺からの階段状剥離によって仕上げられている。刃部は整った円刃である。

7は岩宿遺跡B地点から相沢忠洋氏の採取した局部磨製石斧である。出土層位は黒色帯下半部に位置する。

第166図 AT 降灰以前の石斧出土遺跡分布図



石斧は両面加工で、表面の基部の一部に研磨痕が観察できることから、より大形の石斧が欠損した後、再加工されて本石斧が作られた可能性が指摘されている。

ナイフ形石器は、縦長剥片を素材とし、幅広い剥離の打面を基端面に残し、微細な調整剥離を施したもので、木野遺跡のナイフ形石器と近似している。

下蝕牛伏遺跡 (No. 3、第168図15～19)

下蝕牛伏遺跡は赤城山の裾野の南端に位置し、岩宿遺跡、武井遺跡と近接する。

第II文化層の出土層位は、第VIII・VII層の暗色帯を中心に第IX～VI層上面にかけて検出されている。第Vb層にAs-BP群がブロック状に含まれ、第VI層にATの最大値がみられることから、遺物はAT下位の石器群であることが確認できる。

石器の総数は2039点で、器種の内訳は局部磨製石斧6点、ナイフ形石器(台形椀石器等を含む)11点、撚器、彫器、敲石等と多量の石核、剥片類である。石器集中は15ヶ所検出され、径約50mの環状ブロックを形成している。

局部磨製石斧は形状のわかるもの5点を掲載した。石材は凝灰片岩、石黒片岩等が用いられており、表面の風化が進んでいる。当該地域の石斧には頁岩、安山岩等が用いられる場合が多いが、当遺跡では片岩系の石材で複数製作されている。石斧は石材のためか薄手扁平で、外形は楕円形から短冊形に近いものまである。刃部は円刃から直刃に近いものまでであるが、円刃を基本に使用の結果、直刃または偏刃に近い形状になっているものと思われる。

ナイフ形石器は、縦長剥片を素材とし、基端面に幅広い剥離の打面を残している。調整加工は、基部の周辺に微細な剥離が施されている。正面の剥離面は主要剥離面と同一方向である。

台形椀石器はナイフ形石器のほぼ2倍の点数である。横広剥片を素材とし、平坦剥離によって外形を方形または台形、三角形に整形している。

剥片は縦長剥片と横広剥片の2つがある。しかし、残核は厚手剥片を素材とした盤状石核か求心状石核の

みで、接合資料は石核と幅広剥片、幅広剥片とうしが殆どである。縦長剥片に関する剥片剥離の跡はみられない。

武井遺跡 (No. 4、第167図11)

武井遺跡第III・IV次調査で、AT下位から約800点の石器が検出された。遺跡発表資料であるため詳細は不明であるが、図示された石器をみると、表裏両面に原石面を残す。厚手剥片を素材とし、面的剥離が周縁から施されている。刃部は入念に研磨が施されており、円刃である。

白倉下原遺跡 (No. 6、第167図9～10)

A区とB区からAT下位の石器群が検出され、石斧は両区からそれぞれ1点出土している。

遺物の出土層位は、第XIII層暗褐色粘土層で、その上を層厚1～2cmのAT純層(第XII層)がバックするように堆積している。遺物包含層の下は青灰色粘土層を挟んで裸層となっている。

遺物の出土状況は、両区とも環状ブロックを形成している。

A区は、遺物の総数は403点で、器種の内訳は局部磨製石斧1点(7点の接合)、ナイフ形石器2点、台形椀石器13点、撚・削器、敲石等が出土している。

石器石材はガラス質黒色安山岩を、主に用いている。

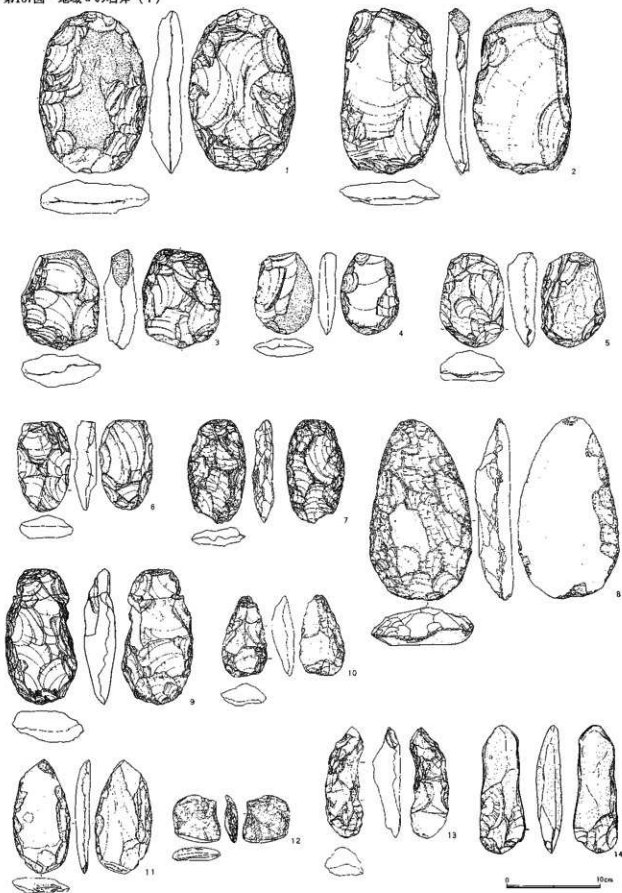
B区は、遺物の総数は120点で、器種の内訳は局部磨製石斧1点、ナイフ形石器5点、台形椀石器13点、撚・削器、敲石等が出土している。

石器石材は、A区と対照的に黒曜石が主体的に用いられている。

9はA区出土の局部磨製石斧である。7点が接合している。長軸の両端に刃部整形がみられる。報告書と上下逆に掲載したが、研磨の状況から判断した。外形は楕円形で、両面に面的剥離を施した後に、周縁からの細かい剥離によって整形されている。刃部は両面に研磨面がみられる。

10はB区出土の局部磨製石斧である。外形は洋ナシ状で、基端は尖るように窄まっている。加工は面的剥離が両面に施され、基端部及び刃部は細かい剥離に

第167図 地域aの石斧(1)



よって整形されている。研磨は両面に観察できる。

ナイフ形石器は、縦長剥片を素材に、打面を基端面に残すものが多い。調整加工は、基端部付近から1側縁に施されているものが多く、素材を切断するような規格的剥離がみられる。末野遺跡の微細な剥離と比べると、より新しい要素であると思われる。

台形様石器は、A区とB区で様相が異なる。A区は大型の横広剥片の側縁に細かい剥離を施したものが多く、B区は面的剥離を両面に施し、外形は素材を大きく変えベン先状に整形しているものが目に付く。石材の性質と関連するかもしれないが、2つの地区で時間差があるのかもしれない。

剥片は、A区から大型の縦長剥片が数点出土しているが、他は両区とも横広剥片が主体で、残核は盤状または求心状、サイコロ状の石核がみられる。いずれにせよ、大型縦長剥片を作出する石核は出土していない。**善上遺跡 (No.9、第167図8)**

善上遺跡は利根川の上流に位置し、ガラス質黒色安山岩、黒色頁岩原の産地に近い遺跡である。遺跡は三峰山西麓の尾根状台地の先端に位置し、石器集中が12ヶ所検出された。

遺物の出土層位は、ATが灰褐色粘質と灰褐色土の2枚に包含され、石器は下層の灰褐色土中から検出された。

石器総数は933点と多く、器種の内訳は石斧1点、ナイフ形石器7点、彫器、石錐、楔形石器、敲石等で、石核27点と多量の剥片類が出土している。また、接合資料が豊富で、石材原産地に近い遺跡の特徴を示している。

8は大型の打製石斧である。最大幅が基部下半部に位置する洋ナシ状を呈している。加工は周縁から裏面→正面方向に平坦剥離が施され、正面の中央部まで剥離が達している。裏面は全面に、正面は中央部に原石面を残しており、扁平礫が素材に用いられていたことが伺える。刃部と基端部に磨耗痕が観察できることから、製品として使用されたようであるが、原石面を大きく残していることから、使用の初期段階のものと思われる。

る。大きさは、長さ19.1cm、幅10.9cm、厚さ3.7cmで重量は916gを測る。多摩礫灰遺跡、末野遺跡に次ぐ大きさである。

ナイフ形石器は、縦長剥片を素材に打面を基端部に残す、基部加工または部分加工である。1点調整加工が規格的剥離で側縁の全体に施されるVII層のナイフ形石器が含まれるが、他は微細剥離又は平坦剥離が部分的に施されるものが多い。

石核及び剥片は、打面調整を殆ど行わず、単剥離の打面から大型の剥片を剥離している。剥片は正面に原石面を残したものは、剥片剥離の初期段階と思われる横広剥片が多く、正面に主要剥離面と同じ方向の剥離面が並列したものは、大型縦長剥片が目に付く。

報告書で石器群を立川ローム第X～IX層段階に位置付け、岩宿遺跡I文化層と同一段階であると述べているが、麻生・大工原両氏は一つ新しい段階に位置付けている。

後田遺跡 (No.10、第168図20)

利根川上流に位置し、善上遺跡と近接している。遺物の出土層位は、AT検出層である淡褐色粘土質ロームが包含層である。

石器の総数は4119点と多く、器種の内訳は石斧1点、ナイフ形石器30点、石錐、搔器、彫器、礫器、敲石等と、多量の石核、剥片類である。接合資料は豊かで、石器集中は42ヶ所検出された。善上遺跡同様に石器石材産地を近くに有する遺跡の特徴を示している。

20は打製石斧である。外形は方形でいわゆる短冊形を呈している。裏面に分割面、正面に原石面を大きく残し、調整加工は周縁的に平坦剥離が施されている。一見、縄文時代中期の打製石斧を思わせる。

ナイフ形石器は、縦長剥片を素材に急角度な規格的剥離が側縁又は基部、端部に施されるなど、点数が多いこともあり多様である。台形様石器は縦長剥片を切断し、側面にナイフ形石器と同様の調整加工を施している。

接合資料と残核から想定される、剥片剥離技術は多様で、縦長剥片を主体に多種の横広剥片を作出してい

る。

石器群の編年的位置付けは後田段階と呼ばれ、立川・ローム第VII層の基本資料である。

報告書の中で、麻生氏は群馬県内のAT下位遺跡の検討を行っている。その中で、善上遺跡に触れ後田遺跡に近い、もしくは同時期としている。しかし、層的に若干後田遺跡より下になる可能性が高く、ナイフ形石器の調整加工に微細剥離又は平坦剥離が施される点など、異なる様相もある。その後、麻生・大門原氏は、善上遺跡を岩宿遺跡と後田遺跡の中間に位置付ける編年案を提示している。

古城遺跡 (No. 7、第167図12)

古城遺跡はAT下位の石器群が、3つの地区から検出されている。ここでは、石斧の出土したIC区を対象とする。IC区の遺物出土層位は、AT純層の第XI b層からその下位の暗褐色粘土層(第XI c層)の中位から検出されている。南北24m、東西22mの環状ブロックを形成している。出土した石器の総数523点で、内訳は局部磨製石斧、台形様石器、削器、剥片類、磨石、敲石等である。

石斧は節理面で割れており、もともとは大きかったと思われる。研磨は両面に施されている。

台形様石器は横広不定形の剥片を素材に、切断、Blunting、平坦剥離によって整形されている。調整加工の部位は、基部及び裏面に面的に施されるものがある。一方、ナイフ形石器は検出されていない。

剥片類は多くの接合がみられる。剥片の形状は、横広のものが多く、正面の剥離方向は一定していない。打面は原石面、単剥離面、複剥離面と多様であるが、打面調整はあまりみられないようである。

内堀遺跡群内堀遺跡 (No. 5、第167図13)

遺跡発表資料であるため詳細は不明であるが、A区とB区から該期の石器群が検出された。遺物の出土層位は、AT下位からAg-Kの上位にあたる。遺物はA区から319点、B区から25点出土している。A区の石器の内訳は、石斧4点(局部磨製石斧2点、打製石斧2点)、ナイフ形石器20点、台形様石器10点、搔・削器、

彫器、敲石等である。石器石材は黒曜石が全体の9割を占めている。

13の石斧は、外形が半角状に湾曲している。裏面に分割面と思われる大きな剥離面がみられ、基部上半部を中心に平坦剥離が施されている。正面は平坦剥離と階段状剥離によって、横断面は甲高の薄針状になっている。刃部は円刃で前面から刃縁をみると丸のみ状になっている。一見、種子柴の石斧を思わせる資料である。

ナイフ形石器、台形様石器ともに縦長剥片を素材にするものが多く、基部を中心に平坦剥離と微細な剥離が施されている。

B区は資料点数が少ないが、ガラス質黒色安山岩、黒色頁岩が用いられており、ナイフ形石器は縦長剥片の基端部付近に、微細な剥離による調整加工を施したもので、A区とは様相が異なる。石材の違いによるものか、時期差によるものかは整理作業を進める中で明らかになるものと思われる。

大竹遺跡 (No. 11、第167図14)

遺跡は善上遺跡、後田遺跡と近接し、利根川の上流部に位置する。遺物の出土層位をみると、ATが第VI～V層にかけて包含され、石器は第V層の前後から検出され、AT前後の石器群と考えられる。

石器集中は25ヶ所検出されている。器種の内訳は石斧、ナイフ形石器等である。

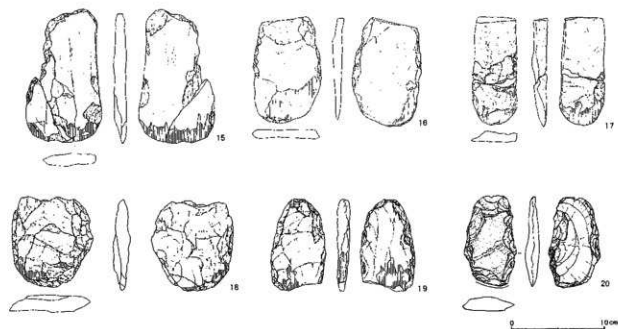
石斧(14)は棒状の腰の先端に平面剥離によって刃部を作りだし、刃縁を研磨した局部磨製石斧である。群馬県内の他の石斧とは、素材の用い方、製作方法等やや異なる。

ナイフ形石器は2側縁加工で打面を除去しており、新しい要素がみられる。石器石材は頁岩と安山岩が用いられている。

以上、群馬県内のAT下位石器群を出土した遺跡で、石斧で形態が把握できる9遺跡を概観し、その石斧をみてきたが、次にそこから導かれる問題点を若干整理する。

初めに、群馬県内の遺跡と木野遺跡の石器群と比較

第168図 地域aの石斧(2)



した場合、複数の石斧(局部磨製石斧と打製石斧)が存在する。ナイフ形石器は縦長剥片の基部及び部分に微細な調整加工を施しただけで、素材に形状をそのまま利用している。台形様石器は木野遺跡で1点出土しているが、少なく主体を占めるものではない。資料数は少なく遺跡内での剥片剥離の痕跡はみられないが、大形の縦長剥片等が多く、他の遺跡から持ち込まれているなど、岩宿遺跡I石器文化が最も近似している。

次に、石器群の序列を考える際に、その出土層位の検討が重要である。群馬県内のロームの堆積は、2 m程で地域によって土質の差が大きいが、AT降灰以降はキーになるテフラによって、細かい土層対比が可能になっている。一方、ここで検討しているAT降灰下位の層位は細分が難しく、石器はAT包含層からその下層にかけて検出される場合が殆どである。AT純層にバックされている白倉下原遺跡等では明らかに、ATの下位と言えるが、大竹遺跡、古城遺跡等では明確な分離が難しい場合がある。黒色帯が明確な、群馬県東部の遺跡や木野遺跡では、ATの最大値が黒色帯の上層にあることから、武蔵野台地の第2黒色帯とある程度の対比が可能なのではないかと思われる。

上記のように、層位的制約はあるが、資料の充実に伴い当該期資料の編年的細分の可能性が議論されている。1991年の石器文化研究会のシンポジウム、1994年の第2回岩宿フォーラム「群馬の岩宿時代の変遷と特色」の中で、麻生・大工原両氏は、AT降灰以前の石器部を南関東の研究状況をおさえながら、3つの段階に分ける群馬編年を提示し、石器組成、石材、石器製作技術について言及している。また、第2・3段階になると利根川上流まで遺跡が多く分布するようになる点を指摘している。

石器群の変遷は、幅広剥片系と台形様石器が密接に関連する石器群から、縦長剥片系とナイフ形石器が主体を占める石器群への漸移的变化として捉えている。

第1段階は、幅広剥片と密接に関連する台形様石器が多く、縦長剥片・石刃を素材とするナイフ形石器が客体的に存在し、局部磨製石斧が集中的に存在する遺跡があるとしている。

第2段階は、幅広剥片と縦長剥片が併存する段階とし、1段階と3段階の過渡期として捉えている。

第3段階は、縦長剥片を素材とするナイフ形石器が主体を成し、台形様石器が殆どみられなくなる段階と

し、立川ローマ第Ⅶ層段階と第Ⅵ層段階に対比している。

群馬編年では岩宿遺跡Ⅰ石器文化を、下触牛伏遺跡等と共に第Ⅰ段階に置いているが、下触牛伏遺跡等の資料と岩宿遺跡Ⅰ石器文化の石器群との違いは大きく、遺跡形成過程の差などとして片付けられるのか疑問である。しかし、石斧の形態やナイフ形石器の調整加工など、新しくする要素も無く、本地域内だけで解決できない問題として、より広い範囲での比較検討が必要になり、その意味で本地域の南端に位置する末野遺跡の重要性は増してくる。

c) 他地域の石斧

地域a以外の状況と、末野遺跡及び群馬県の状況を検討する。なお、紙数の関係もあり近接する武蔵野台地を中心とした概略的な記述とした。

武蔵野台地出土の人の石斧は、形態がいわゆる草鞋形(楕円形)を呈するものが多く、大形の石斧が検出された遺跡は、お伊勢山遺跡を除くと複数の石斧が出土している。また、複数文化層から石斧が検出されている鈴木遺跡、高井戸東遺跡では下の文化層に大形と中形のもの、上の文化層に中形と小形のものがみられる傾向があった。局部磨製石斧と打製石斧の関係は、第Ⅹ・Ⅸ層では遺跡での差はあるが、際立った片寄りとはみられない。一方、第Ⅶ層より上層になると局部磨製石斧は殆どみられなくなり、打製石斧だけになる。

群馬の状況と比較すると、武蔵野台地出土の石斧は草鞋形(楕円形)を呈するものが多く、に対し、群馬県内出土の石斧は、岩宿遺跡、善上遺跡では草鞋形(楕円形)を呈するが、堀内遺跡、大竹遺跡は細身、牛伏遺跡では扁平と形態が多様である。大きさは善上遺跡の大形品を除くと、長さ8～12cmで末野遺跡の3・4の石斧と同規模の中形品が殆どである。

武蔵野台地と並んで該期の遺跡が密集している。下総台地の石斧をみると、草鞋形を呈するものはむしろ少なく、細身で両側縁が平行する短冊形に近いものや、楕円形の扁平礫の一部に剥離加工を施しただけのもの

が目につく。大きさは、長さ8～12cmのものが多く、15cm前後の石斧は坊山遺跡、出口釣鐘遺跡等にみられるだけで、中形から小形のものが多く印象である。

地域bと地域cは、資料が少なく今後の調査の進展をもって検討する。また地域fは武蔵野台地との比較検討も重要であるが、沼津市等との比較も重要な課題となっている。

おわりに

最後に、末野遺跡出土の石器群の編年位置付けに触れて終了する。群馬県内資料を検討した項目で、AT降灰以前の編年について少し触れたが、武蔵野台地等の状況と関連させて末野遺跡の資料を再考する。

群馬県及び埼玉県北部ではAT降灰以前の石器群を、層位的に細分するのは難しい状況であることが確認され、石器群の型式学的検討による細分の可能性が問われている。一方、武蔵野台地は該期に相当する立川ローマ層が黒色帯を含め分層され、幾つかの段階が議論された。その成果は、1991年の石器文化研究会のシンポジウムに著わされ、編年の大枠を立川ローマ第Ⅹ層段階(最古段階)、第Ⅹ～Ⅸ下層段階、第Ⅸ上層段階、第Ⅶ層段階とする点は、ほぼ共通の理解となった。しかし、石器群の捉え方等、認識レベルの違いは明らかで、以後の研究の進展をみている。

現況で、末野遺跡の編年的位置付けを考える際に、岩宿遺跡Ⅰ石器文化の編年的位置が重要になることは、上記で確認している。麻生・大丁原両氏は2回のシンポジウムでAT降灰以前を3段階に分けている。岩宿遺跡Ⅰ石器文化をその第1段階に位置づけ、およそ立川ローマ第Ⅹ～Ⅸ下層段階に対比している。

一方、佐藤氏は立川ローマ第Ⅸ下～Ⅹ層段階に置く意見が大勢であるとしながら、それに対し、大型の石刀を主体とする石器群、縦長剥片製攪器の存在、縦長剥片の特徴等の理由から第Ⅶ層の新しい段階としている。長崎氏は佐藤氏の編年に準拠して石斧の分析を行い、前半期前葉と後葉に二分し、形態変遷の傾向を指摘している。それによると、前半期前葉は立川ローマ

第X～IX下層段階で、楕円形を主体に、リダクションによる刃部再生で形態変化するタイプ。後葉は立川ローム第IX上～VII層段階で、楕円形を残しながらも、短冊形、撥形と長幅比が大きくなり、刃部再生は刃部周辺のみとなるタイプとしている。また、後葉になると関東では殆ど石斧がみられなくなるのに対し、北関東、中部高地等では存続していると述べている。

この様に、岩宿遺跡Ⅰ石器文化の編年的位置付けに対し、大きく二つの意見が提示されている。

上記、群馬県の編年の項で、第Ⅰ段階の下触牛伏遺跡、古城遺跡では、多量の横広剥片と台形様石器が密接に関連し、接合資料など剥片剥離の痕跡が認められる一方で、縦長剥片とナイフ形石器は客体的存在にとどまり、台形様石器がナイフ形石器の2～3倍の点数が出上していることや、石斧は局部磨製石斧が主体を占めるが、形態は多様で、いわゆる草鞋形（楕円形）を呈するものは意外に少ない点を挙げた。それに対し、岩宿遺跡Ⅰ石器文化の資料は縦長剥片とナイフ石器が主体を占め、横広剥片と台形様石器の関連はみられず、遺跡内での剥片剥離の痕跡は少なく、局部磨製石斧はいわゆる草鞋形（楕円形）を呈し、武蔵野台地の石斧と形態的に近似しているなど、特異な存在であることを指摘した。また、末野遺跡と岩宿遺跡Ⅰ石器文化が共通する点が多く、武蔵野台地との関連が重要な課題であるとした。ここでは、もう少し群馬県内の資料を検討すと、第2・3段階のナイフ形石器は、剥片を切断する急角度のBluntingが施され、素材剥片の形状を変えるものが主体を成す。石斧は局部磨製石斧が減少

し短冊形の打製石斧となる傾向がみられ、岩宿遺跡Ⅰ石器文化、末野遺跡の石器群との違いは大きい。本資料をこの段階に対比するのは、困難であると思われる。

次に、武蔵野台地で当該資料と共通する石器群として、高井戸東遺跡第X層の資料が挙げられる。高井戸東遺跡は第X層と第IX中層から石斧が検出されている。第X層からは、大形の打製石斧と局部磨製石斧の刃部破片、縦長剥片の基端部付近及び端部に、微細な剥離を施したナイフ形石器がまとまっており、台形様石器が少量含まれている。ナイフ形石器正面の剥離面の構成や、残存する打面の形状等から近似した石器群と考えられる。

以上の点から、末野遺跡の石器群と岩宿遺跡Ⅰ石器文化を併行段階とみなし、第X～IX下層段階に位置付けるのが最も妥当であると考えている。

はなはだ、雑駁な内容となってしまったが、末野遺跡から出土した資料からスタートして、AT降灰以前の段階においても、関東地域が単一な石器群ではなく幾つかの地域性がみられ、それぞれの地域によって少しずつ違った石器群が展開されていること、横広剥片と台形様石器の緊密な関係から、縦長剥片とナイフ形石器群への漸移的变化だけでは、実資料の把握が難しい点などが確認できた。

尚、末野遺跡の遺物分布状況から、小形の環状ブロックになる可能性を遺跡の説明で述べたが、結語でその点に触れることができなかった。次の機会に、改めて触れたいと思う。（西井幸雄）

2. 箱石遺跡第1号墳出土土埴輪について

今回の箱石遺跡の調査では、埴輪を有する横穴式石室墳1基が検出され、荒川上流域における埴輪消滅期の様相の一端が明らかにされた。周辺の丘陵部には古墳時代から須恵器生産を開始する末野窯跡群がひかえており、須恵器生産に密接な関連をもつ古墳群として注目されている。

本稿では、第1号墳から出土した円筒埴輪の編年的位置づけを中心に検討し、併せて形象埴輪の様相についても簡単に整理したいと思う。

(1) 円筒埴輪

出土した円筒埴輪は破片が多く全体像の判明するようなのは全くなかったが、比較的大きな破片を用いて図上復元を試みた。その結果、口径21.3cm、底径11.7cm、器高36.0cmほどの2条凸帯3段構成の円筒埴輪が復元された(第171図2)。各個体間における多少の変位幅はあるものと思われるが、ここに復元したものがおおよそ本墳に樹立された円筒埴輪の標準的な規格であったと考えられる。そこで、最近の円筒埴輪の編年研究において重視されている器高に対する各段の構成比を検討してみると、最下段は53.6%、中間段は31.1%、最上段は15.3%となり、最下段の幅が器高の1/2以上を占める器形であることが分かる。また、同時に最上段の短縮化も顕著であることが特徴として挙げられる。

さて、出土した円筒埴輪の破片を観察すると口縁部・凸帯・透孔の形態、器面の内外面調整及び底部調整の有無、基部成形、胎土・焼成・色調等の諸属性の

違いによって細分が可能である(第169図)。

まず、口縁部形態は破片数が少ないため明確でないが、緩やかに外反して端部に面をもつもの(I類)、直立して端部に横ナデを施すもの(II類)、端部が強く外反するもの(III類)の3種類が認められる。

凸帯の形態は、断面低M字形のもの(1類)、断面台形のもの(2類)、断面M字形のもの(3類)に大きく区分することができる。さらに、このうち1類は下段よりも上段の突出度の高いもの(1a類)、突出度のやや高いもの(1b類)、低平なもの(1c類)の3種類に細分される。

透孔は基本的に中間段に対向するように円孔が穿たれているが、孔径5cm前後の小さなもので右回りに穿孔されたもの(a類)と、孔径7cm前後の大きめのもので左回りに穿孔されたもの(b類)がある。

外面調整はすべて一次調整の縦ハケのみを施している。内面調整は右傾斜ハケを施した後に縦方向の指ナデを入念に施すもの(I類)と、全体にナデ調整を入念に施すもの(口類)が認められる。底部調整は外面に板押正を施すものが少量確認されているが、必ずしも主体的な調整ではない。

基部は幅5～6cmの粘土板を丸めて成形している。その際、基部粘土帯の両端を接合する方法にはR接合とL接合の二通りの方法が認められる。

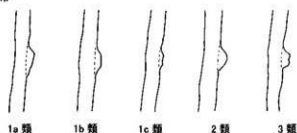
胎土・焼成・色調等の特徴は、大きく二群に大別することができる。I群は出土した円筒埴輪の主体を占めるもので、角閃石、赤色粒子等の砂粒を多量に含む。焼成は良好で、色調は橙褐色から赤褐色までの幅が認

第169図 口縁部・凸帯形態分類

口縁部



凸帯



円筒埴輪属性表

分類	口縁部	凸帯	透孔	ハケノ本数	内面調整	底部調整	基部成形	ヘラ記号	胎土	焼成	色調
A1類	I類	1類	a類	11~13本	I類	×	—	○	I群	良好	橙褐色
A2類	II類	1類	a類	10本	I類	×	R接合	○	I群	良好	橙褐色
B類	—	1類	a類	10~12本	I類	×	R接合	○	I群	良好	赤褐色
C類	—	2類	b類	10~12本	ロ類	×	L接合	×	II群	普通	橙褐色
D類	III類	3類	b類	10~12本	ロ類	○	—	×	II群	普通	橙褐色
E類	—	—	—	10本	ロ類	×	—	×	II群	普通	淡褐色

められる。一方、II群は結晶片岩、雲母、赤色粒子、白色針状物質等の特徴的な混和材を含み、全体に焼きがましく、色調は橙褐色から淡褐色までの幅があり、朝顔形埴輪や形象埴輪の多くがこれに含まれる。

a. 分類

以上の諸属性に基づいて分類した結果が、本文中で記した円筒埴輪A～E類の5分類である。本文と重複する部分も多いが、その概略を説明しておく。

A類 A類はハケ工具の異同によりA1類とA2類の二つに細分される。2cm当たりのハケメの条線を比較した場合、前者は11~13本と目が細かいのに対し、後者はそれよりもやや粗いハケ工具を使用しているが、その他の属性はほぼ共通した特徴を示している。口縁部は緩やかに外反して端部に面をもつI類と、直立して端部に横ナデを施すII類がある。凸帯の形態は断面低M字形の1類が主体を占め、下段よりも上段の突出度の高い1a類と、突出度のやや高い1b類、低平な1c類がそれぞれ認められ、その中でも1a類の比率が大きい。透孔は右回り穿孔のa類によって占められている。外面調整は一次調整の縦ハケのみを施し、内面調整は右傾斜ハケを施した後に縦方向の指ナデを入念に施すI類である。基部の成形はR接合で、底部調整はない。胎土・焼成・色調等の特徴はI群に分類される。また、ヘラ記号もA1・A2類とも二重弧線からなる共通のモチーフが透孔の脇に描かれている。

B類 B類の基本的な属性はA類に類似しているが、色調が鮮やかな赤褐色に仕上げられているのが特徴である。全体の器形はA類に共通する最下段の伸長化した器形と想定される。口縁部の破片がなく、形態は不明であるが、凸帯はA類と同じく断面低M字形の1類が主体で、バリエーションが認められる。内面調整は

A類と同じI類で、胎土等の特徴はI群である。また、1片のみであったか中間段外面にヘラ記号を線刻したものがあつた。このようにB類は胎土の特徴をはじめとして属性のほとんどがA類と共通していることから、同一の製作者集団による可能性が高い。

C類 口縁部の形態については不明であるが、凸帯の形態は2類の断面台形を呈するものが主体で、突出度の高いのが特徴である。透孔は大きめの円孔でb類に該当し、左回り穿孔である。外面調整は一次調整の縦ハケで、やや目の細かいハケ工具を用いている。内面調整は全体に丹念に指ナデ調整を施すロ類である。底部調整はなく、基部の粘土板成形はL接合である。胎土は結晶片岩、雲母、白色針状物質、赤色粒子等を含むII群で、色調は橙褐色を基調とし、A・B類との識別は容易である。なお、C類には朝顔形埴輪が一部含まれているものと考えられる。

D類 全体像は明確でないが、基本的な特徴はC類に共通し、相違点は板押圧による底部調整をもつことである。口縁部形態は端部が強く外反するIII類が確認されている。凸帯は断面M字形の3類が主体で、突出度が高い。外面調整は一次調整の縦ハケで、やや目の細かいハケ工具を用いている。内面調整は全体に丹念に指ナデを施すロ類で、内外面調整はC類に近似している。底部外面に板押圧による底部調整を施す。胎土の特徴はII群で、色調は橙褐色を基調とする。このようにD類は胎土等の特徴がC類に共通していることから、同一の製作者集団による所産と考えられる。

E類 上記の分類に該当しないものを一括した。底部の破片のみで、細部の特徴は不明である。底部調整はなく、胎土はII群の特徴を示し、その他の属性は概ねC・D類に近似している。

b. 製作者集団の復元

次に、胎土等の特徴から大別（群別）を行い、各分類の諸属性との相関関係を検討し、本墳に埴輪を供給した製作者集団の構成について復元したい。

結論から先に言うと、本墳に樹立された円筒埴輪の製作に携わった製作者集団は大きく二つに分けることができる。つまり、円筒埴輪を主体的に製作した胎土Ⅰ群に区分される円筒埴輪A・B類と、形象埴輪及び朝顔形埴輪を主体的に製作した胎土Ⅱ群に区分される円筒埴輪C・D類の二つの製作者集団である。ここでは、仮に前者を製作者集団A、後者を製作者集団Bと呼称しておく。

製作者集団Aが作った円筒埴輪は、胎土に角閃石、赤色粒子等の砂粒を多量に含み、円筒埴輪の出土量の大半を占め、朝顔形埴輪や形象埴輪の製作にほとんど関与していなかったようである。一方、製作者集団Bが作った円筒埴輪は、胎土に結晶片岩、雲母、白色針状物質等の特徴的な混和材を含み、胎土Ⅰ群との識別は容易である。この素地土を用いて円筒埴輪C・D類を製作しているほか、朝顔形埴輪や形象埴輪も同一の粘土によって製作されていることが肉眼観察によって判別することができる。おそらく、円筒埴輪の生産を中心とする製作者集団Aを補完する形で、形象埴輪や朝顔形埴輪の生産に携わっていたのであろう。

このように胎土にみられる差異は、円筒埴輪の形態的特徴や製作技法の相違とも良く一致しており、生産地を異にした埴輪製作者集団に起因する蓋然性が強いことを示唆している。

c. 埴輪の生産地について

さて、それではこれらの埴輪類の生産地は何処に求められるであろうか。

胎土Ⅰ群の円筒埴輪は角閃石、赤色粒子等の砂粒を含み、周辺では荒川中流域左岸に位置する小前田古墳群や三ヶ尻古墳群等で同一の胎土を有する円筒埴輪が出土している。胎土に特徴的にみられる角閃石や赤色粒子等の混和材は、在地の土師器とほとんど変わらないことから、荒川中流域周辺の埴輪窯から供給された

蓋然性が高い。現状では荒川右岸の姥ヶ沢埴輪窯跡群、権現坂埴輪窯跡群が調査されているが、6世紀中葉以降の埴輪生産の実態については不明な点が多く、直接的な需給関係を特定することは難しい。

次に、胎土Ⅱ群とした円筒埴輪は結晶片岩や白色針状物質等の特徴的な混和材の存在から、可能性の一つとして群馬県藤岡市に所在する本郷埴輪窯跡群からの供給が推定される。本郷埴輪窯跡群における円筒埴輪の胎土の特徴として、結晶片岩と白色針状物質（海綿骨針化石）を含むことが指摘されている（前原他1995）。本郷埴輪窯跡群から埴輪を供給された古墳の分布範囲は、群馬県中央部の平野地域を中心に広範囲に及んでいる（志村1995）。また、埼玉県内における白色針状物質を胎土に混入する埴輪の分布は、荒川以北の児下地域を中心にその広がりが確認されている（井口1997）。現状では本墳が最も南寄りに位置し、本郷埴輪窯跡群からは直接距離にして約14.5km離れている。周辺では美里町猪俣北・猪俣南古墳群でも白色針状物質を含む埴輪が報告されているが、荒川中流域の小前田古墳群では今のところ確認されていない。

胎土の自然科学分析による問題を含め、周辺の古墳から出土した埴輪や本郷埴輪窯跡系の埴輪との比較検討が十分でなく、直接的な埴輪の供給を推断することは難しい。しかし、後述するように形象埴輪のうち人や馬などの製作技法及び細部表現に藤岡周辺の古墳から出土している形象埴輪と共通する特徴が指摘できることから、承継的に藤岡周辺の埴輪製作者集団の強い影響を受けていることは間違いないと思われる。

d. 円筒埴輪の編年的位置づけ

ここでは6世紀から7世紀にかけて継続的に営まれた小前田古墳群の円筒埴輪の変遷過程を概観し、それに照らし合わせながら、本墳の円筒埴輪の編年の位置づけを問題とした。

小前田古墳群は、荒川中流域左岸の低位段丘面上に立地する総数100基前後の大規模な後期群集墳で、箱石遺跡の下流約4.5kmに位置している。昭和53・54年度に一般国道140号線バイパス道路建設の事前調査に伴

い、古墳18基、箱式石棺5基、埴輪棺1基が調査された(瀧瀬1986)。報告者の瀧瀬芳之氏により埋葬施設、円筒埴輪、土器等の検討から古墳群の変遷が5期に編年されている。このうち埴輪をもつ古墳はⅠ～Ⅳ期に認められ、Ⅴ期は胴張りをもつ横穴式石室墳が築造された段階で埴輪消滅以降の7世紀前半代に比定されている。従って、ここでは埴輪を有するⅠ～Ⅳ期を中心に円筒埴輪の変遷過程について検討する。

各古墳の相対的な序列については概ね瀧瀬氏の見解に従うことにするが、後述するように時期区分に関しては、埴輪に底部調整が出現する段階として設定されたⅢ期を底部調整の出現頻度によって2時期に細分し直し、本稿では5期に区分して記述する(第170図)。

Ⅰ期 段丘上位面に位置する第2号墳と第3号墳との間で検出された埴輪棺の示す時期をⅠ期として設定する。埴輪棺は2条凸帯3段構成の円筒埴輪を用いたもので、口径26cm、残存高33cmを測る。最上段は中間段よりも長く直線的に開く。外面調整に斜めハケを施し、凸帯は突出度の大きな断面台形を呈し、透孔は円形である。なお、調査された古墳の中には当該期のものは認められないが、周辺にその所在が1分に予想され、古墳群の形成開始時期として位置づけられる。

Ⅱ期 小規模な前方部をもつ全長30mの帆立貝形前方後円墳の第2号墳が該当する。円筒埴輪は2条凸帯と3条凸帯のものが伴出し、数量的には3条凸帯が優勢である。外面調整は一次縦ハケに統一され、この段階ではまだ底部調整は認められない。2条凸帯円筒埴輪は口径21.3cm、器高38.3cm、底径13.1cmを測り、最上段の短縮化と最下段の伸長化の傾向が窺われるが、最下段の器高に占める割合は43%とまだ小さく、前期からの漸移的变化として把握される。一方、3条凸帯のものは全体像の判明するものはないが、凸帯は断面低M字形が多く、内面にヘラ記号を描いている。

Ⅲ期 底部調整が出現する段階で、第9・13号墳等が該当する。第9号墳は河原石積み無袖型横穴式石室を内部主体とする円墳で、円筒埴輪、朝顔形埴輪、人物、馬、鞍などの形象埴輪が出土している。円筒埴輪

の規格は2条凸帯3段構成に統一され、最下段の伸長化が顕著である。この段階は底部調整の出現頻度が低く、一古墳数点程の割合にしかならない。第13号墳の円筒埴輪は図上復元で口径24cm、器高35cm、底径13.2cmを測り、最下段の割合は55%を占め、この時期を境に埴輪の形態が大きく変容している。

Ⅳ期 当該期には第6・7・10・11号墳等が位置づけられる。第10号墳は無袖型石室を内部主体としており、まだ胴張り石室の出現していない段階である。Ⅲ期に比べ底部調整の出現率が高く、第10号墳では最下段の破片のうち約65%に底部調整が施されていた。第10号墳の円筒埴輪の平均的な規格は口径23.7cm、器高39.7cm、底径12.1cm、最上段幅6.1cm、最下段幅20.6cmで、最下段の器高に占める割合は52%前後でⅢ期と大差ないが、最下段幅は最上段幅の3倍以上の長さまで発達している。

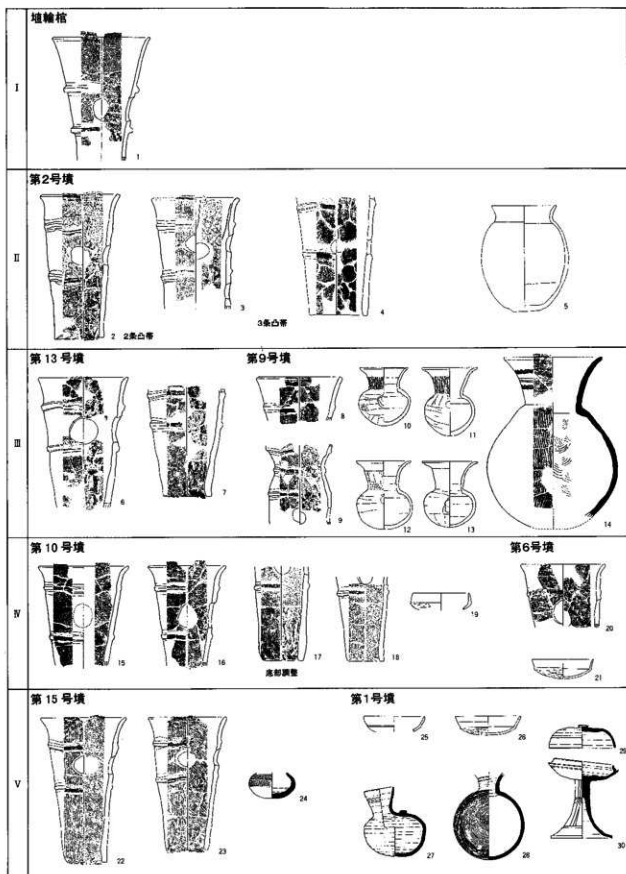
Ⅴ期 埴輪をもつ古墳の終末段階に相当し、内部主体が無袖型石室に替わって「胴張A式」と分類されている。側壁が緩やかな胴張りを有し、奥壁のコーナーが丸くなる平面プランの胴張り石室が出現する。寄居町教育委員会によって発掘調査された第1号墳が「胴張A式」の代表例である(石塚1997)。また、主体部は確認されなかったが、第15号墳も円筒埴輪の様相から当該期に位置づけられる。第15号墳出土の円筒埴輪は、底部調整を施すものの中では最も底径が小さく、最下段の長さが器高の1/2以上を占め、終末期の埴輪と考えられる。ハケ目は全体に粗く、凸帯は断面三角形となり簡略化及び粗雑化が進んでいる。

小前田古墳群における埴輪樹立の風習は、この時期をもって終焉を迎え、これ以降は「胴張B式」に分類された側壁に顕著な胴張りを有する横穴式石室を主体部とする古墳が7世紀前半代に相次いで築造される。

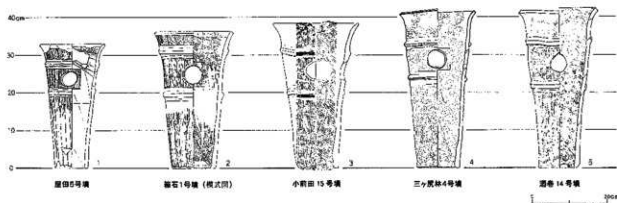
以上、小前田古墳群における円筒埴輪の変遷過程について各段の構成比の変化や内外面調整及び底部調整等に着目しながら素描してきた。

ここで当初の目的である、本墳出土の円筒埴輪の編年の位置づけについて立ちかえると、前述したように

第170図 小前田古墳群の変遷（瀧瀬1986、石塚1997より作図）



第171図 円筒埴輪の比較



形態的な特徴として、最下段の伸長化と最上段の短縮化が顕著で、細身化したプロポーションであることを指摘した。さらに、板押圧による底部調整を施したものが一部含まれている点も看過し得ない。かかる特徴はⅢ～Ⅴ期の様相に一致しており、とりわけ最上段の短縮化や低平化した凸帯の形状などはⅤ期の円筒埴輪に酷似し、周辺地域における終末段階の円筒埴輪の形態的特徴とも共通したあり方を示している(第171図)。また、埋葬施設も割石乱石積み、のり張り無軸型横穴式石室であることを勧案すれば、埴輪消滅期に相当するⅤ期に位置づけるのが妥当であろう。

次に、各時期の年代であるが、Ⅰ期の埴輪棺は副葬品がなく時期を明確にし得ないが、斜めハケ外面調整や凸帯等の特徴が類似する大福稲1号墳においてTK47型式の須恵器壺が出土していることから、年代的には5世紀末葉から6世紀初頭頃に位置づけられる。Ⅱ期の第2号墳には古手の盾や大刀などの器財埴輪が伴出し、円筒埴輪にも底部調整がみられないことから6世紀前葉を中心とした時期が考えられる。

底部調整の導入期であるⅢ期は、第9号墳からTK10型式を模倣したらしい土師器の施形土器が横穴式石室の羨道部からまともに出て上しており、6世紀中葉を中心とした年代に位置づけられる。

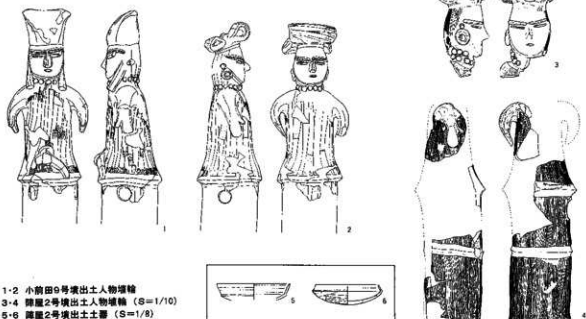
ところで、この古墳からは同一の人物によって製作された、頭布を被った男子と大髷を結った女子の2体の特徴的な人物埴輪が出土している(第172図)。ちな

みに、これらの人物埴輪の作風に極めて類似した特徴を示すものが東京都世田谷区陣屋2号墳から出土しており、当時の埴輪製作者の動向を知る上で非常に興味深い内容を提供している(寺田他1996)。なお、陣屋2号墳から出土した土師器杯の特徴も概ね先の年代観に符号している。

Ⅳ期は底部調整が本格的に導入された段階であり、第6・10号墳から出土した土師器杯の形態的特徴から6世紀後葉の年代を想定することが許されるものと思われる。ただし、Ⅲ期の土師器杯との形態差は少なく、実年代はやや短いのかも知れない。

Ⅴ期は終末期の円筒埴輪の段階である。当該期にあたる第15号墳からはTK209型式に併行する須恵器壺が出土している。さらに、第1号墳ではTK209型式ないしTK217型式に併行する須恵器有蓋高環、提瓶、平瓶等が出土している。最近の須恵器の年代観によれば、6世紀末葉から7世紀初頭を中心とした年代に位置づけられる。

このように本墳から出土した円筒埴輪は、最下段が長く伸び、それに伴い最上段が短縮化したプロポーションに変容し、低平化した凸帯の特徴等から埴輪の終末期の様相を示すことが明らかとなった。残念ながら本墳には土器が伴っていないため、築造年代を限定することはできないが、石室構造の形態的特徴や前方後円墳の消滅時期との関連などを考慮して、6世紀第4四半期頃に築造されたものと想定しておきたい。



1-2 小前田9号墳出土人物埴輪
3-4 陣屋2号墳出土人物埴輪 (S=1/10)
5-6 陣屋2号墳出土土器 (S=1/8)

(2) 形象埴輪

a. 形象埴輪の組成と特徴

第1号墳から出土した形象埴輪の種類には人物、馬、鞍、盾、大刀、家、不明器財等がある。破片が多く全体の形態的特徴が判明するものはないが、人物埴輪では棒状の美豆良や撥形の島田髷の破片から男女それぞれが複数個体あったことが分かる。さらに、小丸状の線刻と連続刺突文によって表現された革鞆の冑や大刀を佩用した半身像の裾部の破片から武装男子や正装男子など多彩な人物群像の存在が想定される。

馬形埴輪は顔泥の破片と耳の部分が出土しているだけである。この他に胸繫や尻繫に装着されていたと考えられる馬鈴3点が出土しているにすぎない。

馬鈴は一般的な粘土塊によって成形された中空式のものではなく、いずれも中空式のものである。また、その製作技法には特徴的な2種類の技法がある。一つは球形に鈴を形作りへう先で鈴口を線刻するもの、もう一つは半球形に鈴を形作りへう先で鈴口を刻み、中央に丸棒を差し込んで本体部分と接合したものである。前者は荒川以北の児玉・大里地域の古墳から出土する例が多く、周辺では小前田6号墳、長沖8号墳、南塚原24号墳、諏訪ノ木古墳等で確認されている。後

者の類例は管見によれないが、大刀形埴輪の勾金に貼付された三輪玉や家形埴輪の大棟に乗せた堅魚木などを接合するために丸棒を差し込む接合技法との共通性を窺うことができる。

このような中空式の馬鈴や丸棒の刺突による接合技法は、6世紀後葉以降に本郷埴輪窯跡をはじめとする上野西部で盛行した製作技法の一つであり、先述した埴輪の需給関係を裏付けるものである。

家形埴輪は小片しか出土していないため不明な点が多い。破風や上屋根の下端に2条の凸帯を巡らした破片から、上屋根と下屋根を分離造形した入母屋造の家形埴輪が存在していたことが推定される。

次に、器財埴輪は鞍、盾、大刀、器種不明破片など種類が豊富である。その中でも鞍形埴輪は複数個体樹立されていたことが、鋳表現部の破片の観察から明らかで、少なくとも5個体以上が存在していた。矢筈部の復元された1個体以外は、いずれも破片のみで全体像は判然としなが、背板と矢筈部の接合技法について新知見を得ることができた。また、盾と大刀については小破片しかなく、詳細は不明である。ただし、大刀形埴輪は護手部に三輪玉を模した粘土塊を貼付したものであることが判明している。

このように良好な資料は少なかったが、築造当初本墳には多種多様な形象埴輪が樹立されていたことが知られた。とりわけ萩形埴輪を中心とした武器・武具形埴輪が充実した内容を示していた。こうした武器・武具形埴輪を中心とした形象埴輪の盛行が、関東地方における6世紀中葉以降の中小古墳の大きな特質であると指摘されている(坂1988)。

b. 萩形埴輪の製作技法と分類

ここでは萩形埴輪の背板と矢筈部の接合技法を中心に検討し、それに基づき萩形埴輪の形態分類及び変遷過程等について考えてみたい。

関東地方で確認されている萩形埴輪は、畿内の前・中期古墳から出土しているものとは形態が異なり、円筒形の台部の上に奴舁形の背板を有する矢筈部を表現したもので、背板よりも鎌を表現する矩形の板が上方に突出しているのが特徴である。畿内の前・中期古墳において器財埴輪の中心的な器種として、「聖域」を守護する防御的な役割をもって発生、展開したものと考えられている(高橋1988・1992)。

さて、本墳から出土した萩形埴輪の特徴について各部位ごとにみていくことにしよう。

鎌表現部 合計6点の鎌表現部の破片が出土している。鎌の表現は、いずれも単沈線によって矢印形を描いている。6本前後の鎌を表現したものが多く、側縁部には粘土紐の貼付により鎌金部を表現する。矢筈部との接合は鎌表現部下端を矢筈内部に挿入して、挟み込む手法である。また、背面には2本の補強帯が認められる。

矢筈部 円筒形の台部の上に奴舁形の背板を有する円形断面の矢筈部を表現する。矢筈部中央には上下を二分するように横帯が表現され、上半部には左右に大きく張り出した翼状の背板をもつ。矢筈部の鎌金については欠損しているため不明であるが、粘土紐の貼付により凹字形に表現されていたものと思われる。また、矢筈部下半部には左右に鱗状の裾部を有し、その下端に横帯を貼付するものと、しないものがある。

なお、矢筈部正面には線刻で円文や三日月文が描か

れており注目される。このうち円文は矢筈部の中央横帯の上部に描かれていることから背負い紐の結び目を抽象化したものと考えられる。

背板接合技法 矢筈部と背板(翼部・裾部)の接合方法には数種類の技法が認められる。小淵良樹氏の接合技法に関する見解を参考にとすると、「T字型貼り付け式」、「ホゾ貼り付け式」、「差し込み式」、「切開差し込み式」の4種の存在が認められる(小淵他1980)。

T字型貼り付け式 矢筈部に背板となる粘土板をT字型に当て、基部に粘土紐を貼付して補強したもの。第134図35の翼部の破片に認められる。

ホゾ貼り付け式 基本的な接合技法はT字型貼り付け式に共通するが、翼部下端にホゾ状の円形突起を有する。第134図29の翼部の破片が該当する。類例に乏しく特殊な技法と考えられる。T字型貼り付け式の亜種であろうか。

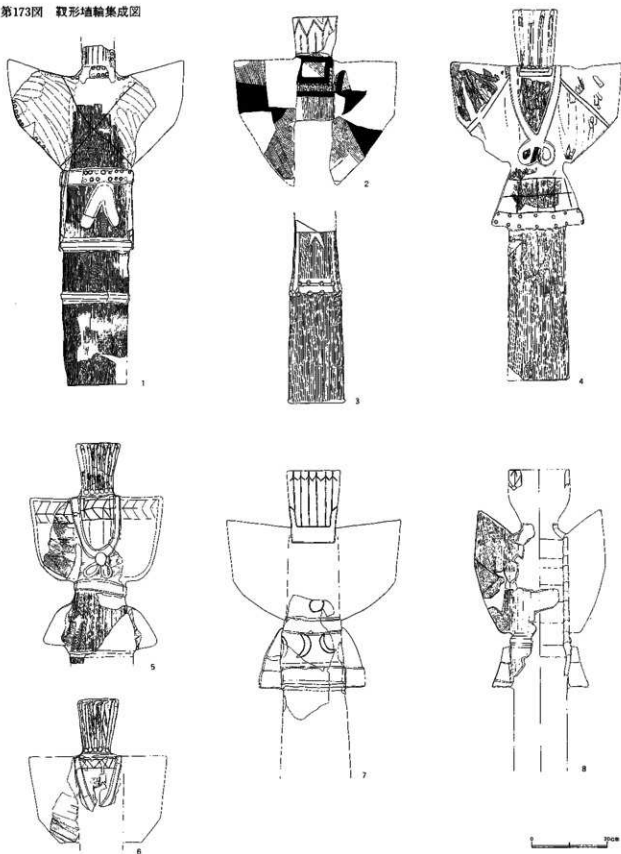
差し込み式 矢筈部に粘土板を取り付ける部分を粘土板の大きさに基づいて切り抜き、そこに粘土板を差し込んで接合したもの。第132図22が該当し、翼部と裾部の両方とも同一の技法で接合している。

切開差し込み式 円筒形に形作った矢筈部を縦割りに切開して、粘土板を挟み込んで再接合したもの。第134図32で良くその技法を観察することができ、裾部の接合技法として用いられている。

背板と矢筈部の接合技法には上記のような種々の技法が認められた。管見にふれた中では、小前田6号墳例は裾部をT字型貼り付け式で接合していた。小前田10号墳例では翼部、裾部ともに切開差し込み式である。また、酒巻15号墳例では翼部は切開差し込み式、裾部はT字型貼り付け式を用いて接合していた。このように同一個体においても翼部と裾部で異なった技法を用いている場合が多く認められ、単純に時期差として置き換えることは難しい。今後は各技法間の相関関係に留意しながら、技法の消長や承継関係を整理することが必要である。

形態分類 今回の出土資料の中には全体の形態の分かるものが含まれていないため、埼玉県内の類例を中心

第173図 穀形埴輪集成図



1 将軍山古墳、2・3 割山埴輪窯跡（1類）、4 酒巻15古墳、5・6 小前田10号墳（2A類）
7 箱石1号墳（2B類）、8 一本松古墳（3類）

に形態分類を行い、本墳出土例の位置づけについて検討したい。

関東地方の竊形埴輪について検討を行った志村哲氏は、矢筒の形態により2種類に大別され、その系列関係を明らかにされた(志村1998)。そこで、志村氏の分類を基にして北武蔵における竊形埴輪の形態分類について検討した結果、その終末段階に背板表現の簡略化が進行し、上記の分類からやや逸脱したものが散見されることから、新たに終末形態として3類を設定した。また、2類は鎌の表現方法によって細分することにした。以下、各分類の概要を記す。(第173図)

1類 矢筒部は断面筒形を呈し、上半にのみ左右に張り出す背板を取り付ける。背板は横から見ると、矢筒前面側に取り付けられている。鎌は線刻で表現する。横帯の下には背負い紐の結び目を表現した逆U字形の垂飾りが付く。

2類 矢筒部は断面円筒形を呈し、背板の上半は左右に翼状に張り出し、下半は鱗状となる。背板は横から見ると、両側面の中位に取り付けられている。

なお、2類は鎌の表現方法によって粘土紐の貼り付けによる2A類と線刻による2B類に二分される。また、背負い紐はリボン形の結び目を表現するものが多く、その表現方法は鎌表現に対応して、粘土紐貼り付けによるものと、線刻表現によるものがある。

3類 矢筒部は断面円筒形を呈し、背板上半は上方に向かって立ち上がる翼部が付き、下半は形骸化した鱗状の張り出しをもつ。矢筒部から鎌表現部への移行は括れ部を形成する。背板は横から見ると、両側面の中位に取り付けられている。鎌は線刻で表現する。

1類には群馬県塚廻り1号墳、古海松塚37号墳、駒形神社埴輪窯跡埴輪集積場、埼玉県将軍山古墳、割山埴輪窯跡、栃木県織姫神社境内古墳、唐沢ゴルフ場埴輪窯跡、足利市田中町出土品等が確認されている。分布範囲は上野東部から下野西部、北武蔵北東部に広がる。2類は奴隸形を呈する竊形埴輪の典型例である。岡本健一氏が指摘するように鎌表現は太筋では粘土紐を貼付するものから線刻表現へ簡略化が進行し、それ

に対応するように背負い紐の表現も変化している(岡本1995)。2類の代表例には小前田6・10号墳、広本大町2号墳、南塚原24号墳、円山2号墳、黒田11号墳、酒巻15号墳、鶴ヶ塚古墳、生田埴輪窯跡、割山埴輪窯跡等が知られる。3類は翼部が上方に立ち上がる一本松古墳を代表例とする。

各分類の変遷過程について志村氏は1類の断面筒形から2類の断面円筒形へ大きく変遷し、背板の取り付け位置も盾形埴輪の盾面と同じように前面から側面に変化すると指摘している(志村1998)。かかる変化は共存遺物の検討からも裏付けられるが、私見では1類と2類は別系列であり、時期的に併存するものと推定される。また、矢筒部縁金具や横帯等に粘土粒を貼付する銀鈿表現は新しい様相と考えられる。

変遷 北武蔵において埴輪に造形された竊の初現は5世紀後葉の築造とされる稲荷山古墳から竊を背負った半身像が出土している。しかし、器財埴輪としての竊形埴輪の関東地方への出現は、現状では蓋や盾などの他の器財埴輪よりも遅れ、6世紀に入り大刀や鞍などの武器・武具形埴輪とともに新たに組成に加わった。

初現的なものとして、初期横穴式石室をもつ6世紀初頭の群馬県前二子古墳から矢印形を線刻で描いた鎌表現部の破片が出土しており、出現当初から線刻表現のものが存在していたことを示唆している。なお、前二子古墳からは蓋、大刀、「石見型」盾などの器財埴輪が共存しており注目される(右島1995)。

6世紀前葉では1類の塚廻り1号墳、古海松塚37号墳、割山埴輪窯跡等が挙げられ、現状では2類の良好な出土例はない。より実物の竊に近い形態の1類が主体を占め、初現的な大刀形埴輪や鞍形埴輪との伴出例が目立つ。

6世紀中葉から後葉にかけて2類が上野、下野、北武蔵の広い範囲に分布し、武器・武具形埴輪の主座を占めるようになる。また、一古墳へ多数樹立するものが普遍化する。前半段階では2A類の粘土紐の貼り付けによって鎌を表現しているものが多いが、後半段階では2B類の線刻表現に統一される。鎌の表現方法を細か

くみると、粘土紐貼り付けでは鑑全体を表現したもの、粘土紐を貼付し線刻で逆刺を表現したもの、曲線的な片刃箭鑑を表現したものなどバリエーションが認められる。また、線刻表現では矢印形が主流を占めているが、他に曲線的な片刃箭鑑を表現したもの、鑑表現を欠き直線のみで表現したものなどが認められ、稀にも表現しないものがある。

この時期の代表例として1類では鋳留表現を多用する將軍山古墳例がある。2類には済巻15号墳、諏訪ノ木古墳、南塚原24号墳、小前田6・10号墳、黒田11号墳等が知られる。

埴輪消滅期にあたる6世紀末葉から7世紀初頭段階には、翼部が小型化した駒形神社埴輪窯跡集積場例が1類の中では最新相を示す。2類では矢筒部の円筒化が最も進行した箱石1号墳例や、翼部が上方に立ち上がり、背負い紐の表現を省略した生出塚埴輪窯跡例などが位置づけられる。3類とした一松山古墳例も翼部の形態や矢筒部と鑑表現部の接続技法に形骸化が窺われ、終末段階の様相を呈している。

(3) まとめ

箱石遺跡第1号墳の調査では、胴張りを有する無袖型横穴式石室を内部主体とする墳丘径約18mの円墳であることが明らかにされた。また、円筒埴輪と駒形埴輪を主体とする形象埴輪が検出され、荒川上流域における埴輪樹立古墳の様相を具体的に把握することができた。特に、埴輪消滅期における駒形埴輪の製作技法や系譜関係について新しい知見が得られた。

このほか出土遺物では横穴式石室から鉄製の鎌と弓金具がそれぞれ1点ずつ検出されているが、残念ながら土器類は全く出土しなかった。このため古墳の築造年代を推定する手がかりが少なく、円筒埴輪の編年的位置づけの検討から古墳の築造年代について6世紀第4四半期を中心とする年代をもとめた。

次に問題となるのは至近距離に位置する古墳時代後期の須恵器窯が調査された末野遺跡との関連である。末野遺跡では3基の須恵器窯が検出され、灰原の切り合い関係から3号窯→2号窯→1号窯の順序で継続的に操業されたことが明らかにされている(福田1998)。このうち時期的に関連してくるのは第3号窯跡の年代である。第3号窯跡は出土した須恵器の型式的特徴が陶邑古窯跡群のTK209型式古段階に共通することから7世紀初頭前後に操業が開始されたと想定されている。また、製品の一部が直線距離にして約28km離れた埼玉古墳群の中の山古墳へ供給されていたことが「須恵質埴輪査」の出土から明らかにされている。

中の山古墳は、埼玉古墳群の中では將軍山古墳に後続する最も新しい時期に築造された前方後円墳で、周辺の若王子古墳や小見真観寺古墳とともに埴輪を樹立していない終末期前方後円墳の一つである。部分的な調査ではあるが、中の山古墳の墳丘には埴輪の代替品としての性格の色濃く「須恵質埴輪査」が樹立されていたことが明らかにされており、周辺で埴輪樹立の風習が終了した時期に前後して築造されたものと想定される(若松他1989)。

このように埴輪の消滅、前方後円墳の築造停止、末野窯跡群の本格的操業といった現象は、時期的に近接した時間幅の中で齎起した一連の歴史的な現象として把握されるものである。

かかる状況から考えて、本墳に埋葬された被葬者が何らかの形で須恵器窯の経営に携わっていたことは想像に難くない。やや想像をたくましくすれば須恵器生産を直接管掌した集団の有力者層の墳墓として位置づけることも十分考えられよう。しかし、本墳からは年代的な位置づけを比較し得る土器類が全く検出されていないため、末野窯跡群を巡る歴史的な性格については今後の検討課題としたい。

(大谷 徹)

3. 城見上・末野遺跡の須恵器生産について

(1) 粘土採掘坑・住居・窯の関係

城見上・末野遺跡の奈良・平安時代における主要な遺構は窯・住居・粘土採掘坑である。これらは当時の須恵器生産の中で重要な要素である。そこでこれらを個々にみていき、最後に3つを総合して、その関係を述べたい。(第174図)

粘土採掘坑は全部で3ヶ所4群検出された。どの群も台地の斜面や、谷などの低い所に位置する。A区にある粘土採掘坑群をI群、B区にあるものをII群、D区にあるものをIII・IV群とする。

I群は東から西へ緩やかに傾斜している斜面にあり、標高124mから126mの間に密集している。南北は不明だが等高線にそくして広がっていると考えられる。遺物は7世紀末から8世紀前半と9世紀のものが出土している。主体は前者である。

II群は谷にある。調査区東端が谷底になる。粘土採掘坑は谷の西側にある。調査区が狭いためII群がどこまで広がっているかは確認できなかったが谷に沿って南北に広がると考えられる。遺物は谷底にある第8号土坑からは8世紀後半のものがそこ以外からは9世紀のものが出土している。

III・IV群は、南にはりだす台地と台地の間にある、浅い谷に位置する。III群は谷の西側の斜面にある。粘土採掘坑は東西に35mの幅を持ち、南北は不明である。しかし、調査区南側には検出されなかったので、粘土採掘坑は北へ広がる可能性が高い。遺物は、西よりの高い方からは7世紀末から8世紀前半のものが出土したが、東の低い方には遺物はなかった。

IV群は、III群の対面にあたる東側の斜面にある。斜面の上の方には円形や楕円の上坑が多く、下の方は大きくて不整形の上坑が集まっている。この群の東側の終わりはE区の西端にある第30号土坑までである。南北の方向へは、斜面の高い方は北へ、低い方は南へ広がる可能性がある。遺物は高い方からは9世紀後半のものが出土している。この中にはSX11がある。これは、土器を意図的に廃棄したもので、粘土採掘坑に直

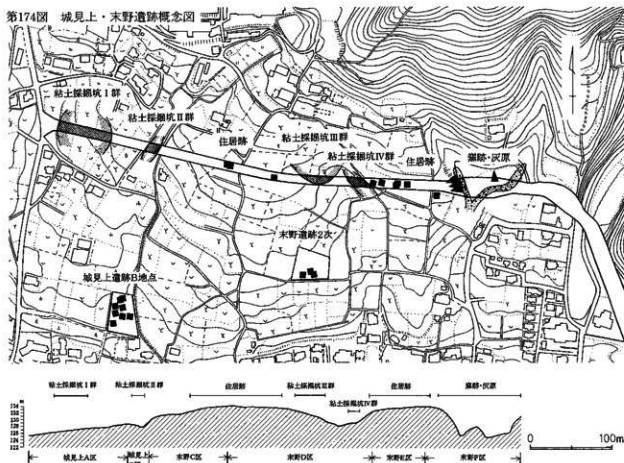
接伴うものではないが、採掘坑の底面に近い位置から出土しているので、粘土採掘坑との時期差はほとんど無いと考えられる。遺物の時期は9世紀後半である。低い方の採掘坑からは8世紀前半のものが出土しているが、図示したものは1点のみで、採掘坑の時期を決めることはできない。

城見上・末野遺跡の粘土採掘坑は7世紀末から8世紀初頭にI群とII群で始められた。I群は東西約50mという長さで採掘坑が連続的に掘られていて、出土遺物が多い。このことから相対的ではあるが、多くの人が多量の粘土を採掘していたと考えられる。その後、8世紀後半にはII群のような谷の底から粘土を採掘するようになる。そして、9世紀に入ると、I・II・IV群と各地点で粘土を採掘するようになる。その特徴は前代の採掘坑や谷地形などを利用して、労力を少なく、粘土を採りやすい所から採掘するようになることである。出土遺物が少ないことから、小規模であることが考えられる。

次に住居について考えてみる。住居はII・III群の間の古地上に3軒と、IV群の東の台地上に5軒検出されている。どちらも9世紀後半の住居であるが、第1号住居跡から第3号住居跡はカマドや貯蔵穴とおもわれるピットは確認されたが、床や柱穴などがはっきりしない。一方、第4号住居跡から第8号住居跡はごく一般的な住居である。これより第1号住居跡から第3号住居跡は、粘土採掘のための一種の作業場で、第4号住居跡から第8号住居跡は工房兼居住空間として使用されていたのではないかと。

粘土採掘坑群IIIから南に160mほどいった所に位置する末野遺跡(第2次)からは9世紀の住居跡が1軒ある。ここは1993年に寄居町教育委員会で調査した地点である。住居跡は竈入れ前の平瓦を出土したことで有名であり、時期は9世紀代だが、本調査区の住居跡よりは若干古いとおもわれる。これらの住居跡は9世紀の粘土採掘坑群との関係が考えられる。末野遺跡(第2次)には他に7世紀前半の住居跡1軒と補強帯の付

第174図 城見上・末野遺跡概念図



いた壁の口縁部を出土した粘土溜遺構が見つかった。

今回の調査では、粘土が採掘され始めたころの住居跡は検出されなかったが、城見上B区から南へ200mほどいったところにある城見上遺跡B地点から、7世紀末から8世紀初頭の住居跡が2軒見つかった。粘土探掘坑群I・IIIとの関係が考えられる。ここでは他に9世紀代の住居跡も3軒検出されている。

E区の住居跡が検出された古地から東には窯跡と灰原のF区がある。F区には2つの谷がある。西側の谷には古墳時代後半の窯3基と灰原が、東側の谷には平安時代の窯1基とそれに伴う灰原が検出された。この遺物の小型器種は、皿、高台付杯の3種で蓋が焼成されないため、平安時代でも新しいと思われる。

その他東側の灰原には7世紀末から8世紀の遺物が出土している。このためこれらの遺物を焼成した窯がこの谷の奥にあると考えられる。この灰原と今回は検出されなかった窯は粘土探掘坑群I・IIIとの関係が考

えられる。

粘土探掘坑・住居・窯をそれぞれ見ていくと、どの要素も7世紀末から8世紀前半と9世紀に分けることができる。3要素をまとめると、前期と後期では異なる様子がみえる。前期は、粘土探掘坑から住居までは230m、住居から窯までは500m、窯から粘土探掘坑までは550mである。3点を結ぶと二等辺三角形に近い形になり、粘土探掘坑と住居は近く、窯場は遠い。後期は東の粘土探掘坑から西の窯場までの550mの間に粘土探掘坑・住居・窯が地形に促して散在している。

前期と後期は奈良、平安時代として置き換えられる。城見上・末野遺跡における須恵器生産をまとめると、奈良時代は平安時代と比べて大規模で集中していて、平安時代は小規模で散在しているといえる。今回はこのような結論に達したが、調査された箇所は遺跡のほんの一部にすぎないため、遺跡全体にこの様なことがいえるのかは分からない。今後の調査の成果によって、明かになっていくであろう。

(2) 末野産蓋の形態的变化

1. 城見上・末野遺跡出土蓋の分類

これまで北武蔵の須恵器編年研究は坏類を中心とし、それに伴する他の器種を並べることが多い。蓋も例外ではなく、蓋を中心にした研究は少なく、その実態はあまり分かっていない。これには生産地である末野窯跡群の調査がこれまであまり行われておらず、末野産の蓋に関して不透明な部分が多いためである。

今回の城見上・末野遺跡の調査で、奈良・平安時代の蓋が一定量出土した。これにより、この地域の蓋について検討する。しかし、出土した蓋の多くは破片であり、ここの資料だけでは蓋がどのような形態をし、どう変化していくのかは理解しきれないと思われる。そこで、奈良・平安時代の特に末野産須恵器が多く供給されている北武蔵の集落出土蓋を使い、蓋の変化とその方向性について考えてみたい。

両遺跡⁽¹⁾から出土した蓋は、ほとんどが破片である。そのため視点をつまみと口縁端部に分け、その形態を観察し、それぞれを分類した。つまみは1～7類とその他に、端部はA～F類に分けた。(第175図)

つまみ

- 1類 宝珠状。他に乳頭状、截頭円錐状がある。
- 2類 擬宝珠状のもの。
- 3類 リング状に近いもの。
- 4類 外形は扁平で、中心を意識的に尖らせている。
- 5類 扁平でへこませず、水平である。
- 6類 扁平で中心やその周辺がへこんでいる。
- 7類 つまみがつかない。
- その他 出土数が少量のため類を設定できない。

端部

- A類 かえりがあり、径が12cmを越えない。
- B類 かえりがあり、径が12cm以上。
- C類 器高が低く、かえりが小さく、奥に入っている特殊なもの。
- D類 器高が高く、口縁部外面に段をもち、開く。かえりは断面三角形の粘土紐が貼り付けられる特殊なもの。

E類 かえりがなく、端部が自然に屈曲する。

F類 口縁部周辺でへこんで、屈曲する。

2. つまみ・端部の相関関係

つまみと端部がどのような関係にあるかをみていきたい。つまみ・端部の相関関係表内の()は末野・城見上遺跡出土の蓋である。例えば、1-Aは22点中6点が城見上・末野遺跡のものである。それを見ると、1-A、5-F、6-Fが多く、つまみ2～4類と端部B～E類については、その関係はほとんど不明であった。そこで末野産が大量に供給されていると考えられる集落出土の蓋を分類し追加してみた。使用した遺跡は八幡太神南、城見上B地点、将監塚・古井戸、熊野、内出、白山遺跡⁽²⁾である。

1類は全てA類の端部をもつ。2類はA・B・E類をもつが、その主体はB類である。2b類は5点中3点がB類をもち、少量だが2類と同様にB類が主体と言える。その他A・C類に1点ずつある。3類はC・E類をもつ。4類は全てE類をもつ。5類はE・F類をもつ。両方とも10点以上と多い。6類は全てF類をもつ。その他は2点ともF類の端部をもつ。

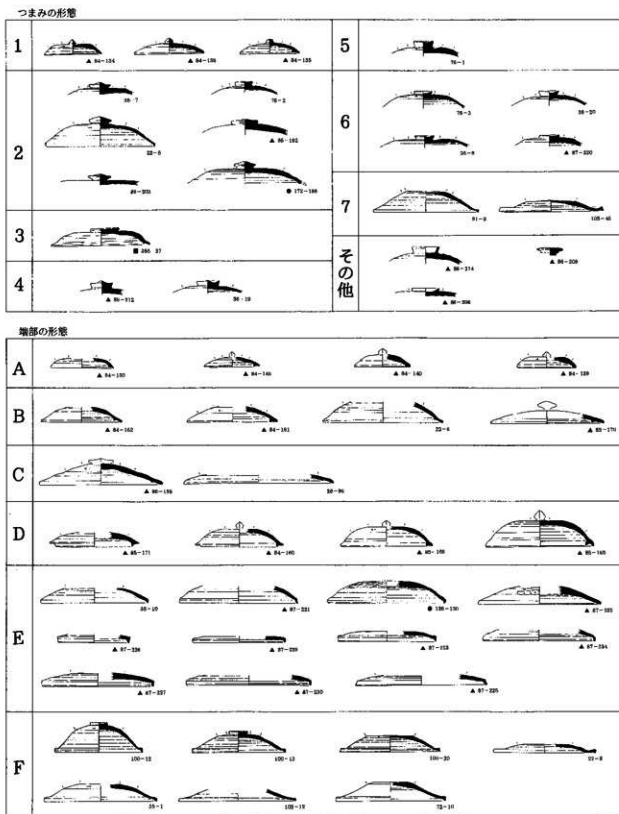
2-Eは城見上遺跡の1点のみで、他の遺跡からは出土していない。端部D類は末野遺跡ではつまみの形態が分かるものが1点もなく、他の遺跡からはつまみ以前に、同様の端部もみられない。このため端部D類にはどのようなつまみが付くのかは分からなかった。

各々の組合せをみると主体的な類のみか、主体的な類とその前後の類に数点みられる。つまみと端部の変化の方向がある程度リンクしているためと考えられる。出土量をみると、1-Aと2-Bが全体の37%で5-E・Fと6-Fが43%を占めている。

つまみ・端部の相関関係表 ()は城見上・末野遺跡出土

	A	B	C	D	E	F
1	22(6)					
2	1	15			(1)	
3	1	3	1			
4			2		3	
5					5	
6					12(1)	14(8)
7						17(7)
その他						2(1)

第175図 城見上・末野遺跡出土の蓋



3. 蓋の変化と伴遺物

つまみと端部の組合せが、他の組合せとどう相伴するのかを、他の集落内住居跡出土蓋を使って考える。又、その組合せが、遺物とどう相伴するかをみていく(第176・177図)。

第1段階は1-Aのみのである。この段階には八幡太神南遺跡1号住居跡が挙げられる。口径10cm以下の環が伴う。底部の調整は全面回転ヘラケズリ、全面手持ちヘラケズリ、ヘラ切りがある。

第2段階は2-Aと2-Bが相伴する。城見上遺跡B地点3号住居跡を挙げた。2-Aは16だけで他は2-Bである。径は12~14cm、16~17cmである。口径12cm・16cmの環が伴う。底部の調整は全面回転ヘラケズリと全面手持ちヘラケズリがある。

第3段階は、つまみは2~4類、端部はA~C・E類がみられ、その組合せは6通りにもなる。この段階は組合せに多様性があることが特徴である。

将監塚・古井戸遺跡76号住居跡他4軒は、2-Bが主体である。径が12cm以下の小ぶりの蓋は極端に減り、小ぶりでも37のようにつまみは3がつく。代わって、3-Bが伴うようになる。径は18cm以上で、前段階よりも更に大きくなるものが出てくる。つまみ径も大きく、扁平になる。これらは3段階でも古い様相がみられる。

将監塚・古井戸遺跡144号住居跡は2-B、3-Bに端部C類が伴っている。53・54はC類だがつまみが欠損しており、その形態は不明であるが、2類が付く可能性が高いと思われる。

内出遺跡13号住居跡は、2-B、3-C、4-C、4-E類が相伴する。径が18cm以上の大ぶりのものが多い。ここで初めてかえりのない端部が出現する。65はかえりがなく、径が12.3cmと小さい。3段階でも新しい様相がみられる。

相伴する環は口径12~16cmのものと18cm以上の大ぶりのもので、底部の調整は全面回転ヘラケズリである。他には内出13号住居跡から銅製鋳帯が出土した。

第4段階は大きな変化がみられる。つまみは2・3

類がなくなり、4~6類になる。端部はかえりが完全に消失し、E類のみになる。この段階は新旧に分けられる。前半は3段階から続く4-Eに、新たに5・6-Eが出現する。全体的に器高が低い。将監塚・古井戸遺跡114号住居跡と内出遺跡12・10号住居跡が挙げられる。この蓋は、南北企産と群馬産のもので、末野産の蓋はみられなかった。口径12.3cm~16.2cmの環が伴う。底部の調整は前段階と同様全面回転ヘラケズリである。後半は4-Eがなくなり、6-Eが主体的になる。器高が高くなる。熊野遺跡21・15号住居跡が挙げられる。環は形態が前半と同じだが、底部の調整は糸切り後、外周回転ヘラケズリである。

第5段階は、ほとんど6-Eである。将監塚・古井戸遺跡155号住居跡の103は4類、104は5類でこの段階にもこのタイプのつまみが存在することが分かる。しかし、105・106のような端部を持つのかは分からない。他には白山遺跡57・58・78号住居跡を挙げる。口径12cmと前段階より小さい環が伴う。底部の調整は糸切り後、外周回転ヘラケズリのものと、糸切り離しのものがある。この段階になると高古付環が伴うようになる。白山遺跡78号住居跡には口径12cmの小ぶり134と15cmの大ぶり135の高古付環がみられる。白山遺跡57号住居跡からは壺G122と甲斐型環I25がある。甲斐型環は将監塚・古井戸遺跡155号住居跡からも出土している。

第6段階は4・5・6-Eに加えて6-Fがみられるようになる。ここでの4・5・6-Eは前段階までとは異なった形態をしている。155は4-Eだが、3・4段階のそれと比べると径が小さく、器高も高い。つまみより扁平になっている。138・139は5-Eだが、前と比較すると、径とつまみが小さくなっている。器高が高く、端部の屈曲がF類により近い。つまり同じ類でも新しくなると他の影響を受けて、新しい形態に変化する過渡的な形態がみられるようになる。又、将監塚・古井戸遺跡145号住居跡は前段階までの5・6-Eと新しい形態の6-Fが相伴している。従って、この住居跡は古い要素と新しい要素が相伴していると

第176図 蓋の変化と共伴遺物 (1)

数量 種類		蓋	共伴遺物
1	1-A	八幡山・大井戸 1 号位        	           
	2-A 2-B	八幡山・大井戸 2 号位      	   
3	2-B 3-A 3-B	内蔵山・大井戸 17 号位                                                                                                                	

第177図 蓋の変化と共伴遺物（2）

段階・土層・層部		蓋	共伴遺物			
5	4-E	将監塚・古泉戸 100 分佈				
		井戸 107 分佈				
		井戸 108 分佈				
		井戸 109 分佈				
		井戸 110 分佈				
		井戸 111 分佈				
6	4-E 5-E 6-E 6-F	井戸 112 分佈				
		井戸 113 分佈				
		井戸 114 分佈				
		井戸 115 分佈				
		井戸 116 分佈				
		井戸 117 分佈				
7	7-F	井戸 118 分佈				
		井戸 119 分佈				
		井戸 120 分佈				
		井戸 121 分佈				
		井戸 122 分佈				
		井戸 123 分佈				

(S=1/8)

言える。後半になると6-Eが主体的になる。坏は口唇部がわずかに外反するようになり、底径が小さくなる。底部の調整は、ほとんど糸切り離しである。高台付坏も坏と同様の变化し、器高が高くなる。皿がみられるようになる。

第7段階は7-Fのみである。ここでは将監塚・古

井戸遺跡103号住居跡しか挙げなかったが、他にも36・102・117・149号住居跡などがある。坏は更に底径が小さくなり、口唇部が外反する。皿・高台付坏もある。これ以降の段階には蓋はみられなくなる。この段階を蓋の最終段階とする。

4. まとめ

城見上・末野遺跡の蓋について、近隣の集落出土蓋を使用し、その変化をみてきた。まとめると、宝珠つまみ他は、小ぶりのかえりのある端部をもち、1段階にみられる。この端部は2・3段階まで若干ある。擬宝珠つまみは、12cm以上のかえりのある端部と特殊なかえりの端部をもち、2・3段階にみられる。特殊なかえりの端部は3段階後半にみられる。扁平で中心を意識したつまみは、特殊なかえりとかえりがなくそのまま屈曲する端部をもち、3段階後半から6段階までみられる。3段階にのみ特殊なかえりの端部がある。扁平で水平なつまみは、かえりがなくそのまま屈曲する端部をもち、4段階から6段階までみられる。扁平で中心やその周辺がへこんでいるつまみは、かえりがなくそのまま屈曲する端部と口縁部周辺でへこんで屈曲する端部をもち、4段階から6段階までみられる。口縁部周辺でへこんで屈曲する端部は6段階にのみある。つまみのないものは口縁部周辺でへこんで屈曲する端部をもち、7段階にみられる。7段階が蓋の最終段階である。

1段階から3段階は宝珠つまみにかえり蓋で、4段階から6段階は扁平つまみでかえりのない蓋になる。3段階後半は扁平で中心を意識する中間的なつまみが、特殊なかえりとかえりがない端部の両方と組合う。古い要素と新しい要素が、混在している様相がみえる。産地をみると、1段階は末野・群馬・東海・尾張産と他地域からの供給がみられ、多様性がある。2・3段階には末野産が主体となり、わずかに群馬産がみられる。4段階になると、末野産が減少し南比企産が供給されるようになる。末野・南比企・群馬産がそれぞれみられる。5段階以降は再び末野産が主体的になり、他地域のものはみられなくなる。

年代については、1段階は、赤熊浩一氏の末野遺跡編年⁽²¹⁾第IV期に併行する。2段階は第VI期に併行し、3段階は第VII期に併行する。3段階後半は内出遺跡13号住居跡から銅製鈿帯が出土しているため、酒井清治氏によると、上限が8世紀第1四半期前半に位置づけ

られる⁽²⁴⁾。4段階は末野第VIII期に併行する。5段階は将監塚・古井戸遺跡155号住居跡から甲斐型環⁽²⁵⁾、白山遺跡57号住居跡から壺Gと甲斐型環が出土しているため8世紀第4四半期から9世紀第1四半期に位置づけられる。

今回の検討では、集落の蓋を援用したので、窯では出土しているのに集落にはないものがあり、それについては不明な点がいくつかある。ひとつは端部D類である。D類にどんなつまみがつくのか分からなかった。また、段階もかえりがあるので、5段階以前だが、それ以上は不明である。ふたつめは端部E類である。末野遺跡には器高が低いE類が出土しているが、これがどのようなつまみをもつのかは、今回明確にはわからなかった。次回以降の課題とした。

本稿をまとめるにあたって、赤熊浩一・富田和夫両氏に多くのご教示を受けた。記して、感謝の意を表します。
(永井いずみ)

註

- (1) ここでいう城見上・末野遺跡出土蓋は本報告書以外に堀田1998年『末野遺跡Ⅰ』、赤熊1999年『末野遺跡Ⅱ』を含む。
- (2) 分類した各遺跡の出典は、八幡太神南遺跡は富田・赤熊1985年『立野南・八幡太神南・熊野太神南・今井遺跡群・一丁・川越出・梅沢』、城見上遺跡B地点は寄居町1984年『寄居町史』、将監塚・古井戸遺跡は井上1986年『将監塚・古井戸Ⅰ』、赤熊1988年『将監塚・古井戸Ⅱ』、熊野遺跡は埼玉県1984年『新編 埼玉県史 資料編3』、内出遺跡は鬼形・飛田野1986年『内出遺跡』、白山遺跡は中村1989年『白山遺跡』である。
- (3) 赤熊1999年『末野遺跡Ⅱ』
- (4) 酒井1987年『武蔵国における須恵器年代の再検討』『研究紀要第9号』
- (5) 甲斐型環については多くの研究がある。田尾誠敏氏は1991年『甲斐型環の初相』『東海大学校地内遺跡調査報告2』の中で、壺Gと甲斐型環の伴同関係から白山遺跡57号住居跡の甲斐型環を8世紀第4四半期後半に位置付けている。又、三好美穂氏は1992年『平城京出土の甲斐型土器』『山梨県考古学協会誌第5号』の中で、平城京出土の甲斐型環について8世紀第4四半期に位置付けている。これらを参考に、時期を示した。

4. 末野遺跡出土の墨画土器について

はじめに

末野遺跡からは、1点ではあるが黒画をもった土器が検出されている。本稿ではこの黒画土器について少し考えてみたいと思う。

なおこの遺物については、別の機会（鈴木1996）に若干検討したことがあるが、今回改めて眺め直してみることにする。前回検討した事例と、記述や図などで重複する部分がある。また、本報告書における事実記載や図とも重複する例もあるが、取ってそのままとし、論を進めたい。

（1）黒画土器

本稿で検討する黒画土器（第82図）は、44-18グリッド内の、SB4の北東側約3mに位置するビット5（第82図）から検出された。このビットは径約0.8mの円形で、深度については黒画土器の出土した部分は浅く、北側が0.3mと若干深くなる。

土器は、このビット北端部付近の、底面から5cm程浮いた位置から正位の状態出土した。そしてこの土器の上位からは、別個体の土器の破片数点が底面を上に向けた状態で確認されている。

これらの点から2点の土器は、黒画をもつ土器を正位の状態にし、その上に黒画をもたない土器を合わせ口状にかぶせた状態にしてビット内に据えたと推定される。なお、2点の土器はともに後世の耕作によって破壊しており、特に上位にあった土器は大部分が欠損していた。

上位の土器は、底面～坏部下半が全体の6分の1程残存しているのみであり、下位の黒画土器の内面に4点の破片が落ち込んでいる状態であった。ちなみに黒画土器の残存率は8割であった。

ビットの覆土内には、これら2点の土器以外に遺物は確認されなかった。また上位の土器と下位の土器の重なっている部分と、黒画土器の内面についても遺物は検出されていない。

しかし土器の内側に当初から、言い換えるならばビット内に土器を据える時点から何も入れられていな

かったか否かについては判断できない。そしてこの点に関しては、ビットの内側にもついてもいえる事柄である。

有機物や液体、または紙等の有無を検証する意味でも、土器周辺やビット内の覆土をサンプリングをしておくべきであった、と発掘調査の担当者の1人であった筆者としては悔やまれるところである。

黒画土器の上に、破片の状態でのついていた土器をNo.1、黒画土器をNo.2として（第82図1・第178図3）、以下に簡単な事実記載をしておく。

No.1：土師質土器、茶褐色。

同一個体のものである破片4点のみ遺存。底面～坏部下半の一部分のみであるため風化できなかった。そのため法量も不明である。ロクロ成形（回転糸切り）在地産と推定される。遺存していた破片の範囲内では、内外面とも墨痕はみられなかった。

No.2：土師質土器、茶褐色。

法量は口径11.8cm、底径7.0cm・器高2.3cmを測る。ロクロ成形（右回転糸切り）。15世紀後半、在地産。No.2の土師質土器（以下黒画土器と呼ぶことにする）は内面底部に黒画をもつ。

この黒画は、肉眼観察では梵字が記されていることと、その周囲に何らかの意匠が描かれているのが分かる程度であり、内容までは読み取ることはできなかった（写真図版16）。そこで赤外線カメラを用いたところ、内容のある程度推定できるまでに黒画が浮かび上がった（写真図版図）。

そこで、この黒画の内容について検討してみたい。まず中央の黒書を、胎藏界の大日如来を意味する「ア」と読むのは異論のないところであろう。

次に、梵字周辺部の意匠を観察してみる。梵字を取り囲むように2重の○（P）が描かれ、さらにその外側には丸みを帯びた「8」字状を呈する黒痕が4箇所みられる。そしてこの「8」字状の黒痕は、3つの「部分」から成っている。

つまり2本の線で描かれた「3」字状のものを対照

的に2つ組み合わせて「8」字状を形成し、その中間部には3本の線から成る直線的な“部分”が配されている。これらの意匠をどう解釈するか。その形状からみて「8」字状の墨底のうち、対照的に配された「3」字状部分が脇鉦、中央の直線的部分は中鉦を表現していると思われる（第178図2・3参照）。

中鉦が3本の線で描かれているのは、鉦の輪郭線と稜線を表しているのであろうか。脇鉦の外側中央や、内側に部分的にみられる「、」状の墨描きは何を意味しているのか判断できなかった。あるいは前者は嘴形、後者は稜線を示しているのであろうか。

これらをまとめると、この意匠は鉦を片側に3つづつもつ密教具＝三鉦杵（同図1）を2本、十字形組み合わせた法具＝羯磨（同図2）が描かれていると考えられる。

梵字を囲む2重の円は、穀その周囲に配する蓮華文、または菊花文の外周線を示しているのか判然としない。胎藏界壇に配する場合は菊花文式の羯磨が、金剛界壇に配する場合は蓮華文式の羯磨が用いられることが多いとされるが、この墨画には花文そのものの表現が省かれていると考えられる。

また、墨底が不鮮明であるため断定はできないが、鉦部と二重の円（穀か）を結ぶ位置に蓮弁帯に相当す

る表現がなく、しかも鉦部と円が交わってしまっている箇所もある。脇鉦の嘴形についても、1箇所それらしい部分がある他は、まったく表現されていないと思われる。

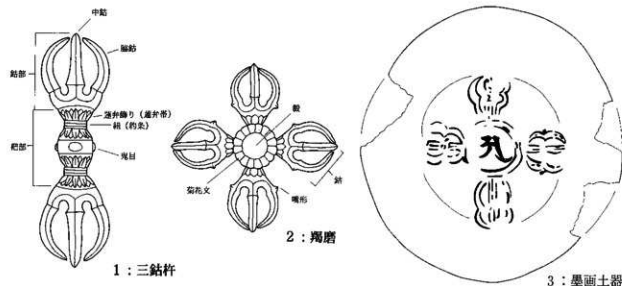
以上の観察結果から、この遺物にされた羯磨は、細部に頓着することなくかなり省略された形で表現されていると理解したい。

「羯磨」は羯磨金剛と呼ばれるが、この他に羯磨輪・羯磨杵・十字金剛・十字縛日羅とも称され、輪宝などと同様に密教法具である。羯磨とは、元々は古代インドで用いられた投擲用の武器を起源とし、四方の縁が敵の侵入を防衛するためのものであった。

羯磨や輪宝は、その神秘に満ちた姿形に単なる道具として以上の意味づけがなされており、行者に特殊な力を授け、修法の成就を助けるものとされる。具体的には、修法の際に大壇の四隅に安置して、四方面への修法作業の成就をはかるためのものである。また「羯磨台」は羯磨を大壇の四隅に安置する際に使用する台で、羯磨皿とも呼ばれる。基本的に真言宗では羯磨台を備えるが、天台宗では用いない。

「輪宝」は、本来古代インド神話に登場する転輪聖王の感得した神聖な車輪のことで、戦闘のさい王に先立って転進し、四方の敵や傷害を破砕したといわれる。

第178図 三鉦杵・羯磨 名称図



密教では輪宝を法具として取り入れ、心中の煩悩を打破して清浄な心を得る象徴とする（以上、岡崎1982・関根1992）。

（2）墨画土器の性格

中近世において、地鎮に用いられたと考えられている祭具の種類と、墨画（墨書）の内容には以下のものがある。

墨画の対象＝A）土器、B）石

墨画の内容＝a 羯磨、b 輪宝、c 梵字、d その他

考古資料にみる墨画祭儀は大部分がカワラケをはじめとした土器であるが、土版に墨画されたものもみられ、さらに石に描かれた例も少数存在する。

土版に描かれた例としては茨城県鹿島城出土例（16世紀後半）、石に墨画された例としては岩手県大釜館遺跡例（17世紀後半～18世紀前半）・新潟県江上館土例（15世紀代）が知られている。

墨画の内容については、1種類のみ記されたものと複数記されたものがある。羯磨の描かれたものとしては、大釜館遺跡例（石製・輪宝、“黄”）・大坂府金剛寺遺跡（土器2点・14世紀代）がある。

井上雅孝氏の調査によれば輪宝墨画土器は19遺跡例、24点が知られており（井上1996）、その内18点には梵字が記されている。梵字の内容は、「ア」（大日如来胎藏界）15点、「アーク」（大日如来胎藏界）2点、「ラ」（宝勝如来）1点、である。紙数の関係上ここでは詳細を省くが、以上の資料の中には「身」と「蓋」というセット関係で検出された例が11例に上る。

では、末野遺跡で確認された羯磨が墨画された土器と、これとセットで検出された土器は、一体どのような性格をもつか。具体的な内容や用法については知るよしもないが、墨画の内容・身と蓋というセット関係等から、地鎮に関連する遺物である可能性が高いのではなからうか。その特徴としては以下の2点が挙げられる。

- 1：土師質土器の内面に羯磨を墨画することによって、羯磨皿と羯磨のセットを表現していると考え

えられる。

- 2：墨画された羯磨は描写が省略されている部分も多く（花卉や蓮弁帯など）、また各部分を表現する墨描きの顔自体も実に大雑把なものである。

この墨画を行った人物は、羯磨を実見したことがないのではないかと、すら思われる程である。地鎮祭儀の作法が徐々に崩れていくに従って、祭具も次第に原型を失っていった結果であろうか。本例に関しては、地鎮祭儀そのものが簡略化されたり変容したりといった、多様性をもった段階を時代背景とする資料であると理解したい。

では地鎮を行うための土器であるとするならば、何を対象としているのか。

（3）地鎮の対象

住まいをはじめとして、何らかの施設を建てるさいには、予め土地を成形したり、掘り下げたりすることが多い。現代においても「地」をいじるに当たって、その土地の神のたりや、怒りを受けないようにとの願いを込めるとともに、その「地」の安寧を願うための行為が行われることが少なくない。

本例が地鎮に伴うとする場合、何を対象としたものであろうか。可能性として以下の2点が考えられる。

- （a）建物を対象とした場合

- （b）屋敷地（＝土地）全体を対象とした場合

（a）に関しては、これから建てようとする建物を対象とするものである。この場合、検出された地鎮祭儀に関わる遺構・遺物の近辺およびその周辺に、祭儀の対象となった建物が存在したと考えられる。

仮に、掘立柱建物跡の柱穴内から祭具が検出されたのであれば、地鎮祭儀とその対象となった遺構（建物）との帰属性は高いといえよう。しかし、掘立柱建物跡の内側に地鎮遺構・遺物が存在し、時期的にも近い場合であっても、各々が単体の遺構である可能性があり、直ちに両者を結びつけてしまうことはできない。しかも建物跡が複数重複している場合、さらに問題は複雑となる。

祭具およびそれに関わる遺構と、建物跡との関連性

を問うのはきわめて困難であり、危険性も高いといわざるを得ない。

(b)に関しては、単独の建物だけを地鎮の対象とするのではなく、上地(＝屋敷地)全体を対象とするものである。この場合、地鎮の対象とする範囲(＝屋敷地の範囲)と、地鎮祭儀の遺構・遺物の検出された地点との位置関係が問題点となる。

つまり密教伝来以降、地鎮の対象が建物であれ、屋敷地(＝上地)全体であれ、その対象地の中央と四隅、あるいは四方・八方の方角を念頭に置いている事例が多いことは、現在行われている地鎮行為や考古資料から検討された先学の成果(水野1982・1984・1991、木下1984、廣田1990、嶋谷1991)等からいえる事柄である。

但し、建物跡や建物跡群が検出され、屋敷地の想定ができたとしても、堀跡・柵列跡・堀跡・土塁などの地割りの痕跡がなくては、屋敷地そのものの範囲や、屋敷地内における祭儀の位置を特定することは困難である。

次に、黒土器が検出されたピット5とその周辺の掘立柱建物跡・柵列跡・溝跡との位置関係を検討し、地鎮の対象を考えてみたい。

1：掘立柱建物跡

ピット群の中から掘立柱建物跡と判断されたのは4棟である。主軸方向は、SB1=N-33°-W、SB2=N-36°-W、SB3=N-64°-E、SB4=N-30°-Wを測る。若干のズレはあるものの、概ね同じ軸方向もしくはそれに直行する軸方向を意識していると思われる。

なお、SB1～3は互いに重複関係にあり、少なくと

第179図 屋敷跡全景(空中写真と全満図を合成 1/600)



も3時期は存在するといえる。SB4は、SB1～3のいずれかと併存であろうか。

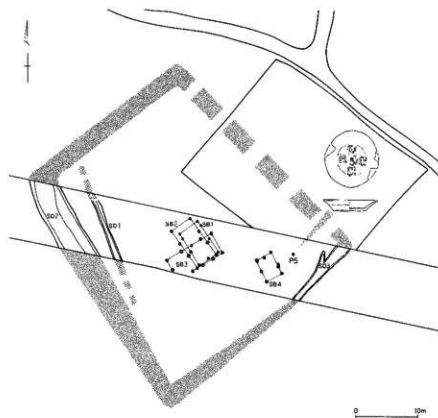
2：柵列跡

柵列跡と判断されたのは2基であった。SA1は3間分のみの検出で、南北方向に正確に一致している。SA2も3間分であるが、軸方向はN-56°-Wを指す。

2基の柵列跡は、いずれの掘立柱建物跡とも方位的に対応していないといえよう。これらの柵列跡は、今回検出された掘立柱建物跡群とは別個の遺構に関連するものと推定される。さらに、柵列跡同士の方角も大きく異なっていることから、どのような遺構に伴うにせよ各々別の遺構に伴うものと思われる。

3：溝跡

溝跡としては3条検出されているが、その検出状況や掘立柱建物跡群との位置関係からみて、両者は関連する遺構であると考えられる。言い換えるならば、掘立柱建物跡は周囲を溝で区画した屋敷跡である可能性が高い。



さらに、発掘調査時に撮影された空中写真において、現在の桑畑の地割りとSD1～3が位置的にも方位的にも対応していることが判明した。屋敷地の地割りが桑畑となって、現在にまで及んでいる結果であると思われる。

なお、SD1・2の土層断面の観察結果 (p107第84図参照) から、両者は併存ではなく、SD2→SD1の順に掘削されていると判断できる。つまり、溝の内法で4メートル程、屋敷地の規模が縮小されていることになる。にもかかわらず、現在の桑畑に残されている地割りは、SD2 (=縮小以前) に対応するものである。つまり屋敷地を区画する溝が内側に付け替えられていながら、地割りとしては残されていることになる。具体的な機能については推察できないが、この空きスペースにも何らかの意味があったのではなかろうか。

あるいは、この屋敷地の南西辺 (第179図<2>・<3>) に出入り口部があり、これに伴う機能をもたされていたのであろうか。またこの一辺の内側にみられる3間

分のビット列が塙として機能していたのであろうか。

以前 (鈴木1996)、このビット列に関して、掘立柱建物跡 (SB2) または櫓列跡の可能性を考えたことがある。SD1・2とは方位的にズレるが、どこかの時点で屋敷跡と関連していた時期があったのであろうか。無論、これはあくまでも想像でしかない事柄である。

なおSD2からは、図化には至らないものの16世紀代と推定される天目茶碗の破片1点が出土している。

4: 屋敷跡

SD2からSD1への付け替えが行われたことから、この屋敷地にはある程度の時期幅が想定されるが、このことは既にみたように、掘立柱建物跡の重複関係からも窺える。

では次に、SD1～2とSD3との関連はどうか。SD3はどちらの溝とつながっていたのか。SD3については、内側ないしは外側への付け替えの痕跡は見られなかった。SD3が、屋敷地が区画された当初から掘削されていたとするならば、SD2とつながっていたことになる。次いで、SD2がSD1に付け替えられた時点では、これとの連結が考えられるが、方位的にみて直行しておらず変則的な平面形を呈することになる。

しかし、溝の付け替え後も地割りとして痕跡をとどめている点から、SD2の存在していた地点との関連が、その後も続いたのではないかと考えられる。

いずれにせよ、この屋敷地の当初の地割りは、SD3から空中写真 (第179図参照) の<1>・<2>・<3>を経てSD2に続き、さらに屈曲して<4>に至ることが分かる。だが、この先が北に折れて<5>となるのか、

直進してく6となるのか、あるいは南に屈曲してく7) となってSD3に至るのであるか判断としない。

屋敷地北側の現道がやや北に曲がっているのは、屋敷地北西辺がく4)・く6)に続いていたので、道が迂回していた痕跡であろうか。現道に沿う北東辺に関しては、さまざまな形状が考えられる。SD2からSD1への付け替えのように、ほかの辺においても変更が行われた可能性がある。

以上を踏まえた上でも、概ね正方形または長方形を呈する屋敷地が想定できよう。掘立柱建物跡や櫓列跡としたピット群の他にも、数多くのピットが存在する。これらは、この屋敷地以前の掘立柱建物跡や櫓列跡の存在を示唆しているのであろうか。なお、この屋敷地以前としたのは、溝を始めとした地割りなどの痕跡がみられず(SD4か?)、この屋敷地によって失われている結果と推定されるからである。

(4) 墨画土器のもつ意味

(a) 建物を対象とした場合

末野遺跡のピット5から出土した墨画土器は、地鎮に用いられたものと推定したが、その対象は何か。建物を対象とした場合から検討してみる。

この場合、対象となった建物跡の中央・四方・八方のいずれかに該当する可能性が高いというのは既述したとおりである。しかし、ピット5の周囲にある遺構としては、3m南西にSB4が存在するのみである。以前この問題を検討した際(鈴木前掲書)には、この掘立柱建物跡以外の遺構存在も仮定したが、それでもピット5との関連を想起させるような遺構はみられなかった。この墨画土器を用いた地鎮祭儀は、特定の建物を対象としたという可能性は低い。

(b) 屋敷地全体を対象とした場合

次に、bとして挙げた屋敷地全体を対象とした場合について考えてみる。

この屋敷地全体の平面形状については、北西辺の北側部分と北東辺が明確ではないものの、概ねの形状は推定することができた。屋敷地内全体での、ピット5の位置はどこか。第180図からみて、屋敷地の東隅に相

当するとみなしたいと思う。

西隅については、我田引水的な解釈ではあるがその位置関係からみて、僅かに調査区北側にはずれてしまっている可能性と、西側に下る斜面地のため、流失している可能性とが考えられる。北隅と南隅は、残念ながら今回の調査範囲外であった。では、四方および八方については、東隅のみが調査区内であったため検出することができたとして、それらと共に点じたであろう中央についてはどうか。この屋敷地の中央部分は、ほぼ調査区内に収まっているが、地鎮との関連を窺わせるような遺構・遺物は確認されていない。

この点についてどのように解釈すべきであるのか、現状では説明し切れない。あるいはほぼ中央に当たる部分は、建物の建て替えが少なくとも2度は行われたことによって失われたのであろうか。

小 結

以上にみたとおり、根拠と呼ぶには差し障りがあるほどに、きわめて限られた資料を基にして仮定を積み重ねてきた。文章もとりとめなく煩雑であるため、以下に末野遺跡で検出された地鎮祭儀の遺構・遺物、および屋敷地との関連についての要点等を挙げておきたい。

(1) 桑畑として現在にまで痕跡をとどめる地割りは、周囲を溝で区画された中世の屋敷地であったと推定される(仮称：2号屋敷跡)。なおこの屋敷地の外側の溝(SD2)からは、16世紀代と推定される天目茶碗の破片が1点出土している。

(2) この屋敷地内では、建物の建て替えや溝の付け替えなどが行われたと思われるが、地割り自体は当初の痕跡をとどめている可能性が高い。少なくとも、南西辺(SD1)ではこれに該当しよう。なお、土層断面の観察からSD1の内側には、土層が存在した可能性がある。

(3) 屋敷地の北側部分のプランは判然としなが、溝の付け替えなどによってプランが変更になった箇所が存在するのであろうか。

(4) 屋敷地の地割りの南西辺をSD2<3><2>、北

東辺を〈7〉の延長戦で考えた場合、北西—南東方向に長軸をもつ内法37m×33mの規模となる。そしてSD2からSD1へ付け替えた際の規模は、内法で37m×22mとなる。そして今回検出された墨画土器は、この屋敷地の東隅を点じたものであると推定される。

(5) この屋敷地とは方位的に対応しないピット列が存在する。このことから、別の方位を意識した屋敷地があった可能性がある。(仮称：1号屋敷跡)

(6) この場合、1号屋敷跡は溝などの痕跡がみられないことから、2号に先行すると思われる。

(7) 黒画土器は、事例は少ないものの類別から推して、地鎮祭儀に関わるものと推定される。そしてこの墨画の観察から、描かれている密教器具(羯磨)は、かなりの省略や変容が見受けられる。これは地鎮祭儀そのものが、内容的に変容した結果とも思われる。

これは、単に末野遺跡例のみにとどまらず、中世の地鎮祭儀全体についてもいえる事柄であろうか。

(8) ピット5と掘立柱建物跡群・屋敷跡全体との位置関係から、地鎮の対象は特定の建物ではなく、屋敷跡全体であると思われる。即ち屋敷地の中央・四方(または八方)を点じてその内側の清浄を守り、また屋敷地内の安寧を願って行われたものと考えたい。

屋敷地の地割りからみて、今回検出された墨画土器は、屋敷地の東隅を点じたものと考えたい。

おわりに

根拠の薄いままに、末野遺跡で検出された墨画土器は、中世屋敷跡の屋敷地全体を対象とした地鎮祭儀に伴う遺物であると推定した。

末野遺跡で検出された墨画土器は羯磨が描かれたものであり、今回はこの1点のみしか扱う準備がなかった。しかし、地鎮祭儀に関わると推定される黒画土器の中には、輪宝や梵字・植物文様などを記した例が散見される。

1例を挙げるならば、福島県三島町の西下方館遺跡(小柴ほか1989)では、中世館跡の内部から16世紀代の土師質土器に輪宝や梵字・植物文様などが墨書された例が出土している。これらの内には、合わせ口状に重ねて埋納されている例があるだけではなく、館の西の方位を意識していると思われる(註1)事例も存在している。

中世の地鎮祭儀については、上にみた問題だけでなく、検討すべき課題が多種多様である。今少し視点を広げて、この問題を考え直す予定である。(鈴木孝之)

註1 小柴吉男氏のご教示による。

5. 花園城跡周辺の地形から

はじめに

今回の発掘調査区は、花園城の西極部を南北にかすめるように設定されている。その範囲内では溝跡2条が検出されたのみで、積極的に花園城に伴うといえる遺構はみられなかった。

花園城の地理的環境・歴史的環境・遺構の概要については、本文中(p137～141・第111～115図)を参照して頂くとして、ここでは発掘調査の結果と、城跡周辺の地形などから2・3検討をしてみたい。

数多くの城跡と同様に、花園城について語られた資料の多くは、

a 城についての歴史・記録・伝承

b 遺構としての城郭そのものであるといえる。

a については、文書や絵図などが主となる。

b については、資料としては城の縄張りなどを記した絵図・図面にこれに含まれようが、主として遺存している郭や土塁・堀などの施設や、各々のもつ機能を対象としたものといえよう。a・bともに筆者は語る任にはなく、本頁の記述はあくまでも地形図や現状のみを基にした現況報告にとどまるものであるが、1つの事例報告としてここに記しておく。そのため、内容的には何ら具体性のないものであることを予め申し上げておきたい。

記述としては、順序で検討していくことにする。

まず1として、周辺の地形を眺めてみる。これについては、城跡西側にみられる南に開く谷地形と、城跡

直下を流れる少林寺川の流路を検討する。

次いで2としては、今回の発掘調査で検出された2条の溝跡について考えてみたい。

1 城跡周辺の地形から

時期は明確ではなくとも、自然地形の中に人工の痕跡、またはその可能性が観察される事例は多い。この点は城跡関連についても同様で、ここでは花園城跡周辺にその可能性の有無を観察してみることにする。

(1) 城跡西側の、南側に開く谷地形について

地形図(第226図・註1)を見ると、北側から西側へと花園城跡を迂回するように、少林寺川によって開折された谷地形が、荒川に向かって南に開いていることがわかる。この谷地形は、河岸段丘の崖線(国道140号線付近)直下(写真③)までは明瞭で、それ以南は等高線によって、地形図上に痕跡がみられる程度である。こういった状況は、明治陸軍作成の迅速測量図においても同様である。この微地形および旧地形が不明瞭な範囲内では、現在水路は暗渠となって荒川に至っている(写真⑤)。

この暗渠が走る部分より北側では、この谷筋の中に、幅5～10m程の縦長の水田が1列で並んでいるのが分かる。そしてこれに続く暗渠の水路は、一連の流路の痕跡とみることができよう。

この現：水田面を含む流路は、複数の段丘面をある程度の傾斜角で切っているにもかかわらず、ほぼ同一幅で流下している。深さや断面形についての調査例はなく、実体は不明であるものの、現在の形状からみても人工が加わっている可能性が高いのではなかろうか。即ち、本来の谷地形に手を加え、堀としての機能をもたせたのではないかと、推定した。

そしてこれらに人の手が加わっている場合、花園城との位置関係からみて2つの可能性が挙げられる。

a) 花園城と、その南に展開していたであろう根小屋などの区域を取り込むための機能

b) 西方向を意識した防衛施設

なお、現在水路が暗渠となっている部分については、後世堀が埋立てられた際に、その脇に付け替えられた

水路を、現代になってさらに暗渠としたと推定される。

花園城跡の西側については、以上にみた地形があり“堀跡”の存在を考えたが、東側にはこれと対応するような地形はみあたらない。そのためa)については、根小屋やそれに関連する施設などがどの程度の広がりをもっていたか、という問題がある。東側方向は意識として、“内側”であったのか。さらにそれ以前の課題として、花園城および根小屋などがいつの段階から機能し始めたのかという問題がある。これに対しては確たる文献資料は知られていない。

b) は、位置的に花園城の西側に当たることから、西方向からの進入を考慮していると考えた。漠然と西(上流)方向というのみで、具体的にどこであるかという点までは到底言及できない。あるいは上州や甲斐を念頭に入れているのであろうか。無論この点については、空想の域を出るものではない。

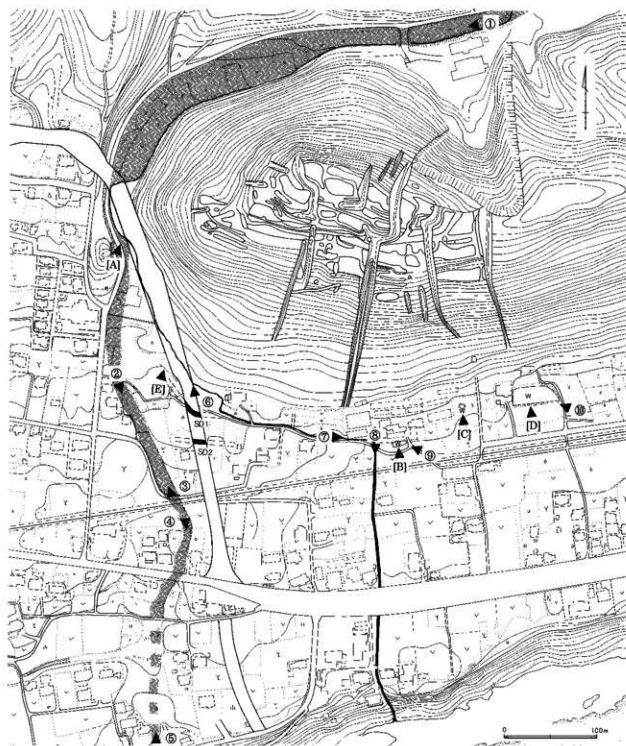
以上は、地形図と現地形、さらに花園城跡との位置関係のみから考えた事例であり、文書などの具体的資料を踏まえたものではない。何ら根拠のない推論である。この推定の当否については、この“堀跡”と考えた水田部分がいつの日か発掘調査されることを待ちたい。

(2) 花園城跡脇の少林寺川の流路について

すでに述べたように、少林寺川は引良田水源を源として、大正寺山と花園城の丘陵部を開折し、城山西端部([A]地点)付近から南に大きく開く。地形的にみても、この流路が自然であるといえよう。

花園城に関連すると考えた“堀”はこの流路を活用したものであり、その城跡が現在水田面として残っていると考えた。しかし、少林寺川の現流路は花園城跡の裾野に沿うようにして流れており、まさに谷地形が南に開こうとする箇所(=[A]地点)以降も、依然として山裾に沿って流れるのである。

現在の少林寺川の流路は、やはり自然であるとはいえない。人工によって、山裾に流路を付け替えているのではないかと。城山北側の谷筋については、現在道路部分を除いて立ち入りが困難な私有地であるため、流路を観察することができない。そのため、この①地



前状況を観察するため、流路内を歩いている際に川底より採取した遺物が、第115図(p141)3の天目茶碗である。遺物の時期は17世紀後半～18世紀前半と推定され、花園城が鉢形城とともに落城したと伝えられる天正18(1590)年より降ることになる。

⑥地点以降は護岸工事が明瞭で、中にはコンクリートが貼られている箇所もある。少林寺川の流路は、⑧の部分に至って現在民家の存在している平坦面の前面で直角に曲げられ(写真⑧)、そして直線状にほぼ真南に流れ下り、荒川に合流する。この流路は、屈曲点から荒川までの最短距離という意味合いと、南北という方向を意識しているのだろうか。

立地条件からみても、花園城の根小屋やこれに関連する町並み(?)は花園城の南側にあったと思われる。少林寺川は、そのための土地区画に対応する方向に、現：少林寺川の流路が配されているのであろうか。

そもそも花園城および、これに関連する根小屋ほかの施設が機能した時期だけでなく、周辺に地名として残る「上宿」・「上本宿」・「宿」・「下宿」が存在した時期を示す明確な記録がなく、具体的な内容に関して現段階では付言できない。

すでに述べたように、少林寺川は地形的にみて、南北に1列に連なる現水田部分を流れていたと思われる。どこかの段階で人工の手を加えて付け替えられたと考えられる。しかしその付け替えられた流路が、山裾に沿って流れる現在の少林寺川であるとまでは即断できない。では、この付け替えは何を目的としたものであったのか。水を得るためであるのかいうまでもないことであろうが、生活用水・農業用水いずれに重きが置かれていたのだろうか。

繰り返しになるが、現在の水田列の部分の流路を堀として転用したものと推定した。そして、少林寺川の川筋は水資源として活用するため堀の内側に取り込み、山裾を巡らせて根小屋方向に付け替えた結果とみなしたい。

⑧の地点付近で流路を屈曲させているのは、この箇所または下流域に、何らかの意味があったのであろう

か。

2 調査において検出された溝跡について

今回の発掘調査で検出された2条の溝跡(第111～114図)からは遺物は出土しておらず、時期は不明である。この溝跡の性格について少し検討してみる。

第1号溝は第2号溝の北側、山(花園城)寄りに位置し、幅3.7～4.3m・深さ0.9mを測る。土層断面から、長時間帯水していたことが分かる。実際に発掘調査をしている際にも、土層断面の3層直下から水が浸み出し、底面は常時水に浸かっている状態であった。地表面では見あたらない溝の底面を、現在も水が流れていることを実感した。検出した範囲内において、この溝跡の流路は山裾の地形に沿うように緩やかに湾曲している。

第2号溝は、第1号溝の南(外)側約24mに位置し、幅約2.3m・深さ約1.6mを測る。土層断面の観察から、何度か掘り直しか行われたことが分かる。発掘調査中、西側土層断面の6層直下(溝跡底面直上)から、僅かではあるものの水が浸み出してくるのが確認された。但し、掘り返された各々の溝の底面には、常時水に浸かっていた痕跡はみられなかった。なお、調査した範囲内での平面形状は直線状であった。

周辺の地形的に、東西方向に河岸段丘面が展開し、段丘面は全体的に南に向かって傾斜が下っている。再三再四述べてきたが、自然流路であれば南流すべき所を、概ね両溝跡は東流していると思われる。

この流路および溝跡の断面形状から推定して、第1号・2号溝跡ともに、人工的に掘削された可能性が高いといえる。しかも第2号溝については、度々掘り直しか行われていることが明瞭である。ではどこから始まり、どこまで続くのか。地形的に、両溝の起点は少林寺川の川筋流路、言い換えるならば、先の検討項目で花園城跡に関連する「堀」跡と考えた谷地形であろう。

[E] 地点付近には「落ち込み」の記号表示がみられるが、この地形は現状でも確認できる。第1号溝はこの地形に沿って東流していた可能性が考えられる。

第2号溝については、第1号溝以南で現在の水田列

の地形に連結していたと思われる。その場合、水田列の当時の底面レベルと第2号溝の底面レベルが問題となろう。下流であるべき第2号溝の底面レベルの方が高かった場合、水路としての機能は考えがたいことになる。

ではこれら2条の溝は、どこまで続いていたのか。残念ながら、地形図や現地地形からでは判断できない。

さらに、第1・2号溝跡については、同時存在であるのか、別々の時期に存在していたのか、その場合の前後関係などいずれも不明である。では両溝跡の性格は何であったのか。可能性としては大きくA・Bの2点が考えられる。

A水路としての機能

- (a) 下流域（藤田善導寺方向）への水路
- (b) 花園城南に展開した根小屋およびこれに付随した施設への水路

B堀としての機能

A-（a）については、主に田畑への農業用水としての性格が、A-（b）については、主として生活用水としての性格が考えられよう。しかし、いずれの場合においても導水の範囲は不明である。現在の少林寺川との関わりについても、興味深い問題ではある。

（a）・（b）のいずれにしろ、水路であったとするならば、第2号溝の性格はどう考えるべきか。つまり、上層断面をみると、第2号溝は何度か掘り返されているが、最下面の底面以外に帯水した可能性が低い。第2号溝は水路としては考えにくいと思われる。あるいはBとしての性格を考えるべきであろうか。

Bについては、その位置関係から花園城との関連が推測される。帯水の有無に関わらず、少林寺川の旧水路（＝“堀”と推定した現水田列の部分）から東方向へと続いた、とまではいえる。但し、A・Bいずれの可能性についても、積極的な根拠はない。

最後に、これらの問題と直接関係はないかも知れないが、花園城跡南に点在する湧水地もしくは、溜池について少し触れておきたい。花園城跡南側には、地形図に記載されている範囲内で、3箇所の「水（＝W）」

の存在を示す地点がある。これらについては、自然湧水であるのか、人工的に溜池としているのか定かではないが、いずれにしても沼または湿地として現在も残っている。地形図にみても、一度掘削すれば湧水水位はある程度保たれたものと思われる。これらの沼または湿地と、現：少林寺川や発掘調査で検出された2条の溝との関連性はあるのか。現：少林寺川と、これらの湧水地または溜池が連続して、東方向の田畑への水路として機能していたのか。あるいは2条の溝（のどちらか一方？）が、湧水または溜池へと続いたという仮定もできる。その場合、農業用を主とした水路と、堀としての機能とが想定されるが、いずれも具体性に欠け可能性のみの指摘にとどまる。

おわりに

以上に述べた事柄について、今後の課題について付言しておきたい。

- 1：“堀跡”と推定した水田は実際に堀であったのか
- 2：従来の少林寺川が現在の少林寺川に付け替えられたのはいつか
- 3：藤田善導寺付近が田畑として開かれたのはいつ頃のことであるのか
- 4：花園城と根小屋、およびこれに伴う施設が機能し始めたのはいつか
- 5：「上本宿」はいつから存在するのか
- 6：現：少林寺川の用途は何か
- 7：花園城南に点在する湧水池または溜池は、花園城と関係したのか

1：については発掘調査例が待たれる。それ以外については、文献資料が主とした論議となろう。

本項では、2～7のいずれにも触れ得ることもなく、地形図と現況のみからの空想空論に終始した。まさに汗顔の至りである。文書や絵図等を踏まえた上での再検討を期したいと思う。

註1 図中の①～⑩は、写真①～⑩の撮影地点・方向を示す。

①



②



③



④



⑤



写真①

少林寺川の谷筋を東南東（上流）方向よりみる。少林寺川は円良田湖を水源とし、大正寺山の東側を流下して、さらに花園城跡北側に至る。

この写真の撮影地点後方には、湧水によると思われる沼状の地形が現在に残っている。この谷筋は、地形図では「田」・「荒地」・「桑畑」・「広葉樹林」の表記からなる。

写真②

この写真撮影地点の後方約35mの位置から、堰と思われる痕跡が始まる。それ以北は住宅によって消失しており、さらにその北は大正寺山と、花園城跡をのせる山との間の谷筋となる。幅約8～10mの水田が1列、ほぼ一直線状に南東方向に続く。自然か人工か、左（東）側斜面の、立ち上がりは明瞭である。

写真③

秋父鉄道（電線が左右に走る部分）のすぐ下あたりから、水田列はやや左（西）に触れる。水田の脇を、谷からの小さな水路が荒川に向かって流下する。

この部分でも水田の幅は8～10m程で、水田部分と、その両側への地形的な立ち上がりは明瞭である。荒川に向かっての傾斜は、写真②よりも急である。

“掘跡”としての痕跡を最も良く残しているといえる。

写真④

ガードレールまで約25mに渡って、幅10m程の旧水田が続く。ガードレール以南は急傾斜で下り、25m程で暗渠となる。

暗渠は約55m続き、中央奥の2階建て民家の先約20mで荒川に達する。この間は大規模に埋め立てられているのか、旧地形は読み取りが困難である。

写真⑤

中央中程の木立の少ない部分が、埋め立てられた範囲か。その手前の、石組みの部分からは水がしみ出しており、ここから再度12m程暗渠となった後、アスファルト道路を横切って荒川に至る。

手前右側は藤田氏館跡といわれる地点、写真最奥の山は花園城跡（距離約350m）。

⑥



⑦



⑧



⑨



⑩



写真⑥

谷筋を下る少林寺川は、谷地形の中で標高的に低い部分＝現水田（堀跡？）部分を流れていたと考えるのが自然と思われる。

しかし現実には、花園城跡の山裾に沿って流れており不自然さが感じられる。写真の部分では岩盤が明らかに掘削されており、人工による流路の付け替えを示す1例証と思われる。

写真⑦

写真左側の民家付近は、開削の時期は不明であるが平坦面を形成し、「開場」の地名を残す。写真撮影地点から左に山を登れば、二の郭と三の郭を画する花園城跡でも最大規模の塹壕に至る。流路は写真撮影地点から約28mで、ほぼ直角に右折し南流する。

写真⑧

民家前からほぼ一直線状に南流して、170m程で荒川に合流する。写真⑥～⑧の範囲内では、コンクリートによる護岸がなされていない部分は、兩岸とも石組みで川幅は約2～3mである。

現在、川沿いに小道が通り、周辺はこれに対応する方位での地割りか。

写真⑨

画面の手前左側の茂みは、現在5m×13m程の規模をもつ湿地である（181図[B]）。位置的には花園城跡の南側直下、現在民家が立地する平坦地（開削時期は不明）の手前に相当する。

この湿地部分から東約40mの地点にも、小規模ながら自然湧水と思われる湿地が存在する。

写真⑩

自然湧水か人工による溜池であるかは不明であるが、現状における規模は35m×15mを測る湿地である。位置的には、[B]の湧水点から東約80m、[C]の湧水点から東約30mに相当する。この辺りは「寺前」の地名を残す。地名の由来は、現存する藤田菅導寺か、または花園城の山に残る地名「清見寺」であるのかは不明である。

（鈴木孝之）

参考・引用文献

- 赤熊浩一 1988 『将監塚・古井Ⅱ』 埼玉県埋蔵文化財調査事業報告書 第71集
- 赤熊浩一 1999 『木野遺跡Ⅱ』 埼玉県埋蔵文化財調査事業報告書 第207集
- 蘆田伊人 1963 『新編武蔵風土記稿』 第十一巻 雄山閣
- 麻生敏隆 1987 『後田遺跡 (旧石器編)』 群馬県埋蔵文化財調査事業報告書
- 麻生敏隆・大工原豊 1991 「北関東地方の埴輪」『石器文化研究』3 pp.51-61
- 麻生敏隆・大工原豊 1994 「Ⅰ期-A-T 階以前ナイフ彩石器文化」『群馬の民俗時代の変遷と特色 子稿集』 pp.25-29
- 井口恭泰 1997 「埼玉県北西部における埴輪供給の問題—胎土分析を中心に—」『十勝考古』第21号 pp.103-117
- 石塚三夫 1997 『中小前田2遺跡 小前田3号墳』 寄居町遺跡調査報告書第14集
- 井上尚明 1986 『将監塚・古井Ⅰ』 埼玉県埋蔵文化財調査事業報告書 第64集
- 井上 肇 1994 『町内遺跡Ⅰ』 寄居町文化財調査報告書第12集
- 井上雅孝 1992a 『岩手県滝沢村大釜館遺跡』『牟婁志』第5号 武蔵考古学会 p.69
- 井上雅孝 1992b 『岩手県滝沢村大釜館遺跡出土の輪宝・飛鳥墨書石』『史緯』第17号 pp.52-59
- 井上雅孝 1992c 「輪宝墨書土器文書—屈成郡遺跡の資料を中心として—」『いわき地方史研究』第29号 pp.94-103
- 井上雅孝 1995 「江上館跡出土の墨書石について」『江上館跡Ⅱ』中栗町埋蔵文化財調査報告 第8集
- 井上雅孝 1996 「地鎮め具としての輪宝—輪宝・輪宝土版・輪宝墨書土器・輪宝墨書石—」『標葉文化論究—小野田晴常先生頌寿記念論文集—』 pp.145-155
- 岩崎泰一他 1986 「下畑千伏遺跡」 群馬県埋蔵文化財調査事業報告書
- 大坂府埋蔵文化財協会 1987 『金剛寺遺跡』 大坂府文化財協会調査報告書第106編
- 岡崎謙治 1982 『仏具大事典』 鎌倉新書
- 岡本健一 1995 「埼玉將軍山古墳出土の靱形埴輪」『調査研究報告』第8号 埼玉県立きたま資料館 pp.13-22
- 小田静夫 1976 「日本最古の磨製石斧」『どるめん』11 pp.96-109
- 鬼形芳夫・飛田野正佳 1986 『内出遺跡』 内出遺跡調査会
- 小沢良樹他 1980 『広木大町古墳群』 埼玉県遺跡調査会報告第40集
- 小和田哲男 1984 「後北条氏の埴形類と埴形城」『日本城郭史研究叢書 第三巻 武蔵野の城館址』
- 鹿島町 1985 『鹿島城址Ⅳ』 鹿島町の文化財第41集
- 渡康保明 1990 「屋敷と原敷地のまつり」『中世のまじない』第6回中世遺跡研究集會 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所
- 加部二生 1995 「武井遺跡」『第2回 石器文化研究交流会—発表要旨—』 pp.4-10
- 木下憲通 1984 「中世の地鎮・鎮型」『古代研究』28・29 pp.18-23
- 栗山政也・谷井彪・今井宏 1988 「花園城」『埼玉の中世城館跡』 埼玉県教育委員会
- 郡司良一 1972 「梵字を描く墨書土器」『考古学ジャーナル』No.71 p.13
- 群馬県史編さん委員会編 1988 『群馬県史 資料編Ⅰ 原始古代Ⅰ』 群馬県
- 小柴吉男他 1989 『西方下館遺跡』 三島町文化財報告書第9集
- 埼玉県 1984 『新編 埼玉県史 資料編Ⅲ 古代』 埼玉県
- 酒井清治 1984 「台耕地 (II)」 埼玉県埋蔵文化財調査事業報告書 第33集
- 酒井清治 1987 「武蔵国における須恵器年代の再検討」『研究紀要第9号』 埼玉県立歴史資料館 pp.125-148
- 阪田宗彦 1989 「密教法具」『日本の美術』No.282 五文堂
- 佐藤隆之 1992 『日本旧石器文化の構造と進化』 柏書房
- 鳴谷和彦 1992 「地鎮め」の諸相」『関西近世考古学研究』Ⅲ pp.141-164
- 志村 哲 1995 「本郷埴輪窯跡とその周辺」『シンポジウム2 関東における埴輪の生産と供給』日本考古学協会1995年度学術大会実行委員会 pp.40-41
- 志村 哲 1998 「関東の埴輪埴輪」『第12回企画展 器財(おこわの世界)—関東の埴輪埴輪—』栃木県立しもつけ風土記の丘資料館 pp.44-54
- 白石浩之 1996 「中期旧石器時代終末から後期旧石器時代にかけての石器群に対する新視点」『神奈川考古』32 pp.19-36
- 杉原壮介 1956 『群馬県岩宿遺跡発見の石器文化』 明治大学文学部

- 鈴木孝之 1993 『寄居町末野遺跡—中世屋敷跡と土器—』『埋文さいたま』第14号 埼玉県埋蔵文化財センター
- 鈴木孝之 1996 『中世地鎮の一様相—大里郡寄居町末野遺跡例を中心として—』『研究紀要』第12号 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 pp.113-134
- 関口和也 1987 『花園城』『関関中世城郭事典』
- 関口博幸 1994 『倉倉下原・大沼山遺跡Ⅰ』 群馬県埋蔵文化財調査事業団報告 第161集
- 関根俊一 1992 『既読密教工芸—神祕の形—』『特別展密教工芸—神祕の形—』奈良国立博物館 pp.7-15
- 館総芸芸企画部 1969 『梵字入門』
- 田尾誠敏 1991 『甲斐型杯の初形』『東海大学校地内遺跡調査報告書2』 東海大学校地内遺跡調査委員会・東海大学校地内遺跡調査
同 pp.200-227
- 高橋克壽 1988 『器財埴輪の編年と古墳祭祀』『史料』第71号第2号 pp.69-104
- 高橋克壽 1992 『器財埴輪』『古墳時代の研究9 古墳Ⅲ 埴輪』 pp.90-108
- 多賀城市埋蔵文化財調査センター 1992 『高崎遺跡調査報告書—中央公園関連調査報告—』多賀城市文化財調査報告書第19集
- 瀧澤芳之 1986 『小前田古墳群』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第58集
- 田中龍男 1987 『金剛寺遺跡』大阪府埋蔵文化財協会
- 大工原豊 1988 『古墳遺跡』群馬県安中市教育委員会
- 千葉県史料研究財団 1998 『千葉県の歴史 資料編Ⅱ 1 (考古資料)』千葉県
- 寺田良寛他 1996 『喜多見陸軍遺跡Ⅲ』世田谷区教育委員会
- 富田和夫・赤熊浩一 1985 『立野南・八幡大神南・熊野太神南・今井遺跡群—Ⅰ—』田・川越田・柳沢 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
報告書 第46集
- 中田正光 1982 『秩父路の古城址』右峰書店新社
- 中村倉司 1989 『白山遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査報告 第17集
- 長崎潤一 1990 『後期旧石器時代前半期の石斧—形態変形論を視点として—』『史学考古学研究』第3号 pp.1-33
- 長崎潤一他 1991 『お伊勢山遺跡の調査 第2部 旧石器時代』早稲田大学
- 奈良国立博物館 1992 『特別展密教工芸—神祕の形—』
- 坂 靖 1988 『埴輪文化の特質とその意義』『奈良考古学研究所論集』第8 pp.293-393
- 比田井克仁 1991 『一地方黨成立の史的契機』『研究論集X』東京都埋蔵文化財センター pp.373-404
- 福田 聖 1998 『末野遺跡Ⅰ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第196集
- 北陸山石器文化研究会編 1989 『旧石器時代の石斧 (斧形石器) をめぐって』
- 前原豊他 1995 『中二子古墳』前橋市教育委員会
- 前原 豊 1998 『堀内遺跡群埋内遺跡』『第5回 石器文化研究交流会—発表要旨—』 pp.14-19
- 松村和男 1988 『先土器時代の局部磨製石斧について—その1—』『群馬の考古学』 pp.31-50
- 右島和夫 1995 『上野型埴輪』の成立』『研究紀要』12 群馬県埋蔵文化財調査事業団 pp.45-70
- 水野正好 1984 『近世の地鎮・銅座』『古代研究』28・29 pp.24-36
- 水野正好 1991 『紙魚想考 (四)』『文化財情報』第9集 奈良大学文学部文化財学科 pp.17-24
- 三宅敦久他 1986 『善上遺跡』月夜野町教育委員会
- 三好美穂 1992 『平城京出土の甲斐型土器』『山梨県考古学協会誌』第5号 pp.50-55
- 森 郁男 1984 『古代の地鎮・銅座』『古代研究』28・29 pp.1-17
- 森 郁男 1990 『古代・中世の地鎮』『中世のまじない』第6回中世遺跡研究集会 広島県瀬戸内市町遺跡調査研究所
寄居町教育委員会町史編さん室 1984 『寄居町史 原始 古代 中世資料編』寄居町教育委員会
- 寄居町教育委員会 1989 『寄居町の歴史』
- 若松良一他 1989 『奥の山古墳・瓦塚古墳・中の山古墳』埼玉県古墳群発掘調査報告書第7集 埼玉県教育委員会
- 渡辺 一 1988 『鳩山窯跡群Ⅰ』鳩山窯跡群発掘調査報告書 第1冊 鳩山窯跡群遺跡調査会・鳩山町教育委員会
- 渡辺 一 1990 『鳩山窯跡群Ⅱ』鳩山窯跡群発掘調査報告書 第2冊 鳩山窯跡群遺跡調査会・鳩山町教育委員会
- 渡辺 一 1991 『鳩山窯跡群Ⅲ』鳩山窯跡群発掘調査報告書 第3冊 鳩山窯跡群遺跡調査会・鳩山町教育委員会
- 渡辺 一 1992 『鳩山窯跡群Ⅳ』鳩山窯跡群発掘調査報告書 第4冊 鳩山窯跡群遺跡調査会・鳩山町教育委員会

X 附編

1. 末野遺跡C区の植物珪酸体分析

古環境研究所

1. はじめに

植物珪酸体は、植物体内で形成されたガラス質の細胞であり、植物が枯れた後も微化石(プラント・オパール)となって土壤中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定、および古植生・古環境の推定などに応用されている(杉山, 1987)。

本報告では、同分析を用いて、末野遺跡における古植生・古環境の推定を試みた。

2. 試料

47-19グリッド西壁と46-19グリッド東壁において、I層、II層、III層、IV層、VIII層の試料が採取された。試料数は計6点である。

3. 分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、「プラント・オパール定量分析法(藤原, 1976)」をもとに、次の手順で行った。

(1) 試料の絶乾 (105℃・24時間)

(2) 試料約1gを秤量、ガラスビーズ添加(直径約40μm, 約0.02g)

※電子分析天秤により1万分の1gの精度で秤量

(3) 電気灰化法による脱有機物処理

(4) 超音波による分散 (300W・42KHz・10分間)

(5) 沈底法による微粒子 (20μm以下) 除去、乾燥

(6) 封入剤(オイキット)中に分散、プレパラート作成

(7) 検鏡・計数

同定は、複動顕微鏡珪酸体由来する植物珪酸体をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中の植物

珪酸体個数を求めた。

4. 結果および考察

I層(As-BP Group直上層)、II層(As-BP Group直下層、AT層準)、III層(暗色帯、石器包含層)、IV層、およびVIII層(粘上層)について分析を行った。

その結果、最下位のVIII層(試料8)ではタケ亜科A1aタイプ(ネザサ節など)が比較的多く検出され、ウシクサ族(ススキ属など)やタケ亜科B1タイプ(クマザサ属など)なども少量検出された。IV層(試料4)からI層(試料1)にかけては、タケ亜科A1aタイプ(ネザサ節など)はまったく検出されず、かわってタケ亜科B1タイプ(クマザサ属など)が比較的多く検出された。その他の分類群ではイネ科Bタイプ(ウシクサ族類似)などが見られたが、いずれも少量である。なお、I層ではヨシ属やウシクサ族(ススキ属など)も検出された。

以上の結果から、各層の堆積当時の植生と環境を推定すると次のようである。VIII層の時期は、ネザサ節を主体としススキ属やクマザサ属なども少量見られるイネ科植生であったものと考えられる。ネザサ節やススキ属は林床では生育しにくいことから、当時の遺跡周辺は森林で覆われたような状況ではなく比較的開かれた環境であったものと推定される。その後、IV層の時期にはクマザサ属が優勢なイネ科植生に移行したものと考えられ、III層からI層にかけてもほぼ同様の状況が継続されたものと推定される。

ネザサ節とクマザサ属は一般に相反する出現傾向を示し、前者は温暖の、後者は寒冷の指標となっている。このことからVIII層の時期は比較的温暖な気候条件(温暖期)であったと考えられ、IV層からI層にかけては比較的寒冷な気候条件で推移したものと推定される。これらの気候変動については未解明な部分も多いこと

表1 大野遺跡の植物遺体分析結果

(単位: $\times 100$ 個/g)

分類群	47-13グリッド		48-13グリッド			
	1	2	2	3	4	5
イネ科						
コシ属	5					
ウシタサ属 (スサキ属など)	5					7
Aタイプ (ヤビ類)						20
Bタイプ (ウシタサ属など)	6	7		12	6	54
タケ亜科						
A laタイプ (ネザサ属など)						118
B1タイプ (クマザサ属など)	240	79	156	145	53	7
未分類等	184	86	60	59	25	115
その他のイネ科						
表皮毛細胞			5	5		27
神状毛細胞	23		12	30	13	41
花粉粒	5					
花粉管等	184	72	132	268	205	326
植物体残骸	755	304	396	550	333	713

参考文献

杉山真二, 1987, タケ亜科植物の植物体残骸, 富山竹類植物報告, 第31号: 70-83.

藤原志志, 1976, プラント・オーバーオール分析法の基礎的研究(1)—数種イネ科栽培植物の植物体標本と定量分析法—, 考古学と自然科学, 9: 15-29.

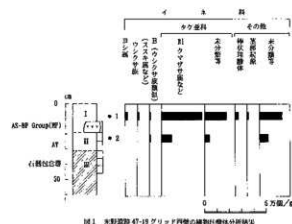


図1 大野遺跡 47-13 グリッド内層の植物遺体分析結果

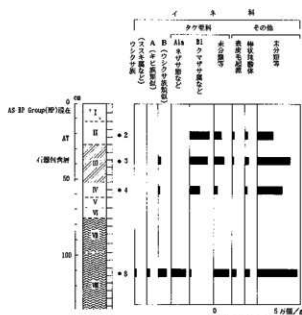


図2 大野遺跡 48-13 グリッド内層の植物遺体分析結果

2. 末野遺跡C区の鉱物分析

1. はじめに

埼玉県北部の台地や丘陵では、表層部に火山灰土が認められる。この火山灰土の中にはおもに浅間火山や榛名火山など北関東地方西部や九州地方などの火山から噴出したテフラ層が吹まれている。これらのテフラ層の多くについては、放射性年代測定法などにより噴

から、今後さらに詳細な検討が必要と思われる。

なお、本遺跡で多く見られたクマザサ属やネザサ属などのタケ亜科植物は、その有用性から燃料や道具、住居の屋根材や建築材などとして盛んに利用されていたものと思われる。とくに、クマザサ属は鹿などの草食動物の食料としても重要であったものと考えられる。

出年代が明らかにされている。これらから標準テフラ層との層位関係を調べることによって、遺物包含層の推積年代や遺構の構築年代を知ることができる。

荒川左岸の河岸段丘面上に位置する末野遺跡の発掘調査では、火山灰土のうちいわゆるロー層の中から旧石器時代の石器が検出された。そこで遺跡の土層に

ついて重鉱物組成分析を行い、示標テフラを検出することを試みた。また火山ガラス質の示標テフラの検出が期待された層準については、火山ガラス比分析を合わせて行った。

2. 地質層序

(1) C区47-19グリッド

本地点ではいわゆる暗色帯に相当する暗灰褐色のローム層(Ⅲ層, 層厚39cm)の上位に、下位より暗褐色ローム層(Ⅱ層, 層厚12cm)、黄色降下軽石層(Ⅰ層最下部, 層厚7cm)、褐色ローム層(Ⅰ層, 層厚12cm)の堆積が認められる(図1)。軽石層には最大径5mmの黄色軽石粒が多く含まれている。本地点ではローム層中から石斧などの石器が検出されている。

(2) C区46-19グリッド

本地点では、下位より厚い黄-灰色粘土層(X-VII層, 層厚154cm)、黄灰色ローム層(VI, V層, 層厚14cm)、黄色がかった暗灰褐色ローム層(Ⅳ層, 層厚10cm)、暗灰褐色暗色帯(Ⅲ層, 層厚25cm)、暗褐色ローム層(Ⅱ層, 層厚15cm)、黄色軽石混じり褐色ローム層(Ⅰ層, 層厚12cm)の連続が認められた(図2)。これらのうち、粘土層の中にはX層のように最大径20mmの亜円礫を含む上層がある。またⅠ層中に含まれる軽石の最大径は4mmで、岩相から47-19グリッドの軽石層(上層最下部)に由来するものと考えられる。

3. 重鉱物組成分析と火山ガラス比分析

(1) 分析試料と分析方法

C区47-19グリッドおよびC区46-19グリッドの2地点において、噴出年代が明らかにされている示標テフラを検出するため、重鉱物組成分析を試みた。分析の対象とした試料は、基本的に5cmごとに採取された試料のうちの21点である。また火山ガラスに富む示標テフラの検出が期待された土層については、火山ガラス比分析を合わせて行った。分析の手順は、次の通りである。

- 1) 試料30gを秤量。
- 2) 超音波洗浄装置により泥分を除去。
- 3) 80℃で恒温乾燥。

4) 1/4-1/8mmの粒子を篩別。

5) 偏光顕微鏡下で250粒子を検鏡し、火山ガラスの比率と形態別組成を求める(火山ガラス比分析)。

6) 偏光顕微鏡下で重鉱物250粒子を検鏡し、重鉱物組成を求める(重鉱物組成分析)。

(2) 分析結果

1) C区47-19グリッド

分析結果をダイヤグラムにして図3に、火山ガラス比の内訳を表1に、また重鉱物組成の内訳を表2に示す。重鉱物組成においては、試料番号1の軽石層で斜方輝石と単斜輝石が多く認められた。各々の比率は54.4%および33.2%である。したがってこの軽石層は、斜方輝石と単斜輝石に富む両輝石型のテフラと考えられる。これより下位の層準にむかうに従って両輝石の比率は減少し、角閃石と不透明鉱物(ほとんどが風化した鉱物)の比率が増加する傾向にある。

火山ガラス比においては、試料中に含まれる火山ガラスが非常に少ない特徴がある。試料番号3以上に透明で平板状のいわゆるバブル型ガラスが認められ、また試料番号1の軽石層中に分厚い中間型やスポンジ状に発泡した軽石型ガラスが少量認められる。

2) C区46-19グリッド

分析結果をダイヤグラムにして図4に、火山ガラス比の内訳を表3に、また重鉱物組成の内訳を表4に示す。重鉱物組成においては、試料番号13以上の層準で上方に向かって両輝石の比率が増加し、角閃石と不透明鉱物の比率が減少する傾向が伺える。とくに試料番号1では斜方輝石(57.2%)と単斜輝石(27.6%)が多く認められる。なお1/8-1/16mm粒子についても検鏡を行ったところ、試料番号7に100面の発達した扁平な斜方輝石がごくわずかに認められた。しかし量が非常に少ないため、その降灰層準を明確にすることはできなかった。

粘土層中には、風化した不透明鉱物が非常に多く含まれる傾向にある。なお1/8-1/16mm粒子についても検鏡を行ったところ、粘土層中の大部分の試料にジルンがごく少量ずつ認められた。しかしこれについてもそ

表3 浅間山噴火に伴う火山灰の成分分析結果

試料	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100	101	102	103	104	105	106	107	108	109	110	111	112	113	114	115	116	117	118	119	120	121	122	123	124	125	126	127	128	129	130	131	132	133	134	135	136	137	138	139	140	141	142	143	144	145	146	147	148	149	150	151	152	153	154	155	156	157	158	159	160	161	162	163	164	165	166	167	168	169	170	171	172	173	174	175	176	177	178	179	180	181	182	183	184	185	186	187	188	189	190	191	192	193	194	195	196	197	198	199	200	201	202	203	204	205	206	207	208	209	210	211	212	213	214	215	216	217	218	219	220	221	222	223	224	225	226	227	228	229	230	231	232	233	234	235	236	237	238	239	240	241	242	243	244	245	246	247	248	249	250	251	252	253	254	255	256	257	258	259	260	261	262	263	264	265	266	267	268	269	270	271	272	273	274	275	276	277	278	279	280	281	282	283	284	285	286	287	288	289	290	291	292	293	294	295	296	297	298	299	300	301	302	303	304	305	306	307	308	309	310	311	312	313	314	315	316	317	318	319	320	321	322	323	324	325	326	327	328	329	330	331	332	333	334	335	336	337	338	339	340	341	342	343	344	345	346	347	348	349	350	351	352	353	354	355	356	357	358	359	360	361	362	363	364	365	366	367	368	369	370	371	372	373	374	375	376	377	378	379	380	381	382	383	384	385	386	387	388	389	390	391	392	393	394	395	396	397	398	399	400	401	402	403	404	405	406	407	408	409	410	411	412	413	414	415	416	417	418	419	420	421	422	423	424	425	426	427	428	429	430	431	432	433	434	435	436	437	438	439	440	441	442	443	444	445	446	447	448	449	450	451	452	453	454	455	456	457	458	459	460	461	462	463	464	465	466	467	468	469	470	471	472	473	474	475	476	477	478	479	480	481	482	483	484	485	486	487	488	489	490	491	492	493	494	495	496	497	498	499	500	501	502	503	504	505	506	507	508	509	510	511	512	513	514	515	516	517	518	519	520	521	522	523	524	525	526	527	528	529	530	531	532	533	534	535	536	537	538	539	540	541	542	543	544	545	546	547	548	549	550	551	552	553	554	555	556	557	558	559	560	561	562	563	564	565	566	567	568	569	570	571	572	573	574	575	576	577	578	579	580	581	582	583	584	585	586	587	588	589	590	591	592	593	594	595	596	597	598	599	600	601	602	603	604	605	606	607	608	609	610	611	612	613	614	615	616	617	618	619	620	621	622	623	624	625	626	627	628	629	630	631	632	633	634	635	636	637	638	639	640	641	642	643	644	645	646	647	648	649	650	651	652	653	654	655	656	657	658	659	660	661	662	663	664	665	666	667	668	669	670	671	672	673	674	675	676	677	678	679	680	681	682	683	684	685	686	687	688	689	690	691	692	693	694	695	696	697	698	699	700	701	702	703	704	705	706	707	708	709	710	711	712	713	714	715	716	717	718	719	720	721	722	723	724	725	726	727	728	729	730	731	732	733	734	735	736	737	738	739	740	741	742	743	744	745	746	747	748	749	750	751	752	753	754	755	756	757	758	759	760	761	762	763	764	765	766	767	768	769	770	771	772	773	774	775	776	777	778	779	780	781	782	783	784	785	786	787	788	789	790	791	792	793	794	795	796	797	798	799	800	801	802	803	804	805	806	807	808	809	810	811	812	813	814	815	816	817	818	819	820	821	822	823	824	825	826	827	828	829	830	831	832	833	834	835	836	837	838	839	840	841	842	843	844	845	846	847	848	849	850	851	852	853	854	855	856	857	858	859	860	861	862	863	864	865	866	867	868	869	870	871	872	873	874	875	876	877	878	879	880	881	882	883	884	885	886	887	888	889	890	891	892	893	894	895	896	897	898	899	900	901	902	903	904	905	906	907	908	909	910	911	912	913	914	915	916	917	918	919	920	921	922	923	924	925	926	927	928	929	930	931	932	933	934	935	936	937	938	939	940	941	942	943	944	945	946	947	948	949	950	951	952	953	954	955	956	957	958	959	960	961	962	963	964	965	966	967	968	969	970	971	972	973	974	975	976	977	978	979	980	981	982	983	984	985	986	987	988	989	990	991	992	993	994	995	996	997	998	999	1000	1001	1002	1003	1004	1005	1006	1007	1008	1009	1010	1011	1012	1013	1014	1015	1016	1017	1018	1019	1020	1021	1022	1023	1024	1025	1026	1027	1028	1029	1030	1031	1032	1033	1034	1035	1036	1037	1038	1039	1040	1041	1042	1043	1044	1045	1046	1047	1048	1049	1050	1051	1052	1053	1054	1055	1056	1057	1058	1059	1060	1061	1062	1063	1064	1065	1066	1067	1068	1069	1070	1071	1072	1073	1074	1075	1076	1077	1078	1079	1080	1081	1082	1083	1084	1085	1086	1087	1088	1089	1090	1091	1092	1093	1094	1095	1096	1097	1098	1099	1100	1101	1102	1103	1104	1105	1106	1107	1108	1109	1110	1111	1112	1113	1114	1115	1116	1117	1118	1119	1120	1121	1122	1123	1124	1125	1126	1127	1128	1129	1130	1131	1132	1133	1134	1135	1136	1137	1138	1139	1140	1141	1142	1143	1144	1145	1146	1147	1148	1149	1150	1151	1152	1153	1154	1155	1156	1157	1158	1159	1160	1161	1162	1163	1164	1165	1166	1167	1168	1169	1170	1171	1172	1173	1174	1175	1176	1177	1178	1179	1180	1181	1182	1183	1184	1185	1186	1187	1188	1189	1190	1191	1192	1193	1194	1195	1196	1197	1198	1199	1200	1201	1202	1203	1204	1205	1206	1207	1208	1209	1210	1211	1212	1213	1214	1215	1216	1217	1218	1219	1220	1221	1222	1223	1224	1225	1226	1227	1228	1229	1230	1231	1232	1233	1234	1235	1236	1237	1238	1239	1240	1241	1242	1243	1244	1245	1246	1247	1248	1249	1250	1251	1252	1253	1254	1255	1256	1257	1258	1259	1260	1261	1262	1263	1264	1265	1266	1267	1268	1269	1270	1271	1272	1273	1274	1275	1276	1277	1278	1279	1280	1281	1282	1283	1284	1285	1286	1287	1288	1289	1290	1291	1292	1293	1294	1295	1296	1297	1298	1299	1300	1301	1302	1303	1304	1305	1306	1307	1308	1309	1310	1311	1312	1313	1314	1315	1316	1317	1318	1319	1320	1321	1322	1323	1324	1325	1326	1327	1328	1329	1330	1331	1332	1333	1334	1335	1336	1337	1338	1339	1340	1341	1342	1343	1344	1345	1346	1347	1348	1349	1350	1351	1352	1353	1354	1355	1356	1357	1358	1359	1360	1361	1362	1363	1364	1365	1366	1367	1368	1369	1370	1371	1372	1373	1374	1375	1376	1377	1378	1379	1380	1381	1382	1383	1384	1385	1386	1387	1388	1389	1390	1391	1392	1393	1394	1395	1396	1397	1398	1399	1400	1401	1402	1403	1404	1405	1406	1407	1408	1409	1410	1411	1412	1413	1414	1415	1416	1417	1418	1419	1420	1421	1422	1423	1424	1425	1426	1427	1428	1429	1430	1431	1432	1433	1434	1435	1436	1437	1438	1439	1440	1441	1442	1443	1444	1445	1446	1447	1448	1449	1450	1451	1452	1453	1454	1455	1456	1457	1458	1459	1460	1461	1462	1463	1464	1465	1466	1467	1468	1469	1470	1471	1472	1473	1474	1475	1476	1477	1478	1479	1480	1481	1482	1483	1484	1485	1486	1487	1488	1489	1490	1491	1492	1493	1494	1495	1496	1497	1498	1499	1
----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	---

今回の降灰層位が明らかにされたテフラ以外にも、埼玉県北部には約1.3~1.4万年前に浅間火山から噴出した浅間板鼻黄色軽石(As-YP)や約2.5万年前に北八ヶ岳から噴出したハッ岳新期第IV軽石(YPm-IV)、さらに DKP や Pm-1 などの多くの示準テフラが分布している。これら示準テフラを遺物包含層の堆積年代を知る鍵として利用することで、埼玉県の旧石器時代の型式編年学的な研究が飛躍的に進展する可能性が秘められている。今後はさらに詳細な野外地質調査を行って多くの示準テフラを検出するとともに、分析の

際に屈折率測定などを合わせて行って同定精度をさらに高めていく必要がある。

文献

新井房夫(1962)関東盆地北西部地域の第四紀編年, 群馬大学紀要自然科学編, 10, p.1-79.
池田晃子・奥野 光・中村俊夫・筒井正明・小林哲夫(1995) 南九州、始良カルデラ起源の大隈降下軽石と入戸火砕流中の炭化樹木の加速質量分析法における ^{14}C 年代, 第四紀研究, 31, p.377-379

小林哲夫・清水英樹・北沢和男・小林武彦(1967) 御岳火山第一浮石層—御岳火山第一浮石層の研究その1 一, 地質雑誌, 73, p.291-308.

町田 洋・新井房夫(1976) 広域に分布する火山灰—始良 Tn 火山灰の発見とその意義 一, 科学, 46, p.339-347.

町田 洋・新井房夫(1979) 入山倉古軽石層—分布の広域性と第四紀編年上の意義 一, 地質雑誌, 88, p.313-330.

町田 洋・新井房夫(1992) 火山灰アトラス, 東大出版会, 276p.

町田 洋・新井房夫・小田勝夫・遠藤邦彦・杉原重夫(1984) テフラと日本考古学—考古学研究と関係するテフラのカタログ—, 古文化財編集委員会編「古文化財に関する保存科学と人文・自然科学」, p.865-928.

町田 洋・鈴木正男(1971) 火山灰の絶対年代と第四紀後期の編年—フィッション・トラック法による試み—, 科学, 41, p.263-270.

松本英二・前田保夫・竹村憲二・西田史朗(1987) 始良 Tn 火山灰(AT)の ^{14}C 年代, 第四紀研究, 26, p.79-83

早田 勉(1996) 関東地方—東北地方南部の小淵テフラの諸特徴—とくに御岳第1テフラより上位のテフラについて 一, 名古屋大学加速器質量分析計業績報告書, 7, p.256-267

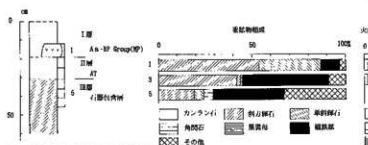


図1 太野遺跡 47-19 グリッド南側の土壌状況
数字は、テフラ分析の試料番号。

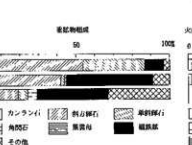


図3 太野遺跡 47-19 グリッドのテフラ組成ダイアグラム

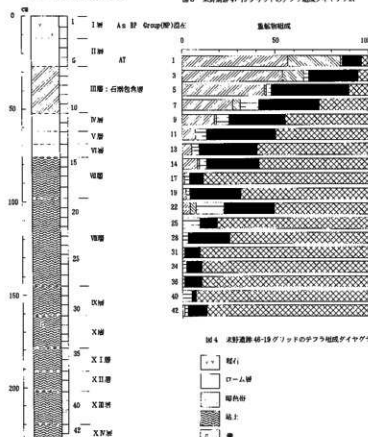


図2 太野遺跡 46-18 グリッド東側の土壌状況
数字は、テフラ分析の試料番号。

図4 太野遺跡 46-18 グリッドのテフラ組成ダイアグラム

